

－ 湯川記念館史料室・朝永記念室・坂田記念史料室の紹介 －

湯川秀樹

朝永振一郎

坂田昌一の遺した史料

目 次

1. この冊子について	1
2. プロジェクト概要	4
(1) 背景	4
(2) 目的	7
(3) プロジェクト開始前の資料の状況・準備調査	7
(4) 進め方の確認：史料記述の方針とデータベース化の手順	9
(5) 当初の計画の変更	10
(6) 現在の状況	11
(7) その他、残る課題	12
3. 湯川記念館史料室（京都大学・基礎物理学研究所）	17
① 史料概要・史料出典・史料室概要	17
② 詳細カタログの URL	25
③ 公開・非公開の方針、史料請求・閲覧利用連絡先	25
④ 湯川記念館史料室に保存されている史料の内容	26
⑤ 史料例	29
4. 朝永記念室（筑波大学）	53
① 史料概要・史料出典・史料室概要	53
② 史料室 URL	56
③ 所在地・連絡先など	57
④ 史料カタログ大項目	58
5. 坂田記念史料室（名古屋大学・物理学教室）	117
① 史料概要・史料出典・史料室概要	117
② 坂田記念史料室 URL	122
③ 資料請求・閲覧利用連絡先	122
④ 史料大項目カタログ	122
あとがき・謝辞	169
「湯川・朝永・坂田記念史料の整理および史料記述データベースの整備」 共同研究参加者リスト	170

1. この冊子について

この冊子は、湯川秀樹、朝永振一郎、および坂田昌一の記念史料として保存されている歴史的資料（史料）を広く利用してもらうためにその概要を紹介し、利用のために役に立つ情報を説明するものとして企画・作成された。これは、2008年度から2010年度までの3年間、科学研究費補助金（科研費）「湯川・朝永・坂田記念史料の整理と史料記述データベース」（研究代表者：高岩義信）として実施された事業の研究プロジェクトによるものである。そのプロジェクトでは、標記の資料の整理を行ってデータベースを作成しその利用の意義について考察するとともに、利用の促進をはかるためにインターネットからアクセス可能なものとして提供することを目的として実施された。この冊子では、事業の概要を簡略に述べたのち、これらの資料を保存・管理している施設とその収蔵資料について紹介し、それを閲覧・利用しようとするときのアクセスの手順・方法についてのガイドを与える。

ここで「湯川・朝永・坂田記念史料」と呼んでいるのは、京都大学・基礎物理学研究所の「湯川記念館史料室」、筑波大学の「朝永記念室」、名古屋大学・物理学教室の「坂田記念史料室」という施設に、湯川秀樹、朝永振一郎、坂田昌一の遺族から寄託または遺贈をうけて収蔵・保存されている資料のことである。この冊子では、これらの施設を総称して「記念史料室」と呼ぶことにする。それぞれの史料室は独立に設立されたものであるが、この三名が研究の上でも研究者のグループを形成するうえでも密接にかかわりがあったことを考慮して、このプロジェクトでは統合して扱うことが、その利用価値を高めるものだと考えた。

また、それぞれの施設にはその設立や所属する大学・研究所の事情によって、この三名の資料のみではなく関連する研究者の資料も収蔵しているが、詳しい説明はこの三名の資料を中心にすることにした。そのほかの資料についての紹介は、このプロジェクトで開発・整備されるシステムを利用して、それぞれの史料室の判断により随時追加されていくものと期待している。

プロジェクトと資料の解説に入る前に、この冊子の構成と内容について簡単に示しておきたい。それぞれの記念史料室の解説の章で利用方法の説明があるが、ここでは利用にあたっての一般的な注意となるようなヒントを与えておくので、それによってこの冊子の利用方法を理解していただきたい。

冊子の構成は以下のようなものである。

1. 「この冊子について」

冊子が作成された目的と経緯、および内容の説明。このセクション。

2. 「プロジェクトの概要」

科研費の事業として実施した研究プロジェクトの目的と計画、および実際に達成されたことの概要を紹介する。このプロジェクトが始まったときの状況から、どのような目標を設定したか、また事業がすすめられていくに従ってどのように進展し、状況の変化に応じてどう修正されたかを説明する。また、この事業がおわる 2011 年の 1 月～3 月の時期の状況を示し、これから先のプランを提案する。

3. 「湯川記念館史料室（京都大学・基礎物理学研究所）」

4. 「朝永記念室（筑波大学）」

5. 「坂田記念史料室（名古屋大学・物理学教室）」

三つの記念史料室（かっこの中は所属する大学とその部局）について、以下のような情報を紹介する。

①史料概要・史料出典・史料室概要

記念史料室に収蔵される史料の概要を、その資料の出典と記念史料室の成り立ちの解説とともに示す。記念史料室の成立と管理の事情により、それぞれ湯川・朝永・坂田以外の個人資料で収蔵しているものがあるので、それも含めてどのような資料が収蔵の対象となっているかが説明される。

②詳細カタログの URL

収蔵する資料の詳細カタログを参照できるインターネットのウェブページの URL を紹介する。この事業で用意するメインのサイトにアクセスすればどの記念史料室の資料のカタログへもアクセスできるように設定する計画であるが、現在はメインサイトが確定していない。暫定的なサイトとして

<http://arcadia.k.tsukuba-tech.ac.jp/yts-memorial-archives/>

を設定しておくが、今後それは変更されることを承知しておいていただきたい。そのサイトから、それぞれの記念史料室で提供するサイトがあれば、そのリンクがメインサイトからナビゲートされるようにする。

③公開・非公開の方針、資料請求・閲覧利用連絡先

収蔵されている資料は、個人情報や著作権等の関係や貴重な資料がふくまれていることもあるので、史料によっては一般利用者のアクセスが適当でなく制限付き公開または非公開の指定がされている。資料の利用に対してどのような原則に従って取扱いをしているかを説明し、また、史料室を利用し、史料を閲覧・複写するのに必要な手続きや利用規定に関する説明や連絡先を示す。

④史料大項目カタログ

「収蔵資料」の概要が見渡せるように資料の大項目分類と主要な資料と思われるものに対応するカタログを掲載する。個々の資料のより詳細な情報は詳細カタログ

の URL にアクセスし、資料請求または資料閲覧によって確認をするものとする。このカタログは原則として湯川・朝永・坂田の資料を対象とし、記念史料室にあっても他の個人史料に関しては、このカタログには含めない。

⑤史料例

収蔵資料のうち、興味深いもの重要なものはその史料の内容の一部または画像等を紹介する。それには、たとえば、手書きの文書、絵、写真などを含む。このカタログに記載された資料リストおよび資料そのもののイメージはそれぞれの記念史料室がその使用の権利を持っているか使用許可を得ている。この冊子の利用者はその権利を侵害しないように留意し、無断で複写を取って使うことは遠慮されたい。

(高岩義信)

2. プロジェクト概要

(1) 背景

湯川秀樹、朝永振一郎、および坂田昌一の三名の物理学者は、原子核物理学と素粒子物理学の研究における自らの貢献はもとより、そのもとに集まってきた若い研究者を育て、日本にその分野の研究を根付かせるにあたって中心的な役割を担った。いまや現在の学界をリードする研究者の世代にとっては直接の教えを受けたというより、彼・彼女らが活躍する場を用意し指導する立場にあった一世代の上の研究者が、この三名の絶大な影響下にあつて業績を上げつつ現在あるような素粒子・原子核とそれに関連する分野を形成したことの恩恵を被っている。

また、その活動範囲は狭い物理学の世界にとどまらず、科学の方法論や学術全般の振興、社会的な課題といった広い範囲の問題を対象として考察を重ねて発言し、行動をすることによって、広い領域の活動に貢献し日本国内にとどまらず様々な方面に影響を与えたことで知られる。これによって、のちの世代の科学者に与えた影響は、三者三様に身を以て示された研究者として社会的な役割と責任を担うときの考え方を、その原型として受け入れていたことにあるだろう。

この三人の足跡を示す多くの資料が三名の名を冠する記念史料室にそれぞれ残されている。その資料は研究内容の発展を示す資料とその背景である広い意味での研究の環境である生活状況や人間関係の歴史的背景を示すものがまず第一に挙げられるが、それに加えて研究を実現するための社会的な体制の整備と、研究という行為の結果が社会に及ぼす影響についての考察を跡付ける資料を含んでいることにその特徴と価値があるといえる。

それらの資料は湯川記念館史料室（京都大学・基礎物理学研究所）、朝永記念室（筑波大学）、坂田記念史料室（名古屋大学・物理学教室）というそれぞれにとってゆかりの深い大学において、その事情に応じて異なった形態と体制で保存され管理されている。それぞれの記念史料室に保存されている資料は、折に触れて展示に利用されたり資料として検討されて研究成果や出版物に反映されることがあった。なかでも、2006-2007年の湯川・朝永の生誕百年記念事業が催されたときには、それらの資料のなかから多くの興味深い出展物が提供された。

これらの記念史料室を設けて資料の保存をしようというきっかけを作ったのは、日本における素粒子物理学の発展の歴史をたどろうという共同研究が日本の物理学者とアメリカの科学史研究者によって企てられ、1978-1979年と1984-1985年の2期にわたってディスカッションの会合やワークショップが開かれたことにある。それについては文献^[1]に詳しく紹介されている。その折に、科学史的な観点からそこで検討されたような物

理学の発展をたどるためには、基礎となる資料の保存がなされなければならないということが、物理学者から科学史家に転じた米国の研究者 L.M. Brown によって示唆され、それをうけてこれらの記念史料室を持つという取り組みが真剣に検討され、資料を保存し整理を手掛ける作業が始められた^[2]。詳しくは、「3. 湯川記念館史料室」を見ていただきたい。

記念史料室に収蔵されている資料の整理はおもに湯川・朝永・坂田の影響のもとにあった研究者の献身的な作業によってある程度の段階までは進められていた。とくに湯川記念史料は、個人科学者研究資料の整理の好例として、アーカイブズ学の研究者からも注目されるものとなった^[3]。

それにもかかわらず、これらの資料の存在が必ずしも十分活用されるのに都合のよい状況になっているとは言い難いものがあった。とくに、個人の努力によって精力的に行われていた整理が、その人たちが転出したり、高齢になったり、また物故して継続がかなわなくなり、大学・研究所で資料をよく知る関係者が少なくなるにしたがって、記念史料室の状況が十分把握できなくなって来ていた。

しかしながら、上に述べたように、その影響が一つの時代の研究の環境を特徴づけるものとして重要であると理解されるならば、これらの資料が十分活用されるように整備されなくておかれるのはもったいないことこの上ない。その感覚を共有した新しい観点からもこの資料の整理の行方に注目するものが集まって、これらの史料室の関係者(管理担当者)と協力してこれらの資料整理を継続し、より使いやすいようにしたいという希望が持ち上がってきていた。それが、このプロジェクトの原動力である。

物理学の研究者としてまた研究を指導する立場にあるものとして相互に密接な関係を持っていた三人の研究者の資料が保存されていることを考えるなら、それを別個のものとして扱うよりは、相互の関連において考察の対象にすることにメリットがあることは、容易に想像できる。それが、このプロジェクトを三人の資料を総合的に扱う形で立ち上げる時の一つのモチベーションである。

異なる形態での管理がなされてはいるものの、それに係る人々は独立・無関係にいるのではなく、それぞれ素粒子・原子核に直接かかわる研究で相互に緊密な関係があったものが、このプロジェクトによって思いがけず専門外の課題で共同研究をするようになったわけである。言ってみれば意外な展開になっているのであるが、それにもかかわらずそれほど違和感がなく進められたことは印象深い。この三名によって張り巡らされた綱目の上に上手に乗せられているかのようであり、そのことが、このプロジェクトを可能にした理由であるといえよう。

このプロジェクトが構想された背景にはもう一つの動きとして、日本における現代の学術研究の発展および新しいタイプの研究機関である大学共同利用機関の成立に関わる

研究を、科学史として研究することを目標に、その経緯を記録した文書記録等の保存管理をする施設の整備しようという研究が総合研究大学院大学(総研大と略す)のプロジェクトとして実施されていた。総研大は国が設置に関わっている研究機関を大学院の研究科と位置付けて大学院教育をする大学である。その研究機関は総研大の「基盤研究機関」と呼ばれるが、その大部分のものが大学共同利用機関であるので、大学共同利用機関の存在意義を検証するという観点で研究プロジェクトが構想されていた^[4]。

大学共同利用機関になる前の形態である大学共同利用研究所として最初に検討されたのは、京都大学・基礎物理学研究所であった。1953年に発足した時には、東京大学・宇宙線観測所も同様の共同利用研究所に位置付けられた。その後も続いて原子核研究所(東大)や物性研究所(東大)、プラズマ研究所(名大)など物理学関連の重要な研究所が設立された。また国立の独立した大学共同利用機関としての最初のもは高エネルギー物理学研究所であり、それも含めてこれらの研究機関設立の歴史的な経緯には、湯川・朝永・坂田が大きくかかわっていたという事情がある。したがって、その研究プロジェクトは湯川・朝永・坂田の記念史料室の資料を見逃すことができないことから、これらの記念史料室へのアプローチがなされた。

加えて、この大学共同利用機関の成立の歴史研究に伴い、研究機関の記録文書の保存管理に注目する観点から、記録文書の取り扱いに関する実務と研究にかかわるアーカイブズ学の知識と理解が必要であるという認識が高まり、アーカイブズ学の分野の進展と対応しつつ進めることが求められると考えられた。

アーカイブズ学とそれに関連する記録管理学の分野は、近年、公的な機関での文書記録等の取り扱いが注目される事例や、国立公文書館法、情報公開法、公文書管理法などの法整備があいついでいたり、文書記録を取り扱うための情報技術の進展から、進展が著しい。その知識を導入してこれらのプロジェクトを進めることが課題としてとらえられるようになった。

この認識を支えてその方向付けを推進する状況として二つのことがあげられる。一つは、総研大の基盤研究機関である高エネルギー加速器研究機構(KEK)に頻繁に来訪して日ごろから科学史的な研究を行っていた米国の研究者を通じて、その所属する大学のアーカイブズとアーカイブズ学の研究者と接点ができ情報の交換が可能になったこと、二つ目は、日本国内でアーカイブズ学を実践するとともに中心となって研究する研究機関である国文学研究資料館が、総研大の基盤研究機関に加わっていることがわかって協力関係が出来上がったことである。これらが相まってにわかこの方向での活動が勢いを持つことになった。

その結果として可能性の検討が始まったのが、国際標準として認められつつあるアーカイブズ資料記述のデータ項目の採用とそれに基づいたコンピュータ処理可能なフォー

マットでのデータベース整備であった。すべてのアーカイブズ資料のデータをおなじデータベースで管理しなくとも、データの検索と表示のために用意されたサーバを設定し、共通の記述形式で表現されたデータが提供されるなら、そこに集積された複数の史料室の資料データを同時に検索（横断検索）することが可能になる。そのような方式を採用することを考えた。この方式はアメリカを中心としてすでにいくつか実現されているプロジェクトがあったことと、国文学研究資料館で日本の近世史の文書資料のデータベースの検索システムとしてその方針での試行がなされていたこともあり、有望な方針として採用することが了解された。

この科研費の事業も湯川・朝永・坂田の記念史料のデータベースを整備するにあたって、同様の方針を採用することを前提としてスタートした。

(2) 目的

科研費の事業の申請に掲げた表題に込められた意図は、短期間の事業としての最終的な目標に資料のデータベースを共通のフォーマットで整備し複数の史料室に収蔵されている資料の同時検索（横断検索）を可能にして、資料間の関連づけを容易にすることにあり、それを達成するためには、まだ不十分である資料の整理を行うことが必要であろう、ということであった。その意味から、資料整理の目標の指針としては、内容の確認をして資料の全貌を見通せるようにすること、管理に便宜がはかれる保存の手順を確立すること、そして、それらの情報をデータベースに書き込めるようにしていくことである。またこの方法・手順が確立していけば科研費の事業が終了した後も記念史料室での資料の管理を安定して続けることができるようになり、湯川・朝永・坂田に関わる資料以外のものの整理についても同様の整理方法が適用できるものと期待してのことである。

(3) プロジェクト開始前の資料の状況・準備調査

申請時に認識されていた整理の状況と、作業に入る前の調査で判明したことは次のようなものであった。

1. 未整理の資料が数多く残っていて資料の全貌がまだ十分には見えていない。
2. 整理がされたとするものとして利用者の目に触れるカタログ・リスト（アーカイブズの世界では「検索手段 - Finding Aid」と呼ばれる）は、それぞれ独自の分類とフォーマットでまとめられて、(a) 研究者用の雑誌「素粒子論研究」に発表したもの（湯川記念史料）か、(b) 別のフォーマットで整理されたカタログを印刷して限られた範囲の人や機関に配られたもの（坂田記念史料）、あるいは (c) 史料室の内部資料として

の作業用にまとめられた簡単なメモのようなもの（朝永記念史料室）があった。

これらのデータは、MS WORD で作成され編集が継続されていた坂田記念室の場合を除いて、容易にデータベースに変換できるような電子ファイルとして保存されているかどうか定かではなかったが、その後の調査で、それぞれ電子ファイルが残っていることが判明した。ただし、作成者でないと理解しにくい plain TeX のソース（湯川）または旧式のワープロで作成されたファイル（朝永）であった。

3. 整理が精力的に行われた時期からある程度に時間が経過し、その担当者が物故したり現場での作業から遠ざかっているなど、整理作業は継続的におこなわれてはいない。そのため、資料保管庫のファイル・キャビネットや箱などを開けてみないカタログとの対応が把握できず、目的のものに効率よく到達することができないことが想像された。
4. カタログ・データは、作成した時点での整理の状況を記述した編集であって、資料の移動・閲覧・展示のための出入を追跡できるようなダイナミックに管理できるデータベースとしてはつくられていなかったため、資料の収蔵場所を移転したりイベントで出品・展示に持ち出されたりすると、そのあとで収蔵場所がカタログに記載されたものと資料の現品がある場所との対応がかならずしも容易にとれないという状況が生じていた。
5. デジタイズ（スキャン）したりマイクロフィルム化処理を実施した資料がある。その処理はそれぞれ事情によって優先度を設定して、一部のみが行われていた。
6. 資料の利用を進めるためには、閲覧・公開等の取扱い規則を制度として定め、施設の管理を十分に行わなければならないが、そのために必要な資料の取扱いの原則や法的な条件などの理解が十分にされてない。現実には必要に応じてそれぞれの管理担当者の判断によって処理されることが予想されたため、利用規則がある場合は安全を期して抑制的なものになっており、資料保全や個人情報等の取扱いに注意深い方針を設定している。一般の（関係者以外の）研究者や利用者が、どのような資料があるか調査しながら閲覧するには、都合がよい規則とは言えないものではないかと思われた。
7. 時の経過とともに、最初に受け入れた資料のほかに追加があり、その中には湯川・朝永・坂田の三名以外の研究者の資料もある。とくに坂田記念史料室の場合は物理学教室の史料室という位置づけなので、その比重は小さくない。

8. それぞれの記念史料室のうち、湯川と坂田のケースのように、内外の委員による管理運営のための委員会が機能しなくなったり、管理体制の維持に不安があるところではこれまでのような物理学の研究者による管理責任体制から、大学の博物館または文書館と連携するか管理の委嘱を図ることで存続が摸索されていた。

(4) 進め方の確認：史料記述の方針とデータベース化の手順

史料記述の基本方針 資料のカタログに記述していく方法として、アーカイブズ資料の編成は「出所原則」に従う保存されてきた単位ごとの扱いと、保存のための物理的な収蔵の単位で整理することを考慮すれば、階層記述を原則としてすることが有効なものとなる。あとで説明する国際標準として受け入れられている記述の基準もそれに則っている。

ただし、すでに整理のための手が入っているところがあり、それを原状（受け入れ時の編成）に復元して記述することは困難でありかえって混乱するであろうと思われたので、次のようにすることにした。(1) 既存のカタログはその記述を保存してデータベースに入力し、そこで採用されている記述の単位と階層性は尊重することとした。それはそのほうが、労力の節約になり、また混乱が少ないだろうということである。(2) 未整理であった分は、作業を開始する時点の編成を出発点として記述する。それは、その時点で収納されているキャビネット、箱の単位とその中にまとめてあるファイル・フォルダーや封筒という階層にしたがう。また湯川記念史料の場合は未整理資料がまだかなりあったので、(3) 詳細のデータの記述を蓄積することよりも全体像の把握を優先する。つまり、階層のうえのものから順次整理し記述データを作成する。そのために各キャビネットまたは箱の内容の概略をまずつかむこととし、それから、詳細を入力するものの優先順位を設定して作業を進める、という方針を採用した。

史料記述 (Archival Description) の国際標準 国際文書館評議会 (ICA) で史料記述の概念的な標準として ISAD (G) なるものが提案され広く受け入れられている^[5]。それに準拠しつつ、コンピュータ処理に都合の良い形式でそれを実現するための規約に Encoded Archival Description (EAD) というものがアメリカの国会図書館のイニシアチブで提案された^[6]。

EAD は、ことなるオペレーティング・システム間で共有が容易にできるように単純なテキストファイルに、データ項目とその間の階層を含めた構造を表現するため、SGML (Standard General Markup Language) という形式的な規約をもつマークアップ言語によって定義されていた。それを実用的な環境で実現するには現在では XML (eXtensible Markup Language) で実現できるように改善されている。詳細は省略する

が、<ead> と </ead> という「タグ」では含まれた中にデータ項目とそのグループをタグで囲みながら

<dataOfThis> データ項目（グループ） dataOfThis の記述 </dataOfThis>

のようにして記述していくものである。階層構造はタグのネスティング（入れ子）を許すことで実現される。EADの詳細については[6]のURLを参照されたい。

どのような形であれ、資料のカタログ情報データベースのデータがEADの形式で表現されるものを書き出すことができれば、異なるプラットフォームに転送してXMLファイルで表現されたデータベースを検索し閲覧する仕組み（データのサーバとクライアントのブラウザ）によってデータを確認することができる。

データベースの選択 EADのデータ項目と両立する（compatible）ものを実現できて、EADの形式のデータを入出力（インポート／エクスポート）できるものであれば、なにを用いても構わない。それぞれの史料室においてデータを入力して蓄積するデータベースのソフトウェアはEADへの出力を可能にする仕組み（機能）を持っていて、検索・閲覧のためのサーバがその出力されたEADのデータ入力の機能を持てば、当面の目的は達せられる。

当初、史料記述の標準に準拠したデータ入力をして蓄積する機能をもつサーバが国文学研究資料館に存在し、そこから検索・閲覧のサーバへ自動的にEADに変換して転送する機能が組み込まれているのを利用して、それぞれの記念史料室のカタログ情報を蓄積することが試みることにした。坂田記念室のみ資料整理の作業が行われる資料保管室にインターネットに接続する設備がなかったため、ローカルなコンピュータ（PC）でEADと両立するデータ構造を持つデータベースを市販のソフトウェアFilemaker Proによって構築することでスタートした。いずれそこに蓄積されたデータをEAD形式で出力し、国文学研究資料館の検索・閲覧サーバに投入する方針であった。Filemaker ProはEADの形式を構成してテキストファイルとして出力（エクスポート）する機能を組み込むことが可能であるという見通しであったので、それを利用することを想定しての採用である。

(5) 当初の計画の変更

この方針の選択は、国文学研究資料館でそのデータベースとサーバの管理とメンテナンスを担当する者（五島敏芳）が、この科研費の事業の研究分担者として参加していることを前提としていた。国文学研究資料館の検索・閲覧のサーバは五島による研究目的

の試験的な運用という形態であったので、問題が生じたり不都合が判明したりした時にはフレキシブルな対応が可能であることがそのメリットと考えられた。しかし、その方針はその研究分担者が他の研究機関に異動することになって、そのまま試験的な運用を継続して行くことができるかどうか難しくなった。

また、それ以前にデータの蓄積にインターネットを経由して大学の記念史料室から国文学研究資料館のデータベースに入力をしてデータを蓄積するのは、ネットワークの負荷が大きいためかあるいはよくわからない理由でデータ転送スピードが制限され、あまり効率が良くないことが気になってきていた。

したがって、湯川と朝永の記念史料室のデータ入力も国文学研究資料館のデータベースに入力することをやめて、ローカル PC で Filemaker Pro のデータベース入力・蓄積に切り替えることとなった。それに移行するにあたって、入力しているデータの統合性を確保する必要があったので、それまでにすでに国文学研究資料館のデータベースに蓄積されたデータを取り出して Filemaker Pro のデータに変換する作業が必要となった。そのためには国文学研究資料館に入力・蓄積されたデータをいったん EXCEL のファイルに出力（エクスポート）する仕組みを整備し、そのファイルを Filemaker Pro に入力（インポート）して、その上で Filemaker の Script で入力作業用のフォーマットに変換する操作を行った。この作業は首尾よく行われた。

(6) 現在の状況

データ蓄積のデータベース 以上が、これまでの経過である。その結果、現状では三つの記念史料室でローカル PC に EAD とデータ項目が準拠する Filemaker Pro のデータベースに史料記述のデータベースが入力・蓄積される仕組みができ、入力が続けられている。そこから実際に EAD 形式でかかれたファイルを出力（エクスポート）する仕組みの原型は用意されているので、その出力ファイルが適切なフォーマットで出力されるようにチューンすることが必要である。これは、そのデータを受け入れて検索・閲覧のサーバとして機能するプラットフォームとソフトウェアを設定して、実施しなければならないが、その機能をもつサーバはまだ検討が必要である。これについては後の項を参照していただきたい。

史料室によっては自分の所属する大学のネットワークにサーバを置いて、自分の史料室のカタログ・データと、可能ならばデジタル化した資料そのもの（コンテンツ）を紹介する URL を提供している。この冊子の、それぞれの記念史料の記述を参照されたい。

データ検索・閲覧のサーバ 国文学研究資料館で設定されているサーバは試験的という位置づけのままであろうが、致命的な障害が生じない限りは運営されるものと期待され

るものの、今後も継続的にこれらの記念史料室の資料カタログデータベースのサーバとして利用し続けるには不都合があるように思われる。

当初の目標である横断検索を可能にするためには、国文学研究資料館のサーバの代替策となる専用の検索・閲覧サーバの構築を図らなければならない。国文学研究資料館で運用されているデータベース・マネジメントシステムを含むサーバーシステムの導入・運用コストはそれほど小さいものではなく、それをそのまま移植することは困難な状況である。そのコストの主要な内訳はサーバに組み込まれた専用ソフトウェアのライセンス料であることを考えれば、代替策は廉価なソフトウェアによるものにしなければ現実的なものとならない。

その候補として有望だと考えているものは、フリーなオープンソフトとして提供されているものがある。アメリカのアーキビスト協会の推奨するソフトのひとつであってイリノイ大学のチームで開発されている Archon である。インターネットに接続される PC をひとつ用意して、このようなフリーソフトでサーバを構築するのが現実的に有効な方法ではないかと考えているので検討してみたいと思う。また、インターネットに接続される PC を大学や研究機関で用意するのは、そこに課せられているセキュリティ上の対策があるため、実はそれほど安易には実行できない。それぞれの大学・研究機関のネットワーク管理者との交渉か専門家のコンサルタントが必要になることが予想される。経費さえ工面できれば運用方針が決定できるまではレンタルサーバを利用した運用が現実的であろうとおもわれる。現在のところ、それを実現できるかどうか不確定な状態にとどまっている。

(7) その他、残る課題

この科研費の申請には、資料整理とデータベース整備のほかに、科学史的研究への利用方法の検討とその推進が提案として含まれていた。しかし、この事業の実施が始まってからの経過をみると、現在のチームの陣容ではその段階に進むには至らず、資料整理・データベースの整備で手一杯であった。このプロジェクトには科学史研究者の参加もあったが、十分その本分を発揮して活躍する場が与えられる段階には達したとは言えないであろう。科学史家として特色を生かしてここまでの作業に積極的に参加してもらえたのかということから考えても、評価するのは難しいというのが実情ではないかと思われる。

この点は、このような史料室が科学史の研究に役に立つものとしてここで示したようなことで整備できるのかということが、いずれ評価の対象として検討されるとすれば、真剣に反省し検討しなければならない課題である。科学史研究の課題にどのように資するかについて真剣に検討するためには、利用可能な資料に依拠した興味ある課題を想定

して科学史の研究者にアピールすることが一つの可能性として考えられるが、それ以外のことがあるとすれば何が必要か更なる検討が必要かと思われる。また改めて挑戦すべき問題であろうかと思われる。

また別の問題として、これらの研究資料の整理にあたってアーカイブズ学の専門知識を持つアーキビストをどのようにして確保するかという課題がある。この科研費の事業においては共同研究の形をとっているので、アーカイブズ学の知識をもち、かつ実際の史料整理の経験のある研究者を共同研究のメンバーとして配置し、サーバの設計から保守にかかわることのほか、それぞれの記念史料室の整理の状況を見ながらアドバイスをもらうという役割をうけもってもらった。もし、共同研究ではなく通常の業務として各記念史料室で実際の整理作業を進めるとすれば、アーキビスト級の担当者を恒常的に配置することが望ましい。しかしながら、いまの実情ではそのような担当者を確保し配置するのは難しい。実際には研究者か作業のために臨時に史料室に関わる者を採用することになるが、それはかならずしも史料の取扱いの専門家ではない。その状況を改善することが、このような研究資料を保存する史料室・アーカイブズにとっては大きな課題である。それぞれの史料室に常駐するか恒常的にコンサルタントとして状況を見ながらアドバイスできるようなアーキビストが確保できる体制が整えられることが求められる。また、一般的なアーカイブズ（文書館）とはことなる研究資料を扱う史料室の特色を理解する専門のアーキビストが養成されるならばそれに越したことはない。

（高岩義信）

参考文献

- [1] Ed. by L. M. Brown, R. Kawabe, M. Konuma and Z. Maki, “Elementary Particle Theory in Japan, 1930-1960 --- Proceedings of the Japan-USA Collaborative Workshops”, Prog. Theor. Phys., Supplement **105** (1991).
- [2] 河辺六男、小沼通二「湯川記念館史料室私記」、素粒子論研究、第 65 卷、第 4 号、1982, 223; R. Kawabe, “The Yuakawa Hall Archival Library, Kyoto”, Prog. Theor. Phys., Supplement **105** (1991) 307; S. Kamefuchi, “The Tomonaga Memorial Room, Tsukuba”, Prog. Theor. Phys., Supplement **105** (1991) 312; M.F. Low, “The Sakata Memorial Archival Library”, Prog. Theor. Phys., Supplement **105** (1991) 316.
- [3] 安澤秀一「史料館・文書館学への道」、吉川弘文館、1985・1995.
- [4] 「大学共同利用機関の歴史 2004」総合研究大学院大学、2005; 「大学共同利用機関の歴史 2005」総合研究大学院大学、2007; 「大学共同利用機関の歴史 2006・2007」総合研究大学院大学、2008; 「大学共同利用機関の歴史 2008」総合研究大学院大学、2009; 「大学共同利用機関の歴史 2009」総合研究大学院大学、2010;
- [5] アーカイブズ・インフォメーション研究会・編訳「記録史料記述の国際標準」北海道大学図書刊行会、2001.
- [6] EAD Official Site, Library of Congress (USA), <http://www.loc.gov/ead/>

湯川関係史料

(京都大学・基礎物理学研究所 湯川記念館史料室)

3. 湯川記念館史料室（京都大学・基礎物理学研究所）

①史料概要・史料出典・史料室概要

史料室概要

湯川記念館史料室は、「中間子論その他の基礎物理学の研究活動及びその成果に関する歴史的史料、図書、文献等を収集、整理、保存し、学内外の研究者の利用に供する」ことを目的として、京都大学基礎物理学研究所（以下、基研と略）に1979年8月1日に設置された。その運営のために湯川記念館史料室委員会が設置され、史料の収集・整理の仕事をおこなってきた。

1985年には、湯川が基研所長として使っていた旧所長室が湯川記念室として整備され、その後多くの見学者を受け入れている。

この史料室のルーツは1978年9月にさかのぼる。米国の南部陽一郎と Laurie Brown からの提案を受けて、1978年から1979年と1984年から1985年にかけて日本学術振興会と National Science Foundation の日米科学協力事業として研究計画「Particle Physics in Japan, 1930 — 50」が進められた。その第1期の第1回研究会の席上、Brown から「中間子論の提唱発展に関する日本の資料の収集・保存とその英訳」が強く要望された。

日本側で検討した結果、日本の独創的研究の資料を散逸前に収集し継承すべきではないかと考えるに至り、1979年2月と6月の基礎物理学研究所の研究部員会議で湯川記念館史料室開設の了承を得た。7月には、委員の一人が欧米での国際会議に出席した機会に、CERN、Niels Bohr Institute、American Institute of Physics の Center for History of Physics、Fermi National Accelerator Laboratory の “History of Accelerator” Room、California 大学 Berkeley 校の Office for History of Science and Technology を訪問し、資料収集・整理の実態を視察し、



湯川記念室に展示されている Nobel 賞メダルと賞状（複製）



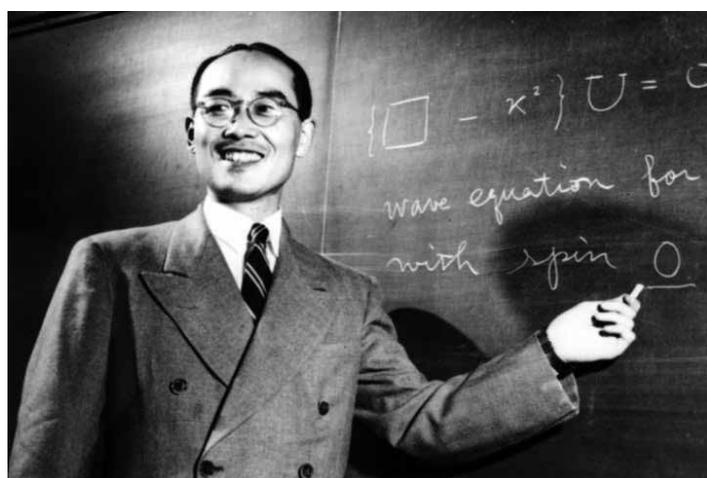
Columbia 大学での湯川

教示と激励を受けた。

このようにして、1979年8月1日に湯川記念館史料室が開設された。最初の仕事は、資料捜査と規程・組織作りであった。資料捜査のハイライトは、京大物理学教室図書室の片隅に置かれた段ボール箱の中にうずもれていた中間子論誕生時の湯川自身の計算、原稿などの大量の貴重な史料の発見だった。湯川はこの資料を史料室に寄贈してくれた。これについては、以下の「⑤史料例1) 中間子論第1論文作成の全資料」をご覧ください。これを受けて史料室委員会では資料の整理、保管、閲覧などの方式、規程の整備に拍車がかかった。国内では、当時手掛かりになる資料が入手できなかったが、欧米で入手した資料、特に American Institute of Physics の “Scientific Source Materials: A Note on their Preservation” は大変有益だった。史料室は、1981年の湯川の没後、遺族から基研と自宅に湯川が残した物理関係の大量の資料の寄贈を受けた。さらに、湯川が定年まで20年近く務めた基研所長室に残されていた大量の資料も収蔵している。



基研所長室の湯川



Columbia 大学滞在中ノーベル賞受賞の報に接した湯川

これらの膨大な資料の内、殊に重要と判断された史料については、最初のリストが史料室委員会によりまとめられ、1982年に YHAL Resources Hideki Yukawa (I) として素粒子論研究に発表された。その後委員の一人であった故河辺六男（1926 - 2000）が最晩年にまでわたる献身的な努力を続け、非常に緻密な目録が作成され YHAL Resources Hideki Yukawa (II) - (VIII) として 1985 年から 1999 年にかけて素粒子論研究に順次発表された。そしてこれらの目録は、湯川の生誕百年に当たる 2007 年の機会に、一冊の冊子『湯川記念館史料室の史料目録』にまとめられ、あわせてその pdf ファイルが基礎物理学研究所のホームページに公開された。

しかし、河辺の超絶的な努力にも拘わらずこれらの目録にリストアップされた資料は、件数で言えば、史料室の収蔵する全資料の 1 割に満たず、残りの 9 割以上に関しては、河辺の死後長い間未整理のまま残された。

幸い、今回基盤研究 A の科学研究費「湯川・朝永・坂田記念史料の整理および史料記述データベースの整備」が採択され、2008 年度 - 2010 年度の 3 カ年間でほとんど全ての資料を点検しリストアップすることができた。2011 年 2 月までに収録された資料は 3 万 8 千余件に達している。

史料の番号付けについて

総点数 3 万 8 千余件の史料は、史料室のキャビネット

- ・ 4 段耐火 Cabinet (B4 幅) 1 個 → $1 \times 4 = 4$ boxes
- ・ 4 段 Cabinet (A4 幅) $4 \times 6 = 24$ 個 (I 1 - 6、II 1 - 6、III 1 - 6、IV 1 - 6)
→ $24 \times 4 = 96$ boxes
- ・ 2 段 Cabinet (B4 幅) $2 \times 9 = 18$ 個 → $18 \times 2 = 36$ boxes

総計 136 boxes その他に収納されている。これらを史料室では、s シリーズ、c シリーズ、d シリーズと名付けている。

史料室委員会は、1979 年の発足時に、整理の原則として「原著者が置いた史料の順序は絶対に乱さず。かつ記録する」ことを確認した。今回の科学研究費補助金による作業の前にもこの原則を再確認した。そのため、一部の box は内容的にも順序にもまとまりがあるが、多くの box は、内容的にいろいろのものを含んでいる。利用にあたっては、リストから検索によって探し出すことになるので、リストの整備を進めている。

s シリーズ： 耐火キャビネット (safe cabinet) の 1 段目から 4 段目までの box は、s-01、s-02、s-03、s-04 と名付けられ、その中に入っている史料は、順に s-01-001、s-01-002、s-01-003、と番号付け (資料記号) され、さらにそれがいくつかの item からなる file の場合は、その中に含まれる item に、順に s-01-001-001、s-01-001-002、のような下部番号を振る。さらにそれらの item が (例えばノートの挟み込み紙片などの) 下部の subitem を含む場合は、更に下部の番号を付ける。

c シリーズ： 24 個の 4 段 Cabinet (A4 幅) の 96 個の boxes は、c-011、c-012、c-013、c-014 から c-241、c-242、c-243、c-244 と命名した。例えば、c-123 は、12 番目の 4 段キャビネットの 3 段目の box を表す。そこに入っている item や file の番号付けルールは上と同じでこれらに下部番号を振る。

d シリーズ： 4 段 Cabinet (A4 幅) の上においてある、18 個の 2 段 Cabinet (B4 幅) の 36 個の boxes に入っている史料の頭の名前は、d-01 から d-49 である。Boxes の個数 36 と、d-XX の数 49 が合わない。これは、リストアップ作業をしていた時には未だ、これらの史料が (河辺が作業していた当時のままの) 段ボール箱に入っていたためで、d-XX は、XX 番目の段ボール箱を表す。しかし、2009 年度の末に上述の 18 個の 2 段 Cabinet (B4 幅) を購入した際に、段ボール箱の史料を順繰りに詰めていったので、d-XX の番号の進みが実際の boxes の進みより早い。[Boxes と段ボール箱の対応表、および元の段ボール箱の外観の写真は保存してある。]

旧史料記号： 今回の史料整理以前から河辺を中心とした史料室委員会が整理した『湯川記念館史料室の史料目録』の史料に関しては、その際に付けられた史料記号がある。その分類・命名法については素粒子論研究に発表されたリスト前書きに詳しいが、使われた頭文字は、E (Envelope: 湯川が研究論文ごとにまとめておいた大型封筒に入っていた史料)、F (File: 湯川が保存していたファイルの中の史料)、N (Note: 湯川のノート)、P (Published Articles)、U (Unpublished Articles)、Z (Miscellaneous: 断片 その他)、EDT (Edited Materials: 史料室委員会が編集した資料)、PIC (Pictures) 等である。これらは主に上記分類の s シリーズとオーバーラップしており、資料番号欄には、上記番号と共に旧史料番号が並記されている。例えば、有名な湯川のノーベル賞論文の第一版手書き原稿の資料番号は s02-03-013 (E01 100 P01) である。この番号から、耐火キャビネットの第 2 段 (にある第 3 ファイル) に収納されており、湯川が大型封筒に入れていた研究論文であることがわかる。

デジタル化された史料

デジタル化は、大阪大学湯川記念室、株式会社堀内カラー、コクヨグループ Netsquare 株式会社の 3 か所で行われた。阪大記念室作成画像は JPEG 形式、堀内カラー・コクヨ Netsquare 作成の画像は PDF および TIFF 形式、堀内カラー作成の音声は WAV 形式、である。

堀内カラー作成成分：『湯川記念館史料室の史料目録』所収史料類 722 files 総数 4,861 ページ

以下の旧史料記号で記されたファイルの詳細は『湯川記念館史料室の史料目録』にある。

E01, E07, E09 - E14, E16 - E32 : E(nvelope) 史料

F01A, F08, F15, F16, F50, F51, F53 : F(ile) 史料

Z10 U07(FRAGMENT A - P) : 湯川の卒業論文、論文筆写のノート断片など

N151, Z02, c034-103-001 - c034-103-019 : Heisenberg-Pauli 筆写論文など

C39N, COR38, COR39, COR39E, COR40, COR41, COR45 - COR49 : 書簡類

大阪大学湯川記念室作成成分：総数 1,597 ページ

E01 (一部), E02 - E06, E08, E15 : E(nvelope) 史料 (E 史料は上と合わせ完全)

F01, F02, F03 - F05 : F(ile) 史料 (F 史料は上と合わせ、F52 を除き完全)

コクヨ Netsquare 作成成分：ノート類 466 files 総数 10,380 ページ

c033-010 - c033-796, c034-001 - c034-112, c033-800 - c033-991

s04-08-01 - s04-08-24, c32-231 - c32-232,

KJR ニュース (1954 - 1980)

堀内カラー作成音声データ：

オープンリール 6mm：49 wav files (10.9GB)

c172-004-023、c172-029-036、この中には、例えば、
研究部員会シンポジウム「坂田昌一先生の『私の古典』を聞いて」、
湯川特別講演、Heisenberg 講演会、素粒子論の成人学校、
Wheeler 講演、Bogoliubov 講演、Lamb 講演、Voice of Ghost

オープンリール 6mm：34 wav files (10.9GB)

ADT M30 18 - 44：MESON30 他

カセットテープ：89 wav files (39GB)

ADT M50 1 - 33：YHAL MESON50、

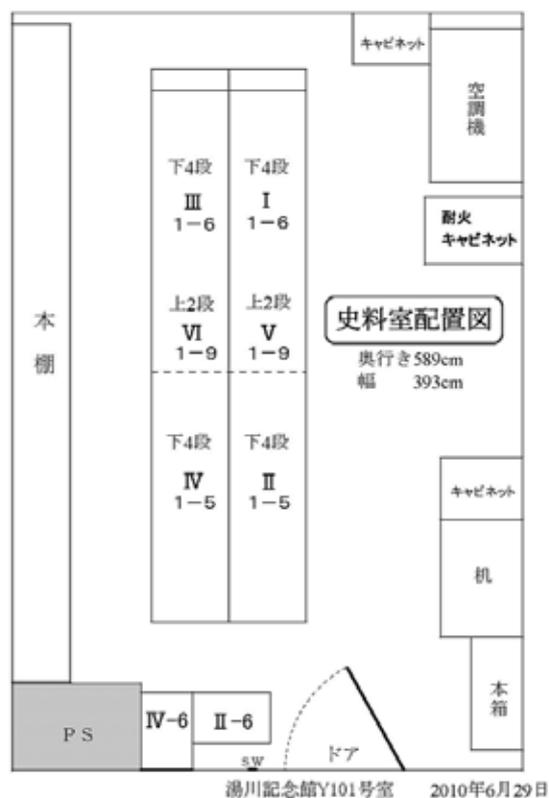
ADT JU1 USJC 78-79 010 - 074：The Prediction and the Discoveries of "Yukawa's Meson"

BBOX1 - 2：湯川秀樹博士追悼行事講演会、他
が含まれている。

史料室と記念室

上述史料は全て湯川記念館の北ウイング奥のY101号室に収蔵されており、この部屋が通常、「史料室」と呼ばれる。その隣Y102号室は史料整理室で今回の作業が行われた。一方、湯川記念館の南ウイング奥には、湯川が在任中使っていた旧所長室とその隣の秘書室が保存されており、現在「湯川記念室」と呼んで一般に公開されている。

右に史料室内部のキャビネット等の配置図を示す。



史料室写真



下4段：Ⅲ、Ⅳのキャビネットとその上の上2段Ⅵのキャビネット



奥右側に4段耐火キャビネット、左手に下4段（A4幅）キャビネットⅠ、Ⅱの上に上2段（B4幅）キャビネットⅤが乗っているのが見える。

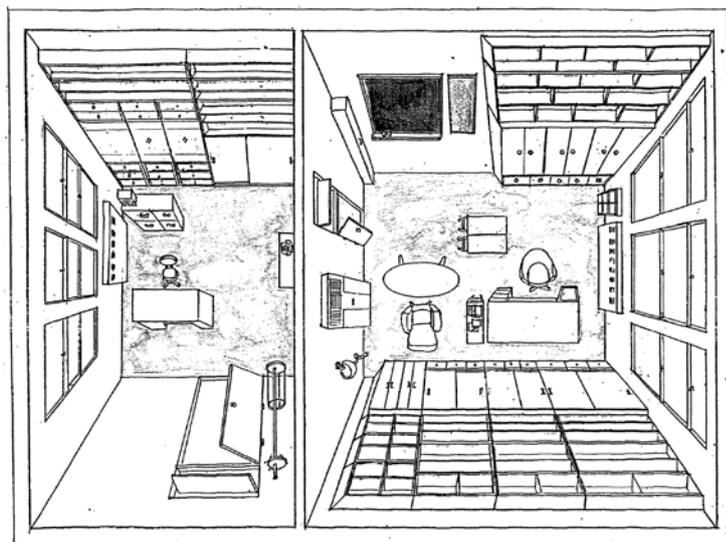
湯川記念室写真



湯川記念室入り口と前室
左手にノーベル賞（レプリカ）の陳列棚、奥に書棚が見える。前室は元所長付秘書室



湯川記念室
元所長室。
手前の四角形と楕円形の机と椅子、右側の書棚は、湯川自身が使用していたものである。



河辺六男氏が描いた湯川在任時の所長室俯瞰図。図には描かれていないが、図上部の黒板の前に、黒板を背にする向きに来客用の椅子もあった。現在史料室が保管する書類のかなりの部分は、この所長室の右半分には積み上げられていた。

② 詳細カタログの URL

上述の冊子『湯川記念館史料室の史料目録』は、基礎物理学研究所ホームページにおいて、タブ「基礎物理学研究所の紹介」→「基礎物理学研究所の資料」で辿って行けるページ

http://www.yukawa.kyoto-u.ac.jp/contents/about_us/documents.html

に公開している。今回の科研費で打ち込んだ史料室のほぼ全史料の目録は、公開に向けて現在作業を進めている所で、でき次第同じページに公開する予定である。

③ 公開・非公開の方針、史料請求・閲覧利用連絡先

基本的には全ての資料を公開する。ただし、個人情報に関わり公開になじまないと史料室委員会が判断したものは、必要な期間非公開とする。

公開の資料に関しては、WEBに掲載された詳細カタログを参照の上、「湯川記念館史料室史料利用願」に記入して下記に申し込む。利用の手引きや利用願いは上記 WEB

http://www.yukawa.kyoto-u.ac.jp/contents/about_us/documents.html

に置く予定。

連絡先：〒 606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学基礎物理学研究所 総務掛 (TEL.075-753-7003)

④ 湯川記念館史料室に保存されている史料の内容

湯川が残した資料は、量が多く、範囲も広いため、現在も整理が続いている。これまでに登録された資料数は、2011年2月10日現在 38,878点に達している。内容を大きく分類すると次のようになっている。

1. 研究・教育関係史料

1-1 大型封筒史料（旧分類番号 E シリーズ）

若い時の湯川は、計算から、講演・論文執筆に至るまでの研究資料を題目ごとに整理して使用済大型封筒に入れて保存していた。これらは、湯川が転任や研究室の移動をかさねるうちに見失われてしまっていた。ところが、史料室の発足に伴い、関連資料の収集を積極的に行う中で、1930年代のもの30点が、1989年10月に京大物理学教室図書室の片隅で再発見された。その中には、ノーベル賞の対象になった中間子論形成の詳細な経過がわかる史料や、受理されなかった論文原稿などまで含まれている。

1-2 ファイル史料（旧分類番号 F シリーズほか）

湯川自身が使用し、保存していた多数のファイルと、基礎物理学研究所の所長秘書が管理していたものなどである。

一例を挙げれば、F02 (s04-03- の前半) は、湯川が「論文原稿 1934 H. Yukawa」と題をつけたファイルである。この中には、中間子論第1論文の英文アブストラクト関係の史料と、「素粒子の相互作用についてII」と題する手書きのメモ、朝永振一郎から湯川への1933年と2通の1935年初頭の手紙、計3通、陽子の磁気能率や中性子—陽子散乱自己エネルギーなどの計算、陽電子についての英文原稿がまとめられていた。この中の1933年の朝永の長文の手紙こそ、湯川が中間子論第1論文中に、先行の朝永の寄与についてつけた脚注の元であった。これについては、⑤史料例 3) で取り上げることにする。

1-3 ノート

学生時代から晩年までの研究・教育などのノート、約150点。この中には、関連する資料がはさみ込まれているものも少なくなく、総計1400点ほどに及んでいる。

2. 社会的活動史料

湯川は、ラッセル・アインシュタイン宣言への参加、バグウォッシュ会議、科学者京都会議、世界平和アピール七人委員会、世界連邦運動、UNESCO など、物理学の研究・教育を超えた活動とも深くかかわった。史料室には、1700点を超えるこれらの資料が残されている。

3. 大学、日本学術会議、日本学士院、原子力委員会、日本物理学会など国内外のアカデミー、学協会関係史料

湯川は、京都大学（1933 - 1934 年、1939 - 1970 年）、大阪大学（1934 - 1939 年）、コロンビア大学（1949 - 1953 年）に勤務した。日本学術会議が 1949 年に発足した時に会員に選出されたが、渡米中のため会員としての実質的活動はなかった。1953 年の帰国後には、日本学術会議の多くの委員会の委員として活動した。日本学士院会員（終身）には 1946 年に選出されている。原子力委員会には、初代の委員として 1956 年 1 月から 1957 年 3 月に任期途中で健康上の理由で退任するまで参加した。日本物理学会は、その前身の日本数学物理学会時代から会員であり、1955 - 1956 年には委員長（今日の会長）を務め、1974 年には名誉会員に選出された。湯川はこれらのほか、国内・国外の多くの学会、アカデミーの外国人会員や名誉会員だった。史料室には、これらに関する資料が 4500 点以上残されている。

4. 湯川の活動の関連資料

湯川の活動に関連する資料として湯川に送られてきたもの、届けられたものが多数残されている。その中には、核兵器禁止運動関係 4700 点以上がある。さらに 1960 年代末の学生運動関係の資料 500 点以上もある。

5. 刊行物

5 - 1 湯川の著作

湯川の研究論文その他の著作の主なものは、

“Hideki Yukawa Scientific Works” edited by Y. Tanikawa, (岩波書店、1979)

“湯川秀樹著作集” 全 11 巻 (岩波書店、1989 - 1990)

にまとめられている。しかしここに含まれていないものも膨大な量であり、その後もうずもれていた史料の発見が続いている。史料室では、湯川の著作を整理し、可能な限り、入手することを目指している。1999 年初めまでにまとめられたリストは「湯川秀樹全著作 version 3」(1999 年 4 月)として、素粒子論研究 99 巻 3 号 1999 年 6 月 115 - 142 ページに公表してある。

5 - 2 その他

湯川が購入、あるいは寄贈された図書・雑誌のうち、基礎物理学研究所に残されていたものと、湯川の没後に湯川家から寄贈されたものが史料室と、湯川記念室に残されている。このうち パグウォッシュ会議の記録など、市販されなかったために入手が困難であって、国内にほとんど保存されていないものは、基礎物理学研究所図書室に置き、広く利用できるようにしている。

6. 書簡

湯川が、長年にわたり勤務先で受領した書簡は、廃棄されることも、失われることもなかったと思えるほど、大量に残されている。その数は7500通以上であり、内容の確認が続けられている。

7. 写真・音声・映像史料

史料室には、写真、映画やテレビの映像テープ、音声のオープンリール・テープやカセットテープが残されている。

写真は、湯川の没後遺族から提供されたものを中心にして、数百枚に上り、すでにデジタルされた。映画の35mmフィルムや16mmフィルム、音声の磁気テープ史料は、時間の経過とともに劣化が進んでいるので、順次これらのデジタル化をおこなっている。

8. 史料室委員会が作成した資料

(これらはすべて『湯川記念館史料室の史料目録』に含まれ、基礎物理学研究所のホームページに掲載されている)

- ・湯川秀樹全著作リスト version 3 1999年4月 わかっている範囲のすべての単行本素粒子論研究 99巻 (1999) pp.115 - 138
- ・湯川の著述リスト。単行本を除き、わかっている範囲で活字になったものすべて (Z03 - Z08)
- ・湯川が1936 - 1937年に書いたレター論文 (EDT070)
- ・大阪帝国大学「湯川研究室」理論物理コロキウム記録 1938年4月21日 - 10月15日 (EDT010)
- ・1939年のヨーロッパ・米国旅行 (EDT050)
- ・メソン会、中間子討論会などの記録 1941年 - 1944年 (EDT020)
- ・第2次大戦中に、ドイツから潜水艦によって日本に届けられたハイゼンベルクのS行列の第2論文 Die beobachtbaren Grössen in der Theorie der Elementarteilchen II, Zeitschrift für Physik 120, 11/12, 673 - 702 (1943) のコピーの日本国内への配布先リスト (EDT060)
- ・湯川日記に見る2中間子論の誕生 1942年 (EDT030)
- ・プリンストン高等研究所における、湯川の非局所場理論の展開 1948 - 1949年 (EDT040)
- ・1949年12月のノーベル賞受賞旅行 (EDT040)
- ・湯川の生前にパグウォッシュ会議から送られてきた会議記録 (EDT080)

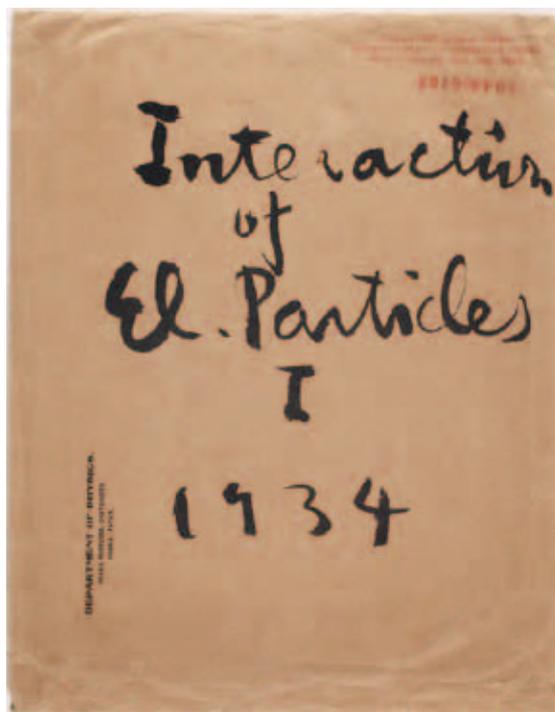
9. その他

⑤史料例

1) 中間子論第1論文作成の全資料

湯川記念館史料室が発足した1979年の秋、史料室委員は保存すべき資料の探索と収集を進めた。ある日、京大物理学教室図書室の片隅に眠っていた段ボール箱が、基礎物理学研究所発足前の理学部湯川研究室から運び込まれたものであることがわかり、史料室委員が急行して開けてみたところ、図書室に返却された古い物理の書籍の下から大量の大型封筒が見つかった。その一つ(s02-03-001、E0100P01)には、驚いたことに湯川自身の筆跡の毛筆で「Interaction of El. Particles I 1934」と書かれていた。中間子論第1論文関係の資料だった。もちろん直ちに湯川に報告した。湯川は、「自宅に持って帰るより、物理学史の資料として役に立つなら、史料室に寄贈する」と言い、これらすべてが史料室に収められた。湯川が出した唯一の条件は、資料発見と社会的に騒がないでもらいたいということだった。

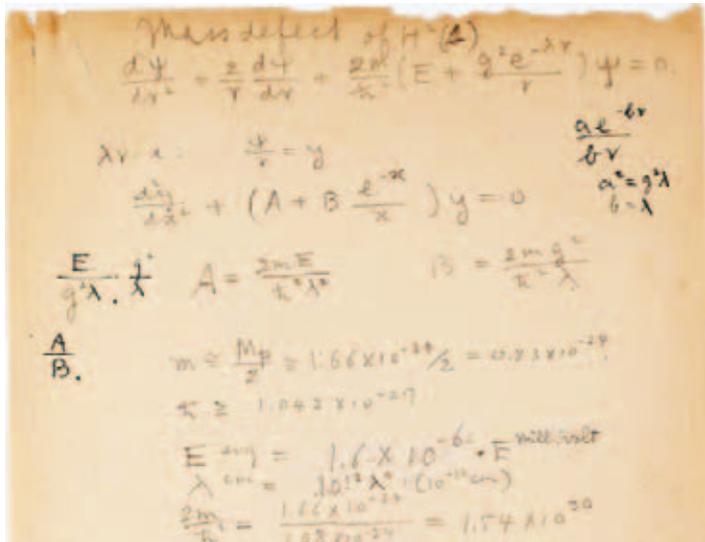
若い時代の湯川は、研究テーマごとに時間の順序に従って研究資料を整理し、使用済みの大型封筒に収めて毛筆で題目を書き保存していた。これがいつの間にか消えてしまっていたのだった。中間子論第1論文の封筒には17点の資料が入っていた。内容を分析しカタログを作った段階で、国内には日本物理学会年会の物理学史分科で発表し、国際的には米国で開かれた国際会議「素粒子物理学の誕生」で発表した。湯川の没後、日本物理学会誌の特集「湯川秀樹博士追悼」の中で解説が発表された。カタログは、雑誌「素粒子論研究」に史料室委員会編集「YHAL RESOURCES HIDEKI YUKAWA (I)」として発表された。YHALはYukawa Hall Archival Libraryの略である。



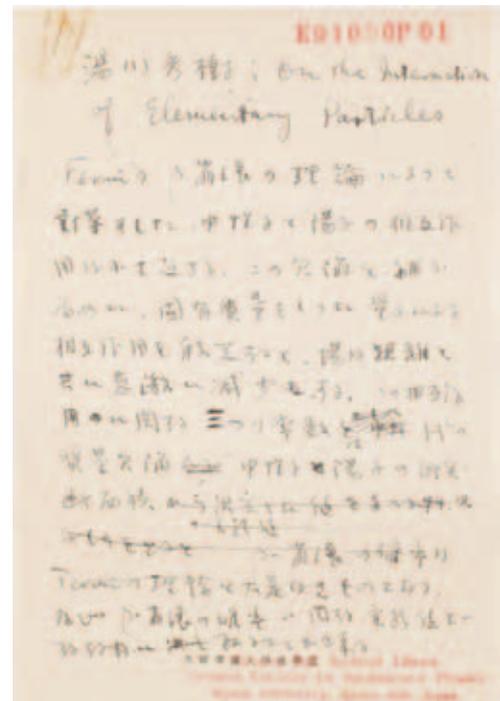
ここでは中間子論第1論文関係史料を、湯川自身が大型封筒に整理しておいた順に見ることによって、中間子論の形成をたどると同時に、大型封筒を使って研究資料を整理しておいた様子を見ることにしよう。

17点の資料は、7種類の計算(s02-03-002~008、E01010P01~E01070P01)から始まる。日付はない。内容は「Collision of N and P」と「Mass Defect of H₂」である。これについては、以下の3)「朝永振一郎から湯川への1933年の書簡」を参照されたい。次に「Oct. 27」の日付のある講演原稿(s02-03-009、E01080P01)がある。これは大阪大学の菊池(正士)研

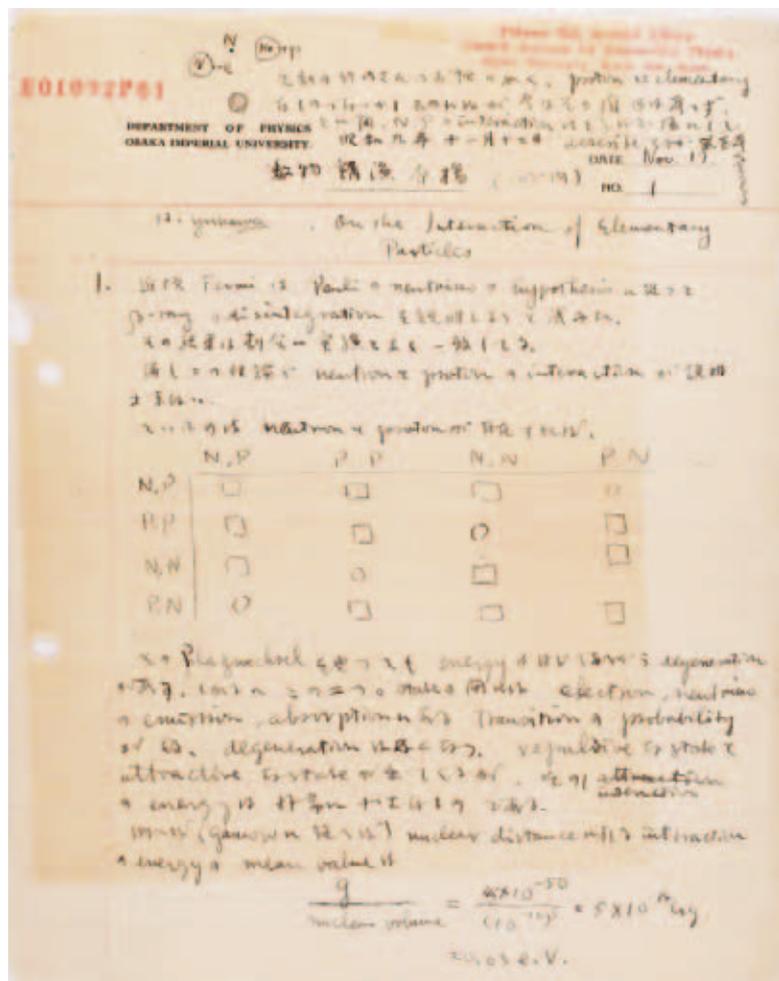
研究室で行った報告原稿である。湯川は、研究室内の非公式報告も、話し言葉の事前原稿を用意した。これを見ると録音機器で記録したように講演内容を知ることができる。



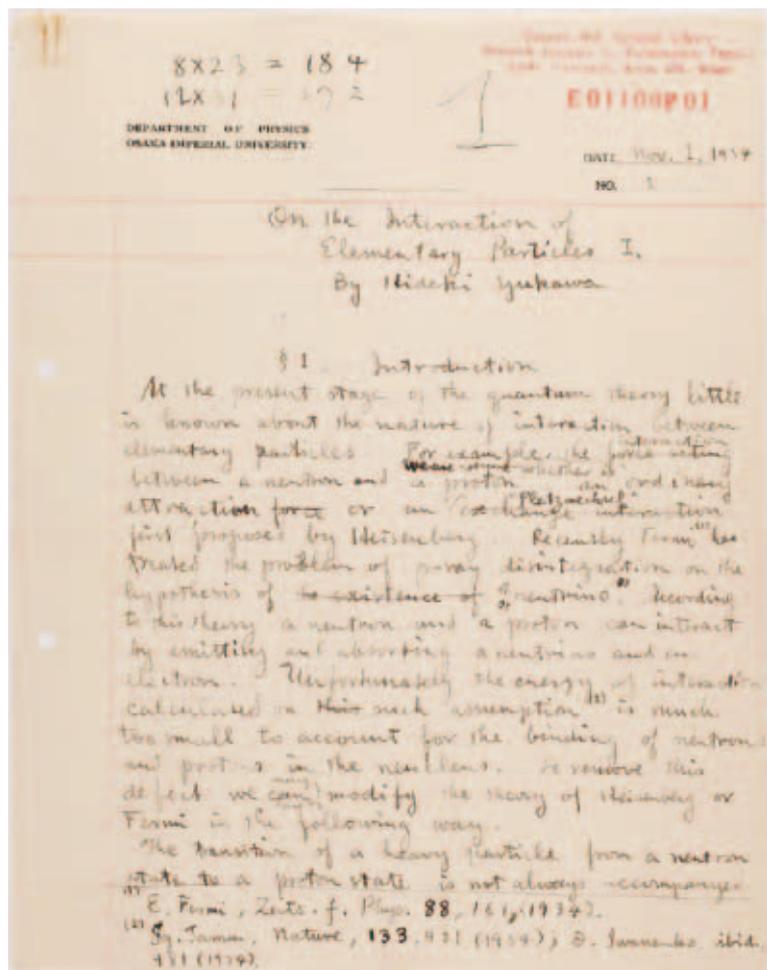
「Mass Defect of H²」の計算 (E01050P01)



次は「湯川秀樹：On the Interaction of Elementary Particles」と題する1枚であり、おそらく次の日本数物理学会常会講演内容の要約とおもわれる (s02-03-010、E01090P01)。そして1934年11月17日に東大で開かれた常会のプログラム (s02-03-011、E01091P01) が続く。これが湯川の間接子論の公式発表の日であった。その次の史料には「数物講演原稿 (10分間)」 (s02-03-012、E01092P01) という題が書かれていて、昭和九年十一月十七日と Nov. 17 の日付があり、14枚にわたって詳しい記述が展開されている。



これに続く史料は論文作成の関係資料である。まず11月1日の日付のある手書き英文の論文原稿 (s02-03-013、E01100P01) には最初のページの上部に大きく1と書いてあり、これが第1原稿であることを示している。この原稿には最後の Conclusion まで書き直しがほとんどなく、一気に集中して書き上げたことを思わせる。これを裏付けるように、当時の湯川はほとんど毎日日記をつけていたにもかかわらず、10月27日に大阪大学菊池研で上記の中間子論の講演をした翌日から11月4日までは、11月1日に「六時五十分起床」と発信欄に



(貝塚)「茂樹兄」とある以外何も書いていない。次には、左上に大きく2と書いた18枚の手書き改定原稿 (s02-03-14、E01110P01) と、大きく3と書いた最初から第3節の題までの8枚の手書き第3原稿 (s02-03-15、E01120P01) がある。

その次が15枚のタイプ原稿 (s02-03-16、E01130P01) である。日記により、このタイプは11月30日に自分でうち始めたこと、12月5日に「今日も Type。一通り終わる。」と書いて提出原稿が完成したこと、12月8日に日本数学物理学会の欧文誌 Proceedings of the Physico-Mathematical Society of Japan に送ったことがわかる。

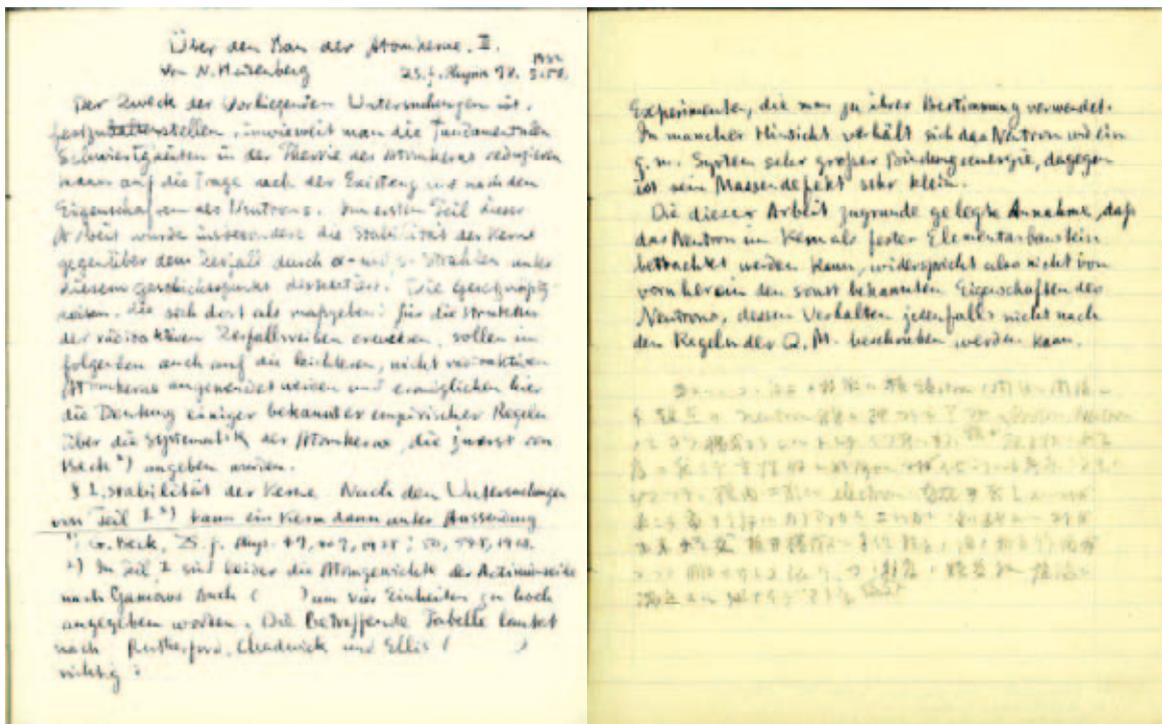
この大型封筒の最後の2枚は、論文のアブストラクトを日本物理学輯報 (学術研究会議から発行されていた Japanese Journal of Physics) に掲載するためとする京都大学の木村正路からの、木村自身への英文タイプ原稿送付依頼 (s02-03-17、E01140P01) と、英文タイプで作ったアブストラクト原稿 (s02-03-18、E01141P01) である。木村は日本数学物理学会の Proceedings の委員であって、当時は論文は委員の一人に提出し、その委員が掲載可否を決定することができた。論文には11月30日受理と記されているので、タイプ前の手書き原稿の段階で木村に提出し掲載許可をもらったと考える以外ない。

(小沼通二)

2) Heisenberg の原子核構造理論の日本数学物理学会誌への詳細な紹介と 1933 年の学会講演「核内電子の問題に対する一考察」

1932 年 2 月 27 日発行の Nature (Vol. 129, p.312、投稿は 2 月 17 日) に J. Chadwick の中性子発見の論文が発表された。これを受けた W. Heisenberg は、原子核構造の論文 3 部作を Zeitschrift für Physik に続けて発表した。1932 年 6 月 7 日投稿の I (77, 1 - 11)、7 月 30 日投稿の II (78, 156 - 164)、12 月 22 日投稿の III (80, 587 - 596) である。III の掲載は 1933 年になった。湯川はこの論文の重要性に着目し、直ちに詳細に分析した。

史料室には Heisenberg の第 2 論文の手書きの全文筆写 (c034-098、N223 の中) が残されているが、その最後に、鉛筆書きのメモが書かれている。「要するにこの論文の特徴は核 Electron の問題に関係した難点を Neutron 自身に押しつけて了って、核が Proton、Neutron のみより構成せられるという考えが原子核の安定性に就いて定性的に如何なることがいえるか考察したるものであって、核内に於いては electron の存在を否定することが果して当を得て (い) るかどうか、にわかに判断することが出来ないが、核を構成する単位粒子の間の相互作用がもっと明らかにされぬ限り、この論文の程度の漠然たる推論で満足する他ないであらう。」



Heisenberg 第 2 論文の全文筆写 (c034-098、N223 の中) 最初と最後の頁

湯川は、I と II について 11 ページにわたる詳細な紹介文を日本数学物理学会誌 7 卷 3 号 195 - 205 ページ (1933 年 3 月号) に発表した。校正中に III が届いたので、補注の形でいくつかの点を加筆している。

ここに引用したメモにある「核を構成する単位粒子の間の相互作用をもっと明らかにする」という自らに課した問題が、1933年4月3日の日本数学物理学会年会講演「核内電子の問題に対する一考察」からその先の中間子論につながる。史料室にある湯川の「核内電子ノ問題 昭和八年頃」と書いた大型封筒 (s02-07-001、E05000U01) の中にはこの講演の原稿と判断される資料 (s02-07-009、E05080U01) などがある。ここでは、電子が Fermi 統計に従うことを無視して陽子・中性子間の電子交換による核力を考察している。

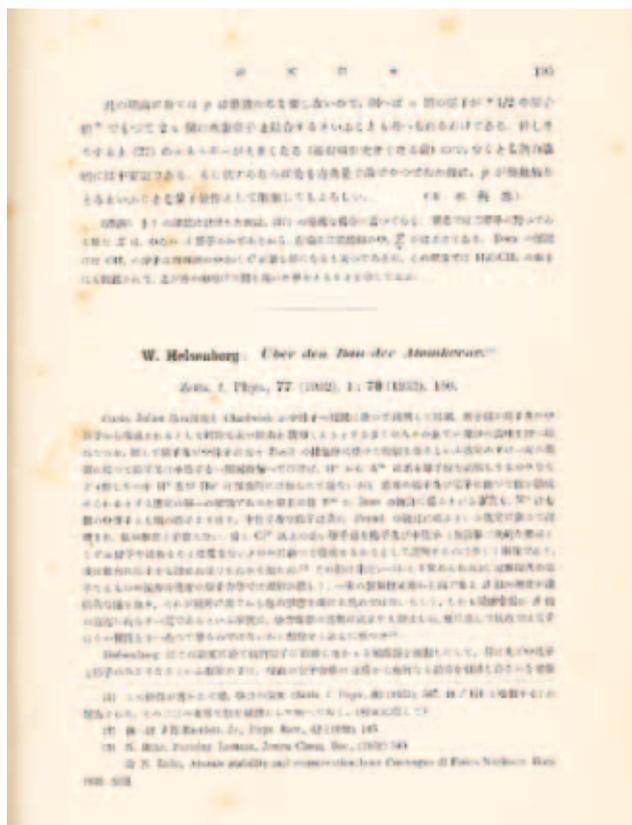
すなわち、「Neutron が electron を emit して Proton になり、Proton が electron を absorb して Neutron になりうるということ自身が、Neutron、Proton の間の interaction の原因となること、あたかも electron が radiation を emit 又は absorb しようということが electron 同志 (原文ママ) の interaction の原因となる如きものと考えられる。」

W. Pauli が導入したニュートリノが広く知られるに至るのは Fermi の β 崩壊の理論によるのだが、湯川は1934年になって大阪大学に着任した伏見を通して初めて *Ricerca Scientifica* 4 (2) 491 (1933) にでたイタリア語の Fermi 理論を知る。(Fermi 理論がドイツ語で発表されたのは1934年のことである。)

日本数学物理学会誌 (7巻, 131, 1933) に載ったこの講演の事前の概要には、「電子には静止質量があることからして中性子と陽子との間の距離が $h/2\pi mc$ に比して大きくなれば相互作用の勢力は急激に減少することが予想される」と書いたのだが、講演原稿には「実際計算してみると出て来ない」と書き、欄外に「想像の誤り」、「 $h/2\pi mc$ はきいてくるのだが、abstract に述べた様な意味では入ってこない」と注記している。

湯川は、常に不完全な場の量子論を使って考察しているという意識があったので、翌1934年の学会講演では「相対性量子力学における確率振幅について」を取り上げることになる。

Heisenberg はここで取り上げた論文の中で陽子と中性子の間のアイソスピンを導入しているのだが、その一方で中性子は陽子と電子の結合状態ではないかという考えから抜けられないでいた。湯川が、中性子を elementary particle だとして進み、中間子論の論文の題



に「素粒子の相互作用について I」と書いたのは、当時として決して自明ではなかったのである。

(小沼通二)

3) 朝永振一郎から湯川への 1933 年の書簡

湯川秀樹と朝永振一郎は終生のライバルであったが、それは競いあうと同時に、互いに切磋琢磨し、助け合う関係でもあった。

例えば、朝永は湯川のノーベル賞受賞に大きく貢献している。それは、1933 年のおそらく 6 月頃に朝永から湯川に送られた日付のない手紙 s04-03-009 (F02 080 C01) に見ることが出来る。1933 年 4 月 3 日に湯川は、東北帝国大学において行われた数物学会年会で講演 (いわゆる仙台講演) を行い、湯川中間子論の原型となる「電子交換による核力」のアイデアを発表したが、その際に朝永と議論をしていた。その後、湯川は朝永に自身の論文などを同封した手紙を送り、朝永と仁科がやっていた核力のより現象論的な研究について問い合わせた。それに対する返事としての手紙がこれで、文面から 1933 年 5 月～6 月 20 日頃までの間に送られた手紙と推測される。

朝永は、そこでいくつかの核力ポテンシャルを仮定して陽子-中性子散乱の散乱長や重陽子の結合エネルギーをフィットする計算結果についてかなり詳細な報告をしている。特に興味深いのは、今日湯川ポテンシャルと言われる $\frac{Ae^{-\lambda r}}{r}$ という形のポテンシャルで合わせた話を先の仙台学会で報告したことに 3 枚目の便箋で触れ、数値を再録すると共に、4 枚目の便箋に貼り付けたグラフにも、新しい別の二つのポテンシャルに対する結果と共に plot していることである。湯川が仙台講演の予稿に「電子には静止質量があることからして中性子と陽子との間の距離が \hbar/mc に比して大きくなれば相互作用の勢力は急激に減少することが予想される」と書いたに拘わらず、講演原稿では、「実際計算すると出てこない」と訂正し、 \hbar/mc の因子は予想した急激な減衰因子ではなく「位相因子として」しか入ってこない、とかなり混乱した状態にあったことから考えると、この手紙は極めて重要であった。事実、湯川はこの手紙を大切に持っており、第 1 ページの裏には、湯川がこの手紙のデータを見ながら行った計算の式が書き込まれている。そこには電子の Compton 波長の逆数 $\lambda = \frac{mc}{\hbar} = 3 \times 10^{10} \text{ cm}^{-1}$ の値がはっきりと読み取れ、そして朝永の手紙の第 3 頁には、湯川ポテンシャルの減衰因子 $e^{-\lambda r}$ の λ は、核力の実験値から $\lambda = 7 \times 10^{12} \text{ cm}^{-1}$ 位だとあるのである。湯川はこの 230 倍の違いを深く考えたに違いない。

そして実際、ノーベル賞の対象となった湯川の第一論文には、実験値からこれらのパラメータ A と λ を決定する計算が朝永によってなされていたことへの言及と朝永への謝辞が記されている。

(九後太一)

F02080c.01

本年紙解見にお返事を書かざるは名だつた。然るにその
 申状は、又 Faraday action 御送り下さる何難う。覺えの論文
 解見は、electron wave に Quelle を考へると、試み大差面白
 いと名だす。どうか困難をこの二つに道めれば、い
 ね。しかし、お書きの通りには見えたか。どうも有名な名だ
 ず。仁科さんにもお見せした。この字術振興会の仕事
 には、いかに申しあげておいた。何れ又仁科
 さんの書へもお知らせ。小差の計算もやれ、少し
 づつお出されたら、お一すお知らせ。小差の計算は、
 途中の process は別に面白いと名だす。お返すか、
 要するに

neutron の proton に対する mass absorption coefficient は Heisenberg
 の theory に依る。

$$\frac{\mu}{\rho} = \frac{\pi}{M R^2} \sum_{l=0}^{\infty} (2l+1) \{ [2-(-1)^l] \sin^2 \delta_{l,1} + [2+(-1)^l] \sin^2 \delta_{l,2} \}$$

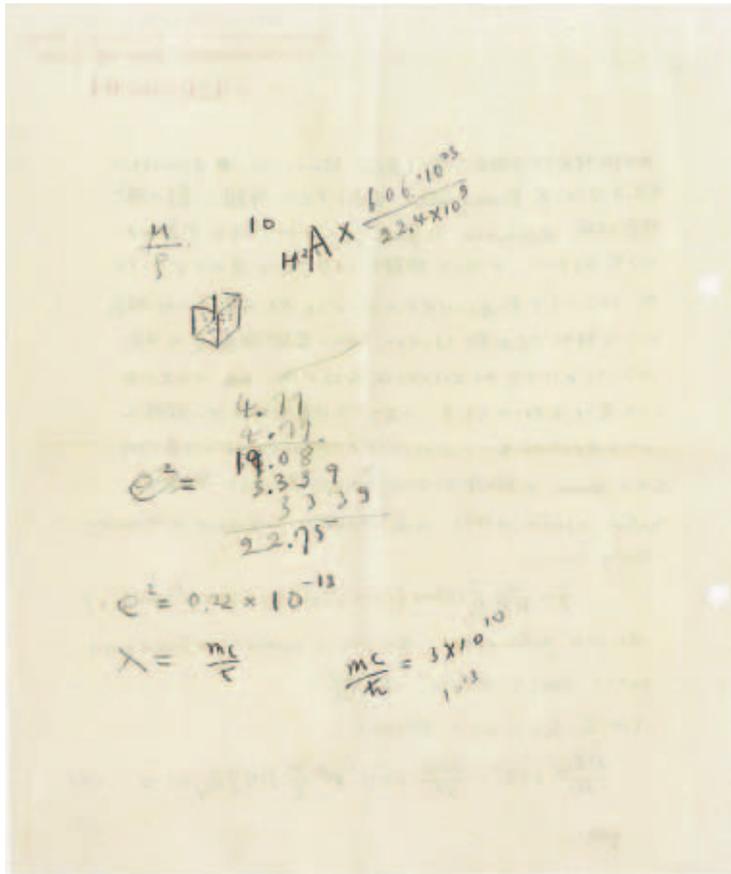
但し M は proton の mass. R は $\frac{1}{2} \lambda$ の neutron の (proton は止つた
 とき) velocity を v とすると $R = \frac{Mv}{2\hbar}$

と、 $\delta_{l,1}$ $\delta_{l,2}$ とは、お返しに

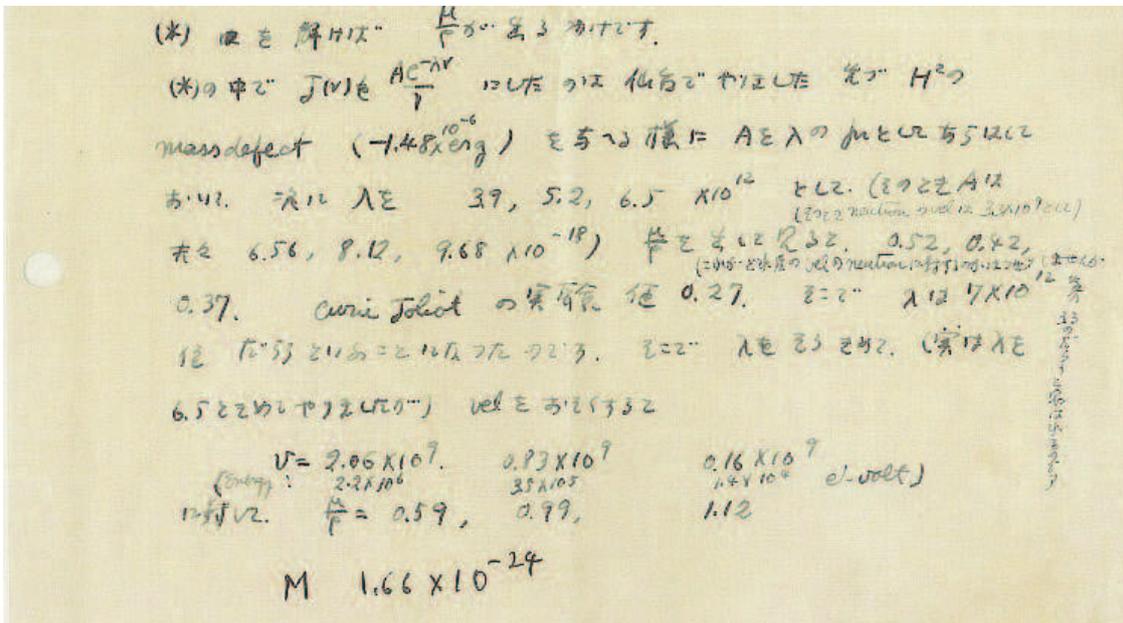
$$\frac{d^2 \Phi_{l,j}}{dr^2} + [k^2 - \frac{l(l+1)}{r^2} - (-1)^j \frac{M}{\hbar} J(r)] \Phi_{l,j}(r) = 0 \quad (*)$$

4/24

朝永の手紙第1頁



第1ページ裏に書かれた湯川の計算。電子の λ として $3 \times 10^{10} \text{ (cm}^{-1}\text{)}$ という数字が見える。



第3頁後半の文面：2行目には今日湯川ポテンシャルと呼ばれる式 $\frac{Ae^{-\lambda r}}{r}$ が書かれている。朝永が核力の実験と合わせると「 λ は $7 \times 10^{12} \text{ (cm}^{-1}\text{)}$ 位だろうと」ある。

4) 研究ノート

湯川史料のなかで、注目されるのは湯川の直筆（ペン書）による多数のノート群である。(1) 湯川が学生時代に必死に取りくんださまざまな「文献の筆写ノート」、(2) 教職についてからの多数の「講義ノート」(たとえば初期 1932 年の量子力学講義ノート (B5 ノート 3 冊) I, II, III c-32-231, -232, -233)、克明に記録された (3)「研究室日誌」、(4)「研究会ノート」などが残されている。

ここではまず理学部学生時代の「文献の筆写ノート」に触れる：

(1) 「京都帝国大学理学部物理学卒業論文」(s03-15) は、卒業論文 (1929) にかかわる 16 個の文書である。「卒業論文」(s03-15-001) からはじまり、最後の二つの「論文筆写」群：Fragment O, Fragment P からなる。後者は、湯川の学部学生時代 (1926-1929) に発表された世界最先端の学術論文 8 編の筆写であり、今日の電子コピー万能の時代からは想像を越える労作である。

とくに Fragment O (s03-15-015) 中の論文、P.Jordan und O.Klein, Zum Mehrkörperproblem des Quantentheorie. ZSP 45 751 (1928) (ドイツ語、右の写真は、その最初のページ Fragment O.pdf, 16/38) は、有名な「第 2 量子化」の先駆的論文である。この論文は学生時代の湯川、朝永を悩ました。そしてその間の両者の切磋琢磨がそれぞれ後のノーベル賞受賞に関わる湯川の間電子論 (1934)、朝永の超多時間理論 (1943) を支えている。

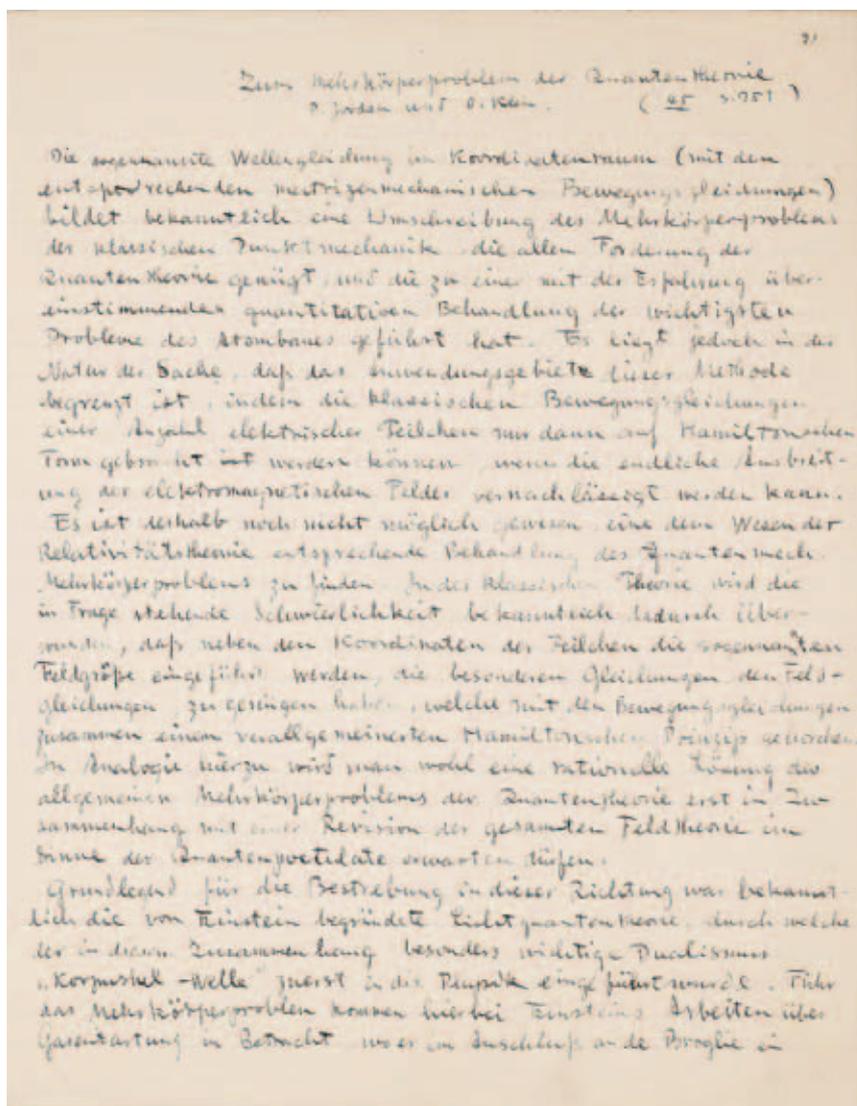


図 1 Jordan-Klein 論文の筆写

(2) 湯川の学部卒業(1929)後の「文献筆写」ノートとして、N101, N102, N201-, N221-(series) (ともに c034 に在中) が注目される。まず2つの「文献筆写ノート」“Memoir and Abstract I 1931” (c034-104) および “Memoir and Abstract II 1931” (c034-107) は、いずれも1931年と明記されたA5ノートで、学部卒業直後1～2年間の、当時西欧の最先端の文献が(それぞれ137、127ページにわたって)筆写されており、各ノートの冒頭ページに、つぎの言葉が書き込まれている。

I) “自己ノ全力ヲ自己ニ最モ必要ナル事柄ニ集中セヨ” (図I c034-104.pdf; 2/137)

II) “新シキ時代ノ代表者ニナレ” (図II c034-107.pdf; 2/127)

そしてさらに後者のノートIIには、幅5,6数センチの短冊風の文書一枚(c034-108)が挟み込まれており、その両面に、湯川の生涯にわたる学問の目標を暗示するかのよう、若き日(～24歳)の湯川の学問的展望、それに立ち向かう「決意」、あるいは「自戒」の念を示す、つぎのことばが書きこまれている。

イ) “原子核、量子電気力学ノコトヲ 一刻モ忘レルナ” (図イ c034-108.pdf, 1/2)

ロ) “明日カラ、夕食後モ学校ニ居ルコト 九月中庭球絶対ニヤラヌ” (図ロ c034-108.pdf, 2/2)

これらの文書は1931年12月時点のものと推測される。

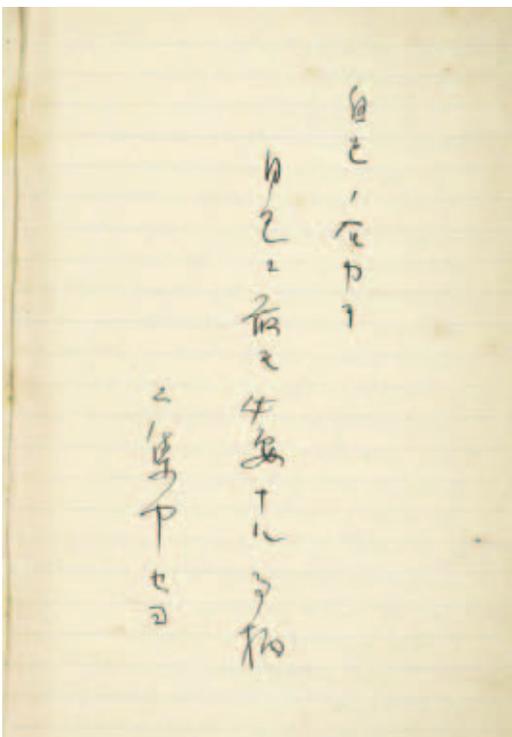


図 I

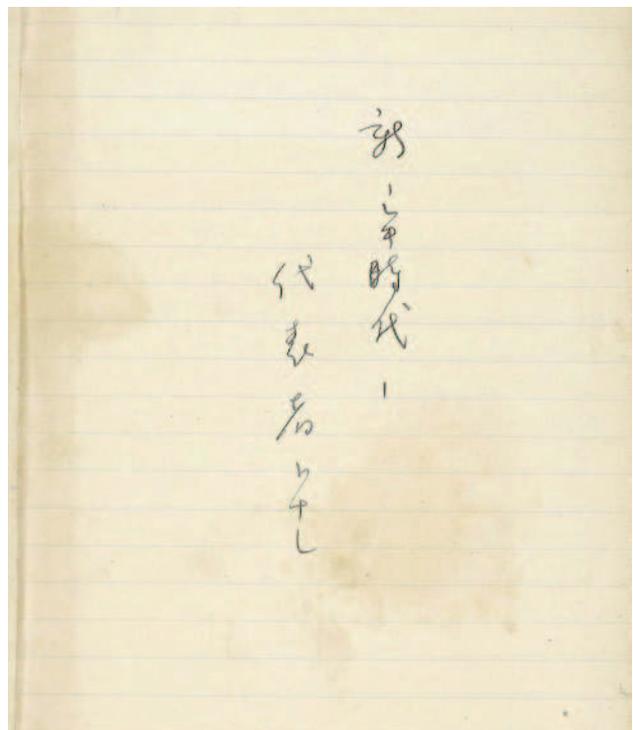


図 II

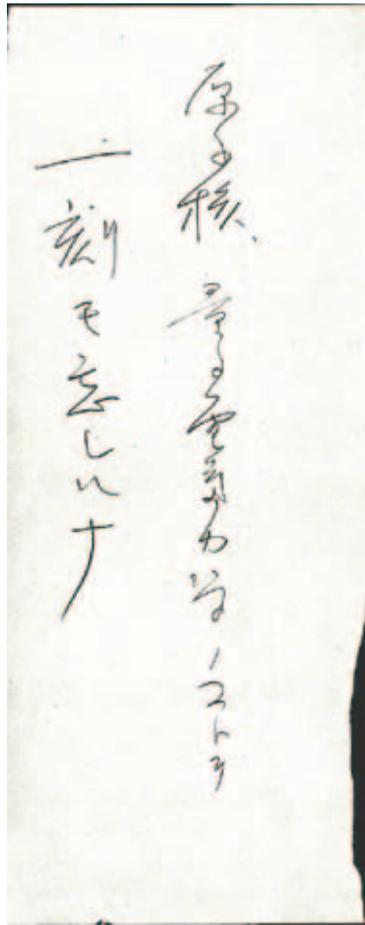


図 イ)

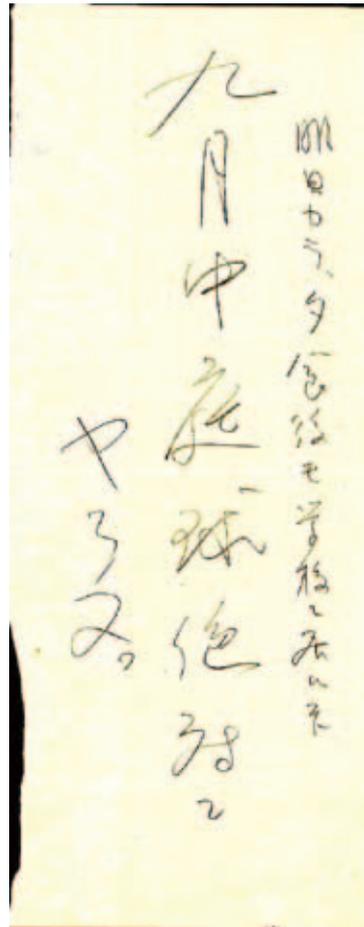


図 ロ)

湯川の自伝、『旅人』には上記をうらづけるかのように、つぎのような記述（角川版（1960）194 ページ）がある。

「大学を卒業してからの三年間は、私の学究生活全体から見ると非常に貴重な準備時代であった。・・・私の目の前には、二つの大きな研究テーマがあった。テーマというよりも、むしろそれは未開の広野であった。一つは相対論的な量子力学を、更に先へ発展させることである。もう一つは量子力学を原子核に関する諸問題に応用することである。どちらも大学を卒業したばかりの私には、大きすぎる問題である。私はまだ満二十二歳になったばかりである。

しかし年齢的に不足はなかった。当時、量子力学の建設発展に貢献した理論物理学者の大多数はまだ二十代であった。私より五、六年の年長者が多かった。ハイゼンベルク、ディラック、パウリ、フェルミ・・・この年（1929）の秋、ハイゼンベルクとディラックが手をたずさえて日本を訪れた。」

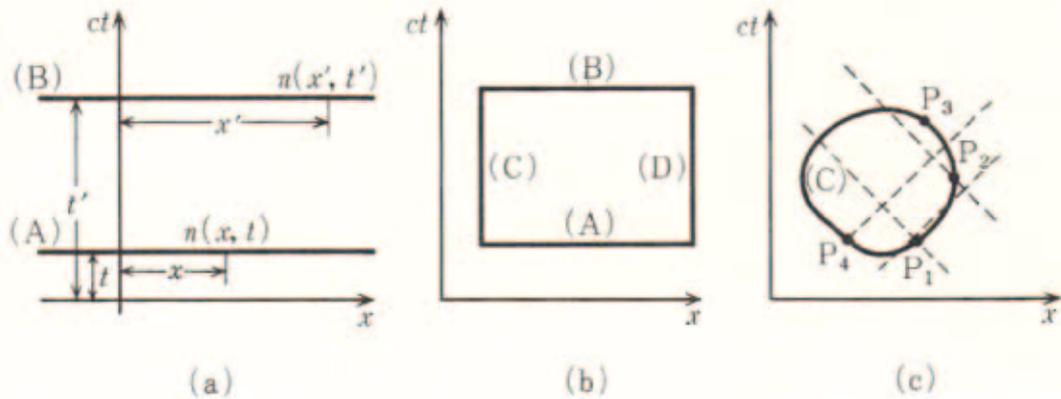
（田中 正）

5) 湯川の“マルの理論”の始まり

前項4) - (1) のイ)：“原子核、量子電気力学ノコトヲ、一刻モ忘レルナ” (c034-108) の中の、「原子核」と「量子電気力学」こそは、上記『旅人』のなかに述べられている“(私の目の前には、) 二つの大きな研究テーマ”である。とくに後者の「量子電気力学」の課題は、前項4) - (1) で述べた、1927年の Jordan und Klein の「第2量子化」(1927) に端を発し、ディラックの相対論的電子論(1928)(湯川の学部卒業研究のテーマ)を経て、1929～30年には Heisenberg und Pauli の「場の量子論」、「量子電気力学(Quantenelektrodynamik)」に発展するが、そこにはいわゆる深刻な“(紫外)発散の困難”(湯川：“無限大という悪魔”)の存在が指摘され、若き日の湯川を悩ます。上掲の『旅人』はこの間の事情を次のように記す：“当時、私は彼らの論文を、何度も何度もくりかえして読んだ。そして何とかして、無限大という悪魔を退治しようと、毎日毎日、想いをねった。しかし、この悪魔は私よりも強力であった。”(『旅人』197ページ) 湯川史料：「文献筆写ノート」、Quantenelektrodynamik I～V (1930～34) c034-096～-101 はこの苦闘を裏書している。そして転機が訪れる。“こんな日がしばらく続いた。とうとう私は悪魔退治に見切りをつけた。何かほかの、もう少しやさしい問題を見つけ出そうと思うようになった。”(198ページ) この“もう少しやさしい問題”が“二つの研究テーマ”のなかの一つ、「原子核」である。それへの引きがけになったのが、1932年のチャドウィックによる中性子の発見であり、そして2年後湯川の「中間子論第一論文」-上記の(1) 中間子論第1論文作成」につながることになる。

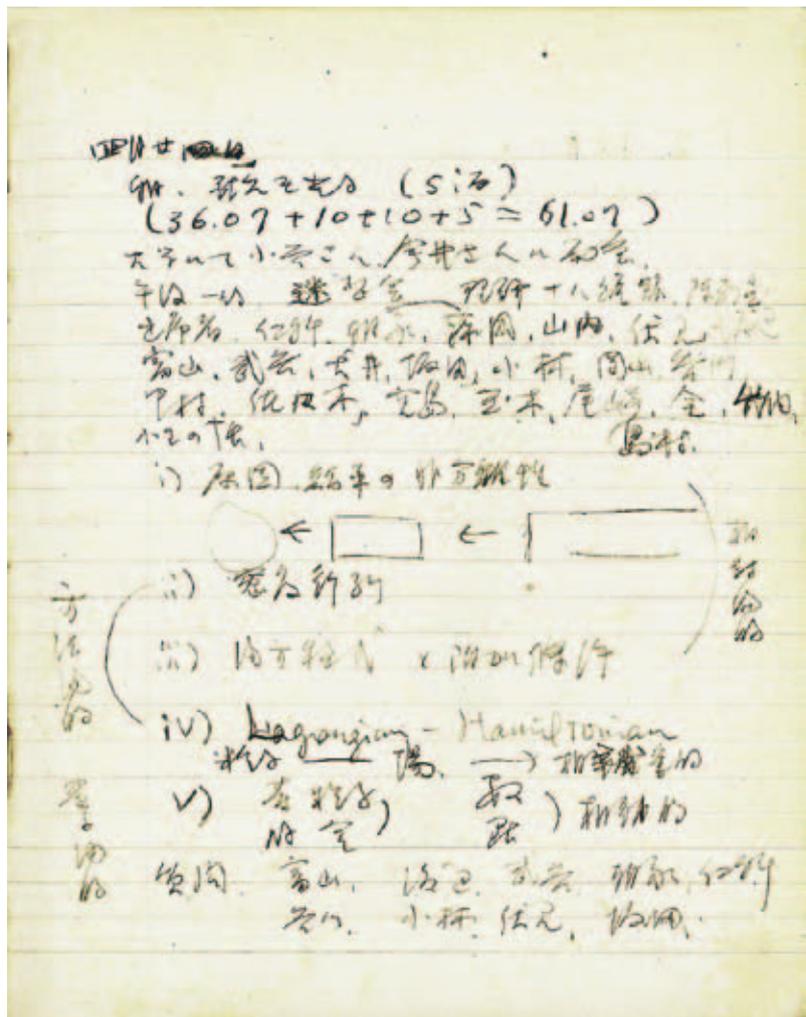
しかし一方の「量子電気力学」の“悪魔退治”についても、上記の“一刻モ忘レルナ”のことばに恥じず、1933年春の仙台の日本数物学会報告から、1934年秋にいたる中間子論への“暗中模索”の真っ最中であつたはずの1934年春、同じく日本数物学会での報告「相対性量子力学に於ける確率振幅について」(湯川史料 F01-030-T02, s04-01-004)のなかで、後年の湯川の「マルの理論」へのスタートを切っている。それは前年、1933年のディラックによる“The Lagrangian in Quantum Mechanics”(Phy. ZS. Sowj.3(1933).64)にかかわるもので、そこでディラックは「Lagrangian 密度の、任意の時空領域にわたる積分」を導入し、確率概念の一般化として「先天的確率」の可能性を強調する。それは後のファインマンの経路積分への先駆をなす(朝永の指摘)ものであるが、湯川はとくに任意の時空領域に注目する。これについての湯川の本格的な考察は、中間子論が一段落する1942年、雑誌『科学』(1942年、7, 8, 9号)に連載される「場の理論の基礎について」(Z04-010 A42)のなかで展開される。そこでは上記の任意の時空領域として、図の(a), (b), (c)が示され、湯川が注目するのは(c)の「マル」(閉曲線)の場合である。そこで以下のような自問・自答がなされる。

問「まずこの場合、原因や結果、因果則という概念はどうなるのか」。



答「この場合原因と結果は非分離となる・・・」。その上で“原因結果の非分離性は素粒子の構造が関係するような問題において、真に本質的な意味を持つに至るであろう・・・。非常に小さな時空領域においては、通常の意味での因果関係は存在し得ないだろう・・・”とも言う。湯川の「マルの理論」に注目した朝永は、このマルを相対論的な超曲面で囲まれた「空飛ぶ円盤型」(渡辺慧氏の命名、朝永「量子力学と私」著作集 11、p61)として、「超多時間理論」(1943)の考察に(朝永「超多時間理論からくりこみ理論まで」朝永著作集 11(みすず書房)所収参照)、一方の湯川は次項で触れる「素領域理論」(1966)に到達する。

なお上述の『科学』(1942年7,8,9月号)への連載に先立つ研究室での討論の様様を記録する湯川の実験室日記(s04-08-06)が残されている。右の図はその該当ページ(s04-08-06.pdf, 72/97)である。



研究室日記 (1942年4月24日)

(田中 正)

6) 「素粒子の時空記述」

湯川の戦後の研究は上記の「マルの理論」(1934)、より具体的には「場の理論の基礎について」(1942)に沿って、生涯にわたる。まず素粒子自体に“拡がり”をもちこむ「非局所場の理論」(1947～)から、時空そのものの変革に挑戦する「素領域理論」(1966～)への道、ひろくは「素粒子の時空記述」(“素粒子の多様な性質をそれらの時空間世界での構造と運動に同定する”)の研究である。それらは湯川史料の広範の部分にわたり、たとえば「時空記述」の標題のもとで「検索」すると、“[時空記述と物質—期待される素粒子像— 第二回素粒子論成人学校講義(1964)”(Z06-020 A65)から、“1. 観測問題について 2. 4次元量子化 3. 遠隔作用と近接作用 4. 因果関係 [素粒子の時空記述研究会 1975年3月13日～15日]”(s03-01-042)まで、61件が示される。さらにしぼって、「素粒子の時空記述研究会」で検索すると、26件が示される。『京都大学基礎物理学研究所 1953 - 1978』によると、「素粒子の時空記述研究会」は、短期研究会として1966年から1978年まで、計12回が開催されているが、それに関わる貴重な史料が多数見出される。その第一回は“[Elementary Domain Theory] 素粒子の時空研究会(東洋紡堅田求是荘 66 05・16)”Z06-010 T66とされ、湯川の素領域理論の幕開けと軌を一にしていることがわかる。また“[手書き原稿]素領域理論の現状と今日の問題(素粒子の時空記述研究会 1968 Sept. 26-28)”c043-003-005などの記録が残されている。

(田中 正)

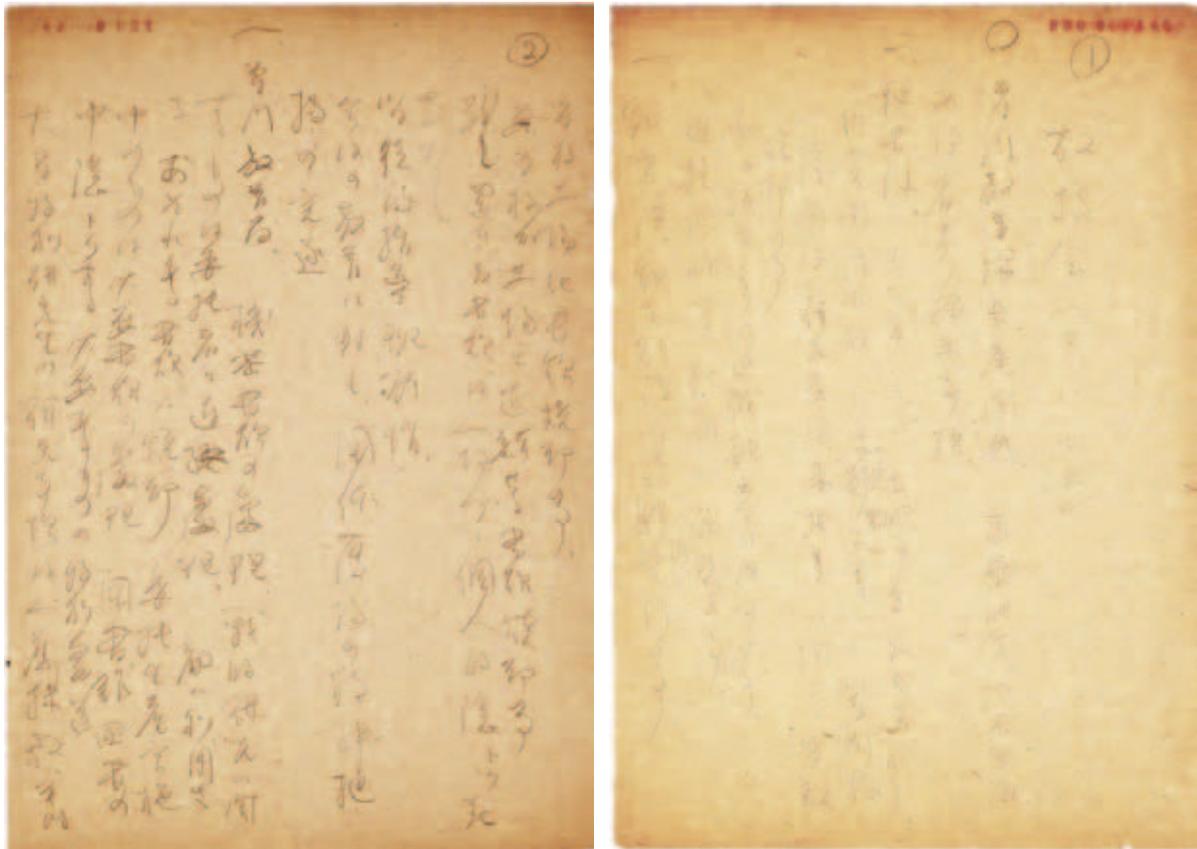
7) 敗戦直後の大学の状況、占領軍への研究報告

第2次世界大戦終結の1945年8月15日から1952年4月28日まで、日本は米国を中心とした連合軍の占領下にあった。占領軍は指令第1号(1945年9月2日)で、日本軍の武装解除に並んで、一切の軍事機関と軍事に関係した研究所などの保全と報告を命じた。この指令を具体化した指令第3号では、原子力研究の禁止とともに、一切の科学・技術機関に対し、前月の詳細な活動報告を毎月提出するよう命じた。

一方、来日した原爆調査団は、報告書の結論に、「指令第3号に注意すべし。特に、日本における核物理学研究の規制を命じた部分に留意すべきである。規制対象とすべきは次のグループである。」として4グループと5人の氏名を明記した。そこには理研グループ(指導者:仁科芳雄)、東大グループ(指導者:嵯峨根遼吉)、京大グループ(指導者:理論物理学者湯川秀樹、精力的実験物理学者荒勝文策)、阪大グループ(指導者:菊池正士)が挙げられていた。

これらのことは以前から明らかだったが、具体的に戦時体制がどのように変更され、活動がどのように規制されていったかを示す資料が、湯川記念館史料室に残されている。注目に値する資料の一つは、戦後10日目(1945年8月25日)の京大理学部教授会の湯川

による手書きメモ（s04-08-005、F50-040-X45）である。「文部省からの指示事項」として、焼却すべき書類、研究テーマの変更、「航空物理学」講座を「物理学第七講座」に変更、研究題目の変更などが具体的に記録されている。さらにこの日に9月3日には学生への授業開始、22日には卒業式を挙げることも決定された。



教授会（廿、八、廿五）メモ（F50-040-X45）第1枚目（左：裏、右：表）

この少しあと、9月28日の理学部長から物理学教室主任宛の「連合国軍司令部よりの命令に基づく実験所・研究機関に付調査に関する件照会」との書類（s04-08-013、F50-120-X45）がある。湯川は教室主任であった。ここで、現在の一切の研究、1940年以降の研究の詳細、前月中の研究について毎月初めに報告を提出すること、ウラン235の分離研究の禁止などが各教室レベルにまで通達されたのだった。湯川の報告書（案）（s04-08-014、F50-130-X45）には「中間子に関する理論的研究」に従事してきたこと、今後も継続の予定などが書かれている。別の報告（案）（s04-09-032、F51-251-N46）には、「戦時研究」について「戦時研究員（1945内命 正式発令なし）」として京都帝国大学において「原子核反応の理論」に従事していたことも書かれている。

（小沼通二）

調査書ニテモ
 昭和二十一年九月
 調査書ニテモ
 昭和二十一年九月

聯合軍司令部より之命令に基づく調査書類
 調査書ニテモ
 昭和二十一年九月

調査書ニテモ
 昭和二十一年九月

報告書

名	研究題目	研究地	研究年次	研究員	備考
1	研究題目	研究地	研究年次	研究員	備考
2	研究題目	研究地	研究年次	研究員	備考
3	研究題目	研究地	研究年次	研究員	備考
4	研究題目	研究地	研究年次	研究員	備考
5	研究題目	研究地	研究年次	研究員	備考
6	研究題目	研究地	研究年次	研究員	備考
7	研究題目	研究地	研究年次	研究員	備考
8	研究題目	研究地	研究年次	研究員	備考
9	研究題目	研究地	研究年次	研究員	備考
10	研究題目	研究地	研究年次	研究員	備考

左：「連合軍司令部よりの命令に基づく」調査の書類 (s04-08-013、F50-120-X45)

右：湯川の報告書(案) (s04-08-014、F50-130-X45) 第1ページ

Report made, preliminary, May 1947

1. 調査(1947) 湯川 実 研
昭和二十一年九月
2. 調査 昭和二十一年九月 湯川 実 研
3. 調査機関名 湯川 実 研
4. 調査内容 (調査項目) 湯川 実 研
湯川 実 研
5. 調査年次 1947
6. 調査員名 湯川 実 研
湯川 実 研
7. 調査内容 (調査項目) 湯川 実 研
湯川 実 研
8. 調査機関名 湯川 実 研
9. 調査年次 1947
10. 調査員名 湯川 実 研

1. 調査(1947) 湯川 実 研
2. 調査 昭和二十一年九月 湯川 実 研
3. 調査機関名 湯川 実 研
4. 調査内容 (調査項目) 湯川 実 研
5. 調査年次 1947
6. 調査員名 湯川 実 研
7. 調査内容 (調査項目) 湯川 実 研
8. 調査機関名 湯川 実 研
9. 調査年次 1947
10. 調査員名 湯川 実 研

別の報告(案) (s04-09-032、F51-251-N46)。「9. 戦時中ノ研究」の項がある。

8) ラッセル・アインシュタイン宣言への参加

湯川は、日本の敗戦後、執筆や発言を一切断って沈思と反省を重ね、その年の末までに、「戦争は常に人類の幸福の破壊者である」との考えを「週刊朝日」と「科学朝日」で展開し、核兵器による人類の絶滅も視野に入れ、世界が一つになって平和を守る以外ないとの確信を和歌の形で表明した。

広島・長崎の被爆に続く、ビキニ水爆実験での被曝を知って、湯川は、「原子力の脅威から人類が自己を守るという目的は、他のどの目的より上位におかれるべきだ」と語り、科学者として、日本人として、さらに人類の一員として、ためらうことなく平和運動に参加した。湯川の考えは、英字新聞や往復書簡によって欧米にも伝えられた。

バートランド・ラッセルは1955年4月5日に世界の指導的科学者に書簡（s02-20-018、E31-010-c55）を送り、宣言への参加を呼び掛けた。湯川は4月19日に賛同の返書（s02-20-021、E31-011-c55）を送った。これが、核兵器と戦争の廃絶を訴えたラッセル・アインシュタイン宣言への湯川の参加である。ラッセルが7月9日にロンドンで行った宣言発表の詳しい記録（s02-20-004、E31-021）も送られてきた。



ラッセルから湯川への書簡（s02-20-018、E31-010-c55）

E31-011-C55

11

In the tragic situation which confronts humanity, we feel that scientists should assemble in conference to appraise the perils that have arisen as a result of the development of weapons of mass destruction and to discuss a resolution in the spirit of the appended draft.

We are speaking on this occasion not as members of this or that nation, continent or creed, but as human beings, members of the species man, whose continued existence is in doubt. The world is full of conflicts: Jews and Arabs; Indians and Pakistanis; White men and Negroes in Africa; and, overwhelming all other conflicts, the titanic struggle between Communism and anti-Communism. Almost everybody who is politically conscious has strong feelings about one or more of these issues; but we want you, if you can, to set aside such feelings for the moment and consider yourselves only as members of a biological species which has had a remarkable history and whose disappearance none of us can desire. We shall try to say as plain words what should appear in each group rather than to another. All, usually, are in peril and, if the peril is unshared, there is hope that they may collectively avert it. We have to learn to think in a new way. We have to learn to see ourselves, not that steps can be taken to give military victory to whatever group we prefer, for these no longer are such steps. The question we have to ask ourselves is: What steps can be taken to prevent a military contest of which the loser must be disastrous to all parties?

The general public, and even many men in positions of authority, have not realized what would be involved in a war with thermonuclear bombs. The general public still thinks in terms of the obliteration of cities. It is understood that the new bombs are more powerful than the old and that, while one A-bomb could obliterate Hiroshima, one H-bomb could obliterate the largest cities such as London, New York and Moscow. No doubt in an H-bomb war great cities would be obliterated. But this is one of the many mistakes that would have to be faced. If everybody in London, New York and Moscow were exterminated, the world might, in the course of a few centuries, recover from the blow. But we now know, especially since the HIKIN test, that thermonuclear bombs can probably spread destruction over a very much wider area than had been supposed. It is stated on very good authority that a bomb can now be manufactured which will be 7500 times as powerful as that which destroyed Hiroshima. Such a bomb, if exploded near the ground or under water, sends radioactive particles into the upper air. They sink gradually and reach the surface of the earth in the form of a deadly dust or rain. It was this dust which infected the Japanese fishermen and their catch of fish. No one knows how widely such lethal radioactive particles might be diffused, but the best authorities are unanimous in saying that a war with H-bombs is quite likely to get us and to the bones bare. It is feared that if many H-bombs are used there will be universal death - sudden only for a fortunate minority, but for the majority a slow torturing of disease and disintegration. Many warnings have been uttered by eminent men of science and by authorities in military strategy. None of them will say that the worst results are certain, that they do say is that these results are possible, and no one can be sure that they will not be realized. We have not found that the views of experts on this question depend in any degree upon their politics or prejudices. They depend only, so far as our researches have revealed, upon the extent of the particular expert's knowledge. We have found that the men who care most are the best science.

E31-011-C56

NATIONAL INSTITUTE FOR PHYSICAL RESEARCH
TRENKLE HALL
ANN ARBOR, MICHIGAN
JULY 1945

April 29, 1945

Dear Professor Russell
Dr. Queen's Road
Surrey, Surrey
England

Dear Mrs Russell

I appreciate your great effort for the cause of benefit of mankind. I am willing to sign your statement.

I have just got a very sad news of the death of Professor Einstein, who had been so very influential in avoiding the possibility of both scientists and non-scientists all over the world, we too in our only to make an effort all the more eagerly to order to continue the ideal which he cherished in common with you and to which we subscribe.

Yours sincerely,

WILHELM DIETZ
Research Institute for
Fundamental Physics
Kyoto University

左：添付の宣言文第1ページ 右：湯川からラッセルへの返書 (s02-20-021、E31-011-c55)

E31-011-C57

12

PRESS CONFERENCE

by

DR. EARL RUSSELL

at

Cortina Hall, Westminster

on

Saturday, 9th July, 1945

Professor J. ROSSIGNOL: Ladies and Gentlemen, this conference was called by Lord Bertrand Russell in order to advise public a statement signed by a number of scientists on the significance of nuclear warfare. I hope that each of you received a copy of the statement. I am going to call on Lord Russell to give you a short summary of this statement and afterwards it will be open to you to ask questions relating to this topic.

EARL RUSSELL: Ladies and Gentlemen, the purpose of this conference is to bring to your notice, and through you to the notice of the world, a statement signed by eight of the most eminent scientists in the fields cognate to nuclear warfare, about the perils that are involved in nuclear warfare and the absolute necessity therefore of avoiding war.

I will just read you a brief abstract here which I think you already know:

"The accompanying statement which has been signed by some of the most eminent scientific authorities in different parts of the world deals with the perils of a nuclear war. It makes it clear that neither side can hope for victory in such a war, and that there is a very real danger of the extermination of the human race by dust and rain from radio-active clouds. It suggests that neither the public nor the Governments of the world are adequately aware of the danger. It points out that an agreed prohibition of nuclear weapons, while it might be useful in lessening tension, would not afford a solution, since such weapons would certainly be manufactured and used in a great war in spite of previous agreements to the contrary. The only hope for mankind is the avoidance of war. We call for a way of thinking which shall make such avoidance possible is the purpose of this statement.

The first move came as a collaboration between Einstein and myself. Einstein's signature was given in the last week of his life. Since in doubt I have approached men of scientific prominence both in the East and in the West, for political disagreements should not influence men of science in estimating what is probable, but some of those approached have not yet replied. I am bringing the warning pronounced by the signatories to the notice of all the general Governments of the world in the earnest hope that they may agree to allow their citizens to survive."

7月9日の宣言発表の詳しい記録 (s02-20-004、E31-021) タイトルと冒頭部分

湯川の活動はこれにとどまらなかった。核時代を超えるために、国家主権の絶対性を否定して世界政府や世界連邦を目指す運動にも積極的に参加した。史料室には、湯川の「核時代から世界連邦時代へ」(1971年11月25日)と題する講演の手書き原稿(c084-013-008)などが残されている。湯川は1961年から1965年まで世界連邦世界協会会長を務めた。また1955年には、下中弥三郎の呼びかけに応え、世界平和アピール七人委員会にも初代委員の一人として参加し、熱心に発言を続けたのだった。

(小沼通二)

9) パグウォッシュ会議と科学者京都会議

ラッセルは、湯川たちラッセル・アインシュタイン宣言の署名者と連名で、科学と世界の諸問題を討議する世界の科学者の会議の開催を呼びかけた。これを受けて、1957年にカナダのパグウォッシュ村で開かれた会議に湯川は朝永振一郎・小川岩雄とともに出席した。この会議が成功したので、継続することになり、今日に続くパグウォッシュ会議となった。海外でのパグウォッシュ会議への湯川の出席は1962年までの4回にとどまったが、その後もしばしば、原点を見失わないよう呼び掛けるメッセージを送り続けた。

パグウォッシュ会議からは、創設者の一人として湯川には毎回の議事録が送られてきていた。この議事録は市販されなかったため、非常に利用しにくかった。史料室では、広く利用できるよう、基礎物理学研究所図書室に移し、利用希望者に公開している。

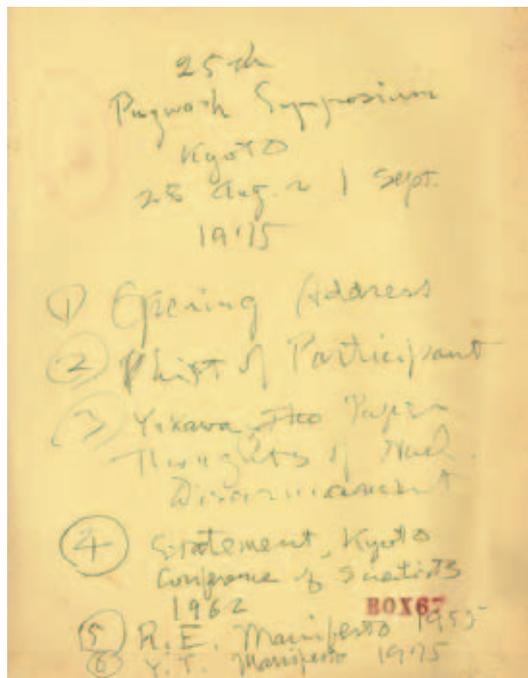
1962年には湯川は、京都の天竜寺で、ラッセル・アインシュタイン宣言に共鳴する科学者・文化人の会議を、朝永、坂田昌一と主催した。この会議は、開催地の名を取って、科学者京都会議と名付けられた。この会の記録は『平和時代を創造するために－科学者は訴える』(岩波新書、1963年)としてまとめられた。科学者京都会議は1980年代末まで



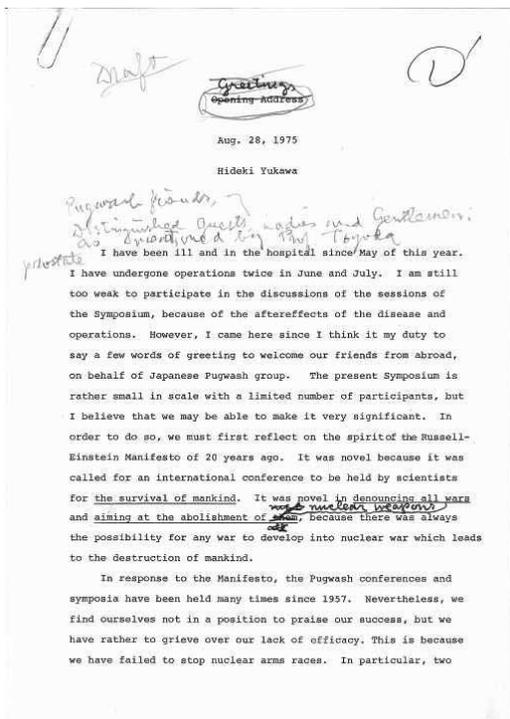
活動を続けた。史料室には、最初の会議趣旨と会議参加への呼びかけ（c094-014-008）からはじまる大量の資料がある。



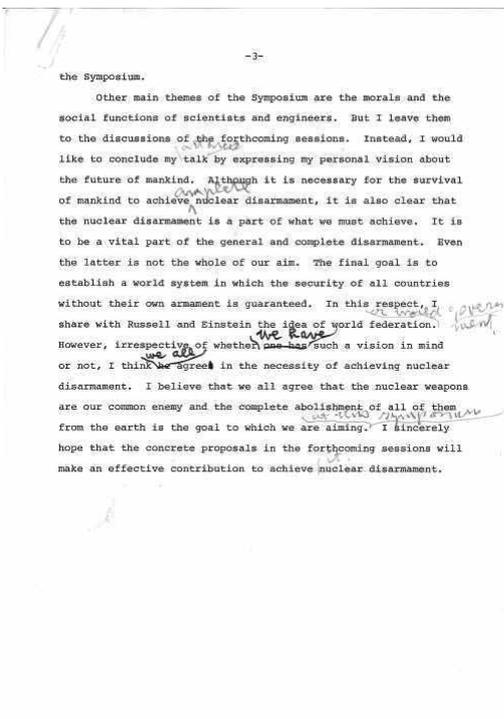
京都会議「呼びかけ」c094-014-008



Pugwash シンポジウム関係書類の「封筒」



シンポジウム「開会あいさつ」原稿（c082-005-002）第1,3頁。加筆の跡が見える。



湯川はさらに、1975年には、パグウォッシュ会議の原点に戻って議論をすることをめざし、京都で第25回パグウォッシュシンポジウム「完全核軍縮の新構想」を主催した。ところが会議準備を進めていた最中に2回の手術をうけ、静養を余儀なくされた。出席が危ぶまれる中で、開会演説の責任を果たすべく、車いすで開会式に参加し、力強いメッセージを読み上げ、核兵器によって安全を守ろうという考えがいかの間違っているかを訴え、「最終の目標はすべての国の安全がそれぞれの国の軍備を必要とすることなしに保障されるような、世界システムを樹立することです。この点に関して、私は、ラッセルやアインシュタインと世界連邦のヴィジョンを共にするものであります。」と述べた。この部分は、病氣静養中の湯川が最後までこだわって演説草案に手を入れたところであり、手書きの加筆原稿(c082-005-002)が、「重要」と朱筆をいれた大型封筒に入れて残されている。

1981年6月には京都で第4回科学者京都会議が開かれた。この日、体力が落ちていたにもかかわらず、十分な気力で出席し、出席者を前にして力強いメッセージを述べた。この会議では、「各国の軍備を必要としない世界システムの樹立」を目指す湯川の年来の主張が支持されて、会議の声明に盛り込まれた。病床にありながら主張を曲げることなく「道は必ず開ける」と確信していた湯川だったが、3か月後に永眠し、このメッセージが全人類への遺言となった。

(小沼通二)



車いすで出席した第25回パグウォッシュ・シンポジウム
(京都、1975年8月28日)で開会の挨拶をする湯川

参考文献

- 1) 河辺六男・小沼通二：「湯川記念館史料室私記」、素粒子論研究 65 卷 4 号（1982 年 7 月） pp.223 - 237
- 2) 小沼通二：「中間子論誕生の歴史的資料の発見」、自然 1980 年 10 月号 p.69
- 3) 河辺六男・小沼通二：「中間子論の誕生」、日本物理学会誌 1982 年 4 月号
- 4) HAYAKAWA Satio: The Development of meson physics in Japan, in “The birth of particle physics” Ed. by L. M. Brown and L. Hoddeson, Cambridge University Press, 1983
- 5) 早川幸男：「日本における中間子物理学の発展」、『素粒子物理学の誕生』（L. M. ブラウン、L. ホジソン編、講談社サイエンティフィク、1986） pp.86—112
- 6) Proceedings of the Japan-USA Collaborative Workshops “Elementary Particle Theory in Japan, 1930-1960” , Progress of Theoretical Physics, Supplement Number 105, 1991
- 7) 湯川記念館史料室の史料目録 京都大学基礎物理学研究所 湯川記念館史料室委員会 2007 年 5 月
- 8) “Hideki Yukawa Scientific Works” edited by Y. Tanikawa, 岩波書店、1979
- 9) 湯川秀樹著作集 全 11 巻 岩波書店
- 10) 湯川秀樹：『旅人』、角川ソフィア文庫
- 11) 湯川秀樹日記 昭和九年：中間子論への道、小沼通二編（朝日新聞社、2007）
- 12) 小沼通二：「1930 年代の学会誌への論文投稿：湯川秀樹の中間子論文の場合」日本物理学会誌 65 、452（2010）
- 13) 湯川秀樹・朝永振一郎・坂田昌一 編著：『平和時代を創造するために』、岩波新書 1963
- 14) 湯川秀樹・朝永振一郎・坂田昌一 編著：『核時代を超える』、岩波新書 1968
- 15) 世界平和アピール七人委員会編：『世界に平和アピールを發し続けて 七人委員会 46 年の歩み』、平凡社 2002
- 16) 『世界連邦運動二十年史』、世界連邦建設同盟 1969

朝永関係史料

(筑波大学 朝永記念室)

4. 朝永記念室（筑波大学）

① 史料概要・史料出典・史料室概要

史料概要

筑波大学朝永記念室（正式名称は、「筑波大学 朝永振一郎名誉教授記念室」）に保管されている史料は、朝永振一郎（ともながしんいちろう）博士に関係のある各種の原稿・蔵書・写真・遺品・資料等をまとめたものである。その一部は筑波大学学生会館ギャラリー内の朝永記念室で常時展示されており、また、史料のいくつかはデジタル化され、朝永記念室のホームページで公開されている。



朝永振一郎は、湯川秀樹に続く、日本人として2番目のノーベル賞受賞者で、超多時間理論、くりこみ理論、集団運動の理論などの基礎的研究により、現代物理学の礎を築いた^[1]。また、東京大学原子核研究所、乗鞍宇宙線研究所、素粒子研究所（現：高エネルギー加速器研究機構）などの設置に努力を注ぎ、日本学術会議会長などを務め、日本の科学振興に尽力した。さらに、マグネトロンと立体回路の理論の研究、多くの若手研究者の育成、教科書や随筆の執筆など、様々な分野でも活躍した。

朝永のノーベル賞に繋がった超多時間理論とくりこみ理論の研究は、1940年代に東京文理科大学（現：筑波大学）の教授として研究グループを率いていた時代に行われたものである。後には、東京教育大学（現：筑波大学）学長、東京教育大学附属光学研究所長を務めた。朝永の育てた物理学の系譜は、東京教育大学のつくばへの移転を経て、筑波大学に引き継がれている。

朝永振一郎略歴

- 1906 (明治 39 年) 3 月 31 日、哲学者朝永三十郎の長男として東京に生れる。
- 1912 東京 本郷の誠之小学校に入学。
- 1913 京都に移る。錦林小学校に転校。
- 1918 京都府立第一中学校に入学。
- 1923 第三高等学校に入学。
- 1926 第三高等学校卒業、京都帝国大学理学部物理学科に入学。同級に湯川秀樹。
- 1929 同大学を卒業し無給副手となる。
- 1932 理化学研究所仁科研究室に入る。東京へ転居。
- 1937 ドイツ・ライプツヒ大学のハイゼンベルグのもとに留学。
原子核理論、中間子論を研究する。
- 1939 第二次世界大戦の勃発とともに帰国。
「核物質に関する研究」により理学博士の学位を取得。
- 1941 東京文理科大学 (現：筑波大学) 教授となる。
中間子論の展開、超多時間理論の研究を開始。
- 1946 磁電管、立体回路の研究をまとめる。
「中間子論の発展と超多時間理論」により朝日文化賞受賞。
- 1948 「くりこみ理論」にとりくむ。
「磁電管の発振機構」の研究により日本学士院賞受賞。
- 1949 東京教育大学 (現：筑波大学) 教授となる。アメリカ・プリンストン高級研究所長オッペンハイマーに招かれて渡米。「多体問題」の研究を開始。
- 1950 帰国。
- 1951 日本学士院会員に選ばれる。
- 1952 文化勲章受章。
- 1956 ~ 1962 東京教育大学長をつとめる。
- 1963 ~ 1969 日本学術会議会長、東京教育大学附属光学研究所長をつとめる。
- 1964 物理学における業績により、ソ連科学アカデミー・ロモノソフ・メダル受賞。
- 1965 量子電気力学に関する業績により、ノーベル物理学賞受賞。
- 1969 東京教育大学を定年退官し、同大学名誉教授となる。
- 1976 勲一等旭日大綬章受章。
- 1979 (昭和 54 年) 7 月 8 日逝去。
- 1980 著書「物理学とは何だろうか」により大佛次郎賞受賞。

史料出典

朝永記念室の主要史料は、1979年（昭和54年）に朝永が逝去した後に、領子夫人の好意により筑波大学に寄贈されたもので、みすず書房編集者として朝永の著作の出版を多数手がけた松井卷之助氏からの寄贈品も一部含む。加えて、宮本米二関係史料、宮島龍興関係史料、朝永振一郎博士生誕100年記念事業関係資料^[2]、朝永振一郎記念「科学の芽」賞関連資料^[3]なども保管している。

史料室概要

朝永記念室は、筑波大学の前身である東京文理科大学・東京教育大学の教授・学長・附属光学研究所長などを歴任した朝永の業績を記念し、筑波大学の伝統として継承して行くため、1983年（昭和58年）9月29日に、亀淵迪筑波大学名誉教授、原康夫筑波大学名誉教授（いずれも当時筑波大学物理学系教授）らの尽力により、筑波大学大学会館内に設置された^[4]。2007年7月23日に、白川記念室などと共に、大学会館に開設された筑波大学ギャラリーに移転した。



参考文献

- [1] 朝永の現代物理学への寄与に関する最近の解説としては、以下を参照。
宇川彰、“場の量子論とくりこみ理論の半世紀”、科学 76, No.4, 369 (2006)
金谷和至、“「くりこみ」が拓く量子の世界”、別冊日経サイエンス 165 「素粒子論の一世紀 湯川、朝永、南部そして小林・益川」、20 (2009)
AAPPS Bulletin special issues on “The Centennial of the Birth of Sin-itiro Tomonaga”, Vol.16, Nos.2 and 4 (2006)
- [2] 2006 年 3 月に朝永の生誕 100 年を迎えるに当たって、筑波大学では 2006 年度に、記念講演会、特別展示、朝永振一郎記念「科学の芽」賞などの一連の「朝永振一郎博士生誕 100 年記念事業」が行われた。記念事業全般については
<http://tomonaga.tsukuba.ac.jp/kako/event/index.htm>
を参照。
特別展示は、京都大学、大阪大学、国立博物館と協力して、湯川・朝永生誕 100 年記念の特別展示として、東京、つくば、京都、大阪、など、各地で開催された。特別展示については以下を参照。
湯川・朝永生誕百年企画展示委員会編集、佐藤文隆監修、“素粒子の世界を拓く 湯川秀樹・朝永振一郎の人と時代”、京都大学学術出版会 (2006)
- [3] <http://www.tsukuba.ac.jp/community/kagakunome/index.html>
筑波大学が主催する朝永振一郎記念「科学の芽」賞は、小学生・中学生・高校生を対象とする科学コンクールで、「朝永振一郎博士生誕 100 年記念事業」の一環として 2006 年に第 1 回が実施された。その後、年に 1 回のペースで継続されている。「科学の芽」賞に関しては、以下を参照。
「科学の芽」賞実行委員会編、岩崎洋一監修、“もっと知りたい！「科学の芽」の世界”、筑波大学出版会 (2008); 同 part 2 (2010)
- [4] Susumu Kamefuchi, “The Tomonaga Memorial Room, Tsukuba”, Progr. Theor. Phys. Suppl. No.105, 312-315 (1991)

② 史料室 URL <http://tomonaga.tsukuba.ac.jp/>

③ 所在地・連絡先など

筑波大学朝永記念室

- 所在地 筑波大学 大学会館内
- 開館時間 9:00 - 17:00 土・日・祝日も開館
- 休館日 月曜日、年末年始
- 入館料 無料
- 交通案内 TXつくばエクスプレス つくば駅下車 つくばセンターより バス「筑波大学循環（右回り）」または「筑波大学中央行き」7分、「大学会館前」下車
- 連絡先 筑波大学 大学会館 事務室（029-853-2382）

朝永記念室ホームページに掲載されている画像などの転載について

- 著作権 <http://tomonaga.tsukuba.ac.jp/> に掲載されている内容の著作は、特に記載がない限り筑波大学に帰属する。
- 一部の写真・文章については、著作権が撮影者・執筆者に属しており、「写真：〇〇氏撮影」などの注が付けられている。それらの転載・コピー等はお断りする。
- それ以外の画像・文章などを、学術的・文化的目的に利用する場合は、下記に連絡のうえ、出典が「筑波大学 朝永記念室」であることを明示されたい。商業的目的のための利用はお断りする。
- さらに高精度の画像を希望の場合は、利用目的を添えて、下記まで連絡のこと。
- 連絡先 E-mail : tomonaga-web@physics.px.tsukuba.ac.jp
〒305-8571 茨城県つくば市天王台1-1-1
筑波大学 数理物質科学研究科 物理学専攻 朝永記念事業 気付

当史料カタログに掲載されている史料の扱いについて

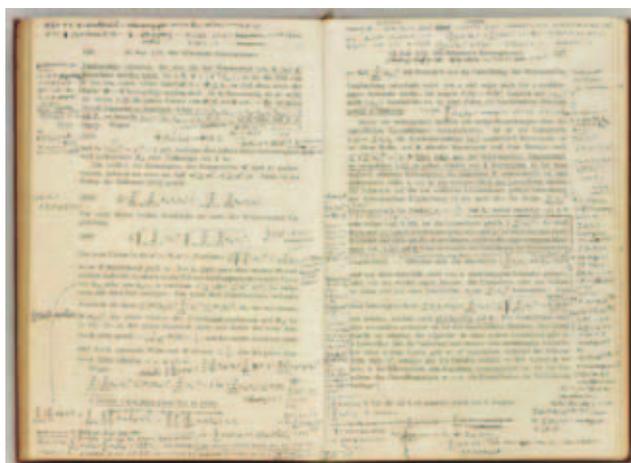
- 公開方針 当史料カタログに掲載されている史料の内、朝永記念室ホームページに掲載されているものについては、上記朝永記念室ホームページの公開規則に従う。
- その他の史料の公開も原則的に上記公開規則に従いますが、一部非公開のものもある。学術的・文化的目的に利用する場合の閲覧希望は、利用目的を添えて、下記に連絡のこと。また、出典が「筑波大学 朝永記念室」であることを明示されたい。商業的目的のための利用はお断りする。
- 連絡先 E-mail : tomonaga-web@physics.px.tsukuba.ac.jp
〒305-8571 茨城県つくば市天王台1-1-1
筑波大学 数理物質科学研究科 物理学専攻 朝永記念事業 気付

④史料カタログ大項目

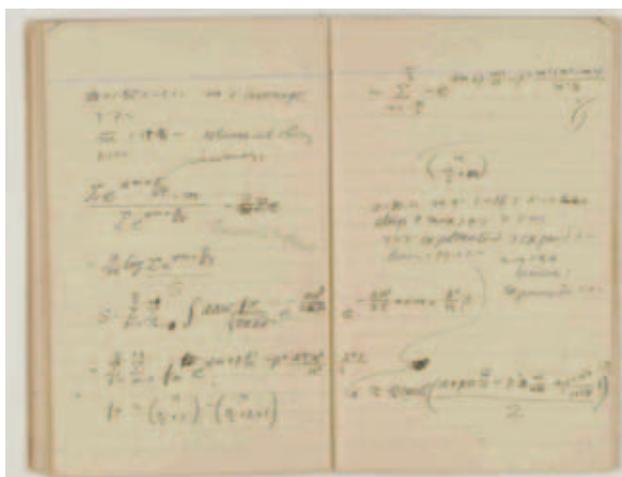
資料群番号	資料群名	概要
ST-001	論文、著書などの原稿	
ST-001-A	物理関係の原稿	「量子力学 I、II、III」原稿他
ST-001-B	随筆等の原稿	「物理学とは何だろうか」他
ST-001-C	講演、挨拶の原稿	
ST-001-D	科学と社会に関する原稿、メモ	
ST-002	印刷物	
ST-002-A	著書一覧	朝永コレクション
ST-002-B	論文	
ST-002-C	随筆など	
ST-002-D	講演の記録	
ST-002-E	対談、インタビューなど	
ST-003	参考図書等	
ST-003-A	朝永先生が使用された本	
ST-003-B	関係論文	
ST-003-C	執筆時の資料など	
ST-003-D	科学と社会	
ST-003-E	蔵書	朝永コレクション
ST-004	手紙	
ST-004-A	先生からの手紙	
ST-004-B	先生への手紙	
ST-005	メモ、紙きれ等	
ST-006	ノート	
ST-006-A	先生のノート	
ST-006-B	他の人のノート	
ST-007	賞状、辞令	
ST-008	その他	
ST-008-A	ノーベル賞関係	
ST-008-B	訪英に関するもの	
ST-008-C	朝永先生について書かれたもの	
ST-008-D	その他	
ST-009	遺品、幼年時作品等	自作玩具、幼児期習字、色紙など

ST-010	写真	幼児期、学生時代、理研時代、 教育大時代、ノーベル賞受賞など。
ST-011	親族の方々の遺品	
ST-012	朝永記念事業の記録	
ST-012-A	朝永記念講演	講演のカセット、ビデオなど
ST-012-B	朝永記念室	伊藤大介氏のデッサン、胸像など
ST-013	松井卷之助氏資料	朝永著書、講演記録など
ST-013-A	蔵書	
ST-013-B	先生の講演、随筆掲載誌	
ST-013-C	“物理学とは何だろうか” 執筆について	書き始め動機、メモなど
ST-013-D	朝永先生参考文献の一部コピー	
ST-013-E	関係文書	
ST-013-F	物理学読本書評 初版時	
ST-013-G	朝永先生に関すること及び学術会議について	
ST-013-H	ノーベル賞の頃の記事	
ST-013-I	逝去時新聞記事スクラップ	
ST-013-J	朝永家家系及び父君について	
ST-013-K	伝記作成のための資料	
ST-013-L	有名人の原稿	
ST-013-M	仁科先生関係	
ST-013-N	科学と技術の広場の会の Diary	
ST-013-O	講演記録テープ	
ST-013-P	朝永先生の思い出を語る	
ST-013-Q	科学と技術の会講演・座談会テープ	
ST-014	研究室、素研、核研関係資料	
ST-TBL	朝永記念室目録別表	
ST-TBL-A	賞状ファイル	
ST-TBL-B	辞令ファイル	
ST-TBL-C	ノーベル賞受賞祝辞等	
ST-TBL-D	勲一等受賞関係	
ST-TBL-E	入院時お見舞	
ST-TBL-F	葬儀関係	手紙、電報、弔辞、献歌
ST-TBL-G	風呂敷包みの内容	手紙、執筆資料、旅行資料など

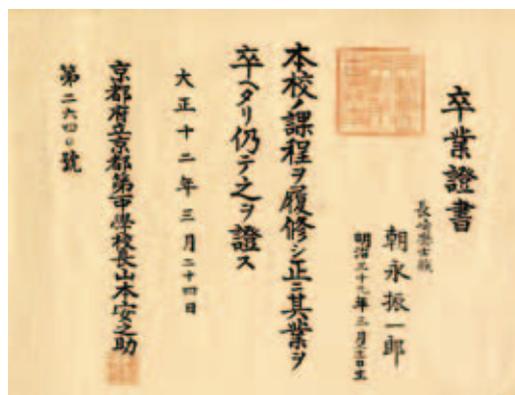
史料抜粋



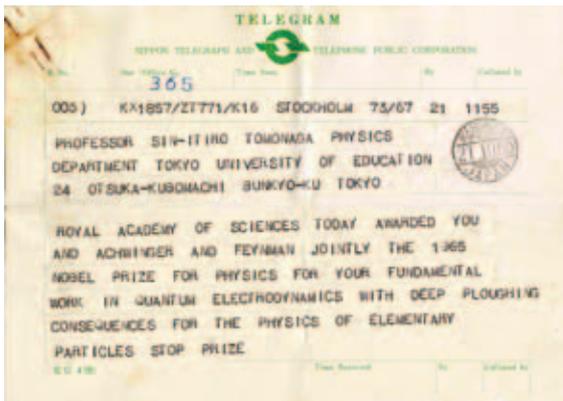
ST-003-A-13 : Wintner (朝永の書き込み有り)



ST-006-A-03 : ハイゼンベルク及びディラックの講演の時の朝永のノート (1929.9)



ST-007-01 : 賞状ファイルより



ST-007-17c：ノーベル賞授賞を伝える電報



ST-009-07：双眼鏡

双眼鏡は子供時代に、船の機関長だった叔父さんからドイツ土産として贈られたもの。生涯にわたって愛用され、晩年には「庭にくる鳥」(随筆)の鑑賞に使用された。

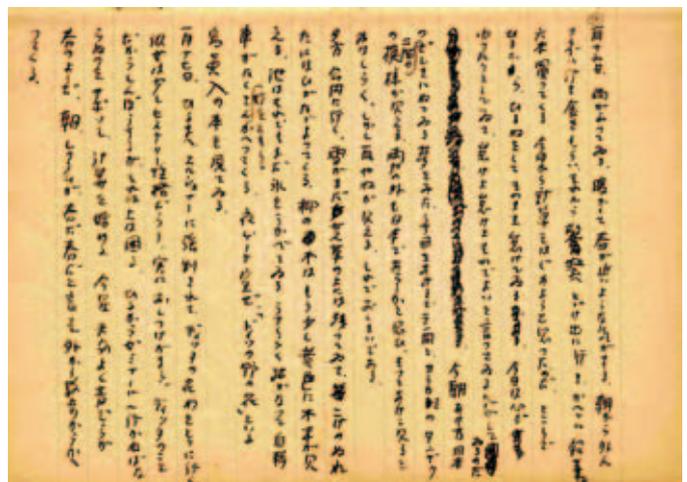


ST-009-10：茶碗 2ヶ

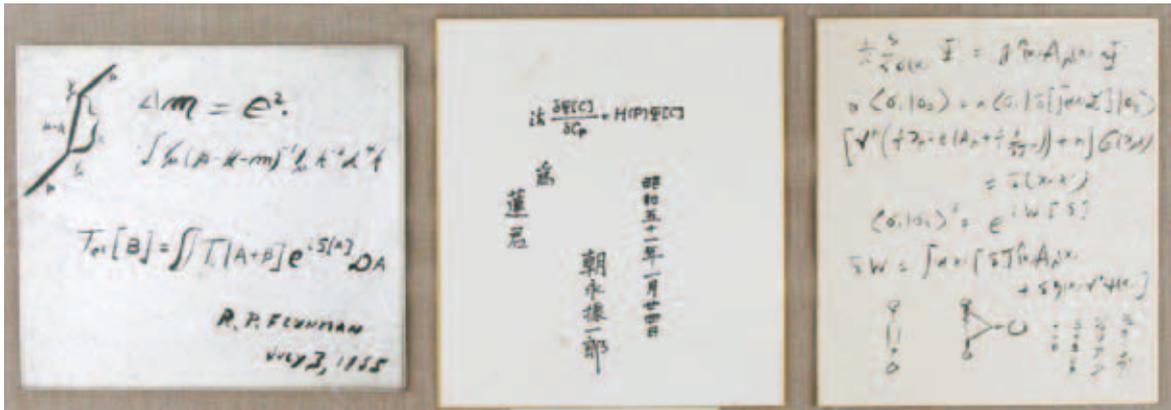
猫と朝永方程式。波佐見窯（長崎県）での作品。



ST-009-15：三高または京大時代の自画像



ST-009-16：滞独日記



ST-009-33a ~ c: ファインマン、朝永、シュヴァインガーの色紙

ST-010 写真アルバムより



小学校5年生頃



三高時代 後列右から2人目 (前列右端は湯川秀樹博士)



京大副手時代
右端 (右から4人目は湯川秀樹博士)



理研時代 軽井沢合宿



ノーベル賞授賞 東京スウェーデン大使館にて



ST-010-26：東京教育大ノーベル賞祝賀風景

ST-001	論文、著書などの原稿
ST-001-A	物理関係の原稿 「量子力学 I, II, III」原稿他
ST-001-A-01	“量子力学 I” 第 2 版のための序文と補
ST-001-A-02a,b	“量子力学 II” の原稿、初校（加筆あり）
ST-001-A-03a ~ e	“量子力学 III” の原稿
ST-001-A-04a ~ e	“量子力学 III” のための資料
ST-001-A-05a	The Development of Elementary Particle Theory 1949
ST-001-A-05b	The Development of Elementary Particle Theory（手書き）
ST-001-A-06	Fundamental Formalism of Intermediate Coupling Theory 1953
ST-001-A-07	Scattering Problem in the Intermediate Coupling Theory I
ST-001-A-08	朝永論文集 II ゲラ刷り
ST-001-A-08-1a	2 卷 II 1 Theory of Split Anode Magnetron I（途中）
ST-001-A-08-1b	3 A General Theory of Ultra Short Wave Circuits I
ST-001-A-08-1c	III 4 中間子の理論
ST-001-A-08-1d	5 量子力学の適用範囲の限界について
ST-001-A-08-1e	9 核粒子の近傍に於ける中間子の状況について
ST-001-A-08-2a	2 卷 II 5 Theory of Magnetron
ST-001-A-08-2b	III 10 原子核反応に於ける S マトリックスと分離方式
ST-001-A-08-2c	III 12 量子電子力学の発展 - 輻射場の反作用の問題を中心として -
ST-001-A-09	原子核反応に於ける S マトリックスと分散方式
ST-001-A-10	トンネル現象についてのもの
ST-001-A-11	A General Theory of Ultra Short Wave Circuits I 1946.10.19
ST-001-A-12a, b	極超短波磁電管の研究の原稿、グラフ
ST-001-A-13	Intermediate Coupling, Ultra Short Wave Circuits 関係の計算とメモ
ST-001-A-14a	朝永論文集 II 巻の原稿
ST-001-A-14b	Theory of Magnetron
ST-001-A-14c	appendix
ST-001-A-14d	§ 5 Kosumosu-type circuit
ST-001-A-14e	Appendix II の挿絵
ST-001-A-15	Theory of Magnetron の青焼き
ST-001-A-16	スライド
ST-001-A-17	名大集中講義「状態空間について」（1971.11.11-12） ノート・レポート用紙，聴講者が講義を書き取ったもの。

ST-001-B	随筆等の原稿
ST-001-B-01	物理学とは何だろうか 原稿
ST-001-B-02	スピンはめぐる 原稿
ST-001-B-03	入院の楽しさと悲しさ
ST-001-B-04	ねこものがたり
ST-001-B-05	訪英旅行と女王様
ST-001-B-06	日本の物理学の発展に対する理研の役割 1978.9.1
ST-001-B-07	量子力学 50 年に寄せて “科学” 1976 年 1 月号の巻頭
ST-001-B-08	鈴木先生の話
ST-001-B-09	“庭に来る鳥” の訂正原稿 (科学と技術の広場 1974 Vol.14)
ST-001-B-10	湯川・朝永宣言の下書
ST-001-B-11	物理学輪講会について
ST-001-B-12	物理学とは何だろうか 第Ⅲ 3 のあとのまとめかたのメモ (テープ)
ST-001-B-13	チューリッゲンの森の保養地で (1938 年夏)
ST-001-B-14	ライプチヒの学生ハイムで (1938 年) 原稿用紙
ST-001-B-15	ライプチヒの学生ハイムで (1939 年)
ST-001-B-16	海の上で (1939)
ST-001-B-17	目白で (1940 年)
ST-001-B-18	ライプツィッヒの思い出 学芸社 1951.8, 原稿
ST-001-B-19	ハイゼンベルク教授のこと
ST-001-B-20	庭に来る鳥 序文
ST-001-B-21	庭に来る鳥
ST-001-B-22	一休禅師
ST-001-B-23	無題
ST-001-B-24	ねずみたち
ST-001-B-25	おたまじゃくしと子どもたち
ST-001-B-26	西田町一丁目
ST-001-B-27	思い出ばなし
ST-001-B-29	ホテル・旅館・銭湯考
ST-001-B-30	ある日のできごと
ST-001-B-31	科学者の戦争観
ST-001-B-32	無題 中途まで
ST-001-B-33 ~ 36	書きかけ
ST-001-B-37, 38	物理学とは何だろうか に関する下書き類

ST-001-C	講演、挨拶の原稿
ST-001-C-01	訪英の際の挨拶 1972.3 (手書き、タイプ、日本語訳)
ST-001-C-02	英国立協会でのなされた講演 (日本文、英文、下書き)
ST-001-C-03	原子核物理に於ける日英の交流 (英文原稿、下書き)
ST-001-C-04	ノーベル賞スエーデン旅行に於ける講演原稿
ST-001-C-05	Heisenberg 独文原稿
ST-001-C-06	宇宙観の変遷 手書き
ST-001-C-07	理研の役割 (大河内書簡在中) 手書き
ST-001-C-08	うそのパラドックス云々 (速記の一部)
ST-001-C-09	物理学の周辺 第23回定期技術講演会要旨
ST-001-C-10	科学と文明 (途中まで)
ST-001-C-11	Opening Address (核構造の国際会議) S.Kikuchi 氏のコピーを含む
ST-001-C-12	物理学とは何だろう 岩波講演に関するもの (手書き原稿、メモなど)

ST-001-D	科学と社会に関する原稿、メモ
ST-001-D-01	7人委員会の要望書について (文責・内山) 最終ページ裏にメモあり
ST-001-D-02	原子力についてのその後の経過 (9月16日、9月28日)
ST-001-D-03	パグワッシュ会議の主旨の意約
ST-001-D-04	パグワッシュ会議について
ST-001-D-05	講演予稿 後半4と同じ
ST-001-D-06	パグワッシュ会議での講演? (他人の手による英文)
ST-001-D-08	核戦争についてのメモ
ST-001-D-09	核戦争についてのメモおよび討論メモ
ST-001-D-10	核研設立時のメモ
ST-001-D-11	核研設立時の記録
ST-001-D-12	質問に関する答え (英文)
ST-001-D-13	第9回文明懇談会議事録および当日のメモ
ST-001-D-14	7人委員会声明書 フランス共和国宛、中華人民共和国宛、下書き他

ST-002 **印刷物**

ST-002-A	著書一覧
ST-002-A-01	量子力学 I, II みすず書房 朝永振一郎 著
ST-002-A-02	量子力学における数学的方法 - 散乱問題 - 岩波書店 朝永、宮島、谷、會津、宮沢 共著

- ST-002-A-03 場の量子論 岩波書店 朝永、福田、福田、沢田 共著
- ST-002-A-04 S-Matrix and Dispersion Formula. A Course given by Prof. Tomonaga
- ST-002-A-05 Quantum Mechanics vol. I, II North Holland 1962
- ST-002-A-06 スピンはめぐる 中央公論社
- ST-002-A-07 点字 物理 上、下 朝永、福田著 東京点字出版所
- ST-002-A-08 Scientific Paper of Tomonaga Vol. 1, 2 みすず書房
- ST-002-A-09 極超短波磁電管の研究 朝永、小谷著 みすず書房
- ST-002-A-10 量子力学概論 2 仁科、富山、朝永著 共立社
仁科編 量子物理学第 4 卷
- ST-002-A-11 超短波磁電管 水間正一郎、朝永振一郎、高尾磐夫共著 コロナ社
- ST-002-A-12 デイラック量子力学 朝永他訳 岩波書店
- ST-002-A-13 極超短波理論概説 朝永振一郎、宮島竜興 リスナー社
- ST-002-A-14 物理学読本 第 2 版 朝永編 みすず書房
- ST-002-A-15 科学と私 東京理科大学
- ST-002-A-16 量子力学的世界像 弘文堂
- ST-002-A-17 随筆集 庭にくる鳥 みすず書房
- ST-002-A-18 鏡の中の世界 みすず書房
- ST-002-A-19 科学と科学者 みすず科学ライブラリー みすず書房
- ST-002-A-20 原子核から素粒子へ 藤岡、朝永著 弘文堂
- ST-002-A-21 わが師わが友 講談社学術文庫
- ST-002-A-22 鏡の中の物理学
- ST-002-A-23 物理学とは何だろうか 上、下 岩波新書
- ST-002-A-24 宇宙線の話 朝永編
- ST-002-A-25 平和時代を創造するために 湯川、朝永、坂田著
- ST-002-A-26 物理学者の眼 朝永他 科学随筆全集 2 学生社
- ST-002-A-27 核軍縮への新しい構想 湯川、朝永、豊田編 岩波書店
- ST-002-A-28 朝永振一郎著作集 1 - 12 補巻 1 - 3 みすず書房
- ST-002-A-29 自然 300 号記念増刊総集録 (仁科、湯川、朝永、坂田) 中央公論社
- ST-002-A-30 核時代を越える 岩波全書
- ST-002-A-31 物質とは何か 座談 (朝永、渡辺、三宅、下村) アテネ文庫・弘文堂
- ST-002-A-32 物理の歴史 朝永振一郎編 毎日新聞社
- ST-002-A-33 現代自然科学講座 4 (科学と方法)

- ST-002-B 論文
- ST-002-B-01 On the Photo-Electric Creation of Positive and Negative Electrons
by Nishina, Tomonaga, Sakata 1934
- ST-002-B-02 On the Annihilation of Electron of Positrons
by Nishina, Tomonaga, Tamaki 1934
- ST-002-B-03 On the Negative-Energy Electrons by Nishina, Tomonaga 1934
- ST-002-B-04 A Note on the Interaction of Neutron and the Proton
by Nishina, Tomonaga, Tamaki 1935.8.21
Sci.Pap.I.P.C.R. Vol.30, P61 1936.8
- ST-002-B-05 On the Collision of a High Energy Neutrino with a Neutron
by Tomonaga, Tamaki 1937,9,27
Sci.Pap.I.P.C.R. Vol.33, P288 1937.11
- ST-002-B-06 Innere Reibung und Wärmeleitfähigkeit der Kernmaterie 1938.7.15
Z.f.Physik vol.110 No.9-10 1938
- ST-002-B-07 Scattering and Splitting of Photons on the Non-Linear Field Theory
of Born and Infeld by Tomonaga, Kobayashi 1938.8.31
Sci.Pap.I.P.C.R. Vol.34, P1643 1938.11
- ST-002-B-08 Über den Zusammenstos des Mesotrons mit Elektronen 1940.4.30
Sci.Pap.I.P.C.R. Vol.37, P399 1940.6
- ST-002-B-09 Zur Theorie des Mesotrons I 1941.10.31
Sci.Pap.I.P.C.R. Vol.39, P247 1941.12 別冊
- ST-002-B-10 Zur Theorie des Mesotrons II by Miyazima, Tomonaga 1942.1.27
Sci.Pap.I.P.C.R. Vol.40, P21 1942.8
- ST-002-B-11 Bemerkung über die Streuung der Mesotrone am Kernetilchen 1942.7.25
Sci.Pap.I.P.C.R. Vol.40, P73 1942.9 別冊
- ST-002-B-12 On the Mesotron Theory of the Nuclear Forces
by Miyazima, Tomonaga 1943.1.21
Sci.Pap.I.P.C.R. Vol.40, P274 1943.3
- ST-002-B-13 場の量子論の相対論的な定式化について 1943.4.20
理化学研究所彙報 第22巻第6号 昭和18年
- ST-002-B-14 中間子と核粒子との相互作用について 上 1943.6.30
理化学研究所彙報 第22巻第8号 昭和18年
- ST-002-B-15 中間子と核粒子との相互作用について下 7.6
理化学研究所彙報 第22巻第9号 昭和18年 掲載誌

- ST-002-B-16 極超短波磁電管の研究－質点力学的理論 by 朝永、小谷 1944-1945
“磁電管の研究” みすず書房 s27 年
- ST-002-B-17 On a Relativistically Invariant Formulation of the Quantum Theory
of Wave Fields 1946.5.17
Prog.Theor.Phys. Vol.1, No.2 P27, Sci.Pap.I.P.C.R. Vol.22, p545 1943
- ST-002-B-18 On the Effect of the Field Reactions on the Interaction of Mesotrons
and Nuclear Particles II 1946.7.8
Prog.Theor.Phys. Vol.1,No.4 P109 1946.11-12
- ST-002-B-19 A General Theory of Ultra-Short-Wave Circuits I 1946.8.19
- ST-002-B-20 A General Theory of Ultra-Short-Wave Circuits II
J.Phys.Soc.Japan Vol3,No.2-3 1948.3-6 (別刷なし)
- ST-002-B-21 Theory of Split-Anode Magnetrons I , II
J.Phys.Soc.Japan Vol3,No.1 P56 1948.1-2
- ST-002-B-22 On the Theory of Air Shower Initiated by Secondary Soft Rays
by Hayakawa,Tomonaga 1947.8.6
Sci.Pap.I.P.C.R. Vol.43, p67 1948.12
- ST-002-B-23 Corrections due to the Reaction of Cohesive Force Field to the Elastic
Scattering of an Electron I by D.Ito,Z.Koba,Tomonaga 1948.2.28
Prog.Theor.Phys. Vol.3,No.3 P276 1948
- ST-002-B-24 On Radiation Reactions for Collision Processes I
by Koba,Tomonaga 1948.3.1, Prog.Theor.Phys. Vol.3,No.3 P290 1948
- ST-002-B-25 Corrections due to the Reaction of Cohesive Force Field to the Elastic
Scattering of an Electron II by D.Ito,Z.Koba,Tomonaga 1948.3.3
Prog.Theor.Phys. Vol.3,No.4 P325 1948
- ST-002-B-26 A Self-Consistent Method in Quantum Field Theory I
by T.Tati,Tomonaga 1948.5.23, Prog.Theor.Phys.Vol.3,No.4 P391,1948
- ST-002-B-27 A Self-Consistent Method in Quantum Field Theory II
by Ito,Koba,Tomonaga 1948.9.23,
Prog.Theor.Phys.Vol.4,No.1, P47, 1949
- ST-002-B-28 素粒子論の進展－無限大の困難をめぐって 科学 1965 12 月号 1949.1
- ST-002-B-29 Applicability of Pauli's Regulator to the γ -decay of Neutrons
by H.Fukuda, Miyamoto, Miyazima, Tomonaga, S.Oneda, S.Ozaki, S.Sasaki
1949.7.17 Prog.Theor.Phys. Vol. IV , No.4 P477 1949.10-12
- ST-002-B-30 ファインマンの拡散方程式 朝永、福田

- 素粒子論研究 3 卷 2 号 1951 (別刷なし)
- ST-002-B-31 Intermediate Coupling Theory of Pion-Nucleon Scattering 1953.9.21
1953 年国際会議のプロシーディング
- ST-002-B-32 量子力学の適用範囲の限界について 物理学講演集 2
- ST-002-B-33 中間子の理論 科学 11 卷 4 号 (1941)
- ST-002-B-34 量子力学的多体問題 (中国版) 科学進展
- ST-002-B-35 物理学界四半世紀の素描 日本物理学会誌 5 卷 6 号 (1950) メモ入り
- ST-002-B-36 On a Relativistically Invariant Formulation of the Quantum-Theory of
the Fields I.P.C.R 22 (1943)
- ST-002-B-37 量子力学的多体問題 日本物理学会誌 第 11 卷 4 号 (1956)
- ST-002-C 随筆など**
- ST-002-C-01a 思い出ばなし 1, 5, 6, 9, 10, 12 教育大学新聞連載 1962.9.10-
- ST-002-C-01b 思い出ばなし 2, 7, 8, 15 (松井家より)
- ST-002-C-02 ぶらぶらポカン 朝日新聞
- ST-002-C-03 数学が分かるというのはどう言うことであるか
都中数研究会報第 4 号 1961.7.1
- ST-002-C-04 わが研究の思い出 日本物理学会誌第 32 卷 10 号 1977
- ST-002-C-05 量子力学と私 日本物理学史 上
- ST-002-C-06 素粒子論に新分野 坂田昌一さんのこと
- ST-002-C-07 富山さんの思い出 科学 1972 12 月号
- ST-002-C-08 木庭二郎さんの思い出 科学 1974 6 月号
- ST-002-C-09 庭にくる鳥 科学と技術の広場 No84 Vol14 1974
- ST-002-C-10 科学と人類 世界 1975.12
- ST-002-C-11 訪英旅行と女王様 学士会報 1973- I
- ST-002-C-12 仁科先生 朝永論文集 II
- ST-002-C-13 量子力学 50 年によせて 科学 1976 1 月号 巻頭
- ST-002-C-14 湯川・朝永宣言 1975.9.1 自然 1975.11
- ST-002-C-15 かなしい現実 1948.10.25
- ST-002-C-16 仁科先生の温情に泣く 我が師我が友 1962
- ST-002-C-17 ゴイデル海の水防とローレンツ 1960
- ST-002-C-18 人類の滅亡を救うために 1961
- ST-002-C-19 暗い日の感想 1954
- ST-002-C-20 ソルベー会議と現代物理学 1962

- ST-002-C-21 科学と技術の現代的課題
- ST-002-C-22 10年ひとりごと 1956
- ST-002-C-23 新しい酒は新しい袋に (原仙作氏の英訳つき)
- ST-002-C-24 訳本 ファウスト風中性子誕生の前夜
- ST-002-C-25 Fotonno ce Jugejo
- ST-002-C-26 Reminiscences (小林稔氏)
Supplement of the Progress of Theoretical Physics 1968
- ST-002-C-27 Reminiscences (藤岡由夫氏) Science of Light 1967
- ST-002-C-28 物理と哲学と政治 毎日情報 1951.1月
- ST-002-C-29 凡児さんとゴム風船
- ST-002-C-30 移り変わる教育 やすだニュース
- ST-002-C-31 ねこ 暮らしの手帳
- ST-002-C-32 ねずみたち 暮らしの手帳
- ST-002-C-33 垣ねの下、塀の下 暮らしの手帳
- ST-002-C-34 おたまじゃくし 暮らしの手帳
- ST-002-C-35 鳥獣戯画 暮らしの手帳
- ST-002-C-36 西田町1丁目 暮らしの手帳
- ST-002-C-37 武蔵野に住んで
- ST-002-C-38 訪英旅行と女王さま 学士会会報 No. 718 (1978)
- ST-002-C-39 凡児さんとゴム風船 図書 12 (1970)
- ST-002-C-40 入院の楽しみと苦しみ
- ST-002-C-41 なまいき 一部
- ST-002-C-42 蚊、蚤、蠅、われら 暮らしの手帳 40 (1976)
- ST-002-C-43 ねずみたち 暮らしの手帳 41 (1976)
- ST-002-C-44 うれしい京言葉 京都新聞 S36.1.1
- ST-002-C-45 北京の休日
- ST-002-C-46 ボロ家もまた楽し 教育大新聞 S34.1.25
- ST-002-C-47 学生気質の今と昔 教育大新聞 S36.1.26
- ST-002-C-48 体育と私 学校体育 11-1 (1958)
- ST-002-C-49 科学者の自由な楽園
- ST-002-C-50 私と物理実験 教科研究 2 - 7 (1956)
- ST-002-C-51 量子力学的世界像 基礎科学 創刊号 (1947)
- ST-002-C-52 光子の裁判 (2) 基礎科学 3-5 (1949)
- ST-002-C-53 写真屋さんについて CONTACT 3-5 (1965)

- ST-002-C-54 鏡の中の世界 数学セミナー 2-1 (1963)
- ST-002-C-55 今の子どもと昔の子ども 教育研究 14-1 (1959)
- ST-002-C-56 子どもの情景 教育研究 15-1 (1960)
- ST-002-C-57 日本学術会議の声明 (原水爆実験の禁止、云々) 1964.10.30
- ST-002-C-58 日本学術会議の声明 (南極地域観測、原子力潜水艦の日本寄港問題、
国立大学教官の待遇改善) 1963.5.11
- ST-002-C-59 核抑止の概念について (要約)
- ST-002-C-60 原子核研究はいかにあるべきか 改造 1955年1月号
- ST-002-C-61 学者コジキ商売の楽しみ 読売・湯川奨学基金の第二次募金に寄せて
読売湯川奨学会 昭和47年6月
- ST-002-C-62 理科教育と教科書 教育 1970年8月増刊 教科書問題
- ST-002-C-63 人類と科学 中央公論 1972年8月

ST-002-D

講演の記録

- ST-002-D-01 原子論の発展 (中学校、高等学校の教員のための講演) 1959.6.22
- ST-002-D-02 玉城先生の追憶 玉城教授記念講演集 1961
- ST-002-D-03a 量子電気力学の発展 Nishina Kinen Zaidan '66 第7号 1966.6.3
- ST-002-D-03b 量子電気力学の発展 日本物理教育学会誌 14巻2号
- ST-002-D-04 Development of Quantum Electrodynamics Nobel Lecture 1965.5.6
- ST-002-D-05 原子核物理の思い出 - 核物理事始め時代の先人達
Nishina Kinen Zaidan 16 (1982) 1970.12.7
- ST-002-D-06 原子核物理における日英の交流 日本物理学会誌 第27巻第7号 1972
- ST-002-D-07 物理学よもやま話 みすず 147 1971.3 2冊
- ST-002-D-08 鏡の中の物理学 麻布学園数学研究会・朝永振一郎講演録 1974.6.22
- ST-002-D-09 宇宙観の変遷 - コペルニクスからアインシュタインまで -
Nishina Kinen Zaidan 12 (1980) 1974.12.6
- ST-002-D-10 物質科学にひそむ原罪 科学の実験 1976.9月号
共立出版創立50周年記念講演録 1976.6.28
- ST-002-D-11 物理学と文明のかかわり
第3回エネルギーを考える会 講演記録 1977.3.15
- ST-002-D-12 理研60周年に際して
理化学研究所創立60周年記念講演集 1977.3.18
- ST-002-D-13 物理学あれやこれや 京都能率第41号 (1978) 1977.11.12
- ST-002-D-14 物理学とは何だろうか

京都におけるフンボルト財団留学生学術交流会で
科学と技術の広場 No.97 Vol.18 1978, 数学第 30 巻第 2 号 1978 年 4 月
みすず 1978.8, 日本物理学会誌 Vol.33, No.4 1978

- ST-002-D-15 朝永先生講演速記録
ST-002-D-16 テープ 量子電気力学の発展 s41.7.31 N.H.K.
ST-002-D-17 朝永先生談話会 1971.11.10 名古屋大学
ST-002-D-18 状態空間について I - IV 1971.11.11-13 テープをおこしたノート
ST-002-D-19 朝永先生講演 s.49.10.10 福井工専
ST-002-D-20 ニュートン祭記念講演 I, II 1975.12.15 教育大学
ST-002-D-21 ニュートン祭記念講演 I, II s.52.12.3 筑波大学
ST-002-D-22 人類と科学 (ユネスコ民間運動の 25 周年記念講演)
ST-002-D-23 研究生生活の思い出 1971.1.25 東京 YMCA 別冊東京青年 No.13
ST-002-D-24 物理学をめぐって 1972.10.3 洛北高校
ST-002-D-25 物理学よもやま話 図書 1 (1974) (加筆あり)
ST-002-D-27a ~ i 科学と文明 1 ~ 9 立命館大学新聞 1976.7.2 ~ 1976.8.27
ST-002-D-28 サイエンスと人生 サイエンス読本 1983.JULY
ST-002-D-29 科学と私 東京理科大 昭和 52 年 7 月

ST-002-E 対談、インタビューなど

- ST-002-E-01 仁科先生と私 (藤岡由夫氏との対談) 1975.5.9
Nishina Kinen Zaidan 14 1981 2 冊
ST-002-E-02 物質をきわめる - 大型電子シンクロトロン建設 湯川、朝永、荒垣
東京大学原子核研究所 素粒子研究所準備調査室
ST-002-E-03 現代と科学者 座談会 1963.5.25 教育大新聞
ST-002-E-04 今、思うと 朝永振一郎氏に聞く
教室の窓 小学算数 No.5 1971.9.1, 中学算数 No.140 1971.9.1
ST-002-E-05 物理の魅力 朝永先生を囲んで
高校通信物理 No.77 東京書籍株式会社
ST-002-E-06 対談 湯川秀樹、朝永振一郎 司会 山崎文男、Isotope News 1972.1 月号
ST-002-E-07 朝永先生大いに語る
ST-002-E-08 科学と知的好奇心
ST-002-E-09 危機の中のパグオッシュ会議
ST-002-E-10 仁科先生をしのんで 自然 1951.4 月号
ST-002-E-11 対談 ボーア先生の 8 ミリ映画 自然 '74-1

- ST-002-E-12 ノーベル賞受賞3 学者対談 49.11 テープ3 巻
- ST-002-E-13 ノーベル賞3 博士 テープ1 巻
- ST-002-E-14 友、物理学、趣味（滞独時代の思い出）高校教育 S46.12 月号
- ST-002-E-15 日本の科学精神（加筆あり）
- ST-002-E-16 対談 語れば永い“素粒子論”三代ばなし 梅沢博臣、朝永振一郎
科学読売 1959 年1 月号
- ST-002-E-17 対談 科学者にとってことばとは何か 坪井忠二、朝永振一郎
英語教育評論 1970 年9 月号
- ST-002-E-18 討論会1、2 岡本、桑原、小谷、朝永、渡辺
東京理科大 昭和52 年7 月19 - 21 日
- ST-002-E-19 湯川・朝永・豊田三先生鼎談速記 昭和49 年2 月11 日
於 銀座・浜坂 岩波書店

ST-003

参考図書等

ST-003-A

朝永先生が使用された本

- ST-003-A-01 “物理学文献抄第1号”1927年 岩波書店刊行
- ST-003-A-02 “量子力学各論4”仁科芳雄、小林稔、玉木英彦 共著 共立社1938
(メモ2枚あり)
- ST-003-A-03 “Die Relativitätstheorie Einsteins” von Max Born 1920
- ST-003-A-04a,b “Methoden der Mathematischen Physik I” by R.Courant, D.Hilbert
(書き込みあり)、計算紙46枚
- ST-003-A-05 “Atombau und Spektrallinien (Wellenmechanischer Enganzungsband)”
by Arnold Sommerfeld 1929 (計算の紙1枚を含む)
- ST-003-A-06 “The Principles of Quantum Mechanics” by P.A.M.Dirac 1947
(書き込みあり)
- ST-003-A-07 “Die Moderne Atomtheorie” by Heisenberg, Schrodinger, Dirac
(書き込みあり)
- ST-003-A-08a,b “Linienpektren und Periodisches System der Elemente”
by F.Hund 1927 (書き込みあり)、計算紙17枚
- ST-003-A-09 “Atomtheorie und Naturbeschreibung” by Niels Bohr 1931
(書き込みあり)
- ST-003-A-10 “Kunstliche Radioaktivitat (Experimentelle Ergebnisse)”
von Dr.Kurt diebner, Dr. Eberhard Grassmann 1935
- ST-003-A-11 “The Dynamics of Particles and of Rigid, Elastic, and Fluid Bodies”

- by A.G.Webster (書き込みあり)
- ST-003-A-12 “Handbuch der Physik IV /1 Quantentheorie” by H.Bethe, et all
(書き込みあり)
- ST-003-A-13 “Spektral Theorie der Unendlichen Matrizen” by Aurel Wintner
- ST-003-A-14 “begliffliche Grundlagen der Statistishen Auffassung in der
Mechanik” by P.U.T.Ehrenfest
- ST-003-A-15 ~ 17 コンサイス英和辞典、岩波英和辞典、独和辞典 (木村、相良)
- ST-003-A-18 “Raum Zeit Materie” by Hermann Weyl 1923 (書き込みあり)
- ST-003-A-19 “Gruppentheorie und Quantenmechanik” by Hermann Weyl
(書き込みあり)
- ST-003-A-20 “Theory of Bessel Functions” by G.N. Watson
- ST-003-A-21 “Die Atomkerne” by C.F. von Weizsacker
- ST-003-A-22 “Lebesguesche Integrale und Fouriersche Reihen”
by L. Schlesinger, A. Plessner
- ST-003-A-23 “Vorlesungen uber Gas-Theorie II Teil” by Ludwig Boltzmann
- ST-003-A-24 “Anschauliche Quantentheorie” by Pascual Jordan
- ST-003-A-25 “HANDBUCH DER PHYSIK” BAND X
- ST-003-A-26 広辞苑
- ST-003-A-27 別冊「朝永コレクション」和書 24 ~ 25 ページ
- ST-003-B 関係論文**
- ST-003-B-01 Relativistic Quantum Mechanics P.A.M.Dirac 1932.3.24
- ST-003-B-02 The Lagrangian in Quantum Mechanics P.A.M.Dirac 1932.11.19
- ST-003-B-03 Die Physikalische Bedeutung Mehrerer Zeiten in der
Quantenelektrodynamik, F.Bloch 1939.3.27
- ST-003-B-04 Radiation Reaction in Collision Process III
Ziro Koba,Gyo Takeda 1948.10.4
- ST-003-B-05 On Radiative Corrections for Electron Scattering
S.M.Dancoff 1939.3.27
- ST-003-B-06 On the Calculation of Atomic Energy Levels 山内恭彦
- ST-003-B-07 原子勢力準位の計算 山内恭彦
- ST-003-B-08 Recoil Effects in the Strong Coupling Theory G. Wentzel
- ST-003-B-09 Variational Treatment of Pion-Nucleon Interaction K. Sanada
- ST-003-B-10 Fifty Years of Matter Waves Heinrich A. Medicus

- ST-003-B-11 Early Years of Quantum Mechanics; Some Reminiscences Pascual Jordan
- ST-003-B-12 From Matrix Mechanics and Wave Mechanics to Unified Quantum Mechanics
B.L.van der Waerden
- ST-003-B-13 Alfred Lande and the Anomalous Zeeman Effect 1919-1921
Paul Forman (Historical Studies of Physical Science 1970)
- ST-003-B-14 Theory of the Upper Critical Field in Layered Super Conductor
R.A.Klemm, A.Luther, M.R.Beasley
- ST-003-B-15 On the Gauge-Difficulty in the γ -decay of the Neutral Scalar Meson
伊藤大介、宮島竜興 1941.8.1
- ST-003-B-16 ヴェクトル中間子と核粒子との相互作用を超多時間理論で記述すること
宮本米二 (手書きのコピー)
- ST-003-B-17 超多時間理論を Lagrangian から直接に定式化する試み
木庭二郎 (?) (手書きのコピー)
- ST-003-B-18 極超短波回路と輻射系の一般論 宮島竜興
- ST-003-B-19 分割陽極磁電管の理論 - 流体力学的取り扱い -
水間正一郎、高尾磐夫
- ST-003-B-20 極超短波磁電管の研究 - 極超短波磁電管の設計と実例 -
水間正一郎、中島茂、山崎荘三郎、佐藤博一、他
- ST-003-B-21 極超短波磁電管の実験 - 磁電管の異常雑音について - 岡村総吾
- ST-003-B-22 極超短波磁電管の実験 - 分割陽極磁電管の出力について -
高尾磐夫、西和人、桂重俊
- ST-003-B-23 極超短波磁電管の研究 - 種々の形の磁電管の多相振動学的考察 -
中島茂
- ST-003-B-24 極超短波磁電管の実験 - 分割陽極磁電管の発振特性 -
高尾磐夫、西和人
- ST-003-B-25 宇宙線の本質と中性微子損失カスケード理論について 玉木英彦
中間子討論会予稿 1943.9
- ST-003-B-26 中性中間子について 武谷三男 中間子討論会予稿 1943.9
- ST-003-B-27 擬スカラー中間子について 荒木源太郎
日本数学物理学会誌 第16巻第3号
- ST-003-B-28 On the Mesotron of Spin One-half 宮島竜興 1941.8.31
- ST-003-B-29 Radiative Correction to Decay Processes III
-Forbidden β -Transitions Caused by Radiation Processes-
Shigeo Hanawa、宮島竜興 1952.3.6

- ST-003-B-30 核力について 宮島竜興 1942.7
日本数学物理学会誌第 16 卷第 4 号
- ST-003-B-31 直接の相互作用について 宮島竜興 1942.7
日本数学物理学会誌 第 16 卷第 4 号
- ST-003-B-32 核反応と準位の幅 E.P.Wigner 著、宮島竜興訳
日本物理学会誌 第 4 卷第 5 - 6 号
- ST-003-B-33 中性子の後方散乱について 宮島竜興 1943.1.31
理化学研究所彙報第 22 卷第 3 号
- ST-003-B-34 Production and Capture of Pseudoscalar Mesons 荒木源太郎 1941.8.31
- ST-003-B-35 Uber die Pradissoziation in der zweiten positiven Stickstoffgruppe
Takeo Hori, Yosio Endo 1941.4.3
- ST-003-B-36 On the Efficiency of the γ -ray Counter
Hideki Yukawa, Shoichi Sakata 1937.1.30
- ST-003-B-37 Ein Versuch uber die Winkelverteilung der Alphateilchen bei der
Kernreaction F(P, α) O Yosihiro Asano 1943.6.12
- ST-003-B-38 On the Theory of the Secular Perturbation of Higher Degrees
Yasuke Hagihara 1928.1.21
- ST-003-B-39 On the Theory of the Secular Perturbation of Higher Degrees
Part II Yasuke Hagihara 3.10
- ST-003-B-40 中性子衝撃に依る重い原子核の分裂 II 皆川理、玉木英彦
日本数学物理学会誌 第 14 卷第 1 号
- ST-003-B-41 ヴェクトル中間子の寿命について 中村誠太郎
日本数学物理学会誌 第 16 卷第 4 号
- ST-003-B-42 高圧ウイルソン管の製作 藤岡由夫 1942.10.12
日本数学物理学会誌 第 16 卷第 8 号
- ST-003-B-43 素粒子の相互作用について I 宮島竜興 1943.12.23
理化学研究所彙報 昭和 19 年 2 月
- ST-003-B-44 集団運動の理論 宮島竜興 科学 vol26.No3 1956.3
- ST-003-B-45 くりこみ理論 伊藤大介 日本物理学会誌 第 21 卷第 2 号
- ST-003-B-46 The Stability of Hartree-Fock Solution and of Collective Mode
Nobuyuki Fukuda
- ST-003-B-47 International Conference on Theoretical Physics (Abstract Book)
1953 (書き込みあり) 先生の部分は抜けている

ST-003-C	執筆時の資料など
ST-003-C-01	1934 年年会のプログラムコピー
ST-003-C-02	寺田寅彦 ラウエ映画の実験方法及びその説明に関する研究に対する審査要旨コピー
ST-003-C-03	昭和 18 年度日本数学物理学会年会の講演アブストラクトのコピー
ST-003-C-04	理研講演会の記録 22 回 (1932) -44 回 (1946)
ST-003-C-05	Nature (1934.11.10) のコピー
ST-003-C-06	Heisenberg and the early days of Quantum Mecanics コピー
ST-003-C-07	Recollections of Physics and of Physicists during the 1920's
ST-003-C-08	科研に於ける宇宙線研究史 小泉賢吉郎
ST-003-C-09a, b	仁科研究室既往業績概観 1938.12 コピー、仁科研究室既往業績コピー
ST-003-C-10	杉浦氏の講義 新量子力学とその応用 1928.4
ST-003-C-11	Sommerfeld の講義 1928.12
ST-003-C-12a, b	理研所長宛て藤岡書簡 1931.4、その返信
ST-003-C-13	“自然” 1976.11 (仁科芳雄について)
ST-003-C-14	“図書” 1977.8 (寺田寅彦について)
ST-003-C-15	日本物理学会第 31 会年会プログラム
ST-003-C-16	玉城教授記念講演集 1970
ST-003-C-17	“みすず” 1976.9-10 (山川健次郎について)
ST-003-C-18	Bayerische Akademie der Wissenschaften 1759-1959
ST-003-C-19	The First Book of Electricity By Sam and B.Epstein
ST-003-C-20	Die Naturwissenschaften 1930.8.1
ST-003-C-21	日本数学物理学会誌年会プログラム s16-23
ST-003-C-22	日本数学物理学会誌 16 (5) 1942.8
ST-003-C-23	Proceeding of the Physico-Mathematical Society of Japan 24 (10) 1942.10
ST-003-C-24	Proceeding of the Physico-Mathematical Society of Japan 25 (1) 1943.1
ST-003-C-25	日本物理学会誌 1 (1) 付録 1946.12
ST-003-C-26	科学 29 (7) 1959.7
ST-003-C-27	“G.Hevesy-Y.Nishina Correspondence 1928-1949”
ST-003-C-28	スピンはめぐる時参考論文一覧表
ST-003-C-29	Supplement of the Progress of Theoretical Physics Dedicated to Professor Sin-itiro Tomonaga on the Occasion of his Sixtieth Birthday
ST-003-C-29b	同上 湯川博士の祝辞

- ST-003-C-30 岩波講座現代物理学の基礎 月報 (No. 2, 3, 4, 5, 6, 8, 9)
- ST-003-C-31 山荘閑談 野上彌生子
- ST-003-C-32 ゾイデル海とローレンツの資料
- ST-003-C-32a The Enclosure of the Zuiderzee
- ST-003-C-32b The Netherlands and the Water
- ST-003-C-32c,d 写真、スライド4枚
- ST-003-C-33 柴谷篤弘氏による書評 メモあり
- ST-003-C-34 Physics in the Contemporary World J.R.Oppenheimer
書き込みあり 他人による訳も
- ST-003-C-35 物理学とは何だろうか に関する資料
- ST-003-C-35a ギリシャ科学の遺産 伊東俊太郎 自然 76-6
- ST-003-C-35b 男女差別と社会有機体説 鎮目恭夫 コピー
- ST-003-C-35c Heisenberg's Contribution to Physics D.Bohm コピー
- ST-003-C-35d Bernal, The Extension of Man の訳者あとがき コピー
- ST-003-C-35e A History of Chemistry, Prog.Theor.Phys.Vol. II J.R.Partington コピー
- ST-003-C-36 Origin of Forms and Qualities
- ST-003-C-37 ロバート・ボイル「形相と質の起源」と粒子哲学 大沼正則
- ST-003-C-38 小田稔氏論文
- ST-003-C-99 「2部あるもの」封筒
- ST-003-D 科学と社会**
- ST-003-D-01 “国際交流” 1978年冬期号
- ST-003-D-02 “科学” 1977.7 (被爆者シンポジウム)
- ST-003-D-03a ~ c 読売新聞 1976.12.6 ロッキード選挙、12.13 環境汚染など、4.29 護憲運動
- ST-003-D-04 国民国家の諸問題 福田歓一
- ST-003-D-05 日本外交への提案 坂本義和
- ST-003-D-06 科学と文化 ロバートオッペンハイマー 1960.9
- ST-003-D-07a Forum of Japan-Italy Science List of Participants
- ST-003-D-07b Words of Prof.Castro
- ST-003-D-07c Words of Ambassador of Italy, V.Tornetta
- ST-003-D-08 原子核特別委員会議事録
- ST-003-D-09 Buried Forest in Lake Yogo-ko and its Significance for the study of Past Bio-Environments S.Horie etc.

- ST-003-D-10 Brief Report on the 2nd International Conference
on the Unity of the Science
- ST-003-D-11 文明問題懇談会議事録 VI
- ST-003-D-12 現代文明を考える 文部省
- ST-003-D-13a 第9回文明問題懇談会議事概要
- ST-003-D-13b 第10回文明問題懇談会の開催のお知らせ 1976.1.24
- ST-003-D-14 日本原子力産業会議創立3周年記念特別講演会
- ST-003-D-15 Nuclear Energy in Britain
- ST-003-D-16 フランス外務省6月19日付コミュニケ
- ST-003-D-17 フランス大使館情報部 1972.6.21 閣議より
- ST-003-D-18 自然放射線と人工放射線の比較
- ST-003-D-19 第28回日本ユネスコ運動全国大会
- ST-003-D-20 日本の科学技術行政機構及び所管研究機関 (裏にメモあり)
- ST-003-D-21 1971年日本学士院代表団の英国訪問について (日本学士院紀要)
- ST-003-D-22 良心的兵役拒否について
- ST-003-D-23 現代思想 1975年5月号

ST-003-E 蔵書

ST-004 手紙

- ST-004-A 先生からの手紙**
- ST-004-A-01 小川秀樹氏へハガキのコピー 1931.3.15
- ST-004-A-02 ~ 04 湯川秀樹氏へのコピー 1935.1.23、1935.2.7、日付不明
- ST-004-A-05 ドイツより 宛先不明
- ST-004-A-06 渡欧中の船中より皆々様へ
- ST-004-A-07 ドイツより朝永三十郎氏へ (封筒のみ) 1939.1.4
- ST-004-A-08a,b 福田、宮本先生へ 1949.8.27、1949.10.10 cf.6B-2
- ST-004-A-09 Kollege 氏へ 1964.8
- ST-004-A-10 Nambara 教授へ 英文手紙 1971.2.16
- ST-004-A-11 ペンシルバニア大 Robert L. Weber 氏への返事の下書き 1969.7.12
cf.4B-8
- ST-004-A-12 Helmut Werner 氏へ 返事の下書き 1965 cf.4B-38
- ST-004-A-13 ノーベル財団へ 1966
- ST-004-A-14, 15 L.Neel 氏へ 1972.4.20、1972.4.21

ST-004-A-16 Klein 氏へ 日本文原稿と英文タイプ 1975.4.8
 ST-004-A-17 Dr.Hayman 氏 への手紙の下書き
 ST-004-A-18 西村氏へ 6.30 cf.4B-3
 ST-004-A-19 アームストロングへ氏のメモ
 ST-004-A-20 ヨコヤマへ氏のメモ
 ST-004-A-21 E.Amaldi 氏へ 1978.1.9 cf.4B-37
 ST-004-A-22 J.Geheniau 氏へ 1978.1.9
 ST-004-A-23 吉汲親雄氏へ
 ST-004-A-24 まことさんへ イースターカード

ST-004-B

先生への手紙

ST-004-B-01 中村氏より
 ST-004-B-02 鈴木ひろし氏より (論文の下書と共に)
 ST-004-B-03 西村氏からの返事
 ST-004-B-04 領子夫人からの手紙 アメリカのお父様へ
 留守宅からの日記便 第1 - 15 信
 ST-004-B-05 小沼通二氏より 1978.10.19
 ST-004-B-06 新井敏宏氏よりお礼のメモ 1969.6.23
 ST-004-B-07 G.I.Budker 氏より 1969.5.23
 ST-004-B-08 ペンシルバニア大 Robert.L.Weber 氏より 1969.5.19
 ST-004-B-09 中華人民共和国からの絵ハガキ
 ST-004-B-10a,b 中華人民共和国からの手紙 1974.12.25、1975.5.8
 ST-004-B-11 小林澈郎氏より cf.3c-21
 ST-004-B-12 松本徳智氏より
 ST-004-B-13 大場一郎氏より
 ST-004-B-14 小林澈郎氏より 1978.2.3
 ST-004-B-15 辻哲夫氏より 原稿依頼
 ST-004-B-16 大塚一夫氏より 原稿依頼
 ST-004-B-17 江沢洋氏より 1976.2.13
 ST-004-B-18 福田歆一氏より
 ST-004-B-19 横山女史よりメモ
 ST-004-B-20 小泉賢吉郎氏より 1976.4.14
 ST-004-B-21 Bernadotte 氏より 1975.11.15
 ST-004-B-22 湯浅氏より

- ST-004-B-23 川上文雄氏より 1976.8.4
- ST-004-B-24 片山幹郎氏より
- ST-004-B-25, 26 石川昂氏より 2.18、9.12
- ST-004-B-27a ~ c F.C.Auluck 氏より 1976.6.4 招待講演依頼、1976.9.14、11.24
- ST-004-B-28 Philip Handler 氏より 1973.9.10
- ST-004-B-29 Vinod Chabra 氏より 1976.9.22
- コンファレンスへの招待
- ST-004-B-30 日独文化研究所長クリストフケンプ氏より講演依頼 1978.3.10
- ST-004-B-31 亀淵迪氏より 1974.12.16
- ST-004-B-32 原康夫氏より 1973.6.25
- ST-004-B-33 鈴木修二氏より 1975.7.18
- ST-004-B-34 中村誠太郎氏より 日付け不明
- ST-004-B-35 共立出版 塩谷茂氏より講演依頼
- ST-004-B-36 ノーベル財団より 66 年度ノーベル賞推薦依頼 1965.9 (物理、化学)
- ST-004-B-37 E.Amaldi 氏より 1977.11.25 cf.4A-21
- ST-004-B-38 Helmut Werner 氏より 1965.11.25 cf.4A-12 (写真含む)
- ST-004-B-39a ~ g 野上彌生子氏より s40.11.14、s45.10.24、s45.12.19、s46.11.1、s46.12.24、s47.1.7、s47.12.24
- ST-004-B-40 豊田利幸氏より s51.7.25 パグオシュ会議について
- ST-004-B-41,42 未整理 日本文手紙 一束、英文手紙 二袋

ST-005

メモ、紙きれ等

- ST-005-01 計算 (Wintner の本の中に挟まっていた物)
- ST-005-02a ~ c メモ (科学史)、幾何的計算、封筒裏 科学史メモ
- ST-005-03 しおり “量子力学と私”
- ST-005-04 1930 年ごろの歴史に関するメモ
- ST-005-05, 06 メモ (科学史)、(1926-30 年代)
- ST-005-07 量子論初期の論文のリスト
- ST-005-08 1930 年代の物理学者のリスト
- ST-005-09 メモ (明治・大正の物理学者)
- ST-005-10 物理学輪講について鈴木先生の話のメモ
- ST-005-11 1933- 年会メモ
- ST-005-12 仁科研初期の様子メモ
- ST-005-13 前期量子力学のリスト

ST-005-14	メモ (チェックらしきもの)
ST-005-15	石原純の論文リスト (“思想” に掲載された)
ST-005-16	朝永先生の名刺 メモつき
ST-005-17	メモ (訪英の際の人の話)
ST-005-18	エレンフェストの壺の実験メモ (物理学とは何だろうかの為)
ST-005-19	“スピンはめぐる” 資料内にあったもの メモ片など
ST-005-20	庭に来る鳥の書き始め
ST-005-21	素粒子論年代表
ST-005-22	国内会議メモ、ビラ
ST-005-23	論文リスト
ST-005-24 ~ 28	計算 6 枚、計算 3 枚、計算 2 枚 (豊田利幸氏からの手紙の裏)、計算 3 枚 (裏に原稿の書きかけ)、計算 (Institut de la Vie からの招待状の封筒)
ST-005-29,30	メモ 6 枚、メモ 2 枚
ST-005-31	年表
ST-005-32,33	物理と生物関係計算とメモ
ST-005-34 ~ 36	原稿の一部とメモ 4 + 1 枚、メモ 封筒の裏、封筒 2

ST-006	ノート
ST-006-A	先生のノート
ST-006-A-01,02	ノートのコピー、ノート
ST-006-A-03	ハイゼンベルク及びディラックの講演の時のノート 1929.9
ST-006-A-04	ノート 論文チェックなど
ST-006-A-05	ノート 計算紙 3 枚、メモ 4 枚含む マグネトロンのころ (松井家より)
ST-006-A-06	マグネトロンのノート 2 冊
ST-006-B	他人のノート
ST-006-B-01	牧二郎氏のノートのコピー
ST-006-B-02a	福田博、宮本米二 両氏の LEVEL SHIFT の計算のノート 2 冊
ST-006-B-02b	手紙 湯川秀樹氏より福田、宮本氏へ
ST-006-B-02c	手紙 J.Steinberger 氏より福田、宮本氏へ
ST-006-B-02d ~ f	朝永先生より、上記についての説明文・資料
ST-006-B-03a	宮島竜興氏のノート 3 冊
ST-006-B-03b	速報記録帳、談話会 S18.5/17-8/23, Colloquium 1943.3.18-5.7
ST-006-B-04	ノート 5 冊 (私物により非公開)

ST-006-B-05	“Meson Theory” のノート
ST-006-B-06a	早川幸男氏のノート
ST-006-B-06b	原子核論 (朝永教授)、素粒子論分科会 (1946)、セミナーノート (1946-48)
ST-006-B-07	宮本米二氏レポート
ST-006-B-08	X氏レポート (超多時間理論を Lagrangian から直接に定式化する試み)

ST-007
賞状、辞令

ST-007-01	賞状ファイル (ST-TBL-A 参照)	
ST-007-02 ~ 04	辞令ファイル 1、2、3 (ST-TBL-B 参照)	
ST-007-05	三高卒業証書	大正 15 年
ST-007-06	京大	昭和 4 年
ST-007-07	学位記	昭和 14 年
ST-007-08	朝日賞	昭和 22 年
ST-007-09	学士院賞	昭和 23 年
ST-007-10	文化勲章	昭和 27 年
ST-007-11	文化功労賞	昭和 27 年
ST-007-12	秋山志田記念賞 (電気通信学会)	昭和 28 年
ST-007-13	王立スエーデンアカデミー	昭和 34 年
ST-007-14	ロモノソフ賞	昭和 39 年
ST-007-15	ドイツアカデミー	〃
ST-007-16	感謝状 (東京教育大学)	〃
ST-007-17a,b	ノーベル賞、メダル	昭和 40 年
ST-007-17c ~ e	電報、手紙、英訳	
ST-007-18	アメリカ科学アカデミー	〃
ST-007-19	賞状 (内閣総理大臣)	〃
ST-007-20	衆議院院議	〃
ST-007-21	参議院院議	昭和 41 年
ST-007-22	アメリカ科学アカデミー (フィラデルフィア)	昭和 41 年
ST-007-23	武蔵野市名誉市民賞、略賞	昭和 42 年
ST-007-24	名誉教授 (東京教育大学)	昭和 44 年
ST-007-25	ソ連科学アカデミー	昭和 46 年
ST-007-26	ニューヨーク科学アカデミー	〃
ST-007-27	ソ連科学アカデミー招待状	昭和 49 年
ST-007-28	名誉会員賞 (物理学会)	昭和 49 年

ST-007-29	アメリカ芸術・科学アカデミー	昭和 50 年
ST-007-30	王立デンマークアカデミー	昭和 51 年
ST-007-31	旭日大綬章	〃
ST-007-32	インド科学アカデミー	昭和 53 年
ST-007-33	大佛賞	昭和 55 年

ST-008	その他
ST-008-A	ノーベル賞関係
ST-008-A-01	受賞時祝辞、手紙
ST-008-A-02,03	受賞時新聞切り抜き、週刊誌切り抜き
ST-008-A-04	スクラップブック スエーデン大使館から贈呈切り抜き、御自身による切り抜き、 外国新聞の切り抜き
ST-008-A-05	週刊誌
ST-008-A-06	12/10 受賞式関係
ST-008-A-06a	手紙 外務省より 10.29 付
ST-008-A-06b	スエーデン大使館より 12.1 付
ST-008-A-06c	スエーデン大使館より 12.6 付
ST-008-A-06d	ノーベル財団より 1.10 付
ST-008-A-06e	Uspekhi より 12.2 付
ST-008-A-06f	病状書（武蔵野赤十字病院） 11.25 付
ST-008-A-06g	電報 ノーベル財団より 11.25 付
ST-008-A-06h ~ j	スエーデン大使館 外務省 11.25、11.26、12.10 付
ST-008-A-06k	スエーデン大使館発表記事 12.10 付 日本語、英語各 1
ST-008-A-06l ~ n	スエーデン大使館からの招待状、式パンフレット、出席者リスト
ST-008-A-06o	スエーデン大使講演予稿
ST-008-A-06 p	スエーデンアカデミーより 1965.11.30
ST-008-A-06q	ハイデルベルグ大学より 1965.12.15
ST-008-A-06r	Speech の予稿（スエーデン大使、Parmanent Secretary of Swedish Academy, The Vice President of The Nobel Foundation, Professor I.Waller）
ST-008-A-07	ノーベル財団関係パンフレット
ST-008-A-07a	アルフレッド・ノーベルとノーベル賞
ST-008-A-07b	アルフレッド・ノーベルとノーベル賞（英文）
ST-008-A-07c	NOBELSTIFTELSEN

ST-008-A-07d	NOBELSTIFTELSEN (スエーデン語)
ST-008-A-07e	List of the Nobel Prize Winners
ST-008-A-07f ~ h	晩餐会 式次第、出席者リスト、メニュー
ST-008-A-07i	講演予稿集
ST-008-A-07j	Faber Foundation パンフレット 4種
ST-008-A-08	ノーベル賞スエーデン旅行
ST-008-A-08a	手紙 朝永→ノーベル財団 3.28
ST-008-A-08b	手紙 ノーベル財団より 4.4
ST-008-A-08c'e	手紙 スエーデン科学アカデミーより 4.4、返信下書き
ST-008-A-08f	ノーベル財団より 4.15
ST-008-A-08g	朝永→ノーベル財団 4.20
ST-008-A-08h ~ j	ストックホルム大学 Ake Johnsson より 5.5、5.6、5.8
ST-008-A-08k	ハイデルベルグ大学より 3.15
ST-008-A-08l	Uppsala 大学 I. Waller より 4.25
ST-008-A-08m,n	スケジュール コピー、手書き
ST-008-A-08o	贈呈された論文
ST-008-A-08p	パンフレット類：地図、ハガキと切手、オペラパンフレットなど
ST-008-A-08q	新聞、ラジオの原稿 (スベンスカ・ダーグブラーデット紙、デンマーク・ラジオ)
ST-008-A-08r	新聞きり抜き
ST-008-A-09	授賞祝賀会に関するもの
ST-008-A-09a	朝永先生ノーベル賞授賞を祝賀する計画について
ST-008-A-09b	祝賀会、朝永記念号への賛助費などの収支報告と賛同者リスト
ST-008-A-09c	実行委員会への朝永記念号援助に対する感謝の意(湯川秀樹氏による)
ST-008-A-10	朝永先生ノーベル賞授賞記念シンポジウムに関するもの 招待者リスト、プログラム、福田先生への招待状と講演依頼の手紙
ST-008-A-11	色紙の写真
ST-008-A-12a	付属小学校生作文
ST-008-A-12b	L.Gysrgyne 氏より (写真含む) 66.1/17
ST-008-A-12c	上野崇史氏より 66.4/6
ST-008-A-12d	大塚吉晴氏より 65.10/29
ST-008-A-12e	Helga Duschkenwitz 氏より 65.12/6
ST-008-A-12f	人吉一中新聞 69.10.23
ST-008-A-12g	朝永先生ノーベル賞受賞記念文集(教育大付属小) 4

ST-008-A-12h	作文（富士市立富士第2小 8、教育大付属小 24、大塚養護学校中等部、高等部）
ST-008-A-12i	祝文 35、電報 22
ST-008-A-12j	錦林小ニュース
ST-008-A-12k	式辞
ST-008-A-12l	海外からの祝文 12
ST-008-A-13	子供（？）の絵
ST-008-A-14	武蔵野市長より記念品目録
ST-008-A-15	教育大ノーベル賞記念祝賀式パンフレット
ST-008-A-16	ノーベル賞を記念する仁科記念講演会と晩餐会パンフレット
ST-008-A-17	スエーデン旅行の時もらったパンフレット類 19
ST-008-B	訪英に関するもの
ST-008-B-01	1971年日本学士院代表団の英国訪問について 7部
ST-008-B-02	1971.3.16のThe Royal Societyのプログラム その他
ST-008-B-03	Post Graduate Courses and Research
ST-008-B-04	Coloured Street Plan of Oxford
ST-008-B-05	The University of Sussex BSc Syllabus
ST-008-B-06, 07	Royal Botanic Garden Edinburgh、Edinburgh
ST-008-B-08	Royal Opera House Covent Garden
ST-008-B-09	dinnerについて
ST-008-B-10	昼食会へのお誘い
ST-008-B-11 ~ 15	国外旅行傷害保険のしおり、レストランのパンフレット、Oxfordの写真集、“BRITAIN 1971”、航空写真地図
ST-008-B-16	Imperial College of Science and Technology
ST-008-B-17	Physics at University College London
ST-008-B-18	Trinity College
ST-008-B-20	“The Royal Society” -Draft Program for Visit of Delegation from Japan
ST-008-B-21	“University of East Anglia 1971-72”
ST-008-B-22, 23	キャンパスらしき風景写真とメモ、ホテルのパンフレット
ST-008-B-24	Merton College OxfordのThe Older Building
ST-008-B-25	1971.3.25のディナーのお知らせなど
ST-008-B-26	NPL上のBackground Note
ST-008-B-27, 28	Imperial Collegeの資料

- ST-008-B-28 “Current Research in the Department of Physics”
- ST-008-B-29 ネームカード
- ST-008-B-30 ~ 35 “Mullard radio Astronomy Observation” のカタログ、“Lan Caster house”、“The Royal Society of London 1660-1970”、各国大使館の所在地のコピー、保険についての資料、“Garden House Hotel” のパンフレット
- ST-008-B-36 日本の科学代表団の訪問のプログラム
- ST-008-B-37 英国政府からのカード
- ST-008-B-38, 39 Shigeru Nambara より Harold Thompson への英文手紙 1971.3.6, 1971.7.14
- ST-008-B-40 The Royal Society のプログラム
- ST-008-C 朝永先生について書かれたもの**
- ST-008-C-01 朝永博士における独創性の研究 伏見康治
学会報 1980- I No.746
- ST-008-C-02 ゾンマーフェルトのデモンストレーションと朝永さん
Nishina Kinen Zaidan 16 (1982) 中のこぼれ話
- ST-008-C-03 Tomonaga Sin-itiro; A Memorial Two Shakers of Physics
J.S.Schwinger 1980.7.8
- ST-008-C-04 朝永振一郎博士 人と業績 月刊フィジックス 1979.10.1
- ST-008-C-05 朝永博士ノーベル賞受賞にあたって 小野周 科学 1965 12月号
- ST-008-C-06 編集手帳 読売新聞
- ST-008-C-07 仁科先生と朝永さんと私 湯川秀樹 1965.12.6
Nishina Kinen Zaidan 66 第7号
- ST-008-C-08 読者からの投稿 無記名 3通
- ST-008-C-09 朝永振一郎追憶の集い s.54.8 テープ
- ST-008-C-10 回想の朝永振一郎 松井卷之助編 みすず書房
- ST-008-C-11 追想 朝永振一郎 伊藤大介編 中央公論社
- ST-008-C-12 朝永振一郎博士 人と言葉 加藤八千代著 共立出版社
- ST-008-C-13 テープ 朝永先生をめぐってI, II 古谷米子さんに聞く s61.3.12
- ST-008-C-14 新聞等の切り抜き 8部 (ご自身が切り抜かれたもの)
- ST-008-C-15 朝永ノーベル賞雑感 梅根悟 生活教育 206 (1966)
- ST-008-C-16 朝永振一郎の人間とその業績 福田信之 中央公論 s40年12月号
- ST-008-C-17 伊藤大介先生の絵の複写 3枚
- ST-008-C-18 学長物語・朝永振一郎 坂柳義巳 蛍雪時代 7月号 (1965)
- ST-008-C-19 朝永振一郎先生の背広 藤田統 れいろう 27-6 (1984) 広池学園出版部

ST-008-C-20	朝永振一郎先生のこと 宮島竜興 茗溪 943 (1974)
ST-008-C-21	ある思い出 Chen Ning Yang ノーベル賞受賞者講演会の記録 No1 1986.9.5 日立製作所
ST-008-C-22	仁科記念財団案内 1986.6 仁科記念財団
ST-008-C-23	ボーア記念談話会 仁科記念財団 理研 OB 会 会報 22 号 (1986 - 4)
ST-008-C-24	素粒子論研究 60-4 (1980) 朝永振一郎先生追悼特集号
ST-008-C-25	テープ 素粒子論昔話 (中村誠太郎、於東海大 1989.3.28)
ST-008-D	その他
ST-008-D-01	理化学研究所図書館概況
ST-008-D-02	理研 OB 会役員会開催通知 s51.2.13
ST-008-D-03	OB 会役員会議事 s51.3.23
ST-008-D-04	世界平和アピール七人委員会昭和 50 年度収支決算書
ST-008-D-05	理化学研究所 1976 のカタログ
ST-008-D-06	昭和 51 年度収支状況中間報告 s52.3.15
ST-008-D-07	第 4 回 OB 会総会出席予定者名簿
ST-008-D-08	理研出身者名簿 1977
ST-008-D-09	理研 OB 会の写真
ST-008-D-10	昭和 40 年第 55 回授賞審査要旨
ST-008-D-11, 12	日本学士院会員候補者推薦書、選考に関する第 4 分科委員会記事
ST-008-D-13a ~ d	江崎玲於奈の主要な学術上の業績、履歴、論文の分類、論文リスト
ST-008-D-14	高エネルギー物理学国際会議の招待状
ST-008-D-15	京都一中についての記事
ST-008-D-16a	大塚物理学同窓会名簿
ST-008-D-16b	素粒子論グループ名簿 1952.3
ST-008-D-17	広島三高会会員名簿 s44.12
ST-008-D-18	“会報 47 1976” 三高同窓会
ST-008-D-19	一中タイムス
ST-008-D-20	教育大新聞
ST-008-D-21	財団法人風樹会昭和 46 年度決算、監査報告および昭和 47 年度研究奨励金 受給者とその推薦書
ST-008-D-22	出版契約書 2 通
ST-008-D-23	手紙 M.Calvin, C.Stakman より和達清夫氏へ 1975
ST-008-D-24	日本学士院から例会、総会、部会、懇談会のお知らせ

- ST-008-D-25 朝永記念号に関する資料
- ST-008-D-26 勲一等受章時 手紙、名刺、電報
- ST-008-D-27 入院時お見舞 手紙等、色紙、覚書ノート
- ST-008-D-28 葬儀関係 弔辞、手紙、外国からのお悔やみ、電報、
天皇陛下より寸志(奉書の紙)、テープ(密葬、本葬)、
新聞きり抜きコピー、葬儀式次第、外国向け通知
- ST-008-D-29 朝永記念室資料収集に関するもの
- ST-008-D-29a ~ c 玉木英彦氏より領子夫人への手紙 1980.6.23、1980.9.18、本のリスト
- ST-008-D-29d 亀淵迪氏より 1980.9.16
- ST-008-D-29e 玉木英彦氏の書き付け 6.10
- ST-008-D-29f 亀淵迪氏より 4.9
- ST-008-D-30a 手紙 小沼通二氏より領子夫人へ s.56.10.19
- ST-008-D-30b 亀淵迪氏より s60.4.9
- ST-008-D-30c Ch.Kleint 氏より A.Tomonaga へ 1985.3.7
- ST-008-D-30d 西村氏より亀淵氏へ s58.11.24
- ST-008-D-31 新聞(太平洋国際会議)
- ST-008-D-32 Particle Physics in Japan, 1930-1955, L.M.Brown, M.Konuma, Z.Maki
Research Institute for Fundamental Physics 1980.9
- ST-008-D-33 畏友 木庭二郎 梅原千治
- ST-008-D-34 科映協 連絡メモ 52-6-15
第31回国際科学映画協会ベニス大会のお知らせ
- ST-008-D-35 岩波書店新刊 1975-3
- ST-008-D-36 新刊ニュース 紀伊国屋 1971-12
- ST-008-D-37 GOETHE HOUSE パンフレット
- ST-008-D-38 Scientific Papers of Tomonaga の宮島氏による序文、原稿
- ST-008-D-39 Scientific Papers of Tomonaga の Physics Today に乗った広告
- ST-008-D-40 ニュートン祭記念講演会 ビラ 1977年(筑波大)
- ST-008-D-41 色紙 教育大1回生寄せ書き
- ST-008-D-42 教育問題 4冊
- ST-008-D-43 故富山小太郎教授追悼集 昭和48年
- ST-008-D-44 玉城教授記念講演集 1971年
- ST-008-D-45 パンフレット 18

ST-009

遺品、幼年時作品等

ST-009-01	西田幾太郎書 掛軸
ST-009-02	西田幾太郎書 額
ST-009-03	扇子 A, B, C
ST-009-04	竹製花活け
ST-009-05	年輪細工
ST-009-06	時計
ST-009-07	双眼鏡
ST-009-08	メガネ
ST-009-09	鉛筆、消しごむ 等
ST-009-10	茶碗 2 ケ
ST-009-11 ~ 13	小学生時代 習字、答案、作文
ST-009-14	昭和七年書き初め
ST-009-15	自画像
ST-009-16	滞独日記
ST-009-17a,b	手帳 11 冊、18 冊 (1959-1978、'60、'75 欠) 松井家より
ST-009-18	スケッチ ファイル、スケッチブック、絵
ST-009-19	病床メモ 9 冊、レポート用紙 1 冊
ST-009-20	記念切手 (チャド共和国)
ST-009-21	偏光器
ST-009-22	鏡のマジック
ST-009-23	御孫さんのための玩具 2 種
ST-009-24	空中浮遊器
ST-009-25	立体写真装置
ST-009-26 ~ 31	机、椅子、インクスタンド、デッキチェアー、ソファー 2 ケ、書棚
ST-009-32	職業能力申告手帳
ST-009-33a ~ d	色紙 朝永、シュヴィンガー、ファインマン、ダイソン
ST-009-34	鳥獣戯画
ST-009-35	本 Princeton in Spring
ST-009-36	入歯 2 ケ
ST-009-37	かばん
ST-009-38	料理メモ (メモ帳 6 冊とメモ 2 枚、裏に計算あり)
ST-009-39	メモ (干支)
ST-009-40	メモ (冷泉家)
ST-009-41	文箱 (小物を入れてある)

ST-009-42	石碑写真
ST-009-43	LEIPZIG の地図
ST-009-44a	パスポート (S 12, 24, 28, 29, 31, 32/5, 32/6, 33, 36 39/2, 39/5, 40, 41, 44, 46, 49 年)
ST-009-44b	身分証明書
ST-009-44c	カバー (夫人の分も含む) 6 領収書などが入っている
ST-009-44d	International Certificates of Vaccination 4
ST-009-45	Electronic artificial larynx の説明書 (病中)
ST-009-46	レプリカ 仁科芳雄先生像 (作者不明) 日本放射性同位元素協会

ST-010
写真

ST-010-01	アルバム 子供、学生、副手時代
ST-010-02	アルバム 理研、副手時代
ST-010-03	アルバム Pugwash 会議、訪中、学長、学術会議
ST-010-04	アルバム 訪ソ、汎太平洋国際会議、学術会議
ST-010-05	アルバム ノーベル賞受賞
ST-010-06	アルバム 1970 年頃
ST-010-07	アルバム 晩年、1970 年以降
ST-010-08	アルバム (茶) 国際会議関係
ST-010-09	アルバム (緑) 1956 年教育大学園祭
ST-010-10	アルバム (赤) 1971 年 Royal Society 招待英国旅行
ST-010-11a	一枚物 Portrait 3 枚
ST-010-11b	一枚物 ご夫妻の写真
ST-010-11c	一枚物 同窓会
ST-010-11d	一枚物 Solvay 会議 4 枚
ST-010-11e	一枚物 Portrait 3 枚
ST-010-11f	一枚物 スウェーデン大使 受賞式写真
ST-010-12	不明 15 枚
ST-010-13	Portrait 額入 (松山 正氏より寄贈)
ST-010-14	8 ミリ “光研における朝永先生” 1974 (坂柳義己氏 撮影)
ST-010-15	菊池俊吉氏 撮影のもの 27 枚
ST-010-16 ~ 19	アルバム No.1、No.2、No.3、No.4
ST-010-20	アルバム Extra No.1
ST-010-21, 22	アルバム 朝永資料室 I, II

ST-010-23	アルバム 16 - 22 のネガ
ST-010-24	アルバム 黒 掲載された物および提供された物
ST-010-25	千葉浩志氏によるポートレート
ST-010-25a	ノーベル賞授賞式 (額入) 3 枚
ST-010-25b	ニュートン祭の場面 3 枚
ST-010-25c	書齋で
ST-010-25d	上半身
ST-010-25e	研究室風景 12 枚
ST-010-25f	学生時代 2 枚
ST-010-25g	子供時代 2 枚
ST-010-26	アルバム 2 冊 (教育大ノーベル賞祝賀)
ST-010-27a, b	パネル 文理大 大久保分室 (1949)、海軍技術研究所島田分室 (1944)
ST-010-28	アルバム Leipzig 今昔

ST-011

親族の方々の遺品

ST-011-01 ~ 05	父君 朝永三十郎氏 勲二等勲記、勲二等勲章、勲三等勲記、勲四等勲記、紀元二千六百年祝典記念章之証、大礼記念章之証 (大正 3 年)、大礼記念章之証 (大正 4 年)
ST-011-07 ~ 09	父君 朝永三十郎氏 学位記、卒業証 (一高)、卒業証 (東大)
ST-011-10 ~ 15	夫人 朝永領子氏 手紙、日記 (1939-1940)、覚え帳 (昭和 24 年)、日記、原稿、手帳 2
ST-011-16	母君 大枝ひで氏卒業証書等 14 通
ST-011-17	父君 朝永三十郎氏宛て手紙 4 通
ST-011-18	清水 崑氏のデッサン

ST-012

朝永記念事業の記録

ST-012-A

朝永記念講演

ST-012-A-01	第 1 回 “朝永理論とその後” カセット、ビデオ 東大理学部教授 西島和彦氏 1983.12.12
ST-012-A-02	第 2 回 “Origin of Life” カセット、ビデオ、テープ プリンストン高級研究所 F.J. Dyson 教授 1984.10.19
ST-012-A-03	第 3 回 “見えない宇宙を見る” カセット、ビデオ、テープ 名大理学部教授 早川幸男氏 1986.2.7

ST-012-A-04 第4回 “物理学と物理学者” カセット、ビデオ、テープ
ミュンヘン工科大学教授 森永晴彦氏 1987.2.13

ST-012-B

朝永記念室

ST-012-B-01 開室時 サイン帳
ST-012-B-02 住井すえ氏随筆 暮らしの手帳 14 1978年6・7月号
ST-012-B-03 伊藤大介氏のデッサン 大2、小10
ST-012-B-04 胸像
ST-012-B-05 色紙、絵などのコピー ファイル、封筒
ST-012-B-06 所蔵品説明ファイル

ST-013

松井卷之助氏資料

ST-013-A

蔵書

ST-013-A-01 原子核から素粒子へ 藤岡由夫、朝永振一郎編 弘文堂 s42
ST-013-A-02 物理の歴史 朝永振一郎編 毎日新聞社 s28
ST-013-A-03 超短波磁電管 水間正一郎、朝永振一郎、高尾磐夫共著 コロナ社 s23
ST-013-A-04 現代自然科学講座4(科学と方法) 弘文堂 s26
ST-013-A-05 極超短波理論概説 朝永振一郎、宮島竜興 リスナー社 s25
ST-013-A-06 物理学読本 朝永振一郎編 学芸社 s27
ST-013-A-07 近世に於ける‘我’の自覚史 朝永三十郎 東京宝文館 T10
ST-013-A-08 近世に於ける‘我’の自覚史 朝永三十郎 角川文庫 S44
ST-013-A-09 カントの平和論 朝永三十郎 改造社 T11
ST-013-A-10 カントの平和論 朝永三十郎 改造選書 S22
ST-013-A-11 哲学的小品 ルソー・カント・ロツツェ 朝永三十郎 黎明書房 S23
ST-013-A-12 哲学的小品 ルソー・カント・ロツツェ 朝永三十郎 黎明書房 S25
ST-013-A-13 デカルト 朝永三十郎 岩波書店 S24
ST-013-A-14 人格の哲学と超人格の哲学 朝永三十郎 弘道館 s424
ST-013-A-15 朝永三十郎先生の思い出 朝永先生の思い出編纂会 S32 (非売品)

ST-013-B

先生の講演、随筆掲載誌

ST-013-B-01 量子力学的多体問題 Buturi S31
ST-013-B-02 新卒業生を送る 教育 S34
ST-013-B-03a, b 今、思うと 中学数学 S34、教室の窓 S46
ST-013-B-04 科学者と社会 科学と人間 S34

- ST-013-B-05 科学技術よもやまばなし（井深氏との対談）
科学と技術の広場の会 S34
- ST-013-B-06 声明（湯川、朝永、坂田）及び科学と社会（談話）
科学と技術の広場の会 S36
- ST-013-B-07 記憶と脳（座談会）科学と技術の広場の会 S38
- ST-013-B-08 量子電気力学の発展 仁科講演会 S40
- ST-013-B-09 量子力学の衝撃と体験（座談会）数理科学 S44
- ST-013-B-10 科学者にとってことばとは何か（対談）英語教育評論 S45
- ST-013-B-11 科学と人生 朝日ゼミナール S45
- ST-013-B-12 凡児さんとゴム風船 図書 S45
- ST-013-B-13 原子核物理の思い出 自然 S46
- ST-013-B-14 物理の魅力 高校通信 S46
- ST-013-B-15 対談 湯川－朝永 Isotope S47
- ST-013-B-16 科学の意味 月刊エコノミスト S47
- ST-013-B-17 物理雑話 岡山県医師会報 S47
- ST-013-B-18 好奇心について 視聴覚教育 S48
- ST-013-B-19 原子核研究所の創設など 日本学術会議月報 S49 2部
- ST-013-B-20 物理よもやまばなし 図書 S49
- ST-013-B-21 鏡の中の物理学 麻布学園数学研究会 S50
- ST-013-B-22 物理学者のみた生命（パネル討論会）月刊百科 S50
- ST-013-B-23 原子核研究所の設立と菊池先生 東京大学原研 S50
- ST-013-B-24 パグウオッシュ会議の歩みと核軍縮への道 広領域教育研究 S51
- ST-013-B-25 物質科学にひそむ原罪 共立 50 周年記念講演 S51
- ST-013-B-26 科学と平和 国際平和研究レポート S51
- ST-013-B-27 物理学と文明とのかかわり エネルギーを考える会 S52
- ST-013-B-28 理研 60 周年に際して 理化学研究所 S52
- ST-013-B-29 基研について 京都大学基礎研 S53S52
- ST-013-B-30 仁科先生と私（対談） 仁科記念財団 S56
- ST-013-B-31 日本における素粒子論の黎明 座談会 科学 s42
- ST-013-B-32 マイクロ波分光学の発展と展望 座談会 科学 s31
- ST-013-B-33 Was ist Physik
- ST-013-B-34 科学技術振興と科学の役割 座談
- ST-013-B-35 ‘物理学読本’ の記述にあたって
- ST-013-B-36 原子核物理における日英の交流 buturi s47

ST-013-B-37	10年のひとりごと
ST-013-B-38	思い出ばなし 3、4回
ST-013-B-39	Scientific Papers of TOMONAGA 序文、目次
ST-013-B-40	朝永教授学術論文集刊行会挨拶
ST-013-B-41	物理学会主催による国際会議のうち関与した物一覧 山里氏による
ST-013-B-42	何かの本の内容 メモ
ST-013-C	“物理学とは何だろうか” 執筆について
ST-013-C-01	書き始め動機
ST-013-C-02a,b	朝永先生から伺ったこと 牧野氏によるもの メモ、詳細
ST-013-C-03	故朝永振一郎博士の読書 晩年に読まれた本の記録
ST-013-D	朝永先生参考文献の一部コピー
ST-013-D-01	外国文献 8
ST-013-D-02	和書 9
ST-013-E	関係文書
ST-013-E-01	朝永講座“物理学帝国主義論”代講 亀淵 勉
ST-013-E-02	ソリトンと非線形破壊 戸田盛和
ST-013-E-03	時間の向き 戸田盛和
ST-013-E-04	融解現象とラテックス粒子による結晶模型 和達、巨勢、戸田
ST-013-E-05	文革後の中国の物理教育 亀淵 勉
ST-013-E-06	Eine Kleine Nachtphysik 亀淵 勉 プリンシピア付録
ST-013-E-07	プリンシピア 昭和52年度
ST-013-E-08	X線結晶解析を回顧して 仁田 勇
ST-013-F	物理学読本書評 初版時
ST-013-F-01	スクラップブック 1冊
ST-013-G	朝永先生に関することおよび学術会議について
ST-013-G-01	Tomonaga Sin-itiro : A Memorial Two Shakers of Physics J.S.Schwinger
ST-013-G-02	一学生がみた朝永先生の横顔 伊藤大介
ST-013-G-03	朝永先生にまつわる思い出 後藤捨男
ST-013-G-04	ブックレビュー 物理学読本 富山小太郎

- ST-013-G-05 朝永教授学術論文集刊行会
- ST-013-G-06 ひとつの時代の終りと“知的好奇心”の行方 山口幸夫
- ST-013-G-07 書評 鏡の中の世界 由起しげ子
- ST-013-G-08 最近のベストセラーズから
- ST-013-G-09 朝永先生の思い出と婦人科学者の会
- ST-013-G-10 科学者朝永さんの生き方 金関義則
- ST-013-G-11 朝永振一郎の人間とその業績 福田信之
- ST-013-G-12 広場設立時メモ
- ST-013-G-13 書評 物理学とは何だろうか 切り抜き 2
- ST-013-G-14 大仏次郎賞決定時の切り抜き
- ST-013-G-15 物理学とは何だろうか 紹介記事
- ST-013-G-17 物理学とは何だろうか 紹介記事 金関義則
- ST-013-G-18 鳥獣戯画 書評 串田孫一
- ST-013-G-19 墓碑銘
- ST-013-G-20 論壇時評 宮崎義一
- ST-013-G-21 書評 鳥獣戯画 村上陽一郎
- ST-013-G-22 不自由経済
- ST-013-G-23 朝永博士の遺訓 玉野井芳郎
- ST-013-G-24 朝永著作集を高校に贈ろう 江沢洋
- ST-013-G-25 朝永博士における独創性の研究 伏見康治
- ST-013-G-26 科学者と教科書問題 山住正巳
- ST-013-G-27 科学者に責任があるか 鎮目恭夫
- ST-013-G-28 全面核戦争の危険逆に濃厚 武谷三男
- ST-013-G-29 次回に対決を残す学術会議総会 山口省太郎
- ST-013-G-30 第45学術会議総会“基本法”めぐり論戦
- ST-013-G-31 将来計画と学術会議の危機 武谷三男
- ST-013-G-32 科学者像とその意識 対談
- ST-013-G-33 中国旅行談 野上茂吉郎ほか
- ST-013-G-34 Pugwash beginnings
- ST-013-G-35 'Time' Criticism
- ST-013-G-36 Japanese Contemplate basic Science Law
- ST-013-G-37 Obituary Sin-itiro Tomonaga,1906-1979 Kazuhiko Nishizima
- ST-013-G-38 Sin-itiro Tomonaga Satio Hayakawa
- ST-013-G-39 朝永記念室 開館時切り抜き

ST-013-H	ノーベル賞の頃の記事
ST-013-H-01	新聞記事、グラビア スクラップブック 1冊
ST-013-H-02	週刊誌、その他思い出など スクラップブック 1冊
ST-013-I	逝去時新聞記事スクラップ
ST-013-J	朝永家家系及び父君について
ST-013-J-01	川棚の郷土夜話 金滝大八郎
ST-013-J-02	西田幾太郎関係 (三十郎氏との話)
ST-013-J-04	家系図メモ コピー
ST-013-J-05	手紙 三十郎氏より
ST-013-K	伝記作成のための資料
ST-013-K-01	故朝永振一郎博士葬儀 パンフレット
ST-013-K-02	弔電 3通
ST-013-K-03a,b	手紙 先生より奥様へ、奥様よりお嬢さんへ
ST-013-K-04	履歴書メモ
ST-013-K-05	桜会 京一中会報
ST-013-K-06	ノーベル賞学者二人を生んだ土壌 寿岳文章
ST-013-K-07	よき時代のよき教育者 桑原武夫
ST-013-K-08	錦林尋常小学校写真
ST-013-K-09	京極尋常小学校、錦林尋常小学校 パンフレット
ST-013-K-10	京都市青少年科学センター パンフレット
ST-013-K-11,12	松井氏メモ
ST-013-L	有名人の原稿
ST-013-L-01	推薦文 湯川秀樹
ST-013-L-02	いよいよ大事な存在であった彼 野上彌生子
ST-013-L-03	朝永先生追悼 円地文子
ST-013-M	仁科先生関係
ST-013-M-01	東洋学芸雑誌
ST-013-M-02	仁科芳雄博士像除幕式

- ST-013-M-03 コペンハーゲンから理研の仁科博士への手紙 玉木英彦
 ST-013-M-04 Reminiscences of Nishina M.Bohr
- ST-013-N 科学と技術の広場の会の Diary**
 ST-013-N-01 1973 年度 ~ 1979 年度
- ST-013-O 講演記録テープ**
- ST-013-O-01, 02 ソルベー会議に参加して I, II 科学と技術の広場の会 1961.10.24
 ST-013-O-03 ノーベル賞授賞講演 ストックホルム 1966.5.6
 ST-013-O-04 量子電気力学の発展 N.H.K. 教養特集、朝日講堂 6.3
 ST-013-O-05 科学の周辺 福井高専 1972.10.10
 ST-013-O-06 力学と日本の伝統思想 1、2 科学と技術の広場の会 1973.6.25
 ST-013-O-07 講演 (題不詳) 日経ホール 1974.10.28
 ST-013-O-08 物理学の周辺 島根県民会館 1975.11.6
 ST-013-O-09,11 量子力学あれこれ話 I, II 厚生年金会館 1976.3.27
 ST-013-O-11 物理学界百年祭講演 1977.10.7
 ST-013-O-12 超多時間理論の誕生 都立大学 1978.3.14
 ST-013-O-13 くりこみ理論の誕生 都立大学 3.21
 ST-013-O-14 理研における原子核研究 (座談会) I 仁科記念財団 10.12
 ST-013-O-15 理研における原子核研究 (座談会) II、基研 25 周年に際して (談話)
 京王プラザホテル 8.29
- ST-013-O-16, 17 ノーベル賞 3 学者対談 I, II 1979.10.16
 ST-013-O-18 ノーベル物理学賞授賞者三人鼎談 京都青少年教育センタ 1979.10.16
 ST-013-O-19, 20 みすずゼミ開講記念 常識とは何か、座談会 日仏会館 1971.9.18
 ST-013-O-21, 22 パグオッシュ会議と世界平和 I, II フレンドの会 不詳
- ST-013-O-23 仁科博士の業績他 NHK 放送文化財団 1958.2.25
 ST-013-O-24a 科学者は語る (A 面) NHK 篠崎氏対談 1969.8.2-8.23
 ST-013-O-24b 朝永博士を偲んで (B 面) 武見、豊田、小田 1979.7.9
 ST-013-O-25 新春対談 NHK 新春対談 1971.1.1
 ST-013-O-26 仁科先生の思い出 岡山大学仁科胸像除幕式 1966.11.21
 ST-013-O-27 科学者京都会議 東大教養学部 1962.7.5
 ST-013-O-28 思い出の記 NHK (豊田、篠崎) 1963
 ST-013-O-29 日米委員会に出席して 科学と技術の広場 1964.8.1
 ST-013-O-30 ソ連視察旅行談 科学と技術の広場 1965.11.2

- ST-013-O-31 量子電磁力学の発展 NHK 教養特集 1966.7.31
- ST-013-O-32 原子核物理学の思い出 仁科記念講演 1970.12.6
- ST-013-O-33 物理学よもやま話 みすずゼミ開講記念 1971.9.18
- ST-013-O-34 核兵器と科学者の社会的責任 NHK ETV 1975.9.7
- ST-013-O-35 誕生 70 年記念 1976.5.8
- ST-013-O-36 ~ 38 パグオッシュ会議の歩みと核軍縮への道 I ~ III
科学と技術の広場 1976.10.4
- ST-013-O-39 ~ 42 量子力学の歩み I ~ IV 京大連続講演 1976.10.14

ST-013-P 朝永先生の思い出を語る

- ST-013-P-01 Tom さんの思い出 大賀小四郎 1979.10.1
- ST-013-P-02 朝永先生“科学と人生”大賀小四郎 1979.10.1
- ST-013-P-03 朝永先生の思い出 I 多田正忠、千田香苗 10・4
- ST-013-P-04 朝永先生の思い出 II 小林稔 10・4
- ST-013-P-05 ~ 08 朝永先生の思い出 小林稔、小沼通二 10.13
- ST-013-P-09,10 朝永先生の思い出 桑原武夫 10.16
- ST-013-P-11 朝永先生の思い出 野上弥生子 10.27
- ST-013-P-12 朝永君の思い出 島藺順雄 11.5
- ST-013-P-13 朝永君 荒木三郎 11.7
- ST-013-P-14 朝永振一郎追憶の集い I 小森憲、小林稔、牧二郎 8.25
- ST-013-P-15 朝永振一郎追憶の集い II 豊田利幸 他 8.25
- ST-013-P-16 理研と朝永先生 I 有山、小林、竹内、玉木、8.26
- ST-013-P-17,18 理研と朝永先生 II 他 理研 OB 8.26
- ST-013-P-19 プリンストン時代の朝永先生 小平邦彦 1980.3.25
- ST-013-P-20 無題 土方夫人 1981.5.27
- ST-013-P-21 朝永先生の学風 小林稔 1980.3.28
- ST-013-P-22,23 朝永先生（座談会）多田、木村、井上、牧 1981.5.26
- ST-013-P-24 無題 稲沼史（靖国丸で同船帰国） 1983.9.27
- ST-013-P-25 無題 朝永陽二郎 1981.5.27
- ST-013-P-26,27 無題 堀健夫氏宅で 1979.9.17
- ST-013-P-28,29 振ちゃんの思い出 朝永光子 1979.10.9
- ST-013-P-30,31 無題 大枝益賢 1979.12.10、1981.5.26
- ST-013-P-32 朝永先生の思い出（座談会）I 馬場、永田、鈴木、田地 1979.7.10
- ST-013-P-33 朝永先生の思い出（座談会）II 佐々木、山口、福田博、石川、和気、

松井

- ST-013-P-34 朝永先生を偲んでⅠ 永田、佐々木、鈴木 1979.9.24
ST-013-P-35 朝永先生を偲んでⅡ 伊藤、松井 1979.9.24
ST-013-P-36 朝永先生を偲んでⅢ 伊藤、松井 1979.9.24
ST-013-P-37, 38 先生を偲んでⅠ,Ⅱ 広場の会 1979.10.20
ST-013-P-39 ~ 41 田地君を囲んでⅠ,Ⅱ,Ⅲ 広場にて 1979.12.27
ST-013-P-42, 43 朝永著作集出版記念の集い 東京会館にて 1983.10.29

ST-013-Q

科学と技術の広場の会講演・座談会テープ

- ST-013-Q-01 ~ 04 漢方医学 丸山昌朗 1972.7.21
ST-013-Q-05 モノ一の哲学的遠征 杉田元宣 1973.2.26
ST-013-Q-06, 07 講演、座談会 玉木英彦 4.23
ST-013-Q-08, 09 ヨーロッパの高エネルギー実験の現状、座談会Ⅱ 吉城肇 5.26
ST-013-Q-10 力学と日本の伝統思想 辻 哲夫 6.25
ST-013-Q-11 カタストロフの構造Ⅰ 宇敷、佐和 10.2
ST-013-Q-12 カタストロフの構造、座談会Ⅱ 朝永、中嶋、玉木、杉田他 10.2
ST-013-Q-13, 14 中国の科学思想 山田慶児 7.14
ST-013-Q-15, 16 ショウジョウバエ 堀田凱樹 1974.4.20
ST-013-Q-17, 18 中国の印象 小谷正雄 5.11
ST-013-Q-19 科学者と文学者の協同 野間宏 7.17
ST-013-Q-20 現代の危機を切りひらくために 野間宏 7.17
ST-013-Q-21 中国再訪で見たこと考えたこと 山田慶児 1975.12.19
ST-013-Q-22, 23 システム・情報・生物 南雲仁一 1976.10.6
ST-013-Q-24 ライフサイエンスの発展とその技術的側面 渡辺格 11.13
ST-013-Q-25, 26 雑感、中国を訪ねて、座談会 中島健蔵 12.22
ST-013-Q-27 ~ 29 半導体技術の影響 喜安善市 1977.3.29
ST-013-Q-30, 31 社会生物学論争について 鎮目恭夫 1977.5.21
ST-013-Q-32 生物化学最近の進歩 藤井康男 6.17
ST-013-Q-33 ~ 37 座談会 湯浅年子 9.24
ST-013-Q-38, 39 あべこべについて 茅野 健 10.29
ST-013-Q-40, 41 近代思想としての経済学の限界 玉野井芳郎 12.10
ST-013-Q-42 ベル研の話 江沢洋 1975.4.26
ST-013-Q-43 チンパンジー生態に関する話Ⅰ 西田利貞 1972.6.15
ST-013-Q-45,46 精神医学の周辺 小木貞考 1978.4.28

ST-013-Q-47	Taylor の著書をめぐって I 湯川、渡辺他 1970.5.14
ST-013-Q-48	生物学の時限爆弾 II 湯川、渡辺他 1970.5.14
ST-013-Q-49	新春放談 広場の会 1972.1
ST-013-Q-50,51	晩集会、座談会 戸田盛和 1975.6.21
ST-013-Q-52 ~ 54	第三回晩集会、座談会 亀淵 迪 1975.7.21
ST-013-Q-55 ~ 57	観櫻会、座談会 広場の会 1978.4.8
ST-013-Q-58, 59	‘広場’ お別れの会 朝永夫人を招いて 1980.3.11
ST-013-Q-60	無題 竹内 均 1972.5.23
ST-013-Q-61,62	無題 I, II 森 毅 1975.9.12
ST-013-Q-63	ソ連の旅から 山口嘉夫 1976.10.22
ST-013-Q-64 ~ 66	ソシオバイオロジーについての論争 柴谷篤弘 1976.10.22
ST-013-Q-67	ライフサイエンスの発展とその技術的側面 渡辺 格 1976.11.13

ST-014
研究室、素研、核研関係資料

ST-014-01	研究室会議議事録
ST-014-02	素粒子研究所準備研究総合報告 s39-43
ST-014-03a, b	素粒子研究所の計画報告 I, II s40
ST-014-04	総合事務局報 no.34 1967年11月
ST-014-05	素研関係資料 18
ST-014-06	未整理 核研以後 学術行政会議資料 一包

ST-TBL
別表
ST-TBL-A
別表 A 賞状ファイル

ST-TBL-A-01	保育証書 東京市誠之尋常小学校附属幼稚園 明治 45 年
ST-TBL-A-02	賞状 錦林尋常小学校 1 年 大正 2 年
ST-TBL-A-03	修業証書
ST-TBL-A-04	命 2 年 大正 2 年
ST-TBL-A-05	賞状 大正 3 年
ST-TBL-A-06	修業証書 06
ST-TBL-A-07	命 3 年 大正 4 年
ST-TBL-A-08	賞状
ST-TBL-A-09	修業証書 09
ST-TBL-A-10	賞状 4 年 大正 5 年
ST-TBL-A-11	修業証書 11

ST-TBL-A-12	命	5年
ST-TBL-A-13	賞状	大正6年
ST-TBL-A-14	修業証書	14
ST-TBL-A-15	命	6年
ST-TBL-A-16	賞状	大正7年
ST-TBL-A-17	卒業証書	
ST-TBL-A-18	賞	京都第一中学校 大正12年
ST-TBL-A-19	卒業証書	19
ST-TBL-A-20	感謝状	桐花寮、茗花寮 昭和37年
ST-TBL-A-21	ニュートン賞	昭和28年

ST-TBL-B 別表 B 辞令ファイル 1、2、3

ST-TBL-B1	辞令ファイル 1	嘱託(理化学研究所)昭和7年、研究生、講師(北海道帝国大学)昭和12年、委嘱(学術研究会議)昭和15年、講師(東京文理科大学)、教授(東京文理科大学)、嘱託(通信院)、委嘱(学術研究会議(内閣総理大臣))、講師(東京大学)昭和23年、光学研究所兼職、など
ST-TBL-B2	辞令ファイル 2	光学研究所長代理(東京教育大学)昭和26年、主任研究員(小林理学研究所)、研究部員(湯川記念館)、国大協臨時委員(文部大臣)昭和28年、併任(京都大学)、光学研所長(東京教育大学)、中央教育審議会委員(文部大臣)、日本ユネスコ国内委員、併任(東京大学原子核研究所)、など
ST-TBL-B3	辞令ファイル 3	光学研究所長(東京教育大学)昭和41年、学術会委員(日本学術会議)、記念委員(京一中・洛北高校)昭和42、退職(東京教育大学)、高エネ研評議員(文部大臣)昭和46年・昭和52年、高等官五等(内閣総理大臣)昭和16年、従六位(宮内大臣)昭和16年、高等官四等(内各総理大臣)昭和18年、正六位(宮内大臣)昭和18年、従二位(内閣総理大臣)昭和54年、位七級、など

ST-TBL-C 別表 C ノーベル賞受賞祝辞等

ST-TBL-C-01	日本人より	秋田勢津、浅田常三郎、荒木善次、飯田宗一郎、五百井仁、池上栄胤、石田岳堂、内田洋一、大前恵美、大塚重遠、岡田重作、加藤ミエ、川本
-------------	-------	--

美恵、京都大学基礎物理学研究所研究部員会議、草分顕洸、工藤一正、小平邦彦（権一）、小林茂男、坂本峻雄、三宮一彦、志方康祐、重本正男、柴田雄次、杉田寛司、妙中麻子、高橋百千、武谷三男、田原和一、天童雅枝、徳永玄理、西隆輝、西谷三四郎、野上弘・大前恵美、長谷川四郎、長谷川峻、畠山蔵六、服部 博、鳩山道夫、花柳徳次海、花輪重雄、浜口博、早川橈治、原一郎、原安三郎、原田耕一郎、肥後和男、披田野陽一、平沢俊男、平田昭、平塚英吉、平吉功、藤井利重、藤井徳也、藤沢謙一郎、藤田純一、藤野富夫、藤野治之、藤井勝一郎、船木司郎、福田光治、福田武、福田正・洋子、福原麟太郎、古川きく、鮑利民、細川護立、穂積五一、穂積七郎、堀浩二、堀しず子、堀淳一・陽子、堀経夫、堀康夫・静枝、本田隆雄、前田隆士、前田秀、牧二郎、牧春夫、松井英彦、松本一男、松本昇、松宮芳雄、松村将雄、三木英一、三竹春子、深津義彊、三瓶温、宮島汀子、宮部巳之助、務台美津子、村上守俊、村越司、森蔦子、森勝子、森義一、森誉四郎、森川学、森沢金造・こま、森田正人、森田平八、最上勇、諸橋轍次、文珠繁治、柳生繁雄、安江孝治、山内俊吉、山形美知子、山崎三郎、山下豊、山田義信、山田京子、山中篤太郎、横地静夫、横山賢二、吉田哲夫、吉富伸夫、吉場仟録、渡辺泰子、渡辺武男、渡辺克巳、和田靖

ST-TBL-C-02

寄せ書き

ST-TBL-C-02-001

長田純一、アンドウゼンパチ、Kenkichi Fujimori、Hiroshi Nakamura、安立仙一、河合武夫、鈴木悌一、Tadao Kuroishi、斉藤広志、藤井卓治、他

ST-TBL-C-02-002

瀬谷、蓮、三宅、尾中、坂柳、工藤、小島、三輪、宮本、福田、戸田、真田、宮島

ST-TBL-C-03

外国人より Yuval Neeman（宮沢弘成氏を通じ）、J.Cookey（ユネスコ国内委員会を通じ）、ユネスコ執行委員会、The British Council、O. Klein、ズベスチャ東京支局ホーニン

ST-TBL-C-04

電報 坂本紡績ソウル工場ジョウセンマン

ST-TBL-C-05

領子夫人へ 秋津しず子、大沢二葉、大山セツ、加藤正秀、川田夏子、川田田鶴子、佐々木美代、原豁、安井田鶴子、山崎みどり、山下タミ、八幡歌代子、山田朝子、山田定義、吉井田鶴子

ST-TBL-D

別表 D 勲一等受賞関係

ST-TBL-D-01

手紙

赤尾好夫、赤城宗矩、有山兼孝、飯田慶三・新一、石井千尋、石川仁作、

稲葉修、祝宮静、大野勝己、岡田幸一、岡野澄、緒方信一、加藤辯三郎、上村登、菊地庸一、木田宏、狩野近雄、小島公平、小寺明、駒井健一郎、佐治敬三、新堂庄二、鈴木清、鈴木康正、瀬藤象二、高橋恵里香、田上辰雄、田中清郎・寿子、谷恵吉郎、徳永玄理、都崎雅之助、朝永修三、朝永総子、内藤誉三郎、中島茂、中根良平、中野宏、中林陸夫、二国二郎、西本顕、野間省一、畠山久尚、福井伸二、福島要一、福山重吉、平尾清子、平沼良、星野達雄、堀正剛、本田益夫、牧野佐二郎、松田進勇、松野幸吉、松本徳智、三木武夫、三阪秋造、諸橋轍次、安嶋 弥、柳瀬陸男・ヨゼフ・ピタウ、山内俊吉、山梨進一、湯浅秀

ST-TBL-D-02

名刺

ST-TBL-E

別表 E 入院時お見舞

ST-TBL-E-01

手紙

ST-TBL-E-01-1

日本人より 飯塚重五郎、伊藤大介、犬飼、科学と技術の広場の会有志一同、岡小天、神崎昌雄、木村毅一、北村勝三郎、小林藤恵、小林雅子、小林稔、戸田盛和・恵子、Toyoda、南部陽一郎、並木美喜雄、西尾信一、早川幸男、福田洋子、福原麟太郎、藤田良雄、松井英彦、宮島龍興、宮台朝直、湯浅年子、山崎和夫、山崎文男

ST-TBL-E-01-2

外国人より Auge Bohr、周培源

ST-TBL-E-01-3

領子夫人へ 河上里子、北島さと子、小谷ひで、衛藤千代、豊田利幸、堀健夫、山口頼子

ST-TBL-E-02, 03

御見舞金のし袋、カード、名刺

ST-TBL-F

別表 F 葬儀関係

ST-TBL-F-01

手紙

鷗谷すみ江、青野寿郎、秋月康夫、秋田鉄弥、東明・瑞子、東 晃、安藤栄子、石川万次郎、石黒九州男、伊藤 博、岩尾秀嶺、岩田健三、岩永方一、植村琢、大塚誠造、大野陽朗、岡崎きく子、小川孝、尾崎正治、小幡 操、小野文雄、柏村志津江、加地礼太、加藤治秀、加藤忠蔵、加藤孟道、上武正二、川田田鶴子、河本晴正、感随寺、菊庸一、木村毅一、栗原真津美、黒川由紀子、後藤茂男、小沼通二、小堀憲、駒井たけ、小安喜佐子、小柳貞子、佐々清一、塩尻常子、新谷政一、清水千之助・歌子、高井義季、田中一実、田中秀雄、田中芳子、千葉絹子、塚本博子、拓植孝広、寺沢新一、寺本英、飛岡文一、豊田利幸、永井哲夫、中林陸夫、永宮健

夫、新村祐一郎、二国二郎、野上 弘、服部 博、花柳徳次、海原明夫、平塚英吉、藤沢善次、藤田良雄、富士原宏次、福島要一、堀浩二、堀淳一、堀陽子、本間昭夫、松宮芳雄、馬淵正樹、宮城たず、村上政嗣、森明、森田平八、八木君江、柳父琢治、矢崎 園、安田利政、谷津信子、山形由史・美知子、山崎みどり、八幡歌代、吉村直子、京一中洛北高校同窓会、渡辺輝雄、江上、小林徹郎、桜井純、樽林初子

ST-TBL-F-02

電報

学者・知人 (159)、各種団体 (107)、出版関係 (9)、政治家等 (35)、会社 (43)、親戚 (26)、ご家族の友人 (31)、為替 (4)

ST-TBL-F-03

弔辞

荒木三郎 (友人代表)、小野 周 (日本物理学会会長)、木下末雄 (石本郷総代)、木村勇次 (武蔵野市議会議長)、参議院、衆議院、武見太郎 (葬儀委員長)、内藤誉三郎 (文部大臣)、西川哲治 (高エネルギー研所長)、伏見康治 (日本学術会議会長)、福井伸二 (理化学研究所理事長)、藤元政 (武蔵野市長)、宮島龍興 (筑波大学学長)、嶺藤 亮 (真宗大谷派宗務総長)、山崎文男、和達清夫 (日本学士院長)

ST-TBL-F-04

献歌 志つ、登紀、陽二郎、竹泉

ST-TBL-F-05

海外よりの弔電、お悔やみ状

ST-TBL-F-05-1

組織

ST-TBL-F-05-2

個人 Aage Bohr, N. N. Bogolubov, D. Kiss, M. Sowinski, Lau Bong-Whan, L.M. Brown, Bethes, Kinoshitas, Salpeters, T. D. Lee, N. M. Markov, Jan Jacoby, Rudolf Peierls, Harald Wergeland, Thou Peiyuan, 鄭南金, C.N. Yang, Alexandere M. Zguridi, 江崎レオ, 南部陽一郎, 尾崎敏, 谷純夫, 岡本和人, Tadashi and Hanako Toyoda, 湯浅年子, Setuko and Yahiko Yamada, Iso Satoshi

ST-TBL-G

別表 G 風呂敷包みの内容

ST-TBL-G-01

青い風呂敷包み

ST-TBL-G-01-001

小林徹郎氏からの手紙 1978.2.3 (講演依頼、1930年代論文調べ)

ST-TBL-G-01-002

「A Self-Consistent Subtraction Method in Quantum Field Theory I」
by Takao Tati, S. Tomonaga (1984.5. 23)

ST-TBL-G-01-003

「A Self-consistent Subtraction Method in Quantum Field Theory II」
by H. Fukuda, Y. Miyamoto, S. Tomonaga (1948.9.23)

ST-TBL-G-01-004

「Radiation Reaction in Collision Process III」

- by Ziro Koba, Gyo Takeda (1948.10.4)
- ST-TBL-G-01-005 「Relativistic Quantum Mechanics」 by P. A. M. Dirac (1932.3.24)
- ST-TBL-G-01-006 「The Lagrangian in Quantum Mechanics」 by P. A. M. Dirac (1932.11.19)
- ST-TBL-G-01-007 「On a Relativistically Invariant Formulation of the Quantum Theory of Wave Field」 by S. Tomonaga (1946.5.17)
- ST-TBL-G-01-008 「Corrections due to the Reaction of "Cohesive Force Field" to the Elastic Scattering of Electron I」
by Daisuke Ito, Ziro Koba, S. Tomonaga (1948.2.28)
- ST-TBL-G-01-009 「Corrections due to the Reaction of "Cohesive Force Field" to the Elastic Scattering of Electron II」
by D. Ito, Z. Koba, S. Tomonaga (1948.3.3)
- ST-TBL-G-01-010 「素粒子論の進展－無限大の困難をめぐって－」(1949.1)
科学 1965.12 月号より抜刷
- ST-TBL-G-01-011 「わが研究の思い出」～理研講演会の記録 22 回(1932 秋)～44 回(1946 春)
「日本物理学会誌第 32 巻第 10 号 (1977)」
- ST-TBL-G-01-012 筆記『量子力学と私』
- ST-TBL-G-01-013 量子論史のメモ－B4 原稿用紙 2 枚、A4 原稿用紙 3 枚
- ST-TBL-G-01-014 三菱銀行のメモ用紙中の 4 枚に幾何学的な計算のしてあるもの
(太陽系の運動)
- ST-TBL-G-01-015 昭和 18 年度日本数学物理学会年会の講演アブストラクトのコピー
- ST-TBL-G-01-016 「理研 60 周年に際して」(1977.3.18)
「理化学研究所創立 60 周年記念講演集」の P10 ～
- ST-TBL-G-01-017 雑誌『国際交流 1978 冬季号』
- ST-TBL-G-01-018 理学博士寺田寅彦君「ラウエ映画の実験方法及び其説明に関する研究」
に対する受賞審査要旨コピー
- ST-TBL-G-01-019 大場一郎氏からの手紙 (B5・1 枚) と要件のパウリの論文のコピー
- ST-TBL-G-01-020 「On Radiative Corrections for Electron Scattering」
by S.M. Dancoff (1939.3.27)
- ST-TBL-G-01-021 「Relativistic Quantum Mechanics」 by P.A.M. Dirac (1932.3.24)
- ST-TBL-G-01-022 「わが研究の思い出」(前出と同じもの)
- ST-TBL-G-01-023 「10 年のひとりごと」
- ST-TBL-G-01-024 「Letters of Editor ～ The Self-Energy of the Electron and the Mass Difference of Nucleons, etc.」
- ST-TBL-G-01-025 「“凝集力の場” の反作用による電子の弾性散乱の補正について」

- 朝永振一郎、伊藤大介、木庭二郎著 (1948.2.28, 3.3)
- ST-TBL-G-01-026 1934 年年会 (P113 に湯川先生の“相対性量子力学における確率振巾について”の題目が載っている)
- ST-TBL-G-01-027 「Development of Quantum Electrodynamics」 by S. Tomonaga (1966.6.3)
- ST-TBL-G-01-028 「On Quantum Electrodynamics」
by P. A. M. Dirac, V. A. Fock, Boris Podolsky (1932.10.25)
- ST-TBL-G-01-029 「Die Physikalische Bedeutung Mehrerer Zeiten In Der Quantenelektrodynamik」
von F. Bloch (1933.8.27)
- ST-TBL-G-01-030 「The Lagrangian in Quantum Mechanics」 by P.A.M. Dirac (1932.11.19)
- ST-TBL-G-01-031 科学史メモ (基研封筒裏)
- ST-TBL-G-02 紫色の風呂敷包み**
- ST-TBL-G-02-001 「スピンはめぐる」
- ST-TBL-G-02-002 「物質粒子による陰陽電子の創生」『日本学会報告第 10 巻第 4 号』
(1935.12) より抜刷仁科芳雄・朝永振一郎・小林稔著
- ST-TBL-G-02-003 「仁科先生と朝永さんと私」湯川秀樹著 (1965.12.6)
- ST-TBL-G-02-004 「量子電気力学の発展」朝永振一郎著 (1966.6.3)
- ST-TBL-G-02-005 1930 年頃の歴史に関するメモ (メモ 3 枚、原稿用紙 A4・2 枚)
- ST-TBL-G-02-006 「On Radiative Corrections for Electron Scattering」
by S.M. Dancoff (1939.3.27)
- ST-TBL-G-02-007 「On Radiation Reactions in Collision Processes I」
by Z. Koba, S. Tomonaga (1948.3.1)
- ST-TBL-G-02-008 「A Self-Consistent Subtraction Method in Quantum Field Theory I」
by T. Tati, S. Tomonaga (1948.5.23)
- ST-TBL-G-02-009 雑誌「自然 '76-11」(ヨーロッパ留学時代の仁科芳雄)
- ST-TBL-G-02-010 雑誌「図書 8 1777」岩波書店 (寺田寅彦?)
- ST-TBL-G-02-011 「朝永博士のノーベル賞受賞にあたって」小野周
- ST-TBL-G-02-012 「素粒子論の進展—無限大の困難をめぐって」
- ST-TBL-G-02-013 雑誌『科学 1977.7 月号』
- ST-TBL-G-02-014 1976 年 12 月 6 日の読売新聞と 12 月 13 日の同新聞の一部
- ST-TBL-G-02-015 『Recollections of physics and of physicists during the 1920's』
- ST-TBL-G-02-016 『理化学研究所図書館概況』
- ST-TBL-G-02-017 『NATURE 1934.11.10』のコピー B5・2 枚
- ST-TBL-G-02-018 『科研に於ける宇宙線研究史』
- ST-TBL-G-02-019 上記 3 つの入れてある横浜国立大学教育学部の封筒に書かれたメモ

- ST-TBL-G-02-020 『仁科研究室既往業績梗概 1938.12 月』の表紙のコピー B5・1 枚
- ST-TBL-G-02-021 「素粒子論の進展 - 無限大の困難をめぐって -」1965.10
- ST-TBL-G-02-021b 「量子力学 50 年によせて」「科学 1976.1 月号」巻頭原稿
- ST-TBL-G-02-022 「鈴木昭先生の話」
- ST-TBL-G-02-023 「Heisenberg and the early days of quantum mechanics」
(Phys. Today 1976, Dec.)
- ST-TBL-G-02-024 「OB 会役員会議事 51.3.23」
- ST-TBL-G-02-025 日本物理学会第 31 会年会プログラム
- ST-TBL-G-02-026 辻哲夫氏からの手紙 (『日本の物理学史』に載せる随筆「わが研究の思い出」の原稿の依頼)
- ST-TBL-G-02-027 『科学』編集部の大塚一夫氏からの手紙
(“量子力学 50 年”というテーマの『科学』の巻頭の執筆の依頼)
- ST-TBL-G-02-028 江沢洋氏からの手紙 (1976.4.5)
(“量子力学 50 年”というテーマの『科学』に関すること、他)
- ST-TBL-G-02-029 理研 OB 会役員会開催通知 1976.2.13
- ST-TBL-G-02-030 リスト
- ST-TBL-G-02-031 「物理学論講会」について書かれたもの
- ST-TBL-G-02-032 1976 年 4 月 29 日の読売新聞の切り抜きのコピー (護憲運動)
- ST-TBL-G-02-033 雑誌「思想 623 号」の抜刷 (福田歓一氏から朝永先生に送られたもの)
- ST-TBL-G-02-034 上記の抜刷と送った手紙と封筒
- ST-TBL-G-02-035 世界平和アピール七人委員会昭和 50 年度収支決算書
- ST-TBL-G-02-036 「仁科先生」『朝永論文集 (II)』(科学 21,1951)
- ST-TBL-G-02-037 講義のお願いの手紙の裏にメモ
- ST-TBL-G-02-038 Klein 宛手紙の日本語原稿 (B4・2 枚) と英文タイプのコピー (B4・1 枚)
- ST-TBL-G-02-039 横山氏よりメモ
- ST-TBL-G-02-040 「On the Calculation of Atomic Energy Levels」山内恭彦著 (謹呈・小谷先生)
- ST-TBL-G-02-041 「原子勢力準位の計算」山内恭彦著 数物学会誌 8[2] 別刷
- ST-TBL-G-02-042 Klein 宛手紙の英文タイプ (1975.4.8) (4 行上と同じ内容のもの)
- ST-TBL-G-02-043 「Reminiscences of Nishina」by Margrethe Bohr
- ST-TBL-G-02-044 「To the Memory of Yoshio Nishina」by O. Klein
- ST-TBL-G-02-045 日本の物理学者のリスト (のようなもの)
- ST-TBL-G-02-046 『共立出版創立 50 周年記念講演会の講師 (含朝永先生) 略歴』の冊子
- ST-TBL-G-02-047 メモされた B5 原稿 1 枚 「物理学論講会」について鈴木先生の話
- ST-TBL-G-02-048 量子力学的多体問題」～『日本物理学会誌第 11 巻第 4 号』別刷 (1956.4 月号)

- ST-TBL-G-02-049 「中間子と核粒子との相互作用について (上) (下)」(1943.6.30, 7.6)
- ST-TBL-G-02-050 1928 年 4 月に行われた杉浦講義「新量子力学とその応用」の内容
- ST-TBL-G-02-051 1928 年 12 月に行われた Sommerfeld の講義の内容
- ST-TBL-G-02-052 1931 年 4 月理研所長宛ての藤岡書簡、及び返書
- ST-TBL-G-02-053 「日本外交への提言」坂本義和のコピー
- ST-TBL-G-02-054 論文リスト
- ST-TBL-G-02-055 「量子力学 50 年によせて」朝永振一郎～『科学 1976.1 月号』巻頭
- ST-TBL-G-02-056 「量子電気力学の発展」1966.6.3 『仁科記念講演』
- ST-TBL-G-02-057 「仁科先生と朝永さんと私」湯川秀樹 1965.12.6
- ST-TBL-G-02-058 『玉城教授記念講演集』1970
- ST-TBL-G-02-059 昭和 51 年度収支状況中間報告 S52.3.15 現在 B5 印刷 1 枚
- ST-TBL-G-02-060 第 4 回 OB 会総会出席予定者名簿 B4 わら半紙刷り 2 枚
- ST-TBL-G-02-061 『理化学研究所 1976』のカタログ
- ST-TBL-G-02-062 『理研出身者名簿 1977』
- ST-TBL-G-02-062b 59) -62) についての注 (理研 OB 会の封筒)
- ST-TBL-G-02-063 小泉賢吉郎氏からの手紙 (Reprinted from "Historical Studies in the Physical Sciences" が同封されている)
- ST-TBL-G-02-064 Bernadotte 氏からの手紙 (air mail) 1975.12.15 付
- ST-TBL-G-02-065 「湯川・朝永宣言 1975 年 9 月 1 日」
- ST-TBL-G-02-066 湯浅氏から朝永夫妻に宛てた手紙
- ST-TBL-G-02-067 ①と書かれたもの
- ST-TBL-G-02-068 「かなしい現実」1948.10.25
- ST-TBL-G-02-069 「朝永先生大いに語る」田地氏・福田氏・朝永氏による対談
- ST-TBL-G-02-070 「くりこみ理論の生い立ち」伊藤大介
- ST-TBL-G-02-071 「ファウスト風中性子誕生の前夜」朝永振一郎訳
- ST-TBL-G-02-072 「仁科先生の温情に泣く」～『わが師わが友』
- ST-TBL-G-02-073 「科学と知的好奇心」朝永氏・早川氏・後藤氏による対談
- ST-TBL-G-02-074 リスト (前期量子論関係)
- ST-TBL-G-02-075 メモ A4・1 枚、B5。1 枚、B4 原稿用紙 1 枚
- ST-TBL-G-02-076 仁科研究室の既往業績のコピー
- ST-TBL-G-02-077 「1971 年日本学士院代表団の英国訪問について」朝永・坪井・木原・水島
- ST-TBL-G-02-078 「ゾイデル海の水防とローレンツ」
- ST-TBL-G-02-079 「人類の滅亡を救うために」
- ST-TBL-G-02-080 「暗い日の感想」

- ST-TBL-G-02-081 「ソルベー会議と現代物理学」
- ST-TBL-G-02-082 豊田－朝永対談「危機の中のパグウォッシュ会議」
- ST-TBL-G-02-083 『思想・石原純先生』と書かれたもの（リスト）
- ST-TBL-G-02-084 東海大学出版会・川上文雄氏からの手紙
- ST-TBL-G-02-085 雑誌『みすず 1976.9-10』
- ST-TBL-G-03 白い紐でしばってあるもの～英国旅行の資料（パンフレット等）**
- ST-TBL-G-03-001 BAYERISCH AKADEMIE DER WISSENSCHAFTEN 1759-1959
- ST-TBL-G-03-002 POST-GRADUATE COURSES AND RESEARCH
- ST-TBL-G-03-003 Coloured Street Plan of OXFORD
- ST-TBL-G-03-004 The University of Sussex BSc Syllabus 1970/71
- ST-TBL-G-03-005 ROYAL BOTANIC GARDEN EDINBURGH
- ST-TBL-G-03-006 Edinburgh
- ST-TBL-G-03-007 Royal Opera House Covent Garden
- ST-TBL-G-03-008 Dinner について印刷されたもの
- ST-TBL-G-03-009 昼食会へのおさそいへの手紙
- ST-TBL-G-03-010 国外旅行傷害保険のしおりの入った手紙
- ST-TBL-G-03-011 レストランのパンフレット
- ST-TBL-G-03-012 OXFORD の写真集
- ST-TBL-G-03-013 『Britain 1971』の本
- ST-TBL-G-03-014 航空写真地図
- ST-TBL-G-03-015 Imperial College of Science and Technology
- ST-TBL-G-03-016 Physics at University College London
- ST-TBL-G-03-017 TRINITY COLLEGE
- ST-TBL-G-04 みどりの紐でしばってあるもの**
- ST-TBL-G-04-001 職業能力申告手帳（厚生省）
- ST-TBL-G-04-002 高エネルギー物理学国際会議の招待状
- ST-TBL-G-04-003a バンケットでのあいさつの原稿 手書き A4・5枚、タイプ A4・2枚
- ST-TBL-G-04-003b バンケットでのあいさつの原稿 日本語訳 B4、A4 レポート用紙 5枚
- ST-TBL-G-04-004 出身中（京都一中）についての記事のコピー
- ST-TBL-G-04-005 Mr. アームストロングに宛てたメモ
- ST-TBL-G-04-006 ヨコヤマに宛てたメモ
- ST-TBL-G-04-007 昭和 40 年第 55 回受賞審査要旨（日本学士院の本）
- ST-TBL-G-04-008 “トンネル現象” についての原稿
- ST-TBL-G-04-009 ㊟日本学士院会員候補者選考に関する第 4 分科委員会記事

- ST-TBL-G-04-010 ~ 14 江崎玲於奈氏の主要な学術上の業績 3 頁、略歴、論文の分類、論文リスト、日本学士院会員候補者推薦書
- ST-TBL-G-04-015 「トンネルの長い旅路」江崎玲於奈～『科学 1974.4 月号』岩波 P194 ~ 202 (オレンジ色のファイルの中)
- ST-TBL-G-04-016 英国国立協会で行なわれた講演の原稿 “回想” (日本文) A4・7 枚、“Reminiscences” (英文) A48 枚、手書きの原稿 A・14 枚、メモ A5・1 枚、英文の手書きの原稿 A4・2 枚、英文タイプ A4・14 枚
- ST-TBL-G-04-017 1971.3.16 の THE ROYAL SOCIETY のプログラム、その他
- ST-TBL-G-04-018 「原子核物理における日英の交流」『日本物理学会誌第 7 号 (1972)』より抜刷
- ST-TBL-G-04-019 「原子核物理における日英の交流」の英文原稿
- ST-TBL-G-04-020 その下書き英文タイプ A4・28 枚 手書き A4・8 枚
- ST-TBL-G-04-021 LIST OF PARTICIPANTS (Forum of Japan-Italy Science)
- ST-TBL-G-04-022 Words of Prof. Castro
- ST-TBL-G-04-023 Words of the Ambassador of Italy, Vincenzo Tornetta
- ST-TBL-G-04-024 ロバート・オッペンハイマーの講演「科学と文化」1960.9.9 (日本語訳)
- ST-TBL-G-04-025 120 ~ 130 枚のメモと計算 (A4 ~ 100 枚程) 中間結合、超短波関係
- ST-TBL-G-04-026 「Fundamental Formalism of Intermediate Coupling Theory」by S. Tomonaga
- ST-TBL-G-04-027 「Recoil Effects in the Strong Coupling Theory」by G. Wentzel
- ST-TBL-G-04-028 「Variational Treatment of Pion-Nucleon Interaction」by K. Sawada
- ST-TBL-G-04-029 「Scattering Problem in the Intermediate-Coupling Theory I」by Ziro MAKI, M. Sato, S. Tomonaga (1953.5)
- ST-TBL-G-04-030 堀江氏より謹呈された冊子
- ST-TBL-G-04-031 原子核特別委員会議事録
- ST-TBL-G-04-032 「科学と技術の現代的課題」
- ST-TBL-G-04-033 戦争のことについて書かれたもの (湯川・朝永宣言?)
- ST-TBL-G-04-034 朝永先生の名刺 (破けてメモのしてあるもの 1 枚が封筒の中にある)
- ST-TBL-G-04-035 Dr. Hayman への手紙の下書き (英文)
- ST-TBL-G-04-036 L. Neel 氏への手紙 1972.4.20 - A4・2、1972.4.21 - A4・1 (朝永先生宛 air mail の中)、英文タイプ (手紙ではない)
- ST-TBL-G-04-037 朝永先生のノート
- ST-TBL-G-05 赤いビニールケース内のもの ~ 訪英の際の資料**
- ST-TBL-G-05-001 「THE ROYAL SOCIETY」
—Draft Programme for Visit of Delegation from Japan

- ST-TBL-G-05-002 Shigeru Nambara 教授から Harold Thompson 氏への英文手紙 1971.3.6
英文タイプ A4・1 枚
- ST-TBL-G-05-003 「Univerisyt of East Anglia 1971-72」(本)
- ST-TBL-G-05-004 キャンパスらしき風景写真とメモ
- ST-TBL-G-05-005 ホテルのパンフレット
- ST-TBL-G-05-006 「MERTON COLLEGE OXFORD」の「The older Buildings」
- ST-TBL-G-05-007 1971.3.25 の Dinner のお知らせなど手紙 3 通とカード 1 枚
- ST-TBL-G-05-008 NPL 上の Background Note
- ST-TBL-G-05-009 IMPERIAL COLLEGE の資料 1 枚
- ST-TBL-G-05-010 「Current research in the Department of Physics」
- ST-TBL-G-05-011 大きなメモ 4 枚 (A4) 他の人の話のメモ
- ST-TBL-G-05-012 ネームカード
- ST-TBL-G-05-013 「Mullard Radio Astronomy Observatory」のカタログ
- ST-TBL-G-05-014 「LANCASTER HOUSE」(紙 1 枚の両面にきれいに印刷されたもの)
- ST-TBL-G-05-015 「The Royal Society of London (1660-1970)」のパンフレット
- ST-TBL-G-05-016 各国大使館の所在のコピー B4・1 枚
- ST-TBL-G-05-017 保険についての資料
- ST-TBL-G-05-018 「GARDEN HOUSE HOTEL」のパンフレット
- ST-TBL-G-05-019 Shigeru Nambara 教授から H. Thompson 氏への英文手紙 1971.7.14
- ST-TBL-G-05-020 Nambara 教授への英文手紙 1971.7.14
- ST-TBL-G-05-021 日本の科学代表団の訪問のプログラム
- ST-TBL-G-05-022 英国政府からのカード
- ST-TBL-G-06 茶色いケース内のもの**
- ST-TBL-G-06-001 「いま思うと - 朝永振一郎氏に聞く -」『教室の窓、中学数学 N-140』
- ST-TBL-G-06-002 「研究生活の思い出」『別冊東京青年 No.13』
- ST-TBL-G-06-003 人吉一中新聞 (同じもの 2 部ある) S44/10/23
- ST-TBL-G-06-004 対談湯川秀樹・朝永振一郎 司会山崎文男 『Isotope news 1972.1』
- ST-TBL-G-06-005 王城教授記念講演集 1969 「玉木先生の追憶」[7 頁] (3 冊ある)
- ST-TBL-G-06-006 “Theory of the upper critical field in layered super conductor”
by R.A. Klemn, A. Luther, M.R. Beasley 1975.3.17
- ST-TBL-G-06-007 「庭にくる鳥」の印刷したもの (訂正の書き込みがある)
『科学と技術の広場 1974.No.84.vol14』
- ST-TBL-G-06-008 「理研 60 周年に際して」『理化学研究所創立 60 周年記念講演集』
1977.3.18

- ST-TBL-G-06-009 理研 OB 会の写真 1 枚
- ST-TBL-G-06-010 Brief Report on The 2nd Intern'l Conference on the Unity of Sciences
- ST-TBL-G-06-011 共立出版創立 50 周年記念講演録「物質科学にひそむ原罪」
『科学の実験 1976.9 月号』とその抜刷 5 冊 1976.6.28
- ST-TBL-G-06-011b 「木庭二郎さんの思い出」『科学 1974.6』
- ST-TBL-G-06-012 「素粒子論の進展－無限大の困難をめぐって－」『科学 1965.12』抜刷
- ST-TBL-G-06-012b 日本物理学会創立 100 周年記念特別講演「物理学とは何だろうか」
『日本物理学会誌 1978.4 月号第 33 巻第 4 号』
- ST-TBL-G-06-013 「物理学とは何だろうか－京都におけるフンボルト財団元留学生学術交流
会で－」『科学と技術の広場 No97.vol.18』2 冊
- ST-TBL-G-06-013b 「1971 年日本学士院代表団の英国訪問について」1971.6.12 6 冊
- ST-TBL-G-06-014 (フランス語の本) 1953 "FOTONO CE JUGEJO" (小さな冊子)
- ST-TBL-G-06-014b 「入院の楽しみと苦しみ」のところだけ切り取られている雑誌
『潮 1970.9 月号』
- ST-TBL-G-06-015 「富山さんの思い出」『科学 1972.12』
- ST-TBL-G-06-015b 「科学と人類」『世界 1975.12 月』
- ST-TBL-G-06-016 「物理学とは何だろうか」『みすず 1978.8』
- ST-TBL-G-06-017 松本徳智さんから事務用せん (B5) 2 枚の手紙
(「現代文明を考える」文部省の中にはさまっている)
- ST-TBL-G-06-018 (英文印刷物) "Curriculum vitae of J. Werle" A4・1 枚
- ST-TBL-G-06-019 (英文印刷物) "The Copernican Inspirations in Physics" J. Werle
- ST-TBL-G-06-020 「原子核物理学における日英の交流」『日本物理学会誌第 27 巻第 7 号
1972』抜刷
- ST-TBL-G-06-021 (英文印刷物) "Heisenberg" A4・10 枚
- ST-TBL-G-06-022 『文明問題懇談会議事録 VI』文部省 科学と現代社会

(受川史彦、金谷和至)

坂田関係史料

(名古屋大学・物理学教室 坂田記念史料室)

5. 坂田記念史料室（名古屋大学・物理学教室）

①史料概要・史料出典・史料室概要

史料概要：

坂田記念史料室では坂田昌一（1911 - 1970）の偉大な業績である、研究業績、研究ノート、講演、湯川や朝永など他の研究者との関係を示す資料や書簡類、日本学術会議関係資料、平和活動での軌跡、日中学術交流、そして多くの弟子たちとの関係を示す資料など、坂田の素粒子物理へ与えた影響および様々な科学者の社会的活動への貢献を伝える多くの貴重史料を整理保存している。

坂田昌一は湯川秀樹、朝永振一郎と並び、素粒子物理の研究分野において不滅の足跡を残した偉大な科学者である。それと同時に、科学者としての活動にも顕著な業績を残し、日本学術会議の創設時から中心的な立場で学術振興に貢献、科学者として平和活動に貢献、日中、日ソの学術交流への尽力、また原子力の平和的利用にも関与するなど多彩である。また、坂田研究室（E研究室）からは数多くの優れた弟子たちを輩出し、その後の物理研究にも貢献し続けている。

<坂田昌一 略歴>

- 1911年 東京で生まれる（首相 桂太郎より「昌一」と名付けられる。）
- 1933年 京都帝国大学理学部物理学科卒業
理化学研究所仁科研究室研究員
仁科・朝永・坂田 共同研究
- 1934年 大阪大学理学部助手 湯川と中間子論の研究
- 1939年 湯川と共に京都大学理学部へ移る
- 1942年 「2中間子論」提唱（坂田昌一、井上健、谷川安孝）
- 1942年 名古屋大学理学部教授
- 1945年 長野県富士見村へ研究室が疎開
- 1946年 名古屋大学物理学教室憲章作成に中心的役割
- 1949年 日本学術会議（第1期）会員。この後、1970年まで会員
- 1950年 「2中間子論」により学士院恩賜賞 受賞
- 1954年 コペンハーゲン大学理論物理学研究所（現ニールス・ボーア研究所）
に半年間滞在（当時ここに CERN 理論部門があった。）
- 1955年 素粒子の複合模型「坂田模型」を提唱
- 1956年 ストックホルム世界平和評議会出席
帰路ソ連、中国を訪問

- 1957年 日本学術会議 原子核特別委員会 委員長
原子力特別委員会 委員長
- 1958年 第3回パグウォッシュ会議出席（ウィーン宣言作成に参加）
- 1960年 素粒子の統一模型「名古屋模型」提唱（牧、中川、大貫、坂田）
- 1962年 「新名古屋模型」提唱（牧、中川、坂田）
この模型でニュートリノ振動を導入。牧・中川・坂田行列へ
- 1962年 日本版パグウォッシュ会議（科学者京都会議）を湯川、朝永とともに提唱、
第一回科学者京都会議を開催
- 1964年 北京科学シンポジウムに日本代表団団長として出席
- 1966年 名古屋大学理学部長
- 1970年 永眠

史料室ではこうした坂田昌一の業績を、年代別、日本学術会議各委員会別、科学者としての活動別、書簡類、名古屋大学関係資料、E研究室関係資料などに分類し、坂田の業績を記念するとともに、科学史研究へ資料提供できるよう整理保存している。

坂田史料はすでに、資料目録第一集、第二集、蔵書目録が作成されており、史料室 URL より目録を見ることが出来る。史料室に保存されている史料は、この目録に登録済みの保存史料と映像・音声・写真資料と、その他に目録外資料、平和活動資料、坂田関係図書類、E研関係資料、湯川・朝永関係、坂田葬儀関係、所蔵物品などがあり、旧坂田史料室の資料棚とそこにあった各資料箱につけられた番号を基に整理されている。

資料目録第一集には、坂田の研究ノート、論文原稿、著作原稿、書簡などが、小川修三によって年度ごとに分類、整理されて登録され、坂田の研究業績だけでなくそこに至る過程、そして多くの著作や書簡から坂田の研究哲学、また科学者としての平和活動と坂田の平和への思い、日ソ、日中学術交流を切り開いた坂田の行動と信念などをうかがい知ることが出来る最も貴重な資料の目録となっている。ここに登録された資料はすでに電子化されており、希望者は閲覧可能である。次に資料目録第二集においては、日本学術会議とその中での原子核特別委員会と原子力特別委員会関係資料が登録されている。坂田は日本学術会議創立時から会員であり、原子核特別委員会と原子力特別委員会には委員長として長年尽力された。原子力の平和利用の問題に取り組み、また基礎物理学研究所など共同利用研究所の創設、巨大加速器施設の建設を含む日本の原子核物理将来計画において中心的な役割を果たされた。当時の坂田のこうした尽力と苦悩を知る資料が第二集には登録されている。その他に蔵書目録があり、坂田教授室に遺された書籍類が登録され、坂田の著作だけでなく当時、坂田居室に有った書籍類を知ることが出来る。

坂田史料室に収蔵されている資料の中には、未だ目録に登録されていない多くの貴重な

資料が存在する。このプロジェクトにおいて、未登録の多くの資料を整理し、データベース登録に加えた。目録外資料2群には、第二集登録以外の学術会議関係資料、素粒子論グループ資料などがあり、これらは、坂田が関係した学術会議の各委員会や素粒子論グループとしての動きについての資料となっている。また、平和活動資料群には、坂田の科学者としての平和活動・社会的活動を示す資料としパグウォッシュ会議、科学者京都会議、原水爆禁止問題、原子力平和利用、日中科学者交流、北京シンポジウムなど坂田が強く携わってきた活動の記録がある。その他に、坂田史料室所蔵の映像・写真、雑誌類、論文別刷、坂田の弟子たちとE研関係資料、所蔵雑誌類、葬儀資料など、全ての資料を整理、登録して保存している。

坂田記念史料室では坂田関係資料に加えて、名古屋大学物理学教室において同時期に活躍され、研究、教室運営においてお互いに協力し、影響し合ってきた、早川幸男（素粒子、宇宙物理学）と有山兼孝（物性物理学）が所有していた研究ノート、学術会議資料、教室会議記録なども所蔵している。

資料にはそれぞれ資料番号が付され、その番号付けは、史料目録第一集登録資料については、目録編集時に付された番号とその分類方法を用いている。

(年代 カテゴリー 形態 その中の番号) 分類記号

“年代”は西暦の下二桁

“カテゴリー”は以下の分類に従う。

- 01 原稿、手記、ノートブック、メモ、その他手書きのもの
- 02 印刷物（論文、別刷り、本、新聞、雑誌、およびそれらのコピー）
- 03 聞き書き、インタビュー（弟子のとった坂田講義ノートなど含む）
- 04 手紙類（送信受信、その他書簡コピー）
- 05 蔵書 06 記念品 07 その他

“形態”は所蔵資料の形態を示すためのものである。

- | | | | | | |
|----|----------|----|------------|----|--------|
| FL | ファイル・ノート | FF | 定型紙 | NB | ノートブック |
| RE | 論文別刷りなど | ME | メモ類 | ZC | コピー |
| TA | 音源 | OR | オリジナル、原著原稿 | | |

“分類記号”によって内容について付記している。

学術論文、研究メモ、計算、コロキウムノート：a

総合報告、解説：b 科学論、方法論：c

講義ノート：d 体制、政策、原子力：f

国際交流、会議：g 平和運動、科学者：h

随想、人物評、旅行記、私的事項など：i

大学、学部、物理学教室関係：j

例) 1955年の坂田研究ノート、その分類で2つ目の資料の場合

(55 01 NB 02) ac

と資料番号は付されている。

蔵書目録については、史料室書棚の書籍配列に従い、1番から順に番号が付され、書籍に番号ラベルが付けられている。また、坂田の死後に、史料室に収められた物、寄贈された物、作業のノート等は a-“番号”と番号付けされ、これらには紙ラベルの貼り付けはされていない。

それ以外の資料については、旧史料室の棚の配置と資料箱の順番により分類され番号が付されている。旧資料室の棚は、

- 棚 B-1 : 資料目録第一集の貴重資料を収めた棚
- 棚 A : 目録第二集、その他の坂田昌一関連資料が収められていた棚
 - A-2 : 日本学術会議関係 (原子核特別委員会、総合事務局報、など)
 - A-3 : 日本学術会議関係 (原子核特別委員会、長期計画調査委員会など)
 - A-4 : 平和関係 (Pugwash 会議、日中学術交流、原子力、原水禁など)
 - A-5 : 原子力関係雑誌類
 - A-6 : 日本学術会議関係 (学術会議資料など)
 - A-7 : 論文別刷、坂田へ送られたプレプリントなど
 - A-8 : 日本物理学会誌等、雑誌類
 - A-9 : 書簡類、原子力特別委員会資料 など
 - A-10 : 坂田昌一葬儀資料
 - A-11 : 早川幸男関係資料
 - A-13 : 日本学術会議関係資料、名古屋大学教授会資料など
- 棚 C : 主に蔵書と所蔵学術雑誌類が収められた棚
- 棚 D : 日本語科学雑誌類、送られてきたプレプリントなど
- 棚 E : 写真、色紙、額装資料など
- 棚 F : 旧展示棚下収納庫 素粒子論研究が収められていた
- 棚 G : 坂田家にあった坂田所有書籍の一部
- 棚 H : 坂田教授室物品類

その棚にあった資料はその棚番号を基に番号付けされている。その他に、小川により別の箱に年代別に整理された資料と有山兼孝関係資料などは、その資料箱の番号に基づき、B箱番号で表記した。箱番号は年代順に並んでいないが、それらの資料箱が保管されていた場所での番号付けに由来している。

史料室保存資料は上記の方法にて番号付けされ分類、保管されている。

史料出典：

史料室所蔵の資料は、坂田昌一の死後、名古屋大学坂田教授室に遺されていたものに加えて、信子夫人より寄贈されたものが主となっている。

第2次大戦中の名古屋空襲により坂田の自宅は焼失し、また、兵庫県御影町の旧居も焼失しており、戦前、戦中の資料の多くは失われてしまったため、坂田に関する資料は1932年のP.M.D. Diracの論文を書き写したノートが最も古く、それ以降、そして戦後から坂田の亡くなった1970年ごろまでの資料が主なものとなっている。

史料室概要：

坂田昌一は、1942年からその死去まで名古屋大学理学部物理学教室教授として在職した。坂田の死後、科学研究や社会的活動に関する資料を収集・保存することが企図され、その一つとして「物理学と方法」及び「科学者と社会」なる2冊の本が1972年に出版された。そして1973年名古屋大学理学部物理学教室は、坂田昌一の多方面に亘る多くの業績、活動を記録するために坂田教授室とそこに残された資料を保存する坂田記念史料室（SMAL）を設立した。

史料室において坂田昌一の遺稿・著作・諸資料、並びに名古屋大学物理学教室の諸史料を整理保存することで、学内外の科学史的研究に貢献すると共に、坂田昌一の数々の偉大な研究成果が現在の素粒子物理学に今も影響を与え、そしてその研究哲学、坂田研究室（E研究室）での教育は現在の名古屋大学に受け継がれて生きていることを伝えることが目的となる。

史料室の場所は、もともとの坂田教授室の場所から何度か移転し、現在は名古屋大学博物館サテライト ノーベル賞展示室の一角に位置し、坂田研究室で育った益川敏英、小林誠の2008年ノーベル物理学賞の原点が坂田昌一教授にあることを伝えるために、史料室所蔵の資料の一部を展示室にて展示している。

坂田記念史料室所在地

名古屋市千種区不老町 名古屋大学理学部 A 館 1 階（A102 室）

（2011 年 5 月末に名古屋大学工学研究科中央棟・素粒子宇宙研究棟（ES 館）2 階へ移転）

② 坂田記念史料室 URL

<http://www.eken.phys.nagoya-u.ac.jp/introduction/sakata/sakata-j.html>

資料の閲覧は、科学史研究に関する場合においては、閲覧請求により公開する。

また、一部資料はノーベル賞展示室の展示にてご覧頂ける。

③ 資料請求・閲覧利用連絡先

名古屋大学大学院理学研究科 物理学教室 坂田記念史料室

〒464-8602 名古屋市千種区不老町

連絡先：sakatashiryou @ eken.phys.nagoya-u.ac.jp

④ 史料大項目カタログ

資料群番号	資料群名	概要
SMAL-01	坂田記念史料室 資料目録 第一集	小川修三により分類、年度別に整理され、目録第一集に登録されたもの。遺稿、著作、研究ノート、書簡、新聞記事など（電子化済み）
B-1-1-1	坂田昌一資料 No.1 (1932年 - 1947年)	卒業論文、ノート、武谷への書簡、2中間子論論文原稿、疎開時のノート、第一回研究室会議挨拶、「物理学と方法」など
B-1-1-2	坂田昌一資料 No.2 (1948年 - 1956年)	新聞記事、武谷への書簡、研究日誌、コペンハーゲン滞在関係、研究ノート（坂田模型が生まれた瞬間のノート）など
B-1-2-1	坂田昌一資料 No.3 (1957年 - 1962年)	研究ノート、原子核特別委員会委員長報告、原子炉の安全性、論文原稿、科学者京都会議が開かれるまで、など
B-1-2-2	坂田昌一資料 No.4 (1963年 - 1972年)	中国学術代表団をむかえて、北京科学シンポジウム開会式における日本代表団長挨拶、「科学に新しい風を」、「素粒子論と哲学」「私の自然観」「第14回ソルベイ会議の思い出」など
SMAL-02	坂田記念史料室 資料目録 第二集	目録第二集に登録されたもの。 坂田宛通信、日本学術会議総会関係資料、原子核特別委員会関係資料、原子力特別委員会関係資料など

1) 坂田昌一宛て手紙類 (年代順)

- A-9-4-1 坂田昌一宛て手紙類 (1947-1966) 湯川から、野上より私信、サンパウロの武谷からの手紙など
- A-9-4-2 坂田昌一宛て手紙類 (1967-1970)

2) 日本学術会議 (SCJ) 総会関係資料

坂田昌一は日本学術会議創立以来 1970 年まで会員であり、学術会議諸活動の原動力となった原子核特別委員会、原子力特別委員会の委員として、後に委員長を引き継ぎ、1950 年代末から始まる日本学術会議の学術振興将来計画の中心的存在となった。

- A-6-4-1 日本学術会議 (1949-1951) 第 1-11 回総会議事録、資料綴
- A-6-4-2 日本学術会議 (1952-1954.1) 第 12-14 回総会議事概要、資料綴第 15 回欠、第 16 回総会資料綴
- A-6-4-3 日本学術会議 (1954.4-1955) 第 17-20 回総会議事概要、資料綴
- A-6-4-4 日本学術会議 (1956) 第 21, 22 回総会資料綴
- A-6-5-3 日本学術会議 (1957.1-4) 第 23, 24 回総会資料綴
- A-6-5-4 日本学術会議 (1957.10-1958.4) 第 25, 26 回総会資料綴
- A-6-5-2 日本学術会議 (1958.4-1958.10) 第 26 回総会資料、第 27 回総会資料綴
- A-6-5-1 日本学術会議 (1959) 第 28, 29 回総会資料綴
- A-6-6-1 日本学術会議 (1960) 第 30-32 回総会資料綴
- A-6-6-2 日本学術会議 (1961) 第 33, 34 回総会資料綴
- A-6-6-3 日本学術会議 (1962) 第 35-37 回総会資料綴
- A-6-6-4 日本学術会議 (1963.1-4) 第 38, 39 回総会資料綴
- A-6-1-4 日本学術会議 (1963.10-1964.4) 第 40, 41 回総会資料綴
- A-6-1-1 日本学術会議 (1964.10-1965.4) 第 42, 43 回総会資料綴
- A-6-1-2 日本学術会議 (1965.10-1966.4) 第 44, 45 回総会資料綴、第 46 回の 1 部
- A-6-1-3 日本学術会議 (1966.10-1967.4) 第 47, 48 回総会資料綴
- A-6-2-3 日本学術会議 (1967.10-1968.4) 第 49, 50 回総会資料綴
- A-6-2-1 日本学術会議 (1964.10,1970.4) 第 51, 56 回総会資料綴、第 52-54 回欠
- A-6-2-2 日本学術会議 (1969.10) 第 55 回総会資料綴、会員のしおり

3) 原子核特別委員会関係資料

原子核特別委員会は、1949 年 4 月 28 日に原子核研究連絡委員会として発足し、1952 年 6 月に特別委員会と改組された。坂田昌一は、初代委員長 朝永振一郎の後を引き継ぎ、1957 年 1 月 20 日より病に倒れる 1969 年 1 月まで委員長の職にあった。

A-2-1-1	資料東 1-3 (1951-1957)	1957 年より坂田委員長
A-2-2-1	資料東 4-7 (1958-1959)	広大理論研合併問題、関西原子炉など
A-2-2-3	資料東 8-10 (1960-1961)	基礎科学振興 5 原則 総会声明案など
A-2-1-2	資料東 10-18 (1962-1963)	原子核研究将来研究提案など
A-2-1-3	資料東 19-25 (1964)	南極問題など
A-2-1-4	資料東 26-30 (1965)	将来計画シンポジウムなど
A-2-1-4	資料東 31-33 (1966-1970)	将来計画シンポジウムなど

3-1) 原子核特別委員会附置将来計画小委員会 (SKS) 関係資料

A-2-2-2	資料東 1-2 (1959-1961)	原子核研究将来計画関係など
A-2-2-4	資料東 3-7 (1962)	政府へ申し入れほか
A-2-1-4	資料東 8-14 (1963-1969)	文部省へ、将来計画の今後など
A-2-2-7	原子核研究将来計画関係資料 (補遺)	

3-2) 原子核特別委員会附置素粒子研究所準備調査委員会 (SJC) 関係資料

A-3-6-1	資料東 1-3 (1960-1962)	高エネルギー加速器研究所の検討など
A-3-6-2	資料東 4-8 (1963-1964)	高エネルギー加速器準備委員会など
A-3-6-3	資料東 9-12 (1965)	素粒子研加速器の機種など
A-3-6-4	資料東 13-15 (1965)	電磁石・電源関係 WG など
A-3-5-1	資料東 16-18 (1965)	素粒子研究所の計画概要など
A-3-5-2	資料東 19-20 (1965)	素粒子研究所計画報告書
A-3-5-3	資料東 21-23 (1965)	巨大加速器基礎研究など
A-3-5-4	資料東 24-26 (1966)	陽子シンクロトロン基礎研究
A-3-5-5	資料東 27-30 (1966)	素粒子研究所計画報告書
A-3-5-6	資料東 31-33 (1966)	諸外国における高エネルギー物理学
A-3-5-7	資料東 34-37 (1967)	加速器・測定器シンポジウムなど
A-3-5-8	資料東 38-41 (1967)	各ワーキンググループ編成など
A-3-5-9	資料東 42-44 (1968)	素粒子研究に関する研究体制

3-3) 原子核特別委員会附置将来研究体制小委員会関係資料

A-3-6-5	資料東 1-3 (1961-1964)	総合研究機構と共同利用研究施設
A-3-6-6	資料東 4-8 (1965-1966)	素粒子研究所の研究体制についてなど
A-3-6-7	資料東 9-14 (1967-1968)	研究体制小委員会の案など

4) 原子力特別委員会関係資料 (1957年より坂田が委員長)

日本学術会議の下、原子力特別委員会の前身である第39委員会が、講和条約(1952)の発効により可能となった原子力研究に関する議論(茅・伏見提案)をうけ、1953年1月に発足した。その後、原子力平和利用の問題に対応するため第39委員会は原子力問題委員会となり、関連して放射線影響調査特別委員会も発足した。日本の原子力研究体制が整うのに応じて原子力特別委員会(委員長 伏見)が1955年に発足し、1957年より坂田昌一が委員長になった。1960年、原子力関係の3委員会は統合・整理され、坂田を委員長として原子力特別委員会となった。

A-9-4-3	資料東1 (1952-1954)	原子力問題委員会資料
A-9-4-4	資料東2 (1955)	国際原子力会議参加準備など
A-9-4-5	資料東3-4 (1956-1957.6)	原子力問題に関する懇談会など
A-9-4-6	資料東5-6 (1957.7-12)	関西研究用原子炉設置に関する資料
A-9-1-1	資料東7-8 (1958.1-6)	関西研究用原子炉設置について
A-9-1-2	資料東9 (1958.7-12)	原子力開発について政府に申し入れ
A-9-1-3	資料東10-11 (1959-1960)	原子力開発長期計画シンポジウム
A-9-4-7	資料東12-15 (1961-1963)	原子力潜水艦寄港に関する声明
A-9-4-8	資料東16-20 (1964-1969)	原子力開発利用長期計画の改訂

SMAL-03	坂田記念史料室蔵書目録	坂田教授室の蔵書目録として登録されている書籍など。一部に坂田没後に寄贈された関係書籍、史料室関係図書、ファイルなど含む。
---------	-------------	--

所蔵書籍の一部

113	物理学と方法論集1 (1972)	坂田昌一著作集 岩波書店
114	科学者と社会論集2 (1972)	坂田昌一著作集 岩波書店
115, 116	素粒子の探求 (1966)	湯川、坂田、武谷 勁草書房
117	科学と平和の創造 (1963)	坂田昌一著 岩波書店
118	自然科学辞典 (1949)	武谷三男 霞書房
119	現代学問論 (1970)	湯川、坂田、武谷 毎日新聞社
122	素粒子論の研究I (1949) - 中間子討論会報告 -	武谷三男 編 岩波書店
124	原子核及び宇宙線の理論 (1942)	湯川、坂田 岩波書店
125, 126	バーナル 科学の社会的機能	坂田、星野、竜岡 訳 勁草書房
127	新しい自然観 (1974)	坂田昌一 大月書店

128	原子物理学入門	坂田昌一 勁草書房
129	物理学と方法 (1965)	坂田昌一 素粒子論グループ
130	科学に新しい風を (1966)	坂田昌一 新日本出版社
132	平和時代を創造するために (1963)	湯川、朝永、坂田 岩波書店
133	思想 1963年1月号 文明における現代科学の位置	坂田、大槻 岩波書店
447	学問・思想の自由のために (1950)	羽仁五郎編 北隆館
485	核時代と人間 (1968)	坂田昌一責任編集 雄渾社
488	科学と平和の創造 (1963)	坂田昌一 岩波書店
723	理学部将来計画第7回 シンポジウム記録 (1969)	名古屋大学理学部
775	物理学と方法 (1947)	坂田昌一 白東社
776	坂田昌一科学哲学論文集 (1987)	巖濟慈
777	新基本粒子観対話 (1965)	坂田昌一
780	北京シンポジウムと京都の科学者達	序文 坂田昌一
785	物理学の方向 (1949)	湯川、坂田ほか 三一書房
786	近代物理学概論 (1954)	坂田、有山編 朝倉書店
REC-01	目録外資料1	現在、電子化保存されている資料の内、目録第一集、第二集、蔵書目録に登録されていないもの
B-1-3-1	目録外資料1	物理学教室憲章、新聞切抜き、坂田墓碑関係 など
REC-02	映像・音声・写真・色紙・物品	坂田記念史料室所蔵の映像、写真類、音声資料など
B-1-5-2	映像資料：DVDで保存	恩賜賞の坂田理論、フランス核実験に対するコメント、北京科学シンポジウム、など
E-22-1	写真・色紙等	坂田関係写真、北京科学シンポジウム、色紙など
B-1-5-3	音声資料	「兄弟対話」、「朝の訪問」、「現代の科学技術の人類史的意義」、富山大学祭講演科学者京都会議（竹原）、「私の古典」、原治語

E-22-2	額装色紙、その他	る、など 色紙額「兼聴則明 偏信則暗」、「科学者京都会議勉強会寄せ書き」、湯川和歌賞状・勲章：「勲二等瑞宝章」
C-16-6-1	写真コレクション 2	E 研集合写真、名駅にてローゼンフェルトを迎える、マルコフを囲んで、北京科学シンポジウム、素粒子国際会議、中間子論 30 周年、第 1 回科学者京都会議写真、ソ連訪問、E 研究室の雰囲気など
REC-03	目録外資料 2	坂田記念史料室所蔵資料の内、目録に登録されていない史料のリスト。
1)	日本学術会議関係資料・学術振興会資料	
A-2-4-4	日本学術振興会関係資料	流動研究員・奨励研究生事業実施世話人会他
A-3-1-4	物理学研究連絡委員会	委員会資料（1949 年～1965 年）
C-13-3-1	日本学術会議関係資料 BOX1	Annual Report（1960、1963）など
C-13-3-2	日本学術会議関係資料 BOX2	学術会議各種資料冊子（1950-1960）
C-13-4-1	日本学術会議関係資料 BOX3	学術会議各種白書、報告、資料冊子
2)	第 4 部会関係	
A-3-4-3	第 4 部会会議資料（1951-1964）	
A-3-4-1	第 4 部会会議資料（1965、1966）	
A-3-4-2	第 4 部会会議資料（1967-1969）	
3)	運営審議会関係	
A-3-1-2	運営審議会記録（第 11 回－第 114 回）	
A-3-1-3	運営審議会記録（第 115 回－第 311 回）	運営問題特別委員会資料含む
4)	長期計画委員会関係	
A-3-2-7	長期計画調査委員会資料（1955 年－1958 年）	
A-3-2-8	長期計画調査委員会資料（1959 年－1962 年）	
A-3-2-9	長期計画調査委員会資料（1963 年－1969 年）	
5)	原子核特別委員会	
A-6-3-2	宇宙線研究者会議資料（1963 年－1969 年）	
A-6-4-2	核研電子シンクロトロン実験計画	委員会資料
A-6-4-3	原子核談話会・核研準備小委員会	原子核談話会通信など

- 6) 原子力特別委員会
- A-2-3-6 原子力特別委員会関係資料Ⅰ 放射線影響部会議事録など
 - A-3-3-3 原子力特別委員会関係資料Ⅱ 力特委小委員会資料 など
 - A-3-1-1 原子力特別委員会関係資料Ⅲ 関西原子炉について など
 - A-2-3-2 原子力特別委員会関係資料Ⅳ 放射線調査特別委員会 など
 - A-2-3-6 原子力特別委員会関係資料Ⅴ 放射線影響部会関係資料 (66、67)
 - A-7-1-4 原子力委員会資料 学術会議への請願、1952年－1958年
 - A-7-1-1 原子力委員会資料 1960年－1965年
 - A-7-1-3 名古屋大学原子力委員会資料 1957年－1968年
 - A-6-1-5 国際原子力会議 原子力平和利用国際会議
- 7) 学問思想の自由保障委員会、
- A-3-3-5 学問・思想の自由保障委員会資料 問題状況、要望書など
- 8) 研究費委員会
- A-3-3-6 研究費委員会関係資料 会議記録、委員会報告など
- 9) 基礎物理学研究所
- A-3-3-9 基礎物理学研究所関係資料 (1952年－1959年)
 - A-3-3-1 基礎物理学研究所関係資料 (1960年－1963年)
 - A-3-2-3 基礎物理学研究所関係資料 (1964年－1966年)
 - A-3-3-3 基礎物理学研究所関係資料 (1967年－1968年)
 - A-3-3-2 中間子論30周年・素粒子国際会議 国際会議実行委員会資料、中間子論30周年記念講演(坂田)など
- 10) 原子核研究所、
- A-3-2-1 原子核研究所関係資料Ⅰ 高エネルギー研究計画委員会
 - A-3-2-2 原子核研究所関係資料Ⅱ 核研小委員会議事録 など
 - A-3-2-4 原子核研究所関係資料Ⅲ 低エネルギー専門委議事録
 - A-3-2-5 原子核研究所関係資料Ⅳ 1967年－1969年資料
- 11) 原子力研究所
- A-3-3-4 日本原子力研究所関係資料 原研資料、CP-5問題白書など
- 12) 学術審議会
- A-3-6-8 学術奨励審議会資料
- 13) 人文社会科学振興特別委員会
- A-3-2-6 人文社会科学振興特別委員会資料 研究体制委員会議事録など
- 14) 共同利用研究所協議会
- A-3-6-8 共同利用研究所協議会関係資料 共同研究協議会シンポジウム議事など

- 15) 総合事務局報
- A-2-4-6 総合事務局報冊子 (1961 - 1965、1967.3-5)
 - A-2-4-5 総合事務局報冊子 (1966 - 1968.4)
 - A-2-4-7 総合事務局報冊子 (1969.2-5, 1970.10-11, 1970)
 - A-2-4-8 総合事務局報冊子 (1967.6-8, 1969.6-11, 1970.1-8)
- 16) 素粒子論グループ
- A-2-3-1 素粒子論グループ事務局報 1956年～1965年度 欠1959年
 - A-2-3-4 素粒子論グループ事務局報 1966年～1969年度
- 17) KJR
- A-2-4-1 KJR ニュース (素粒子論グループ KJR) 1954年～1968年小冊子、ソ・米核兵器実験再開をめぐる、コールドターホール改良型発電炉の安全性について、
- 18) 高エネルギー同好会
- A-3-6-8 高エネルギー同好会関係資料 素研準備調査委員会議事録など
- 19) 日本物理学会
- A-3-4-4 日本物理学会関係資料 委員会議資料 (1960年 - 1968年)
 - A-3-4-5 地方大学問題ニュース 金沢、東北
- 20) その他
- A-6-3-1 宇宙空間研究特別委員会資料 宇宙空間科学の振興に関する資料
 - A-3-5-10 その他委員会資料 体制小委員会 (1963-1964)、高エネルギー将来計画資料、基礎科学小委員会 など
- REC-04 名古屋大学物理学教室会議録
- C-17-2-1 教室内会議 (北京シンポジウム) 名古屋大学での会議、報告などの資料
 - C-17-2-2 理学部教授会資料 北京シンポ、中国学術代表団来学 など
 - B1(BOX1) 教室運営関係資料 大学院設置に関する記録、学報など
- REC-05 平和活動
- 1) パグウォッシュ会議
- A-4-1-1 パグウォッシュ会議 1 パグウォッシュ第1回会議声明など
 - A-4-1-2 パグウォッシュ会議 2 科学者京都会議関係資料
 - A-4-1-3 パグウォッシュ会議 Proceedings 第2回、第3回会議 Proceedings
 - A-4-1-4 パグウォッシュ ニュースレター Vol.1-6, Proceedings (regional 会議)
 - A-4-1-5 パグウォッシュ会議 3 ラッセル声明、リンダウ宣言、京都会議

		声明、第7回、10回会議声明、第7回－ 10回会議資料
A-4-1-6	PUGWASH（冊子） 1967	J. Rotblat チェコ科学アカデミー
A-4-1-7	Documents of 3rd Conf.（冊子） 1958	第3回会議報告集 オーストリア
A-4-1-9	Proceedings of 13th Conf. 1964	第13回会議 チェコスロバキア
A-4-1-10	Scientists in the quest for Peace	J. Rotblat, MIT press
A-4-1-11	Proceedings of 14th Conf. 1965	第14回会議 イタリア
A-4-1-12	Proceedings of 15th Conf. 1966	第15回会議 エチオピア
A-4-1-13	Proceedings of 16th Conf. 1966	第16回会議 ポーランド
A-4-1-14	Proceedings of 17th Conf. 1967	第17回会議 スウェーデン
A-4-2-4	パグウォッシュ会議 4	声明草稿、第5回 Proceedings 他
A-4-3-3	第3回パグウォッシュ会議	湯川・朝永・坂田声明、ラッセル・アインシュタイン声明、パグウォッシュ声明 要訳 等
A-4-3-4	パグウォッシュ会議 5	パグウォッシュ声明の SCJ 支持など
2)	原水禁、世界平和評議会	
A-4-2-2	原子力、原子炉、原水禁	原子力関係冊子、雑誌など
A-4-2-3	原水協関係	第3,4回原水爆禁止世界大会関連
A-4-4-1	原水禁、世界平和評議会	愛知県原水協 など
3)	日中学術交流・北京シンポジウム	
A-4-3-1	北京シンポジウム 1964	北京科学討論会論文集など
A-4-3-2	訪中、日中友好 1	北京シンポジウム報告書など
A-4-3-6	訪中、日中友好 2	1957年日中代表団公式記録（小川）
A-4-3-7	日中学術交流 1964年	北京シンポジウム、ニュース など
A-4-4-2	日中学術交流 1956年～	日中物理学交流に関する報告等
A-4-4-3	日中学術交流 1964年～	66、68年北京シンポジウム、訪日代表団
A-4-4-4	北京シンポジウムアルバム 1964年	
A-4-4-5	日中学術交流 1966年～	66、68年北京シンポジウム
A-4-4-6	北京シンポジウム参加論文	
A-4-4-7	北京シンポジウム関係資料	1964年北京科学シンポジウム報告書
4)	平和活動	
A-4-3-5	平和活動	声明（湯川・朝永・坂田）、京都会議のよ びかけ（湯川・朝永・坂田）、声明案原稿 など

REC-06 坂田昌一著書・著作

雑誌、書籍になった坂田の著作所蔵目録
以外の書籍雑誌

所蔵書籍・雑誌の一部

- | | | |
|--------|-----------------------|-------------------------|
| G13-01 | 物理学の方向 (三一書房) | 「現代物理学の主流素粒子を追う人々」坂田 |
| G13-02 | 学問・思想の自由のために (北隆館) | 「現代物理学の発展とその環境」坂田 |
| G13-03 | 原子物理学の現状 | 佐賀県立武雄高校物理研究班 |
| G13-04 | 自然 1951年4月号 | 座談会「仁科先生を偲んで」 |
| G13-05 | 自然 1951年5月号 | 「湯川理論展開の径路」坂田 |
| G13-06 | 自然 1953年1月号 | 「原子力問題と取り組む」坂田 |
| G13-07 | 街のパンフレット 1953年2月 | 「科学放談 原子と生活」坂田 |
| G13-08 | 日本の原子力問題 (理論社) | 「広い視点に立って」坂田 |
| G13-09 | 図書 65号 昭和30年2月 | 「アンデルセンの国を旅して」坂田 |
| G13-10 | 原子物理学入門 (NHK 教養大学) | 坂田昌一 |
| G13-11 | 二十世紀の思潮 (NHK 新書2) | 「科学」坂田 |
| G13-12 | 荷役と機械 1955年11号 | 「原子力と人類の将来」坂田 |
| G13-13 | 科学通報 1956年7 | 「国際科学交流 日本理論物理学的発展現況」坂田 |
| G13-14 | 自然 1956年2月号 | 「ボーア先生の周辺」坂田 |
| G13-15 | 科学 1956年4月号 | 「座談会 研究費と研究体制」 |
| G13-16 | 科学朝日 1959年1月号 | 「原子科学者とウィーン宣言」坂田 |
| G13-17 | 科学 1959年1月 | 「パグウォッシュ会議をめぐって」 |
| G13-18 | 自然 1959年7月 | 「原子力基本法厳守に関する討論」 |
| G13-19 | 世界研究 1960年 Vol.2 No.3 | 「世界平和と科学者の責任」坂田 |
| G13-20 | 教育評論 1960年3月 | 「科学時代と人類」坂田 |
| G13-21 | 科学 Vol30 No.2 1960 | 「素粒子の統一模型」坂田 |
| G13-22 | 物理学会誌 1960年6 | 「日本物理学会の脱皮を望む」坂田 |
| G13-23 | 科学読売 1960年11月号 | 「日本と欧州・二つの素粒子論対決 坂田一町田」 |
| G13-24 | 東海テレビ 台本 | 「この道ひとすじに 坂田昌一」 |
| G13-25 | 科学 1961年4月 | 「座談会 素粒子論開拓の道」 |
| G13-26 | 通運読本 時代の登音 1961 | 「原子力と人類の将来」坂田 |
| G13-27 | 世界 200号 1962年8月 | 「(科学者京都) 会議が開かれるまで」 |
| G13-29 | とちぎ警友 126号 | 「宇宙時代と原子力の将来」坂田 |
| G13-30 | 日本の原子核 | 「将来計画のめざすもの」坂田 |

G13-31	自然 1964 年 11 月	「北京科学シンポジウムの印象」坂田
G13-32	自然 1964 年 12 月	「北京科学シンポジウムの印象」坂田
G13-33	思想 1964 年 12 月	「北京科学シンポジウム雑記」坂田
G13-34	新基本粒子観対話	坂田昌一
G13-35	紅旗 1965 年 6 月	「新基本粒子双的対話」坂田
G13-36	平和時代を創造するために (岩波)	湯川、朝永、坂田
G13-37	国語通信 1966 年 4 月	「科学の現代的性格と現代国語」坂田
G13-38	世界 1966 年 11 月	「中国の素粒子観と素粒子論科学に新しい風」坂田
G13-39	ニュースレター Vol.1 No3 1966	「ウィーン宣言のこと」坂田
G13-40	PHP 1966No.212	「湯川博士と朝永博士」坂田
G13-42	12 回創美 1967 年	「闘う精神について」坂田
G13-43	核時代を超える (岩波新書)	湯川、朝永、坂田
G13-44	大学村だより 第 3 号 1968 年	「野尻とスイス」坂田
G13-45	名古屋大学理学部 25 年小史	「まえがき」坂田
G13-46	サントリー記念帳 No.7	
G13-47	現代学問論 (勁草書房)	湯川、坂田、武谷
G13-48	学士会会報 1970 年 - 4	「第 14 回ソルベイ会議の思い出」坂田
G13-49	Reminiscences of the XIV-th Solvay Congress	Shoichi Sakata
G13-50	自然 1971 年 1 月	「中間子論の 30 年」坂田
G13-52	科学 1971 年 3 月	「私の古典 エンゲルスの自然弁証法」
G13-54	中国画報 1973 年 5 月	「北京科学シンポジウムにおける坂田氏と周培源氏」
G13-55	新しい自然観 (大月書房)	坂田昌一
G13-56	原子物理学入門 (勁草書房)	坂田昌一
G13-57	SHOICHI SAKATA Scientific Works	
G13-58	自然 1981 年 11 増刊 追悼特集	「湯川秀樹博士 人と学問」
G13-59	顕彰録対中ソ外交物故功労者記念碑	
G13-60	人間天気図 斎藤信也 (朝日新聞社)	「坂田昌一」
G13-S-1	岩波講座 現代 2 科学・技術と現代 「現代科学・技術の人類史的意義」	坂田
G13-S-2	科学と平和の創造 (岩波書店)	坂田昌一
G13-S-3	素粒子の本質 (岩波書店)	坂田昌一
G13-S-4	物理学と方法 論集 1	出版関係者署名あり

G13-S-5	科学者と社会 論集 2	出版関係者署名あり
REC-07	坂田氏関係記事を含む書籍雑誌類	雑誌、書籍に記載された坂田関係記事所蔵目録以外の書籍雑誌
	所蔵書籍・雑誌の一部	
G10-03	人物天気図 (朝日新聞社) 1950 年	
G10-05	家庭よみうり 1954 年 5 月	「わたくしの顔」坂田写真
G10-09	国際写真通信 1958 年 7 月	「学問に生きる坂田昌一」家族写真
G10-10	毎日グラフ 1958 年 10 月 26 日	「戦争の絶滅に世界の頭脳集まる」
G10-11	人物花壇 好きなもの (講談社)	「若人の新鮮さ」坂田昌一
G10-12	中央公論 1960 年 5 月号	「創りだす日本人」日下実男 坂田モデル、名古屋モデルについて。“只野凡児さん”について記載
G10-13	日本人物画 (オリオン社)	科学の顔 坂田昌一
G10-16	図書 12 1970 年	「凡児さんとゴム風船」朝永振一郎
G10-17	日本物理学会誌 Vol.25 No.12	「坂田昌一博士の業績」湯川秀樹
G10-18	故坂田昌一教授理学部葬 弔辞	
G10-20	世界 1971 年 1 月	「坂田昌一氏追悼」湯川秀樹
G10-22	日本物理学会誌 1971 年 3	「坂田昌一教授のおもいで」
G10-25	週刊朝日 1972 年 6-9	「日中学者に通い合った男のあつい友情郭沫若氏と坂田昌一氏の場合」
G10-27	人民中国 1973 年 1 月	「わすれがたい友情」周培源
G10-29	医療と人間と 1974 年 4 月	「夫・坂田昌一の闘病生活」坂田信子
G10-31	続 風貌 (講談社)	「P75 坂田昌一、武谷三男」
G10-36	国語教育法 1981 年	「要約の練習課題に収録」
REC-07	坂田史料室所蔵雑誌類	坂田教授室に有った雑誌類
	所蔵雑誌の一部	
C-18-1	Physicalische Zeitschrift der Sowjetunion	ソ連にて製本された物 貴重
C-18-3	Nature Vol.131-148	
A-5-3	Scientific Papers of the Institute of Physical and Chemical Research	No.899-1156
A-8-3	Proceedings of the Physico-Mathematical Society of Japan	Vol.17-26

D-21-1	Journal of the Physical Society of Japan	Vol.2 – 27
A-8-3-20	日本数学物理学会誌	Vol.9 – 17
	日本物理学会誌	Vol.1-26
D-21-3	自然	Vol.3-Vol.24
A-8-1	科学	～ Vol.39
F	素粒子論研究	Vol.0 Vol.1-42
A-8-2-1	物理学史研究	Vol.1-5
A-8-1-4	科学史研究	2号 –
A-5-4	各国原子力情報、原子力関係資料、 原子力調査時報、原子力情報、 原子力内外情報など	
A-5-1	原子力海外事情	Vol.1-11
A-5-2	原子力国内事情	Vol.1-11
A-6-5	日本学術会議月報、日本学術会議ニュース	
A-6-4-9	原子力シンポジウム報文集 第1, 2, 3回	
REC-10	坂田史料室所蔵 論文リプリント類	坂田の論文別刷、E研関係者の論文、坂田へ送られてきた論文別刷、プレプリントなど
A-7-3-1	坂田所有の論文、プレプリント	Pauli、Heisenberg、Oppenheimer、Chew 関係論文、Bohr 関係資料、Rosenfeld、 T.D.Lee 論文、坂田論文別刷、武谷三男論 文別刷、南部陽一郎関係論文 他 その他、論文別刷、プレプリント類の束、箱
REC-11	目録外資料3	
C-16-5-1	書簡類ファイル1	資料目録第二集登録以外の書簡
A-9-6-2	書簡類ファイル2	資料目録第二集登録以外の書簡、朝永よりノーベル賞の報告
C-16-5-4	書簡類ファイル3	中学生からの質問「死の灰」坂田講演について、中学生への回答原稿、木庭の手紙など
A-9-3-4	坂田氏資料 1	位記（従三位）、論文コピーノートなど
A-7-3-2	坂田氏資料 2	量子力学講義ノート（岐阜大学用）、坂田

		論文別刷りなど
A-7-3-5	坂田氏資料 3	仁科記念財団設立関係、コペンハーゲン国際会議出席関係、中日文化賞賞金袋
A-7-4-2	坂田氏論文別刷束	
A-7-3-3	坂田史料箱	山田英二卒論、河辺六男卒論、周からの手紙、名大公募への応募、場の理論研究会、坂田国際会議出席関係資料、日本学術会議関係 など
A-4-2-1	大学関係、学術研究会議など	
A-4-2-2	科学者の平和活動に関する資料	日本学術会議の声明、坂田の手紙原稿、素粒子論グループ声明、第10回パグウォッシュ会議声明訳、ソ連政府声明について討議KJR、ゲッチンゲン宣言全文、ゲッチンゲン宣言への支持、パグウォッシュ会議声明支持 など
C-16-5-2	第14回高エネルギー物理学国際会議とPugwash会議出席の旅費申請	
C-16-5-3	1956年ごろの書簡、メモ、名刺	ソ連、中国訪問時の資料
C-16-5-6	坂田氏本人の名刺箱	
C-16-5-7	名刺箱に入っていた書簡	木庭の手紙「日中学術交流の下準備（北京にて）」、日中交流準備会からの手紙コピー、ラッセル声明支持のよびかけ など
C-16-5-8	書簡類（年賀、greeting card）	
D-21-6-1	学生レポート（量子力学）	
A-9-3-5	Cinquantenaire du Premier Conseil de Physique Solvay 1911 Bruxelles 1961	第14回ソルベイ会議写真含む
A-9-3-6	Cinquantenaire de l'Institut International de Chimie fonde par Ernest Solvay 1913 Bruxelles 1963	ソルベイ会議写真
SMAL-04	小川により年度別に整理された資料	小川修三により年別に整理された坂田資料コピー、新聞切り抜き、など。主に、目録第一集に登録された資料のコピーで、

- 新聞切り抜きや雑誌記事などは現物であり、この中だけにしかない資料も多く存在する。
- B17(BOX17) 坂田昌一氏資料 (1933-1947) 新聞切り抜き「湯川粒子発見まで」甲南、「研究室会議の設立」学生、「2 中間子論完成」科学文化、「名古屋の旅から 武谷」民報、「2 中間子論」毎日、「理論物理学のトピック」中日など
- B22(BOX22) 坂田昌一氏資料 (1948-1952) 新聞切り抜き「非凡な只野凡児」朝日、「湯川博士と私」朝日、「学士院賞に想う - 賞金でピアノを」新東海、「書齋の顔」中日など
- B24(BOX24) 坂田昌一氏資料 (1953-1956) 新聞切り抜き「国際理論物理学会に望む」朝日、「書齋拝見」朝日、「ただ一度の幸」朝日、「世界平和名古屋会議で演説」中日、「コペンハーゲンにて」京都、「デンマークとボーア博士」、「絵のような美しさコペンハーゲン」毎日、「二つの原子力利用」河北、「アンデルセン」朝日、「北欧通信」、「ヨーロッパを旅して」朝日など
- B26(BOX26) 坂田昌一氏資料 (1957-1961) 新聞切り抜き「ゆっくりいそげ」西日本、「無題」ちくさ、「素粒子論グループ声明」、「科学者の友情実る」毎日、「坂田声明をめぐって」中部日本、「素粒子の成り立ちを解明」朝日、「名古屋模型を発表」日経、「話題の名古屋モデルとは」朝日、「ローゼンフェルド博士をむかえて」中日、「ほしい大型加速器」毎日など
- B25(BOX25) 坂田昌一氏資料 (1962-1966) 新聞切り抜き「民主的な研究室」朝日、「ボーア先生を思う」朝日、「世界の学者が反対」大学、「パグウォッシュ会議にて興奮」朝日、「中国学術団をむかえて」朝日、「坂田氏の研究態度はどの点ですぐれているか?」、「坂田昌一」中日、「科学者京都会

B19(BOX19)	坂田昌一氏資料 (1967-1970)	議が声明」朝日など 新聞切り抜き「歴史の忘却、英知の退廃を克服せよ」東風、「物理学会の大損失湯川秀樹」、「坂田昌一さんのこと 朝永振一郎」など
B18(BOX18)	坂田昌一氏資料 (1971-1979)	新聞切り抜き「坂田論集」読売、「坂田昌一 藤本陽一」毎日 など
REC-12	湯川秀樹、朝永振一郎 他 関係資料	坂田史料室に保存されている、目録に登録されていない、湯川、朝永関係資料、論文、雑誌、新聞記事など
A-9-2-4	湯川・朝永関係論文 1	Nishina Kinen Zaidan '66、湯川、朝永論文別刷、素粒子論序説 イワネンコ 対訳など
A-9-2-5	湯川・朝永関係論文 2	朝永の手紙コピー、朝永 中間子討論会原稿、湯川論文原稿コピー、湯川、朝永の論文別刷りなど
EKEN-02	E 研究室関係資料	
C-16-6-3	E 研のファイル	「小此木 Q 一郎氏の話」(小此木久一郎他による E 研の歴史を語る会の記録)、E 研研究室員年表 (1942-1954) E 研研究室員年表 (1955-1957) 等
C-16-6-4	E 研関係資料	教室憲章、居室表 (1968)、D 論審査報告、北大学生からの感想文、誓いのことば (益川結婚式にて)
A-7-2-3	E 研関係者の論文等	E 研学生卒業論文、田中正論文原稿、中川昌美論文原稿など
E-22-2	E 研忘年会寄せ書き	1955 年、1968 年
SMAL-06	坂田昌一氏葬儀関係	
A-10-4-1	坂田氏葬儀記録 1	
A-10-4-2	坂田氏葬儀関係 2	弔電、名簿など
A-10-4-3	坂田氏葬儀関係 3	坂田昌一死去の新聞切り抜きなど

SMAL-08	坂田記念史料室所蔵物品	坂田教授室内にあった物品、旧坂田史料室で展示していた物
H-01	坂田教授 机	
H-06	額 原子核研究所より寄贈	日本で最初に作られた人工中間子
H-12	旧坂田史料室 展示棚	恩賜賞メダル、勲二等瑞宝章、2 中間子論 25 年記念祝賀会、バートランド・ラッセルからの手紙 等

⑤史料例

資料番号	項目名	備考
(33 01 NB 01)	坂田卒業論文「原子核ノ理論ニ就テ」1933 年 3 月	(原本所蔵)



蔵書 113 物理学と方法 論集 1 (1972) 坂田昌一著作集 岩波書店
論集 1 に収録された資料

I 物理学と方法

(47 02 ZC 04)	1. 理論物理学と自然弁証法 (潮流 1947 年 10 月号)	B17-031
(46 02 ZC 04)	2. 原子物理学の発展とその方法 (自然科学 1947 年 2 月号)	B17-037
(59 02 ZC 06)	3. 量子力学の解釈をめぐって (科学 1959 年 12 月号)	B26-066 A-7-4-2-23
(61 02 RE 01)	4. 新粒子観対話 (日本物理学会誌 1961 年 4 月別冊)	B26-078
	中国語訳 (65 02 RE 04), G13-34, 紅旗 1965 年 6 月	G13-35

II 中間子理論の展開

(46 02 OR 01)	5. 湯川理論発展の背景 (自然 1946 年 8 月号)	
B22-042	6. 中間子理論研究の回顧 (真理の場に立ちて 毎日新聞社 1951 年刊)	
B22-002	7. 原子核物理学の形成過程 (物理学の方向 三一書房 1949 年)	G13-01
	8. 付録	

- (39 02 RE 01) 8-1. 素粒子の相互作用の理論 (日本数学物理学会誌 1939 年 13) B17-6-3
別刷: A-7-3-1-09-09, A-7-3-3-02-1
- (42 01 WP 01) 8-2. 中間子と湯川粒子の関係について (原稿所蔵) B17-009
坂田昌一、井上健 2 中間子論の論文
(日本数学物理学会誌 1942 年 16) 別刷: A-7-4-2-05, A-7-3-1-09-10

Ⅲ 素粒子論の方向

- (46 01 NB 04) 9. 素粒子論の方法 (原稿ノート所蔵) B17-021
- (47 02 ZC 05) 10. 素粒子論の現段階 (“素粒子論” 科学年鑑 1947 年) B17-032
- (48 02 ZC 03) 11. 素粒子の進歩 (“素粒子の進歩” 朝日年鑑 1949 年) B22-018
- (49 01 WP 03) 12. 素粒子の構造 (原稿所蔵) (基礎科学第 3 巻 1949 年) B22-027
- B22-047 13. 素粒子論の新展開 (読売新聞 1950 年 2 月 25 日) (50 02 ZC 04)
- B22-040 14. 素粒子論の方向 (物理学と方法 岩波書店 1951 年刊)
- (53 01 WP 01) 15. 相互作用の構造 (原稿ノート所蔵) B24-013
A-7-3-3-03-23
- (55 02 ZC 05) 16. マヨラナ・ニュートリノにまつわる迷信 (素研第 7 巻 9 号) B24-057

Ⅳ 素粒子の新概念をめざして

17. 「場の理論」の研究会から
- (55 01 WP 03) 17-1. 秋の研究計画の提案 (原稿ノート所蔵) 1955 年 B24-51, A-7-3-3-05
- (56 02 ZC 05) 17-2. 素粒子論の新しい展望 (素研 12 巻 3 号 1956 年) B24-087
- B24-070 18. 新粒子の複合模型について (日本語訳)
(坂田の手書き英文原稿の一部を所蔵) (56 01 WP 02)
原論文別刷 (56 02 RE 05), B24-95, A-7-3-2-2-01
- (61 01 WP 01) 19. 素粒子の新概念をめざして (英語論文原稿所蔵)
原論文別刷 B26-093, A-7-3-2-2-07
20. 「素粒子の模型と構造」研究会から
- (63 02 ZC 02) 20-1. 結びに代えて (素研 28 巻 2 号 1963 年), B25-026
- (65 02 ZC 07) 20-2. やまとたにはてしもなく (素研 31 巻 4 号 1965 年) B25-057
- (67 02 ZC 01) 20-3. 断章 (素研 35 巻 6 号 1967 年) B25-051
- B25-069-01 21. 新原子論の思想 (日本読書新聞 1966 年 7 月 18 日) (66 02 ZC 03)
- B25-052 22. 素粒子の新概念と複合模型の方法について (日本語訳原稿のコピー)
(手書き英文原稿所蔵) (65 01 WP 08)
原論文別刷 (65 02 RE 02), B25-10, A-7-3-2-2-03

- (65 01 ZC 01) 23. 素粒子論と哲学 (原稿所蔵)
(科学 1965 年 4 月) (65 02 RE 03), B25-034, A-7-3-2-1-07

付 歩みの中から

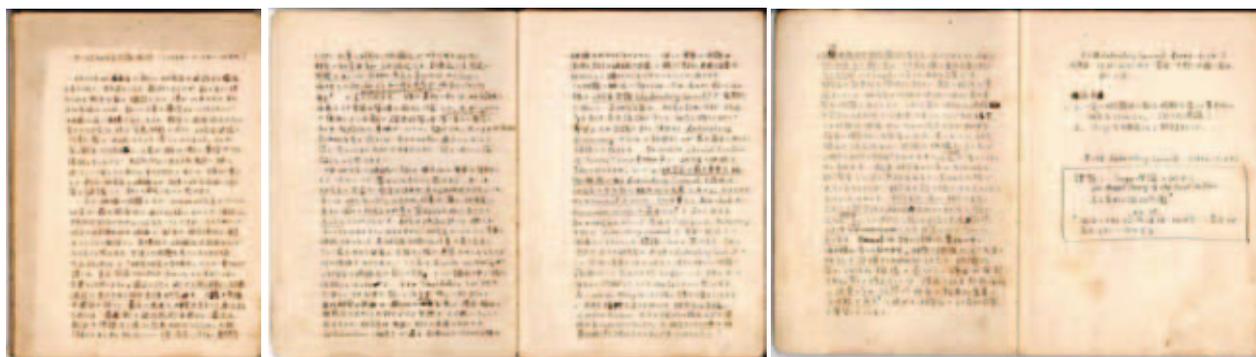
- (33 01 NB 01) 24. 原子核ノ理論ニ就テ (手書き卒業論文所蔵)
25. 書簡抄
- (37 04 WP 01) 一 坂田から武谷への書簡 1937 年 7 月 30 日 (書簡所蔵)
- (41 04 WP 02) 二 坂田から武谷への書簡 1941 年 4 月 30 日 (書簡所蔵)
- (48 04 WP 02) 三 坂田から武谷への書簡 1948 年 8 月 12 日 (書簡所蔵)
- B17-029-002 26. 科学と哲学 (“科学者から” 夕刊新大阪 1947 年 3 月 19-20 日)
- B22-050 27. わが師を語る (“自然の内奥へ” 夕刊新東海 1950 年 5 月 11 日)
- (50 02 ZC 08)
- B22-073 28. 現代科学の課題 (“序文” 物理学と方法 岩波 11951 年刊)
- B22-087 29. 狭まる自由の広場 (社会タイムス 1952 年 9 月 10 日) (52 02 ZC 02)
- B24-035 30. ただ一度の幸 (朝日新聞 1954 年 1 月 6 日) (54 02 ZC 01)
- B26-018 31. 京都から名古屋に移って (“無題” ちくさ 1958 年 6 月)
- (66 02 RE 02) 32. 中国の素粒子観と素粒子論 (世界 1966 年 11 月) G13-38, A-4-4-5-025
- (67 02 ZC 05) 33. 闘う精神について (創美 12 回 1967 年 1 月刊) G13-42, B18-004
- (68 01 ZC 01) 34. わが道 (原稿所蔵)
- (69 02 RE・TA 01) 35. 私の古典 エンゲルスの自然弁証法 (NHK 音声 CD 保存, 原稿所蔵)
(NHK FM 1969 年 7 月 30 日)
(科学 1971 年 3 月号) G13-52

蔵書 114 科学者と社会 論集 2 (1972) 坂田昌一著作集 岩波書店

論集 2 に収録された資料

I 科学の再建と研究の民主化

- (46 01 NB 01) 1. 研究室会議の提唱 第 1 回研究室会議挨拶 (原稿ノート所蔵)



- (46 01 NB 03) 2. 科学の再建 (原稿ノート所蔵)

- (46 01 NB 13) 3. 研究の民主化 (原稿ノート所蔵)
 B17-040 4. 研究と組織 (自然 1947 年 9 月)
 774, 775 5. 「物理学と方法」刊行にあたって (史料室蔵書 白東書房)

Ⅱ 学問と思想の自由のために 学術会議とともに (一)

- B22-023 6. 日本学術会議第一回総会に出席して (東大新聞 1949) (コピーのみ)
 B22-065-01 7. 学術会議から (“研究の自由を得ん” 石川新聞 1950 年 1 月 1 日)
 B22-044 8. 科学者と平和 (中部日本新聞 1950 年 5 月 22 日) (コピーのみ)
 477, G13-02 9. 学問と思想の自由のために (1950 年刊 北隆館)
 B22-078 10. 学術会議の反省 (中部日本新聞 1951 年 11 月 5 日) (51 02 ZC 03)

Ⅲ 新しい時代の科学

- B22-071 11. 近代科学を正視せよ (読売新聞 1950 年 3 月 19 日)
 (54 02 ZC 02) 12. 科学者の苦悩 (教養の書 35 1954 年刊) B24-034
 B26-010 13. 一つの観点 (育英通信 1957 年 10 月) (57 02 OR 04)
 A-3-2-7 14. 流動研究員制度について (長期研究計画調査委員会資料 1956 年)
 コピー (56 02 ZC 09), B24-088
 蔵書 467 15. 議論の前提となるべきこと (素粒子論グループ風雲の書 1956 年)
 蔵書 468 16. 「三反運動」の提唱 (各地から寄せられた意見 1956 年 12 月 25 日
 素粒子論グループ事務局) (56 02 ZC 11)
 G13-22 17. 日本物理学会の脱皮をのぞむ (日本物理学会誌 1960 年 6 月)
 コピー (60 02 ZC 08), B26-047

Ⅳ 原子力と取り組む 学術会議とともに (二)

- (52 01 ZC 01) 18. 日本にも原子炉を (原稿所蔵) (中日新聞 1952 年 5 月 12 日) B22-085
 (52 01 WP 03) 19. 原子力と取り組む - 第 13 回総会から - (原稿所蔵)
 (自然 1953 年 1 月) G13-06
 G13-08 20. 広い観点に立って (日本の原子力問題 1953 年刊 理論社)
 コピー (53 02 ZC 06), B24-015
 蔵書 752 21. 三原則と濃縮ウラニウム (自然 1955 年 7 月)
 B24-068 22. 科学亡国論 (朝日新聞 1956 年 1 月 19 日) (56 02 ZC 02)
 B26-024 23. 科学技術会議の設置と原子力の安全性をめぐって
 (思想 1958 年 7 月) (58 02 ZC 05)
 (59 01 ZC 01) 24. 原子炉安全調査委員会を何故やめたか

- コールダーホール改良原子炉の安全性をめぐって - (原稿所蔵)

(中央公論 1960 年 1 月) (60 02 ZC 03)

(60 01 ZC 02) 25. 原子炉の安全調査機構はこれでよいのか (原稿所蔵)

(日本学術会議ニュース 1960 年 2 月) (60 02 RE 01)

V 原子科学者の課題

B26-014 26. 科学の社会的役割 (学生と科学 1957 年刊 河出書房) (57 02 BK 01)

蔵書 663 27. 科学者 (現代思想 1957 年 岩波書店) B26-003

(52 02 ZC 04) 28. 平和憲法の擁護を (世界 1952 年 10 月号)

(54 01 ZC 01) 29. 私の憲法観 (世界 1954 年 4 月掲載予定稿: 未掲載)

B24-049, 065 30. 科学者の社会的自覚 ((新聞名不詳) 新聞掲載 1955 年 1 月 18 日、河北
新報 1 月 26 日)

(56 02 ZC 04) 31. 原子力と人類の将来 (世界 1956 年 4 月号)

(56 01 ZC 01) 32. 原子力について訴え ストックホルムにて (原稿コピー)

(世界平和評議会特別総会報告草案 1956 年 4 月)

G13-16 33. 原子科学者とウィーン宣言 (科学朝日 1956 年 1 月) (59 02 ZC 01)

(小冊子 ニュース No.1 1956 年 3 月 15 日) B26-56

蔵書 489 34. 放射能の下で科学者は何をすべきか (平和の思想 1968 年刊筑摩書房)
(科学朝日 1961 年 11 月号) D-21-5-5

(65 02 ZC 08) 35. いま何をなすべきか (世界 1965 年臨時増刊号)

アンケート回答 B25-054

(65 04 ** 01) 36. 第 14 回パグウォッシュ会議への電報 (電報原稿所蔵)

B25-016 の裏面 37. 「歴史の忘却」「英知の退廃」を克服せよ (東風新聞 1967 年 7 月 3 日)

(66 02 RE 01) 38. 平和の論理の創造と科学者の責任 (世界 1966 年 9 月号)

VI 基礎科学の振興と将来計画 学術会議と共に (三)

B26-083 39. 科学技術基本法より科学研究基本法を (小冊子 科学と平和 岩波)
(1961 年 11 月衆議院科学技術特別委員会後述)

(62 02 ZC 05) 40. 正気の科学技術政策を (思想 1962 年 11 月) B25-006

G13-30 41. 将来計画のめざすもの (日本の原子核 1963 年 10 月) (63 02 RE 02)

B19-006 42. 初心忘るべからず (日本物理学会誌 1967 年 Vol22, No.10) (67 02 RE 01)

B19-017 43. 人文・社会科学と自然科学との調和ある発展

(シンポジウム報告 1968 年 5 月 18 日 日本学術会議) (68 02 ZC 03)

Ⅶ 科学と国際協力

- B24-006 44. 国際理論物理学学会に望む (朝日新聞 1953 年 8 月 14・15 日) (53 02 ZC 08)
(53 02 ZC 10) 45. 国際理論物理学学会を終えて
(“違う欧米の行き方” 中部日本 1953 年 9 月 24 日)
(56 04 ZC 01) 46. 海外通信 (素粒子論研究 1956 年 12 巻 2 号)
A-7-2-2-27 47. 科学における国際協力 (思想 1961 年 1 月号) B26-076, (61 02 BK 01)
B25-016 48. 中国学術代表団をむかえて (朝日新聞 1963 年 12 月 10 日)
D21-3-12.001 49. 科学史をゆさぶる北京科学シンポジウム (自然 1964 年 6 月)
(64 01 WP 04) 50. 北京科学シンポジウムあいさつ (手書き原稿 所蔵)
(“北京科学シンポジウムの印象” 自然 1964 年 11・12 月) G13-31,32
(64 01 WP 03) 51. 科学に新しい風を (“北京科学シンポジウム雑記” 手書き原稿所蔵)
(思想 1964 年 12 月号) G13-32
(“科学に新しい風を” 1966 年刊 新日本新書) 蔵書 131
(素粒子論研究 別冊 1965 年 8 月) (所蔵)
(70 02 RE 01) 52. 第 14 回ソルベイ会議の思い出 (手書き原稿コピー)
(学士会報 1970 年 10 月 15 日) G13-048

Ⅷ 学問の論理と政治の論理

- B-19-023 53. 科学の論理と政治の論理 (朝日新聞 1968 年 4 月 8 日)
(手書き原稿コピー) (69 01 ZC 01)
蔵書 426 54. 現代科学の現代性 (岩波講座哲学「自然と哲学」1968 年)
蔵書 723 55. 大学の本質・学問とは何か (第 7 回理学部将来計画シンポジウム)

以上 論集に収録された資料

上記 論集収録資料以外の 年代別資料例

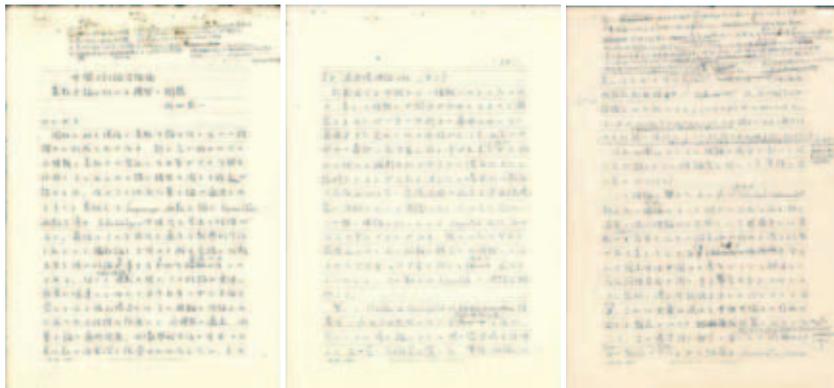
- (34 02 RE 01) 「On the Photo-electric Creation of Positive and Negative Electrons」
論文別刷 Nishina, Tomonaga and Sakata,
Suppl.Sci.Pap.of the I.P.C.R. 1934, No.17, pp.1-5
理研時代の論文。御殿場合宿での研究
参照 G10-016 図書 12 1970 年「凡児さんとゴム風船」朝永振一郎
(36 01 FL 01) 「陽電子の理論からの様々な結果に就いて (総合報告)」1936 年 5 月 28 日
大阪大学のノートで、手書き原稿
(37 01 WP 01) ボーア教授講演会関係資料 1937 年 4 月

坂田のノート、講演会案内、ニールス・ボーア教授紹介

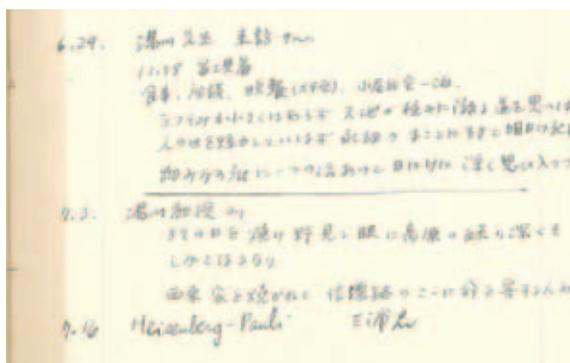
講演会の新聞記事 帝國大學新聞 4月19日、26日

東京日日新聞 5月1日

- (39 01 WP 06) 講義用ノート (量子力学) 139 ページ
- (42 01 NB 01) 講義用ノート (数理物理学 I)
常微分方程式ノ初等的解法 複素変数関数論 I
- (42 01 NB 02) 講義用ノート (数理物理学 I)
複素変数関数論 (続) 直交関数 2
- (42 01 NB 01) 講義用ノート (数理物理学 I)
常微分方程式ノ初等的解法 複素変数関数論 I
- (42 01 FL 01) 講義用ノート (II 関数の級数展開) 91 ページ
- (42 01 NB 03) 講義用ノート (量子力学)
- (43 01 WP 03) 「素粒子論に於ける模型の問題」中間子討論会講演原稿 1943 年 10 月

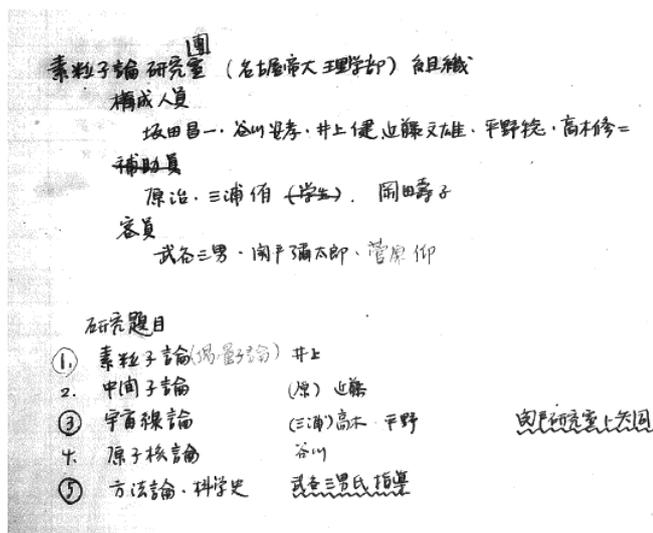


- (43 01 WP 05) 「素粒子論の方法」講演原稿 1943 年
- (43 01 WP 07) 「反中性粒子の消去理論に就いて」未完原稿 1943 年
- (43 01 WP 08) 「 β -崩壊理論」未完成原稿 1943 年
- (43 01 NB 02) 講義用ノート (原子核及宇宙線論)
- (44 01 WP 01) ウラニウム問題 第一回会合のメモ書き 1944 年 10 月 4 日
大阪水交社にて、出席者 (川村海軍大佐、荒勝、湯川、木村、小林、萩原、千谷、奥田、坂田 ほか)
- (44 01 NB 11) 疎開先 富士見へ湯川来訪 坂田疎開時のノート 1944 年 - 1945 年
研究日誌として日付入りで記入されている。特に、湯川来訪時に贈られた和歌の書き取りがあり、湯川との関係を物語っています。
(贈られた和歌短冊のコピーは展示中)



この和歌の話は、後日、中京新聞の記事“湯川博士と和歌”1948年5月7-8日に出ています。参照 B22-007, (48 02 ZC 02)

- (45 01 NB 10) 「知ハ力ナリ」富士見国民学校での講演原稿（疎開先）1945年10月
- (45 01 NB 17) 「科学者の警鐘」新聞記事原稿1945年 中部日新聞1946年3月11日
- (45 01 NB 18) 「素粒子論研究室組織」1945年のノートに記載



- (46 04 WP 05) 武谷への書簡 物理学教室憲章を作成したことを伝える 1946年
- (46 02 ZC 01) 素粒子論研究室会議議事録 坂田手書きノート 1946年
第1回 1月24日 参照 論集2 No.1 (46 01 NB 01) 挨拶原稿
第2回 3月27日、第3回 4月17日、
第4回 5月10日、第5回 5月28日
- B17-024 「研究室会議の確立へ」学生新聞切り抜き 1946年7月20日 (46 02 ZC 03)
- (46 01 NB 05) 「研究の民主化」1946年4月30日
民科・物理学者懇談会 - 現下に於ける物理学者の任務 - 講演原稿
- (46 01 NB 14) 「研究組織の民主化」名古屋大学新聞の原稿 1946年

- (46 01 NB 17) 「バーナル 科学の社会的機能 訳者の序」原稿
- (46 01 WP 03) 「素粒子論分科会第 1 回講演会 予稿 素粒子の相互作用の関連」原稿
- (46 01 WP 04) 「電子の自己エネルギー並に中性子と陽子の質量の差異について」
論文原稿 (坂田昌一、原治 科学 1947 年 2 月号)
- (47 01 WP 01) 「メソン会」未完原稿
- (47 01 WP 06) 「凝集力の場にともなう素粒子 (C 中間子) の性質」論文原稿
(原、龍岡、坂田) 1947 年 7 月 2 日
- (47 04 FF 01) 武谷への書簡 1947 年 8 月 3 日
イタリアの実験グループが異種の間接子を報告
2 中間子論を再検討していることを伝える
- (47 01 WP 07) 「中間子と湯川粒子の関係について」論文原稿
(坂田、井上 1947 年 9 月 23 日)
- B17-048-001 「湯川素粒子論に新展開 中間子に異質の 2 種」毎日新聞
1947 年 11 月 21 日切り抜き (47 02 ZC 08)
参照 2 中間子論 論集 1 No.8-2 (42 01 WP 01)、(47 01 WP 07)
- (48 02 ZC 01) 「素粒子論研究室速報」研究室における状況など
- (48 04 WP 02) 武谷への手紙 1948 年 8 月 12 日
湯川送別会に出席
C 中間子理論の方法論的な検討し秋の分科会での発表を提案
- (48 01 WP 02) 「素粒子論の方法」原稿 (井上、坂田、武谷) 1948 年
素粒子論研究 Vol.0 No.1
- B22-007 「湯川博士と和歌」中京新聞 1948 年 5 月 7、8 日 切り抜き (48 02 ZC 02)
参照 (44 01 NB 11) 疎開先へ湯川が見舞いに来訪 1945 年
- (49 04 WP 01) 湯川への手紙の下書き 1949 年
- (49 01 WP 03) 「湯川博士とノーベル賞」未完の原稿下書き
- B22-012 「湯川博士と私」朝日新聞 1949 年 11 月 5 日 (49 03 ZC 01)
湯川との関係、湯川と朝永の違い、疎開先への見舞いのことなど記載されている。
- (49 02 ZC 02) 素粒子論研究者の懇談会のお知らせ 朝永、坂田 1949 年 5 月 2 日
- (49 07 TA 01) 「朝の訪問」NHK ラジオ 1948 年 12 月 30 日放送の書き起こし
- (50 04 FF 03) 武谷への書簡 1950 年 7 月 27 日
朝永帰国の歓迎会についてと、湯川は帰国するかどうか
- (50 04 FF 05) 武谷への書簡 1950 年 12 月 15 日
日本学術会議で、坂田は当選したが、武谷は落選したこと

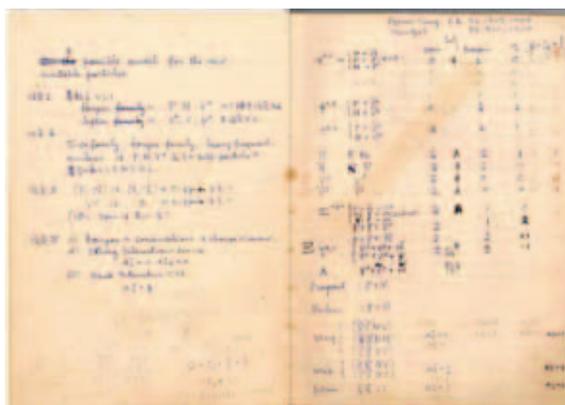
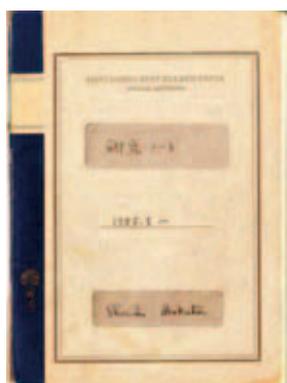
- (50 01 WP 01) 「混合場の方法と素粒子の構造」 講演原稿
- (50 01 WP 02) 「湯川理論の背景」原稿 1950 年
- (50 01 WP 03) 「原子物理学の発展と平和」講演原稿 1950 年
- B22-017 「学士院賞に想う 賞金でピアノを」夕刊新東海新聞切り抜き
1950 年 3 月 16 日 (50 03 ZC 02)
- B22-033 学士院恩賜賞に関する通知、招待状、式次第など
- B22-062 新聞切り抜き 学士院恩賜賞 関係記事 中京新聞、中日新聞 ほか
- (50 02 ZC 16) 「研究制度の確立」中部日本新聞 1950 年 10 月 2 日 コピー
- (51 01 WP 01) 「On the Structure of Interactions between Elementary Particle
And the Applicability of the Renormalization Theory」
(坂田、梅沢、亀淵) 論文下書きと原稿
- B22-077 「仁科先生の死を悼む 坂田昌一」名古屋タイムス 1951 年 1 月 13 日
- B22-083 「仁科博士逝く」(「おそかったか」急ぎ上京した坂田教授)
毎日新聞 1951 年 1 月 11 日 切り抜き
- (51 01 NB 01) 坂田ノート “My Trip to Copenhagen” 英文下書き 1951 年
- (51 04 FF 01) 坂田(鎌倉)から武谷への書簡 1951 年 3 月 13 日
コペンハーゲンへの渡航を計画する経緯が書かれている。
- (51 04 FF 04) 坂田(鎌倉)から武谷への書簡 1951 年 7 月 24 日
コペンハーゲンへの渡航を断念し、名古屋へ帰ることを伝える。
- A-7-3-5-11 ハイゼンベルグからの書簡 1951 年 3 月 10 日コペンハーゲン来訪のこと
- A-7-3-5-22 渡航説明書など、渡航許可申請書類
- A-7-3-5-24 E 研メンバーより鎌倉滞在の坂田昌一先生への激励文 1951 年 7 月 13 日
E 研究室の亀淵、高橋、後藤、中井、梅沢より
コペンハーゲン渡航できず待機中の坂田への激励文



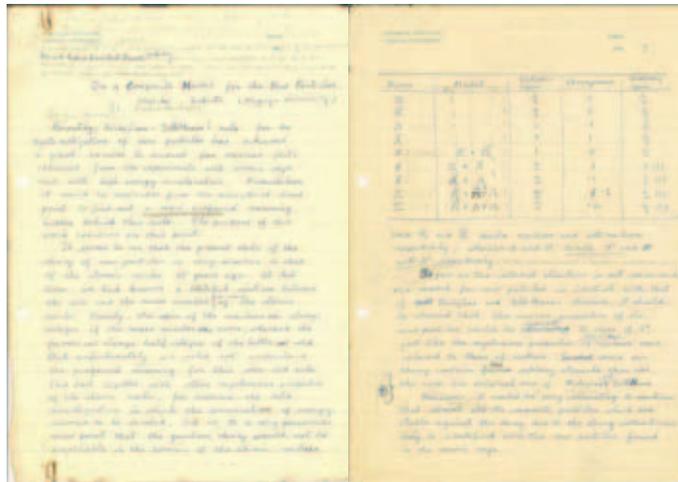
当時のE研究室メンバーと坂田の関係が伝わります。

“只野グループ” という記述あり

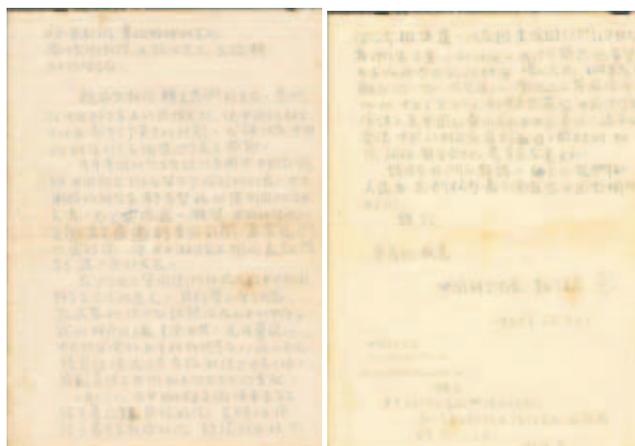
- B22-081-02 「旅券手続きの遅滞 坂田教授渡欧延期」名古屋大学新聞 1951年
経緯が記載されている
- (52 01 ZC 01) 「日本にも原子炉を」 中日新聞記事原稿コピー
B22-085 中日新聞 1952年5月12日
- B22-086 「夫妻対談」湯川秀樹・スミ子夫妻、坂田昌一・信子夫妻
第一放送 1952年9月2日放送 台本
- B24-009 「書齋拝見－見当らぬ装飾品」朝日新聞切り抜き 1953年10月22日
(53 02 ZC 12)
- A-7-2-4-01-01 国際理論物理学会終了後のインフォーマルミーティング 起し原稿
Prof. Bopp のレクチャー、討論会 参加者（坂田、Bopp、Proca、Heitler、
Møller、Wigner、湯川、朝永、渡辺、Salecker、Bloch、武谷、他）
1953年 関連資料 (53 02 R 03)、G13-51 自然 1954年3、4月
(自然には、Bopp レクチャーは含まれていない。)
- (54 02 RE 01) 世界平和者日本会議、名古屋会議資料 1954年4月17日
- B24-024-03 「世界平和者名古屋会議で決議文 坂田氏演説」中日新聞切り抜き
1954年4月18日
- (54 01 WP 01) 「Some Recent Theoretical Research Work in Japan」手書き原稿
コペンハーゲン滞在中の講演用 1954年
- (54 01 WP 02) Prof. Proca に招待された講義での話の原稿（未完原稿）
- (54 01 WP 03) 「On the Structure of Interactions Containing the Neutrino」
コペンハーゲンでの講演原稿 1954年
- (54 01 NB 01) 坂田研究日誌 1954年 コペンハーゲン滞在中のノート
- (55 01 WP 01) 原子力問題委員会報告のノート
- B24-048 「アンデルセン生誕150年の記念行事」朝日新聞記事 1955年3月5日
- (55 01 NB 02) 坂田研究ノート 1955年 坂田模型誕生の瞬間（計算書きが見られる）



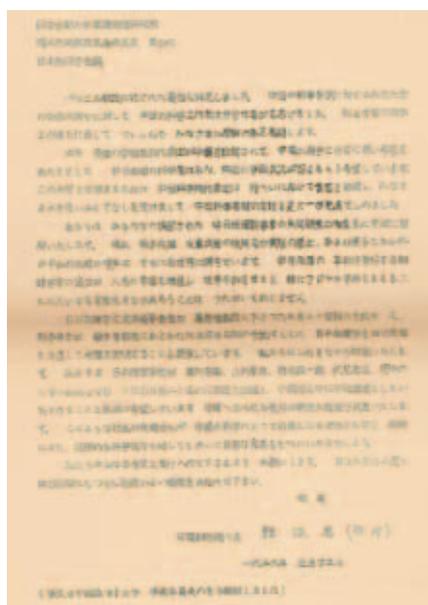
- (55 01 WP 09) 場の理論研究会（後半）スケジュールと坂田の研究会ノート
 (56 01 WP 02) 「On a Composite Model for the New Particles」論文原稿
 坂田模型論文原稿



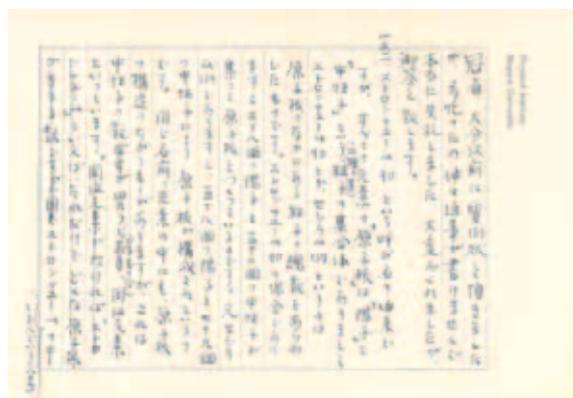
- (56 01 WP 03) 「On a Composite Model for the New Particles」北京での講演原稿 1956 年
 (56 01 FL 01) ソ連、中国歴訪時の講演原稿、メモ書き、ノート、日誌
 北京での講演原稿「A remark on the composite model for new particles」
 世界平和評議会出席（ストックホルム）から中国訪問までの日誌
 下書き原稿「Physicists in U.S.S.R.」
 メモ書き
 原稿「中国の印象」
 原稿「ソ連にできた宇宙線発生装置」
 混じりこみ資料（1954 年イギリス滞在中の日誌メモ、1955 年コペン
 ハーゲン滞在中の論文原稿「On the Nature of Neutrino」）
 (56 01 ME 01) 北京滞在中に郭沫若から預かった湯川、日本物理学会への手紙
 1956 年（所蔵資料は、坂田による写し）



A-4-4-2-3-8 郭沫若からの手紙 (56 01 ME 01) の日本語訳 (準備委員会)
1956 年 5 月 25 日



- B24-101 「日本における原子力の平和利用について」
「日本の科学者の原水爆反対運動について」原稿 1956 年
- SS0018 「研究室めぐり 名大理学部坂田研究室」1957 年 5 月新聞切り抜き
- B26-012 「原子の世界を語る」志摩高校第 4 回文化祭講演要旨
志高新聞 1957 年 12 月 28 日号 新聞切り抜き (57 03 ZC 03)
- C-16-5-4-07 新聞記事「死の灰現在までの実験で十年後に致死量 坂田教授が説く」
中部日本新聞 6 月 3 日 の記事について、静岡県袋井中学一年生から質問
の手紙
- C-16-5-4-08 中学生からの質問 C-16-5-4-07 に対して坂田からの回答文原稿
中学生の質問に対しても丁寧に回答原稿の推敲がされています。



1 ページ目 (3 ページの原稿)

- B26-015 「嵐の中の自己改革」(武谷三男・星野芳郎著「原子力と科学者」書評)
日本読書新聞記事 1958年3月17日 (58 02 ZC 02)
- (58 01 WP 02) 「Remarks on the Promotion of International Cooperation」
「一般的見解」日本語原稿 パグウォッシュ会議関係
- B26-020 原子力世界大会へ坂田出席の新聞記事 毎日新聞記事
1958年9月14日
- B26-019-01 「科学者の友情実る 理論物理学の大御所タム博士」毎日新聞
1958年10月30日
- B26-019-02 「気軽なおじさん ノーベル物理学賞のタム博士」毎日新聞
1958年10月30日
- B26-019-03 「ジュリオ・キュリーの死」週刊読書人 1958年8月25日号
- (59 07 TA 01) 「兄弟対談 明るい茶の間」NHK ラジオ 1959年8月12日放送 CD
- B26-052 「坂田委員が辞意」朝日新聞 1959年11月11日 切り抜き
英改良炉が安全との答申に責任が持てぬとして原子炉安全審査専門部会委員の辞意を表明
- B26-051-02 「安全に責任負えぬ 坂田教授が声明」中日新聞 1959年11月11日記事
坂田声明文要約
- B26-050 「英改良炉は果たして安全か 坂田声明をめぐって」中部日本新聞記事
1959年11月12日 唯一のレジスタンス坂田昌一教授
- B26-049-01 「坂田問題で会合」朝日新聞 1959年11月17日 切り抜き
(関連「コールドーホール改良炉の安全性に関する問題」陳述原稿
(59 01 ZC 01) 論集2、No.24 に収録)
- (59 01 ZC 01) 原子炉安全審査専門部会長 八木栄への意見書
(英改良炉坂田声明) 1959年11月7日
- (60 01 WP 01) 「声明書」原稿 日米安保による議会崩壊に対して 1960年5月26日
- (60 01 WP 02) 「声明」原稿 湯川秀樹の名前で坂田が書いたもの
日米安保条約批准で議会崩壊により、国会解散を求める
- (60 01 FL 02) 物理教室講演会 草稿 1956年12月11日など
- (60 01 WP 05) 「An attempt to the unified model of elementary particles」Abstract 草稿
(後に「A Unified Model of Elementary Particles」Maki, Nakagawa, Ohnuki and Sakata Prog. Theor. Phys. 23 1960 名古屋模型の論文)

坂田模型、名古屋模型に関する新聞報道の切り抜き

- SS0024 「素粒子の複合模型について」中日新聞 1959年5月18日

- B26-030 「新粒子の存在を予言」毎日新聞 1959年11月14日
- B26-031 「坂田モデル 三粒子の組合せから 物質のナゾ解明に巨歩」
毎日新聞 1959年11月25日
- B26-032 「世界の科学者が注目 新しい素粒子の統一理論」
北海道新聞 1959年7月19日
- B26-033 「素粒子の成り立ちを解明」朝日新聞 1959年12月19日
「名古屋モデルを発表」日本経済新聞 1959年12月19日
- SS0035 「名古屋モデルと命名」中日新聞 1959年12月19日
「坂田理論さらに進展」朝日新聞 1959年12月19日
「素粒子の統一理論 名古屋モデル発表」毎日新聞 1959年12月19日
- A-9-3-2-1 「名古屋モデルと研究体制」毎日新聞 1959年12月30日
- B26-057 「話題の名古屋モデルとは…」朝日新聞 1960年2月1日
- B26-085 「正しい坂田モデル」朝日新聞 1961年3月22日
- B26-086 「坂田モデルをめぐって上」朝日新聞 1961年3月29日
- B26-087 「坂田モデルをめぐって下」朝日新聞 1961年3月30日
- SS0036 「坂田モデル実証 素粒子研究会で報告」朝日新聞 1961年3月22日
- (60 01 ZC 01) 「原子力問題委員会報告」委員長報告原稿下書き
- (61 02 ZC 05-1) 湯川・朝永・坂田による核実験停止および軍縮への物理学者としての声明
1961年9月3日



(62 02 ZC 11) 湯川・朝永・坂田による日本版パグウォッシュ会議開催のよびかけ
1962年4月18日



(62 01 WP 03) 「科学者京都会議がひらかれるまで」手書き原稿所蔵 赤字で校正あり
(世界 1962年8月号掲載)



B25-012 第1回科学者京都会議 声明 1962年5月9日
A-4-1-5-3-1 「STATEMENT」第1回科学者京都会議 声明の英訳
(62 07 TA 01) 「現代の顔 科学者京都会議」TBS テレビインタビュー未放送
1962年5月15日放送予定の原稿のみ
(62 07 TA 02) 「朝の訪問」NHK ラジオ 1962年9月14日放送 CD
(62 02 RE 01) 「Remarks on the Unified Model of Elementary Particles」

Maki, Nakagawa and Sakata, Prog. Theor. Phys. 28 (1962) 870

新名古屋模型の論文（ニュートリノ混合を提唱）

別刷：A-7-3-2-2-05, A-7-3-1-09-18 など

(63 01 WP 01) 第 2 回科学者京都会議でのノート 1963 年 5 月 7-9 日 竹原

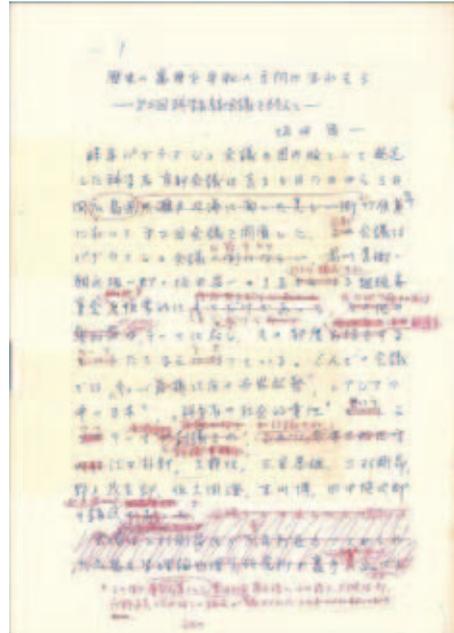
(63 01 WP 02) 「歴史の歯車を平和の方向にまわそう 第 2 回科学者京都会議を終えて」

未完原稿所蔵

完成版は科学朝日

1963 年 6 月に掲載

(史料室所蔵 D-21-5-6)



B25-012 第 2 回科学者京都会議 声明 1963 年 5 月 9 日

A-4-1-2-02 「STATEMENT」第 2 回科学者京都会議 声明 英訳

(64 02 ZC 02) 「長編小説論 - 兼せ聴けば明るく、偏り信ずれば暗し」

素粒子の模型と構造研究会にて 1964 年 2 月 3-4 日

素粒子論研究 29 卷 1 号掲載

B25-031-01 「坂田教授を団長に」中日新聞 1964 年 6 月 29 日

参照 (64 01 WP 03) “科学に新しい風を” 論集 2、No.49

(64 01 WP 04) “北京科学シンポ 団長挨拶” 論集 2、No.50

(65 01 WP 06) 「原子力特別委員会委員長報告」1965 年 12 月 原稿

(65 01 WP 07) 講演原稿の一部 1965 年 3 月 22-24

(65 01 WP 08) 「Remarks on a New Concept of Elementary Particles and Method of Composite Model」論文原稿

(Maki, Ohnuki and Sakata Suppl.Prog.Theor.Phys.

Extra Number (1965) 406)

B25-044 朝永ノーベル賞受賞のお祝い原稿下書き（未完）1965年



B25-045 理学部長に選ばれた坂田昌一教授 中日新聞 1965年12月17日

(66 02 ZC 02) 「ウィーン宣言のこと」 ニュースレター（ラッセル平和財団）

1966年4月15日 G13-39

B25-063 「核兵器全廃を科学者京都会議が声明」朝日新聞切り抜き 1966年7月

「核兵器開発を憂う－科学者京都会議が声明－」新聞切り抜き 1966年7月
第3回科学者京都会議の記事

(66 02 RE 03) 「現代物理学における自然観」名古屋大学農学部科学史及科学論研究会
1966年12月17日 講演

(66 01 WP 02) 史料ファイル

原水爆科学者会議（第0次案）

第3回科学者京都会議プログラム

第3回科学者京都会議でのノート

「科学者の社会的責任」レジメ 鉛筆書き

「平和の論理の創造と科学者の責任 第3回科学者京都会議から」原稿
坂田の講演内容と討論を書き起こした原稿

B25-064 「仏教と物理学の接点－けし粒の中に全宇宙が－」同朋新聞切り抜き
1966年9月10日

(67 01 WP 02) 「On the Composite Model Approach to the Theory of Elementary Particles
Historical Review and the Underlying Philosophy of Japanese Works」
1967年 MAX Planck Inst. での講演原稿

(67 02 ZC 07) 「私の自然観」甲南大学学生部「学生だより」1968年1月19日刊

B19-002 「対談 この人と 坂田昌一氏」中日新聞 1967年7月17日

(68 02 ZC 02) 「1968年北京シンポジウム日本準備会結成総会によせたメッセージ」
1968年3月19日

- (68 01 ZC 05) 科学者京都会議勉強会での坂田ノート 1968年6月6-8日 東京
 B19-040-02 「坂田理学部長が辞任」中日新聞 1969年6月2日 切り抜き
 B19-056 「E研における研究の展開」原稿 1970年5月27日



- B19-041 「弔辞」原治 原稿 1970年10月18日
 B19-047 「坂田昌一先生告別式」素粒子論研究編集部 原稿 1970年10月18日
 B19-048 「凶年表 坂田博士と日本学術会議」
 A-10-4-3-001-01 「ベッドでも専門書」1970年 新聞切り抜き
 A-10-4-3-001-02 「百歳にも匹敵する生き方 坂田昌一氏」朝日新聞 1970年10月28日
 A-10-4-3-001-05 「素粒子論に新分野 坂田昌一さんのこと」朝永振一郎
 1970年10月20日新聞切り抜き
 A-10-4-3-001-06 「平和への科学追求」湯川秀樹のコメント「物理学会の大損失」含む
 1970年新聞切り抜き
 A-10-4-3-001-07 「常にノーベル賞の候補」1970年 新聞切り抜き
 A-10-4-3-001-08 「若草山で生まれた2中間子論」湯川のコメント 1970年 新聞切り抜き
 D-21-4-9 坂田昌一告別式(写真アルバム)1970年10月18日、
 坂田先生を偲ぶ会(写真アルバム)1970年10月27日
 D-21-4-7 故坂田昌一教授理学部葬(写真アルバム)1970年10月27日

- B19-058 「坂田昌一教授のおもいで」原稿 日本物理学会誌 1971年3月号
日本物理学会誌 a-236, G10-22, A-9-4-9-4
- B18-022-001 「思想と実践浮彫り－世界的物理学者の業績－」毎日新聞 1973年2月26日
論集 1、2、原子物理学入門 の出版について
- B18-026 「現代を動かす人と思想 坂田昌一 階層がある自然」藤本陽一
毎日新聞 1974年5月20日
- B18-027 「新粒子発見の背景」牧二郎
朝日新聞 1975年4月10日
- B18-028 「坂田昌一博士の墓碑 柳井へ」周南新報 1975年1月30日
- B18-037 「故坂田博士 13 回忌法要」読売新聞 1982年10月11日
- A-9-3-3 坂田像完成祝賀（写真アルバム）1984年11月1日

(77 02 BK 01) 「SHOICHI SAKATA SCIENTIFIC WORKS」1977

映像資料（現在 DVD にて保存）

- (50 07 TA 01) 「ニュースに見る昔の日本 恩賜賞の坂田理論」1950年 日本映画社
- (60 07 TA 01) 「NHK テレビニュースインタビュー フランス核実験に対するコメント」
1960年 NHK
- (64 07 TA 01) 「16 ミリフィルム (The 1964 Peking Scientific Symposium)」1964年
- (86 07 TA 01) 「坂田昌一「人と業績」」1986年 坂田記念史料室
坂田史料室についての会議の様子
- (03 07 TA 01) 「偉人達の夢 # 69 坂田昌一」2003年 文部科学省

音声資料（現在 CD にて保存）

- (59 07 TA 01) 「明るい茶の間「兄弟対談」坂田昌一・静間良次」（10分）
1959年8月12日 NHK ラジオ（名古屋）
- (62 07 TA 02) 「朝の訪問」勝沼精蔵 坂田昌一 1962年
NHK ラジオ（名古屋）
- (64 07 TA 01) 「現代の科学技術の人類史的意義」講演 於信州大学 1-4 1964年
- (64 07 TA 02) 「信州大学生自治会主催 座談会」1964年
- (68 07 TA 01) 「科学と現代」第14回富山大学祭講演 A面B面 1968年6月1日
- (68 07 TA 02) 「第14回富山大学祭 座談会」1964年
- B-1-5-3-12 「科学の現代的性格（1－6）」
- B-1-5-3-14 「第2回科学者京都会議 於竹原(1)(2)」1963年5月

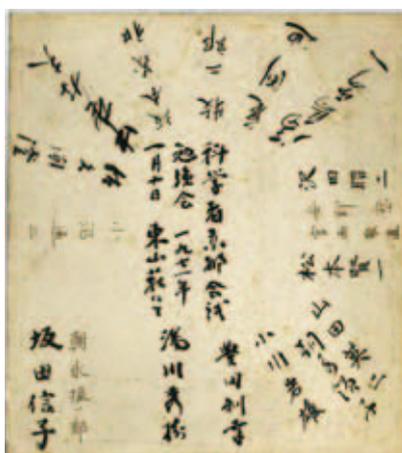
- (69 02 TA 01) 「私の古典—エンゲルスの自然弁証法」 NHKFM 1969年7月30日放送
- B-1-5-3-16 「坂田先生告別式（密葬）」 1970年10月18日
- B-1-5-3-19 「坂田先生理学部葬 1, 2, 3」 1970年10月27日
- B-1-5-3-20 「坂田昌一さんのおもいで」 1970年10月22日
- B-1-5-3-21 「故 坂田昌一教授追悼講演会」 1970年12月21日
- B-1-5-3-22 「坂田昌一について 有山兼孝の思い出」 1970年12月21日
- B-1-5-3-23 「坂田昌一 61才祝賀会」
- B-1-5-3-24 「E研の歴史シリーズ 牧氏のお話」 1971年7月23日
- B-1-5-3-26 「坂田昌一 人と業績」 1986年4月15日
- B-1-5-3-27 「高林：坂田を語る」 1997年30日
- B-1-5-3-28 「原治氏 語る」

色紙・物品類 資料

- E-22-2-1 色紙額「兼聴則明 偏信則暗」 1969年3月 坂田昌一



- E-22-2-4 額装色紙「科学者京都会議勉強会寄せ書き」
1971年1月10日 御殿場 YMCA 東山荘にて（レプリカを展示中）



- E-22-2-6 勲記：「勲二等に叙し瑞寶章を授与する」昭和 45 年 10 月 16 日
 E-22-2-8 E 研忘年会寄せ書き 1955 年
 E-22-2-9 E 研忘年会寄せ書き 1968 年 12 月 26 日
 祈坂田先生 早期御快癒

写真資料

- E-22-1-2 : ALBUM (坂田、湯川、早川、朝永 写真)
 E-22-1-2-27 京都大学基礎物理学研究所にて
 E-22-1-2-28



- E-22-1-2-80 東京文理科大学 (東京教育大学) 大久保分室にて (前列左より坂田、朝永、武谷。後列左より馬場、皆川、木下、早川、木庭、宮島)



- E-22-1-4 : 1964 年北京科学シンポジウム写真集
 E-22-1-4-10 1964 年北京科学シンポジウムにて坂田の講演



- E-22-1-5 : 坂田のお墓参り写真
E-22-1-6 : 坂田昌一関係写真集
E-22-1-6-01 坂田昌一 机にて



- E-22-1-6-02 坂田昌一 半袖シャツにて
E-22-1-6-03 坂田と武谷（風貌（続） 土門拳 講談社 掲載写真）



1949年6月撮影

- E-22-1-6-09 温泉にて 毎日新聞記者と（坂田、湯川、小林、記者）
E-22-1-6-10 たばこを吹かす坂田 コペンハーゲンで 信子夫人撮影
E-22-1-6-16 会議中（大貫、坂田）
E-22-1-6-18（湯川、朝永、小林、坂田） 写真



- E-22-1-6-20 机にて論文を読む坂田
E-22-1-6-22 温泉地の河辺にて（湯川、坂田）
E-22-1-6-23 モーツアルトの生家にて（坂田）1967年
E-22-1-6-30 E研遠足にて（坂田、松本、中川、梅村、清水）

E-22-1-6-33 浴衣姿の写真 (小林、坂田、有山、武谷、井上、中央に湯川)

E-22-1-6-40 1946年9月 名古屋大学物理教室 教授集合写真
(宮原、坂田、有山、宮部、上田、関戸)



E-22-1-6-54 坂田昌一 朝日賞受賞 1949年1月16日



E-22-1-6-66 国際理論物理学会 1953年9月 名古屋駅にて出迎え



E-22-1-6-66-2 国際理論物理学会 1953年9月 名古屋駅にて出迎え



E-22-1-6-41 第14回ソルベイ会議 1967年10月2-7日



E-22-1-6-38 E研究室の様子 (毎日新聞 1959年12月30日掲載写真 参照 A-9-3-2-1)



C-16-6-1-1 E 研写真 (田中、亀淵、岩田、湯川二、河辺、高橋、坂田、梅沢)

C-16-6-1-2 E 研写真 1953年9月理論物理学国際会議

H. ザレッカーを囲んで (原、岡野、大貫、岩田、小此木、Salecker、坂田、湯川二、亀淵、梅沢、小森、高林、小川)

C-16-6-1-3 E 研写真 1953年9月理論物理学国際会議

H. ザレッカーを囲んで (小川、亀淵、岡野、岩田、小森、?、Salecker、高林、吉村、?、原、小此木、坂田、?、湯川、大貫、松本?、高尾、山田)

C-16-6-1-4 E 研写真 1953年ごろ (岩尾、岡野、小此木、広川、吉村、小川、亀淵、高林、松本、大貫、山田、坂田、原)

C-16-6-1-5 基礎物理学研究所にて (左から、藤村淳、坂田昌一、小此木久一郎)

C-16-6-1-7 写真 坂田昌一 1953年 (旧理学部2号館南口にて)

C-16-6-1-9 物理学教室写真 1953年11月13日 (榭原温泉にて)

C-16-6-1-11 物理学教室写真 1953年11月14日 (佐田駅ホームにて)

C-16-6-1-12 写真 坂田昌一、武谷三男 1951年（風貌（続）に掲載）（展示パネル）

C-16-6-1-15 写真 1957年名駅にて（高林、ローゼンフェルト、有山、ローゼンフェルト夫人、坂田、小此木）

C-16-6-1-16 写真 1958年第3回パグウォッシュ会議（朝永、ポーリング）（ウイグナー、湯川など）

C-16-6-1-17 写真 1958年第3回パグウォッシュ会議集合写真

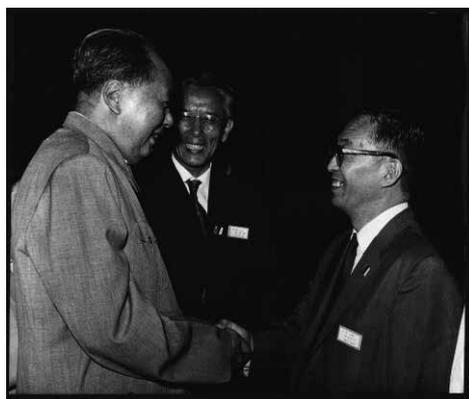
C-16-6-1-20 連続写真5枚 1960年ごろE研にて坂田とゲームを楽しむ（鷺見、鈴木、豊田、坂田、金田、林、梅村、小此木、牧）（展示パネル）



C-16-6-1-21 写真 1960年マルコフを囲んで（高林、マルコフ、坂田、中川、小此木、早川、大貫、牧、大槻）（展示パネル）

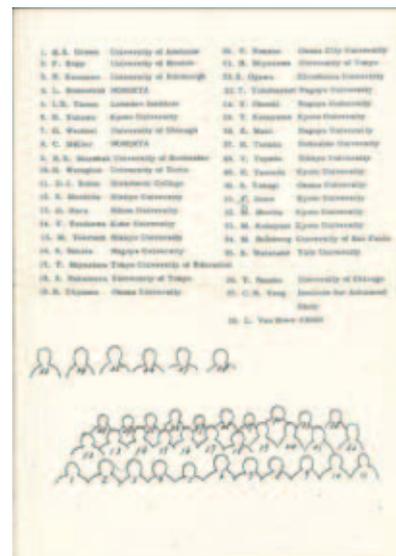


C-16-6-1-23 写真 1964年8月北京シンポジウムにて 毛沢東と坂田の握手（毛沢東、周培源、坂田昌一）（展示パネル）



C-16-6-1-24

写真 1965年9月24-30日 素粒子国際会議集合写真



C-16-6-1-25

写真 1965年 素粒子国際会議園遊会にて（南部、坂田）



C-16-6-1-26

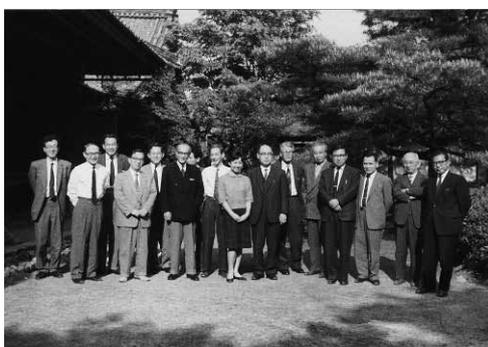
写真 1965年 中間子論30周年園遊会集合写真（湯川を囲んで）

C-16-6-1-31

写真 1950年 毎日新聞社撮影（小林稔、坂田昌一、湯川秀樹）

C-16-6-1-32

写真 1962年5月 第1回科学者京都会議集合写真（展示中）



C-16-6-1-36

写真 たばこをもつ坂田昌一

C-16-6-1-39 写真ファイル 1956年 坂田ソ連訪問 16枚



C-16-6-4-14 写真 たばこを持って語る坂田昌一 中日新聞 1967年7月掲載
(展示パネル)



C-16-6-5-1 E研集合写真 1968年 (展示パネル)



C-16-6-5-4 写真 E研にて (坂田、小此木、益川など) (展示パネル)

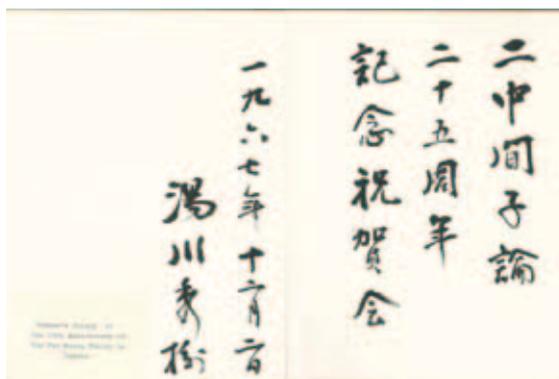
C-16-6-5-6 写真 餅つきをする坂田 (展示パネル)

- H-01 坂田昌一の机（展示予定）
H-06 額 原子核研究所より「日本で最初に創られた人工中間子」

- H-12-01 2 中間子論 25 周年記念祝賀会アルバム、芳名帳 1967 年
アルバム写真より（坂田、益川、二宮、湯川）



芳名帳 湯川の記帳



- H-12-03 恩賜賞メダル（1950 年第 40 回、2 中間子理論により）



H-12-04

勲二等 瑞寶章 1970 年



H-12-12

C-Meson Theory の茶碗 (文章：梅沢、筆：亀淵)



H-14

坂田胸像 (1981 年 清水多嘉示 作) 展示中



ノーベル賞展示室内 坂田昌一展示



坂田史料展示棚



(吉川直志)

あとがき

この冊子では、湯川秀樹、朝永振一郎、坂田昌一の記念史料室にある史料の概要を紹介し、その利用へのよきガイドとなることを目的としている。これが多くの人に利用され、ひろく役立てられることを期待している。

また、ここで紹介した史料記述のカタログデータベースを公開する方法が有効であれば、この三つの記念史料室の資料にとどまらず、他の多くの研究資料（個人研究資料および研究機関の資料）を一つのサーバのシステムで検索し、閲覧利用を促進することに役立つものとなるであろうと期待される。将来は、そのようなものへと発展することをねがっている。

謝 辞

この研究と並行して実施された総研大の研究プロジェクトの提案者で初期の代表者であった平田光司氏（総合研究大学院大学）および後半の代表者であった松岡啓介氏（元・核融合科学研究所）、また名前はあげないがそのプロジェクトの参加者のみなさんに感謝する。また、国文学研究資料館のサーバを使用するにあたって、高橋実氏、大友一雄氏にいろいろな便宜を与えていただいたことに感謝する。また湯川記念館史料室では、科研費の助成によって坂東太郎さん、田中希生さん、川勝早苗さんに長い期間にわたって継続して史料整理に携わっていただくことが可能になったが、その精力的で熱心な作業に負うところが大きい。とくに記して謝意を示しておきたい。

なお、この冊子は科研費（課題番号 20240073）「(基盤研究A) 湯川・朝永・坂田記念史料の整理および史料記述データベースの整備」の助成を受けて作成されたものである。

「湯川・朝永・坂田記念史料の整理および史料記述データベースの整備」

共同研究参加者リスト（五十音順）

氏名	所属	主な役割
伊藤和行	京都大学・文学研究科	科学史
伊藤憲二	総合研究大学院大学・先導科学研究科	科学史
受川史彦	筑波大学・数理物質科学研究科	朝永記念室
金谷和至	筑波大学・数理物質科学研究科	朝永記念室
九後太一	京都大学・基礎物理学研究所	湯川記念館史料室
五島敏芳	京都大学・総合博物館	アーカイブズ学
小沼通二	神奈川歯科大学	湯川記念館史料室
高岩義信	筑波技術大学・障害者高等教育研究支援センター	代表者・統括
田中正	京都大学・名誉教授	湯川記念館史料室
棚橋誠治	名古屋大学・基礎理論研究センター	坂田記念史料室
難波忠清	自然科学研究機構・核融合科学研究所	坂田記念史料室
西谷正	キクチ眼鏡専門学校	坂田記念史料室
坂東昌子	愛知大学・名誉教授	湯川記念館史料室
藤田康元	総合研究大学院大学（現・国際基督教大学）	科学史（一部期間の参加）
山脇幸一	名古屋大学・素粒子宇宙起源研究機構	坂田記念史料室
吉川直志	名古屋大学・理学研究科	坂田記念史料室

湯川秀樹・朝永振一郎・坂田昌一の遺した史料

－湯川記念館史料室・朝永記念室・坂田記念史料室の紹介－

ISBN 978-4-9904374-9-7

発行日／平成 23 年 3 月 30 日

発行／国立大学法人 筑波技術大学

〒 305-8520 茨城県つくば市天久保 4-3-15

TEL:029-852-2931(代表) FAX:029-858-9312

発行責任者／高岩義信

編集責任者／金谷和至 高岩義信

印刷／松枝印刷株式会社

〒 303-0034 茨城県常総市水海道天満町 2438 番地

本誌からの無断複写・転載を禁止いたします。

物理学史資料紹介

日本物理学会
物理学史資料委員会会報 No. 5
2019年6月17日

日本物理学会物理学史資料委員会は、学会の所蔵する物理学史資料を管理・維持するほか、主として日本国内の物理学史資料に関する情報の収集・公開などを行っています。収集した情報の一部は、第1号から第4号に至るまでの委員会会報として印刷・配布してきましたが、インターネットの普及に鑑み、第5号は、ウェブ上での公開のみを行うこととしました。

これまで紹介してきた資料館・文書館の多くは、各館ごとにウェブサイトを持続して情報発信を行っており、資料の内容や利用方法の詳細は、これらのサイトによって確認することができます。従って、関心のある人物や事項を、あいまいにでも思い浮かべることができれば、適切な検索エンジンを用いることで、それらについてのより詳細な情報、或いはさらにより深く知るための資料についての情報を得ることができます。

こうした状況で、あらためてウェブ上のみでの公開を前提とした物理学史資料委員会会報を発行する意義がどのようなものであるかといえば、それは、会報の記事が、資料の収集・管理に当たっている人々や、資料を利用した人々によって、何らかの意味での当事者の視点から執筆されていることであるといえるでしょう。各資料・各館の紹介には、たとえわずかであっても、資料館・文書館の発する公的情報からやや踏み出した内容が盛り込まれています。

以前に比べて、ウェブ上での情報収集が各段に容易になったことから、本号ではまた、従来の号に掲載されてきた資料館・文書館等の情報を網羅的に更新することは行わず、現段階で集まった情報のみを発信することとしました。ここに掲載されていない資料館・文書館について手がかりを得ることを希望される場合は、4号以前の会報を参照されることをお勧めします。ただし、本号も含めて、情報は刊行時のものですので、最新の情報は各館のウェブサイト等によってご確認ください。

なお、物理学史資料委員会の活動全般の概要は、下記のサイトに掲載されています。

<https://www.jps.or.jp/activities/iinkai/gakushi.php>

目次

※最初に人物、次いで資料館・文書館を挙げ、それぞれのうちは年代順に並べてあります。

本多光太郎関係資料	3
湯川記念館史料室（湯川秀樹資料）	8
坂田記念史料室（坂田昌一資料）	10
国立科学博物館 理工学研究部	11
東京大学駒場博物館	12
上智大学史資料室	13
高エネルギー加速器研究機構(KEK)史料室	14

本多光太郎関係資料

○東北大学金属材料研究所本多記念館 本多記念室，資料展示室
仙台市青葉区片平 2-1-1（東北大学片平キャンパス）

<http://www.imr.tohoku.ac.jp/ja/public/memorial-hall/>

本多記念館は，金属材料研究所（金研）の創設者（1916年に臨時理化学研究所第二部として発足）で，東北帝国大学第6代総長でもあった本多光太郎博士の在職25周年を記念して，総工費47万円をかけて建設された。昭和14年10月に起工し，同16年10月に落成した鉄筋コンクリート造3階建，延べ面積2,217㎡の研究棟である。現在は，所長室，事務部及び外来者用宿泊室として利用されている。創立50周年（1966年）の際に，本多博士の執務室が本多記念室として整備され，あわせて資料展示室が新設された。

本多記念室（写真1）には，本多博士愛用の机，椅子のほか，デスマスクや当時の書籍，学術雑誌，実験ノート，書簡や写真類（例えば，ゲッチンゲン大学（ドイツ）留学中に田中館愛橘に送ったはがき 写真2）などが展示されている。

資料展示室（写真3）は，2016年の金研創立100周年時にリニューアルされ，KS磁石鋼，センダスト，コエリンバー，炭化ケイ素繊維などの金研による発明品やその製品群などを常時展示し，金研の歴史や研究成果を広く紹介している。これらの展示品のほか，茅誠司博士の手書き草稿（「高温における鉄単結晶の磁化に就いて」）に本多博士が修正の赤ペンを入れた原稿（コピー）（写真3）なども常設展示されている。

本多記念室，資料展示室に所蔵の展示品，各種資料などは，2013年に公益財団法人本多記念会から管理を金研に寄託された。また，多くの写真類は東北大学史料館でデータベース化され史料館HP（<http://www2.archives.tohoku.ac.jp/>）から検索利用できるようになっている。



写真1 本多記念室（旧本多光太郎執務室）

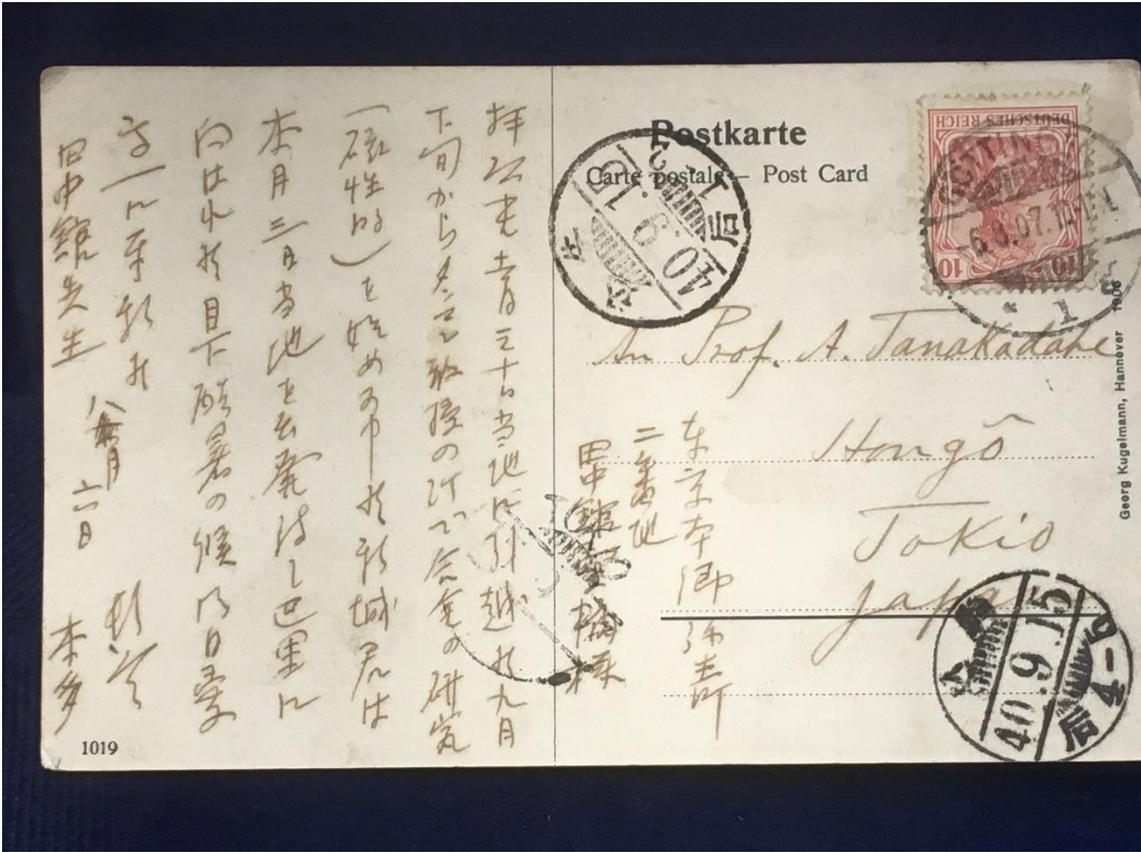


写真2 ドイツ留学中（ゲッチンゲン）に東京本郷の田中館にあてたハガキ



写真3 展示資料室（2016年リニューアル）

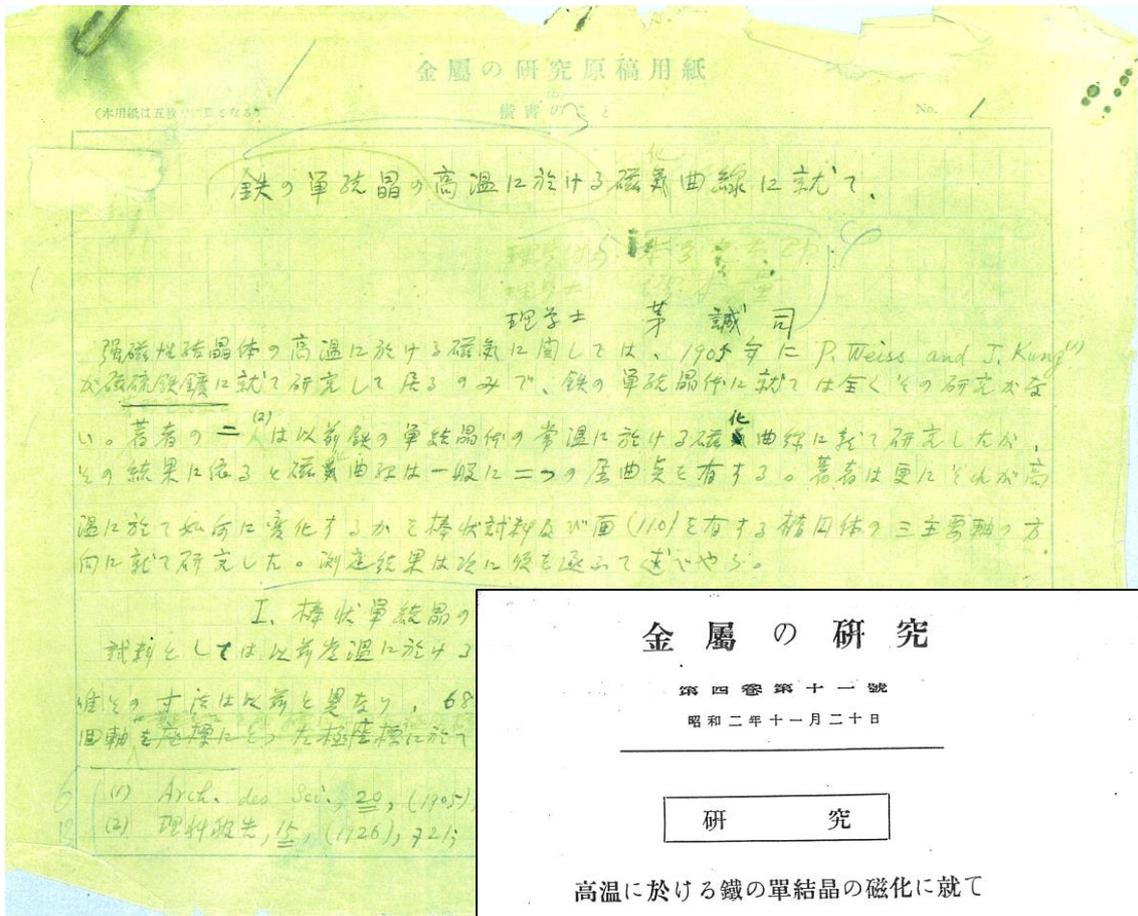


写真 4 茅誠司による手書き原稿に、本多が赤ペンを入れた原稿（コピー）

金属の研究

第四卷第十一號
昭和二年十一月二十日

研 究

高温に於ける鐵の單結晶の磁化に就て

理学博士 本多光太郎
理学士 増本量
理学士 茅誠司

Kotaro Honda, Hakar Masumoto and Seiji Kaya :- On the Magnetization of Single Crystals of Iron at High Temperatures. The present writers measured the magnetization of single crystals of iron at different high temperatures by means of the ballistic method. As is already known, the magnetization curve at ordinary temperature of an iron rod of a single crystal, shows a peculiar course; that is, the curve is almost straight up to a magnetization of 1000 C. G. S units, then shows twice sharp breaks, till it reaches its saturation value 1707. As the temperature is raised, the breaks are gradually displaced towards lower fields, and the saturation value decreases, till it vanishes at the critical point, 790°C. From the saturation of magnetization - temperature curve, the saturation value at the absolute zero is estimated to be 1752. The relations between the magnetization and the temperature for the directions of the principal axes are all similar to each other and also to those for the iron rod.

強磁性結晶體の高温に於ける磁化に関しては、1905年にP. Weiss and J. Kuntz⁽¹⁾が磁鐵鐵礦に就て研究して居るのみで、鐵の單結晶體に就ては全くその研究がない。著者の二人は以前鐵の單結晶體の常温に於ける磁化曲線に就て研究したが、その結果に依ると磁化曲線は一般に二つの屈曲點を有する。著者は更にそれが高温に於て如何に變化するかを棒状試料及び面(110)を有する聯圓體の三主要軸の方向に就て研究した。測定結果は次に順を逐ふて述べてやう。

見学希望、問い合わせ先
980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1
東北大学金属材料研究所情報企画室広報班
tel: 022-215-2144 e-mail: pro-adm@imr.tohoku.ac.jp
URL <http://www.imr.tohoku.ac.jp/>

○本多会館

宮城県仙台市青葉区土樋 1-6-11

本多会館は、本多博士が東北帝国大学に在職中の公邸（官舎）を職員集会所として学内研修や外来者用宿泊所として利用していた建物である（写真 1）。敷地内に、展示棟が建設され岡崎市関係の遺品、資料の写真、その他受賞関係、新聞記事、逝去後の記事などが展示されている。東北大学片平キャンパスから徒歩 10 分程度の住宅地にある。現在は閉鎖されているが申し込みにより見学可能である。

問い合わせ先 東北大学財務部資産管理課 tel: 022-217-4916



（写真 1 本多会館玄関）

○東北大学総合学術博物館

仙台市青葉区荒巻字青葉 6-3（東北大学青葉山北キャンパス）

<http://www.museum.tohoku.ac.jp/>

本多光太郎の資料のうち、論文や実験ノートを所蔵していた金属博物館は、2003 年に閉館となり、同館の所蔵資料や図書は東北大学総合学術博物館に寄贈された。本多光太郎関

係の資料の常設展示は行われていないが、収蔵品の内容はデータベースで見ることができ、要望により閲覧が可能である。

○東北大学史料館

仙台市青葉区片平 2-1-1 (東北大学片平キャンパス)

<http://www2.archives.tohoku.ac.jp/>

明治 40 年 (1907) の東北大学創設以来の歴史的公文書や教職員・卒業生の資料など大学の歴史を伝える資料を保存・公開し、展示などの活動を通じて大学の歴史を紹介している。本多光太郎関係の資料は理学部物理学教室で保存されていた資料が 1968 年に寄託されたものである。明治末から大正期にかけての原稿、ノート、実験記録などがある。また東北大学鉄鋼研究所 (現金属材料研究所) の拡張計画に関する書簡草稿など大学行政に関わるものも若干含まれている。

東北大学デジタルアーカイブス (<http://www2.archives.tohoku.ac.jp/tuda/tuda-index.html>) により、所蔵文書、画像、動画などの検索、閲覧が可能である。

(佐々木孝彦)

京都大学 基礎物理学研究所 湯川記念館史料室 (Yukawa Hall Archival Library)

<https://www2.yukawa.kyoto-u.ac.jp/~yhal.oj/index.html>

1979年8月1日開設

運営組織：湯川記念館史料室委員会

責任者：早川尚男（湯川記念館史料室委員会委員長）

住所：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学 基礎物理学研究所

TEL：075-753-7000 FAX：075-753-7020

収蔵史料：

湯川秀樹が残した史料は分量が多く、広範囲に及ぶため、現在も整理が続けられている。これまで登録された史料点数は約44,100点となっている。史料内容のおおまかな分類は以下ようになる。

1 研究・教育関係史料

1949年のノーベル物理学賞の対象となった1930年代の中間子論研究に関する原稿・メモ・書簡や、学生時代から晩年までの研究・教育に関するノートなどを含む。ノートの点数は約150にのぼる。

2 日記類

大阪帝国大学講師・助教授時代、京都帝国大学教授時代にかかる1934-1939年の当用日記、米国滞在を経て帰国後の1954年の当用日記、大阪帝国大学助教授および京都帝国大学教授時代にかかる1938-1948年の「研究室日誌」、在米中の1948-1949年の「DIARY II」。なお、1934-1935年の日記の一部は『湯川秀樹日記 昭和九年：中間子論への道』（朝日新聞社、2007）として刊行された。以下のサイトでは一部の日記の解説文を閲覧できる。

<https://www2.yukawa.kyoto-u.ac.jp/~yhal.oj/diary.html>

3 社会的活動史料

ラッセル・アインシュタイン宣言への参加、パグウォッシュ会議、科学者京都会議、世界平和アピール七人委員会、世界連邦運動、UNESCOなど、湯川の社会的活動に関する史料が1700点を超える。

4 国内外のアカデミー、学協会関係史料

湯川が勤務した大阪大学、京都大学、コロンビア大学、会員であった日本学術会議、日本学士院、日本物理学会などに関する史料。外国人会員となっていた海外のアカデミー関連も含めて4500点以上がある。

5 刊行物

湯川の主な刊行物は『湯川秀樹著作集』全11巻（岩波書店、1989-1990）にまとめられたが、それ以外の刊行物もある。また、湯川が所蔵していた書籍や、没後に湯川家から寄贈された書籍類などがある。これらの書籍類は史料室・湯川記念室・基礎物理学研究所図書室に収蔵

され、湯川記念室には遺著約 250 冊、蔵書約 1920 点の湯川関連書籍が保存されている。

6 書簡

湯川が研究人生を通してやりとりした書簡が 7800 点ほど残されている。

7 写真・音声・映像史料

湯川に係る写真、映画・テレビ番組の映像、音声のオープンリール、テープ類などが残されている。

湯川記念館史料室委員会が 2007 年に刊行した『京都大学基礎物理学研究所 湯川記念館史料室の史料目録』は以下の web サイトからダウンロードできる。

<https://www2.yukawa.kyoto-u.ac.jp/~yhal.oj/publication.html>

また、以下の web サイトでは湯川史料の一部・関連刊行物・史料紹介を閲覧できる。

京都大学 基礎物理学研究所 湯川記念館史料室

<https://www2.yukawa.kyoto-u.ac.jp/~yhal.oj/index.html>

なお、大阪大学では、大阪大学総合学術博物館 湯川記念室の web サイトが新設され、サイト上の「史料集」を通して阪大時代の湯川の間子論関連論文を閲覧することができる。

大阪大学総合学術博物館 湯川記念室

<https://www-yukawa.phys.sci.osaka-u.ac.jp/>

(小長谷大介)

坂田昌一資料

保管場所：名古屋大学 2008 ノーベル賞展示室

坂田記念史料室（1973年4月18日創設）

Sakata Memorial Archival Library

責任者：岡本 祐幸

〒464-8602 名古屋市千種区不老町

TEL: 052-747-6577, FAX: 052-747-6578

<http://www.eken.phys.nagoya-u.ac.jp/introduction/sakata/sakata-j.html>

e-mail: sakatashiryu@eken.phys.nagoya-u.ac.jp

坂田昌一ノート、草稿、蔵書、写真、映像・録音史料、および日本学術会議関係資料、平和活動関係資料等多数収蔵されている。2011年には、坂田生誕百年を記念して、これらの史料等を元に、「坂田昌一 コペンハーゲン日記 - ボーアとアンデルセンの国で -」坂田昌一コペンハーゲン日記刊行会編（ナノオプトニクス・エナジー出版局，2011）が刊行された。また、他に名古屋大学理学部物理学科に在籍した有山兼孝（物性物理）、早川幸男（宇宙物理）、大澤文夫（生物物理）の資料も収蔵しているが、まだまだ未整理の状態である。

一部の収蔵資料のリストに関しては以下の目録を参照のこと。

「坂田記念史料室資料目録第一集」（2013年2月改定）

「坂田記念史料室資料目録第二集」（2014年3月改定）

閲覧希望者は、上記電子メールアドレスに申し込むこと。

（岡本祐幸）

国立科学博物館 理工学研究部

茨城県つくば市天久保 4-1-1

国立科学博物館の理工学研究部では、日本の科学者や技術者に関する資料をはじめ、日本の科学技術の歩みを示す貴重な資料を数多く所蔵している。「ミルンの地震計」「ユーイングの蘇言器」など 5 点については、重要文化財に指定されている。

所蔵資料の種類は多岐にわたっており、たとえば以下のようなものがある：時計資料、日本の初期自動車関係資料、航空機関係資料、電子通信・情報関係資料、近代化遺産資料、大工道具資料、天文学資料（暦、望遠鏡・双眼鏡、天球儀・地球儀など）、地震学資料（震災写真や地震計など）、隕石資料、日本の科学者・技術者に関する資料。

物理学史に直接関係する資料としては、まず挙げられるのは長岡半太郎資料である。これは長岡半太郎旧蔵のノート、原稿、書簡、辞令、写真、論文別刷などからなるコレクションで、総点数は 6 千を超える。大部分を占めるのは長岡が国内外の研究者から贈られた別刷であるが、たとえばノート類に関して言えば、幼少期の学習帖から大学および留学時代の受講ノート、東大および理研での研究ノートや晩年の日記に至るまで、500 冊近くが遺されている。

物理学者に関係したその他の資料としては、西川正治や本多光太郎などの資料がある。また、ノーベル物理学賞を受賞した日本人科学者に関する資料が若干あり、常設展示の中で紹介を行っている。この中には、朝永振一郎の手紙のような文書類だけでなく、赤崎勇と天野浩の LED ウェハのような紙以外のものも含まれている。

実験機器類としては、理研で戦後に再建されたサイクロトロン加速箱や、KEK で製作された歴史的な泡箱、Belle 実験に使われた検出器などを常設展示しているほか、理研の仁科研究室で製作された宇宙線計（電離箱）や、東大物性研で建造された超高压高温実験装置などを収蔵している。地球物理学に関係するものでは、測地学委員会のステルネック振り子や長岡式の重力振り子装置、各種の重力絶対測定装置などがある。また研究用でなく教育用の実験機器類として、東京女子高等師範学校などに由来するコレクションを所蔵している。

(有賀暢迪)

東京大学駒場博物館

(美術博物館 1951 年創設；自然科学博物館 1953 年創設；両館の合併 2003 年)

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

電話 03-5454-6139 ファクシミリ 03-5454-4929

<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/>

第一高等学校旧蔵の教務関係を含む文書類、教育用機器、教員や卒業生に関する資料が収集・収蔵されており、一部は公開されている。資料整理が進められており、進捗状況に応じて展示も実施されている。物理学史に関連する主要な資料は以下の通りである。

1. 理化学実験機器類：1870 年代前後のものから戦後に至るまでに製作された 100 点ほどが収蔵されている。点数は少ないが、ケーニッヒ (Rudolph Koenig, 1832-1901) の工房で製作された音響分析器、フーコー (Jean Bernard Léon Foucault, 1819-1868) が光速の測定に用いた回転鏡の改良型、ケンブリッジ社製のダデル式オシログラフなどが含まれる。折に触れて展示により公開されている。

2. 第一高等学校関連文書：人事・教務・会計など校務全般に関わる資料が含まれるが、東京大学予備門の時期からのものを含む入学試験および定期試験の問題、高等学校学科細目及教授法 (明治 34 年)、高等学校教科用書調 (明治 35 年) などがある。目録は公開されており、希望すれば閲覧が可能である。

<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/d-archive.html>

また、所蔵資料ではないが、第一高等学校医学部を卒業し三島で医師を務めた池田章 (源作とも、1874-1945) が学生として出席した講義のノートがウェブ上で公開されている。

<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/IKEDA/index.html>

3. 教育用掛図：教育用掛図は明治初年より使われてきた図像資料である。商品として掛図を販売する業者もあり、そこから購入した掛図も収蔵されているが、ほかに、教育機関が教科書の絵を拡大したものを描かせて作った掛図、大正期に至るまで工科の学生には必修であった測定の成果物である実測図のうち、優れた作品を教材として採用し掛図にしたものなども含まれる。一部は修復後に撮影され、ウェブ公開されている。

<http://gazo.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/ichiko/index.html>

4. 卒業生・元教官などに関連する資料も、寄贈を受けて整理を進めており、展示を通じて公開することもある。2019 年までに、東京大学教授を務めた光学機器の専門家、小穴純 (1907-1985)、戦後日本を代表する理論物理学者の一人、戸田盛和 (1917-2010) などに関する展示を実施している。過去の展示の概要は以下のウェブサイトに掲載されている。

<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/old.html>

(岡本拓司)

上智大学史資料室

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町 7-1 (上智大学四谷キャンパス)

Tel: (03) 3238-3294

上智大学はイエズス会を母体として 1913 年に設立された大学であり，理工学部を設置（1962 年）以降は物理学の教育研究においても重きをなすようになっている．当史資料室は上智学院に関連する史資料を所蔵しており，事前の申請により閲覧も可能である．大学の発行物のほか，物理学史に関係するところでは，天文学で業績を残した第 3 代学長土橋八千太（1866-1965）や，量子力学の観測問題を研究した第 8 代学長柳瀬睦男（1922-2008）に関連する資料が例として挙げられる．学部および大学院の各年度ごとの学生要覧・履修要覧も所蔵している．

(稲葉肇)

高エネルギー加速器研究機構 (KEK) 史料室

施設名：

(大学共同利用機関法人)

高エネルギー加速器研究機構 (略称 KEK)

社会連携部・情報資料室

史料室

所在地・連絡先：

305-0801 茨城県つくば市大穂 1-1

TEL 029-864-5100 FAX 029-879-6207

mail: shiryo@kek.jp

ホームページ：

<https://www2.kek.jp/archives/>

概要：

高エネルギー加速器研究機構 (KEK) は、大型加速器を擁する研究機関として加速器の開発、素粒子・原子核物理の研究、物質構造の研究、およびそれらをサポートする様々な技術にかかわる研究・開発を行っており、日本におけるセンターであるとともに世界の研究拠点の一つである。1971年に高エネルギー物理学研究所 (旧 KEK、1971年設置)、東京大学附置原子核研究所 (INS、1955年設置)、「東京大学理学部附属中間子科学研究センター (1978年「実験施設」として設置、1988年「センター」に改組)」を統合して「機構」となり、2004年に大学共同利用法人となって現組織になった。史料室は2002年頃から当時の機構長の提案を受け作業部会を設けて資料の収集・整理の活動を始めていたが、2004年の機構の法人化とともに史料室が正式に発足した。史料室では、機構およびその前身の研究機関とその研究分野に関わる研究者およびその組織の記録資料 (史料) を収集・整理・保管し、必要に応じて機構内部のみならず科学史研究者などの外部の人々の利用にも供している。

利用案内： ウェブページ <https://www2.kek.jp/archives/services/index.html> より

● 開室日時

月曜日～金曜日 9:30～12:00、13:00～16:00

但し、祝日及び年末年始・夏期休業期間は除く。

また、臨時に休室の場合もあるので、事前に確認すること。

● 資料検索の方法

「総研大基盤連携資料情報共有化データベース」

https://www.i-repository.net/il/meta¥_pub/G0000093KEK

から目録の検索ができる。

- 閲覧の申請
事前に、来室日時や閲覧希望の資料名等を、電話・FAX・メール等で連絡して下さい。
- 閲覧について
資料の閲覧は、史料室内の所定の場所で行う。
- 複写の方法、複製物の利用について
資料の複写は、事前の許可が必要となります。資料の複写は、利用者が持参する機器（デジタルカメラ等）で行う（コピー機等での複製は行えません）。複写により作成した複製物を出版物へ掲載又は放映等に使用する場合は、事前の許可と「出版物掲載等許可申請書」の提出が必要となります。
- 参考調査
資料の検索、特定の事項に関する調査または参考文献等の照会を行っています。ご希望の方は、ご連絡ください。
- 連絡先
上記の所在地・連絡先を参照。
- 【史料室利用要項】
その他、ご利用に関しては利用要項
<https://www2.kek.jp/archives/services/siryousitsu%e5%85%b6%e3%81%84%e3%81%97%e3%81%9c%e3%81%91%e3%81%90%e3%81%97%e3%81%9c%e3%81%91%e3%81%90.pdf>
をご確認ください

所蔵資料の概要：

- 学術資料・個人資料
歴代の所長・機構長や退職した職員の書類・メモ類・写真等、また機構内外の個人・団体より提供を受けた資料。
- 刊行物等
KEKの事務部門や研究部門において作成された刊行物、例えば、要覧、月報、広報誌（紙）等の定期刊行物、研究活動に関する報告書など。また、機構の研究活動と関係が深い刊行物等も収集、保存している。
- 写真・映像・図版
KEKの前身である高エネルギー物理学研究所、東京大学原子核研究所（核研）、中間子科学研究施設等の建設時からの写真・映像等資料や、研究機器などの写真・映像、建築物などの図面等。
- 機器遺産
KEKで実施されてきた数多くのプロジェクトで活躍した機器の多くは、その役目を終えた後、廃棄されたり他機関で再利用されたりしているが、歴史的に有用と思われるものはできる限り機器遺産として保存・展示する努力をしている。現在、大型機器は

屋外に、また比較的小型の測定機器や年表、写真などは機構内のコミュニケーションプラザに設けた「KEK ギャラリー」コーナーに展示しているものがある。

(高岩義信)

仁科記念財団

案 内

2003年6月



財団法人 仁科記念財団

し、行われた講演はできるかぎり記録を出版するように努力しております。そして、出版されたものは、できるだけ多くの人々に読んでもらいたいと念願しております。

§ 6. 財団ニュース

- a. 小柴昌俊教授が2002年ノーベル物理学賞を受賞されました。心からお祝いを申し上げます。小柴先生は「超新星爆発に伴うニュートリノの検出」の業績により、1987年度の仁科記念賞を戸塚洋二氏，須田英博氏とともに受賞されています。仁科記念賞受賞者の中からノーベル賞受賞の榮譽に輝かれたのは，江崎玲於奈先生（1959年度）に続いて，二人目になります。
- b. 仁科記念賞の賞牌（写真左）の制作にあたられた彫塑家，澄川喜一先生は，平成15年度日本芸術院賞・恩賜賞を受賞されました。心からお祝いを申し上げます。先生のお写真（右）は平成13年，東京芸術大学学長当時のものです。



§ 7. 仁科記念室だより

仁科記念室では、仁科雄一郎・浩二郎両氏のご努力により、そこに永い間眠っていた仁科芳雄先生の古文書の発掘が進行しています。新しい「発見」の連続のようです。その生き生きとした様子を以下に綴っていただきました。

厩大で栄養になる資料

仁科 浩二郎

我々整理事業班（中根良平，矢崎裕二，仁科雄一郎，浩二郎）は現在、仁科記念室（もと理研37号館2F突き当たり）書類ケースの内容確認を行っています。父芳雄が残した資料に対する整理記録としては、文末に挙げた6つの労作が既にあります。いずれも丹念な敬服すべき集約ですが、今回の作業は資料(2),(3),(4),(5)の概括的記述をもう少し具体化し、各資料の個別性が判断できるようにしたい、というのです。

今の段階で特に我々が注目しているのは、中根を中心として調べが進んでいる父芳雄宛、あるいは芳雄発の膨大な量の書簡で、そこに科学史上の進展を実感することができます。例えば1930年代、父宛て書簡の中で湯川秀樹博士は、「メソトロン」という呼び名を提案しながら中間子研究の状況を語って居られます。間接的な一般的伝聞としてならば筆者もこの史実を認識していましたが、具体的な当事者の言動に接するのは初めてです。

また1940年、大サイクロトロン技術の検証・吸収のために渡辺扶生、飯盛里安両先生と一緒に渡米した矢崎為一先生からの通信は、活き活きと現地科学者との交流を語っています。同先生がローレンス (U.C.Berkeley) のサイクロトロン実験室はもとより、米国の各大学を歴訪なさり、特にボストンでの会議ではラビ、フェルミに会ったこと。フェルミはその時の晩餐会で仁科・矢崎（ほか？）の対称核分裂発見を注目に値すると紹介し、加えて理研グループ（仁科，矢崎，江副，木村，井川）によるU237の発見はBerkeleyによる発見と独立であると語ってくれたので、

矢崎先生は出席者の注目を浴びて、照れたとの報告です（1940年10月書簡、下に掲載）。

理研グループはこのU-237発見の実験では小サイクロトロンを使った訳ですが、矢崎先生が別の書簡では、サイクロトロンビームにおける彼我の電流差をよく克服したものだ、とマクミランから褒められた、と記しておられる。さらに矢崎書簡によれば、マクミランは理研グループがNp発見の長蛇を逸した事実を取り上げ、具体的な分析操作上の考え違いが理由であると指摘したそうです。またBerkeleyの夜のコロキウムでは、矢崎先生がなされた研究説明に対してローレンス、オッペンハイマー、アルバレ、マクミランらが褒めてくれ、セグレ、シーボルクが別刷りを要求したとの事。

以上の便りからは、「日中戦争・太平洋戦争下で産業技術のハンデいを背負いながら進行していた日本の現代物理の発展」という類型的な概念や表現では包括し切れない、奥の深い人間交流を垣間見る思いです。

この5年後に、占領軍が理研サイクロトロン2基ほかを破壊した際に激烈に非難した米国科学者たちの名前もここに現れている。

書簡以外では、父が多くの講演会で示していた宇宙線の霧箱写真も出てきました。1940年ごろ、軍人会館（九段下）の壇上（おそらく『理研映画を見る会』）で繰り返すこのスライド内容を解説・講演していた父を、当時小学3年生であった筆者は思い出します。内容の理解は問題外でしたが、現在に比べてプレゼンテーションの小道具は随分と原始的（大量のガラス製スライドと大型ポスターの連続）だったように思います、会場には詰襟姿の大學生が溢れ、小学生の目からは威厳があって偉そうに見える聴衆でした。

また、広島・長崎の原爆被害調査の一環として、長崎で放射線計測に当たられた増田時男先生の郵便葉書も数枚あります。現地経過を鉛筆で毎晩書き記し、破壊された浦上天主堂の美しいスケッチなども書き添えて、不自由な現地で投函されたものです（敗戦の翌年の1月）。あの食糧難の状況下に現地で重い放射線計測器を担いで回られた、研究室員の労苦が偲ばれます。

我々の作業はすでに10ヶ月を経過し、長期戦の様相を呈しています。傷みそうな

試料をそっと扱いながら、一つずつ内容を確認し、この傷み易い資料の望ましい保存法は何か、と思いを巡らせます。資料が実に多様で、作業班が苦心して編み出した分類基準も、これから当たる記念室内の資料全てに適切とは限りません。諸賢の多くは引越し、ご退官の際の書類整理などから苦い実感をお持ちでしょうが、この種の資料整理では内容を丹念に読み始めますと所要時間がうなぎ上りに増えます。従って心を鬼にして深い検証をあきらめ、作業者の個人差が出ず、曖昧さのない、自明的な整理法はないか、と模索することとなります（整理作業の不確定性原理を認識した最適化!?)。

でも今回の資料は科学史上、貴重な内容を含むことは間違いないと考えられますから、あまり機械的に処理し過ぎては、何のための整理か判らなくなってしまいます。そこで現況をご紹介します、皆様からの声援を頂き、作業の糧としよう和小文をものした次第です。（2003年5月11日）

【参考資料】

- (1) 岩城、玉木、島村、竹内（一）、矢崎（裕）、「3号館仁科資料の内容一覧」第2版（1991年3月）、
- (2) 竹内（一）、「記念室メモ」、1987年、第1版、その後1988年に2回改訂、
- (3) 竹内（一）、「仁科記念室A-3-6 資料」1991年5月、
- (4) 編者なし（竹内（一）と推察）、無タイトル、B4版、引き出し内容図（碁盤の目に記入、（2）の補足資料と思われる）
- (5) 竹内（一）、矢崎（裕）、「仁科記念室 B-2-7 資料」、1991年4月（芳雄の学習ノート：コペンハーゲン時代のコロキウムノート、およびハンブルグ留学時代のノートなど）
- (6) 竹内一、矢崎裕二「仁科芳雄博士に関する資料の現状」日本物理学会誌「仁科芳雄生誕百年記念号」1990, 45, 10月号, 766

[注] 今回の整理対象を（1）の流儀で表現すると、「37号館仁科資料」となりましょう。

仁科記念財団

案 内

2004年4月



財団法人 仁科記念財団

§ 6. 財団ニュース

- a. 当財団理事長の西島和彦先生は、平成15年11月、文化勲章を受章されました。おめでとうございます。
- b. 長い間、当財団の評議員をおつとめ下さいました山路敬三氏は、平成15年12月26日にご逝去されました。ご冥福をお祈り申し上げます。

§ 7. 仁科記念室だより

仁科記念室では、昨年に引き続き、永い間眠っていた仁科芳雄先生の往復書簡の発掘が進行しています。新しい「発見」の連続のようです。その生き生きとした様子を以下に綴っていただきました。

仁科往復書簡の整理：出版計画の進展

2004年3月14日 仁科 浩二郎

当冊子の昨年版でお知らせした通り〔1〕、仁科記念室の抽斗（書類ケース）に大切に保管されて来た諸資料に対して、新たな整理作業が2002年6月以来進行中です。整理中の数々の発見から思い当たるトピックについては、上記の文でご紹介したのですが、早くも1年が経過しました。そこでその後の展開についてご紹介します〔2〕。また昨年で紹介文にあった誤り1ヶ所を訂正してお詫びし、ご指摘に対してお礼を申し上げます。

この1年間、われわれ整理作業班（中根、江沢、矢崎、仁科雄一郎、浩二郎、ほか）は前年に引き続き、多量の諸資料に目を通す作業を根気よく続けました。それと同時に、父芳雄が交わした往復書簡に対する出版計画が具体化し、動き出しました。実はこれが一番、大きな動きです。

すでに前回の紹介文でもその一端に触れましたが、この膨大な量の書簡が交わされた相手は、仁科研究室メンバー・国内外の科学者・企業技術者・業界担当者・行

政担当者など広範・多岐にわたります。その書簡内容を見るに付け、我々は当時の物理学発展の背景にあった、生身（なまみ）の人物群の活動や接触を身近に感じるので。このような科学史的に意味のある内容を活かすには、一方では時代を超えて保存に耐えるような整理・記録が大切ですが、同時になるべく早くこれを一般社会に示して若い世代層にアピールし、科学志向の興味を喚起すべきであると痛感したのです。そこで一般書店での販売に向けた出版物を目指して、現在、その形態を整えるべく計画が立てられ、準備作業が進行中であります。

我々のこの出版願望を具体化し、一層の弾みを付けて下さったのは何と言っても、昨年5月から整理作業に加わって頂いた学習院大名譽教授 江沢 洋先生です。先生はこれまでも父芳雄や朝永振一郎先生に関する史実の紹介に努力され、特に芳雄に関しては丹念なサーベイに基づいて年表を作成されています。今回、先生は整理作業に参加された直後から精力的に上記書簡のサーベイをなさり、お蔭で作業には格段の記録性と momentum が加わりました。

さてこの出版物を実現するには、まず記載する書簡を選び出さねばなりません。第1段階の選択対象として挙がった書簡はざっと1,000通の多きに達しました。実は記念室にはさらに多くの書簡が保存されています。その中から、掲載候補として中根・江沢が選び出した書簡が、このような数になったのです。更にこの中から、全員による第2段階の選択によって本格的に選ばれたのが、現在のところ900通強であります。そのボリュームがお察し頂けるでありましょう。完成させる出版物は、上下2巻。必要な場合には各書簡の背景について解説をつける。外国語の書簡（芳雄の発信分も含む）は、翻訳して記載する、などの方針を立てました。そして翻訳の対象となる書簡はざっと約380通に及びます。

このように多量なので、内容が重複する複数書簡については、一つを残して割愛せざるを得ないのではないかと、とも考えました。しかし例えば日本降伏の1945年に米軍が実行したサイクロトロン破壊に関して、芳雄はその翌年、嘆きの書簡を米国の K. T. Compton, A. H. Compton, Lawrence, Rabi, Condon, Urey, Smyth らに送っています。当然、そこでは文の内容がかなり重複します。しかし、これらの相手はそれぞれ大きな影響力を持つ科学者であり、それを反映して各人の返答書簡にはそ

れぞれの特徴が見られます。そこで割愛し難く、今のところ多少の重複はあっても記載する方針であります。

財団は2005年で設立50周年を迎えます。なるべくこの節目に、この出版物を皆様にお目に掛けたい、と目標を立て、作業の日程、並びに翻訳・解説の分担を決めて、これに取り掛かり始めたところです。

ところで、この多量の書簡に接するにつけ、筆者は次のような芳雄の行動を思い出しています（しばらくの回顧談をお許し願います）。今、仮にあい対立する（あい争う）二つの主張、または課題A、Bがあって、どちらを採用するかについて彼の決断が期待されている、とします。その選択によってどのように対立を解決するのかと固唾を飲んで見ていると、両者をより基本的な観点、またはより正直な人間の感情に立ち返って眺め、難題をよく消化して両立させるような解決策を打ち出すのでした。それを見て『難しく考えなくても良かったのだ』と自分は安堵し、緊張が氷解しました。そのような場が、戦中・戦後に何度かあったのです。

当時、年少であった自分としては、推測に頼るより仕方がないのですが、「研究隣組」という構想も、その種の知恵の例になるように思います。現在の固定観念からすれば、『研究』という、自由であるべき行動と、『隣組』という規制の伴う体制は相容れない、と考えられがちです。ところが、戦後も戦後1970年代になって『学際領域』での研究者接触の重要性が力説され始めた時、杉本朝雄先生が、『戦争中の研究隣組の概念は有用であった。今、活かされるべきだ』と書かれたのを目にしました。恐らく研究の狭い殻に閉じこもらないで、お隣りの分野とも接触しなければ、という趣旨で戦争中にこの概念の必要性を芳雄が力説したのでしょう。その時、隣組という当時の日常用語をタイミング良く流用したと推測されます。このような言葉の使い方と行動は『言葉のすり替えだ』と怒る向きもありましょうが、芳雄自身は事によると、当時、すり替えとは夢にも考えず、案外、大真面目だったのではないかと時々、今でも思うのです〔3〕。

このような流儀のコツや秘密が、この書簡類の整理作業を通して会得できることをひそかに筆者は期待しています。竹内証先生が戦争中、軍との交渉に関して芳雄から『君らは裏門から行くからいけない。正々堂々と表門から行け』と言われて困

った、と父の没後に、ある座談会で話して居られます〔4〕。そのような流儀とも無関係ではない、と思います。このような明るさのコツも書簡類の中から何か実感できるかも、という期待を持っているのです。

ところで隣組と言えば、すぐ空襲と防空訓練を思い出します。たまたま当原稿を書いているのが3月10日、そして書いている場所は、同夜の東京大空襲で標的となった本所・深川に近い、東京近郊の宿泊施設です。毎年今ごろの時節に、強くなり始めた陽射しと強い乾いた風を感じると、その気配からあの東京大空襲の大火災を、そして同夜の芳雄の興奮振りと素早い行動とを思い出します。自分はその火災で亡くなられた方々のご冥福を祈り、我々生存者は残る人生を有効に生きなければ、と自戒するのです。

なお前回（2003年版）の拙文では、1940年に渡米された矢崎為一先生に対する同行者の一人として飯盛里安先生を挙げていました。しかしこれは飯盛武夫先生の誤りでした。元来、同稿に挿入した矢崎書簡の写真を注意深く読んで、その言葉使いに注意すれば、これに気付く事ができた筈でした。つまり同書簡で矢崎先生は『飯盛君』という言葉を使って居られます。矢崎・飯盛里安両先生のご年齢を考えれば、飯盛里安先生を矢崎先生が君づけで呼ぶ事は有り得ない：つまりご長男の飯盛武夫先生だと気付くべきでした。お詫びして訂正し、ご指摘くださった富田功先生に感謝申し上げます。

- 〔1〕 仁科浩二郎、「歴大で栄養になる資料」、仁科記念財団案内 2003年6月版 pp. 17～20.
- 〔2〕 1937年、新粒子発見当時の原稿の一部を末尾に示す。
- 〔3〕 それは、本郷区駒込曙町19番地の隣組組長を務めたときの父のやり方から思い当たるのです。
- 〔4〕 朝永、山崎、竹内、坂田、中山、玉木、「仁科先生を偲んで」「自然」1951年4月号



新粒子の発見

仁科芳雄

緒言

H.J. Rutherford, W. Heitler: Proc. Roy. Soc. A, 175 (1937), 432.

J.F. Carlson, J.R. Oppenheimer: Phys. Rev. 51 (1937), 220.

宇宙線粒子の有つエネルギーの範囲を遙に超えて居る。吾々の豫想外の発見に等しい。例へば陽電子の発見の如き。

従つて、その研究はこれ以上の起るべき現象は吾々の従来の経験し得ぬ新しいものがある。

又はシャローの現象(1)これである。これに與つてあることはこれ等は皆それの発見である。爲に理論的には豫言せられたものである。最近に至つてこれと類似の色(2)を発見した。

陰陽電子の電流を測定するに際して陽電子の発見がなされた。

又宇宙線研究の收穫として成し遂げられた。且其存(3)至は三年(4)も前に吾が湯川秀樹氏によつて豫言せられたかの事(5)は愉快に絶へない。日本の物理学界(6)は斯(7)に携(8)はる角(9)の心持(10)によつて芽を萌(11)きぬる様に思はれる。この(12)萌芽を(13)廣く(14)に(15)散(16)ら(17)せ、空(18)に(19)舞(20)ゆ(21)る(22)大木(23)と(24)させ(25)度(26)い(27)もの(28)がある(29)。

宇宙線の本質

此内題は宇宙線の祭目

である。處(30)は(31)最(32)の

Carlson ->

仁科記念財団

案 内

2005年4月



財団法人 仁科記念財団

§ 5. 財団出版物

公開講演会は、仁科記念財団の重要な事業の一つですが、その講演会に来聴できなかった人のためにも考えるべきであり、講演記録をぜひ出版する必要がある、というのが、初代理事長渋谷敬三氏の強い願望でした。われわれは講演会活動を活発にし、行われた講演はできるかぎり記録を出版するように努力しております。そして、出版されたものは、できるだけ多くの人々に読んでもらいたいと念願しております。

§ 6. 財団ニュース

財団設立50周年事業

2005年は本財団設立50周年に当たりますので、それを記念して講演会等の行事を行うこととしています。

訃報

長い間、本財団の評議員をおつとめ下さいました宮憲一氏が2004年4月8日に、理事をおつとめ下さいました平野龍一氏が2004年7月16日にご逝去されました。ご冥福をお祈り申し上げます。

§ 7. 仁科記念室だより

仁科記念室では、一昨年に引き続き、永い間眠っていた仁科芳雄先生の往復書簡の発掘が行われ、それらの出版の準備が進んでいます。

仁科往復書簡の出版準備作業の進展(2)

2005年3月22日 仁科 浩二郎

表記の準備作業の現況を昨年の続報として簡単にご紹介します。2003年以来準備

中の書簡集はその後、更にページ増加が予想されております。これは父が戦争直後にGHQ向けに提出した書類、およびそれに関連する米軍側記録が、長年月を経過して国会図書館資料として公開されており¹、これを何らかの形で含めることを作業班で決断したためです。この資料から読み取れる史実は、(1)サイクロトン破壊前後の経緯と、その後の父の往復書簡、(2)戦時中の「二号研究」に関する米国側科学者の調査資料、などが典型的なものです。

結果としての増ページは極力抑えるべく、これ以前に採用決定された書簡も併せて、各書簡の冒頭・末尾にある共通フォーマット部分をなるべく切り詰めるなど、工夫がなされています。出版時期としては、目標として財団設立50年に当たる、今年12月の仁科賞授与式の懇親行事で、出席者に完成品をお見せするべく、努力中です。

この種の書簡集の前例が作業班の中でしばしば話題になるのですが、最近では紅野敏郎氏による志賀直哉宛書簡の整理・収録の記事が目につきました²。今回の芳雄書簡整理を行なっている当筆者には、この記事に綴られた当事者の苦心が、以前よりつぶさに想像・理解できた次第です。

さて具体的な進行状況を、目下の定量的なデータからご紹介しますと、

- (1) 和文往復書簡については、ゲラ刷り第2版の段階にあり、ざっと書簡数は950、ページ数はB5版で550に及びます。現在、ここに盛られた史実が正しく読み取れるように、江沢洋先生が解説及び注の執筆中であります。
- (2) 欧文書簡の方は、特定の発信人（芳雄を除く）を一人の翻訳者が担当する方針で翻訳分担を決めました。現在は訳の第1段階が殆んど終了したところですが、今後は複数担当者間での各種の統一や整合を取ることで、和文書簡と合併の上での内容付き合わせ、あるいは複数書簡に及ぶ特定話題の流れ一貫性確認などが必要でしょう。

1 江沢洋先生のサーベイによる。

2 紅野敏郎、「志賀直哉宛書簡4,500通日本近代文学館へ」読売新聞（夕）2005年3月15日 東京版第2版 p.4.

以上の経過中に当筆者が改めて強い印象を受けた事項を幾つか申し上げます。

(あ) Bohr 教授が来日して行なった講演については、その学術的な効果を含めて、既に様々の場で語られておりますが、この実現に向けて注いだ芳雄の努力は気が遠くなる程、根気の要るものでした。まず、欧州滞在中（1928/1/27）に長岡半太郎先生に宛てた長い候文で、近々 Bohr が米国他を訪れるから、この機会を捉えて日本へも招いてはどうか、と勧めたのが始まりの模様で、³これは既に玉木英彦先生も語られています。興味深いのはその勧める理由で、(1)日本の物理界が受けると予想する刺激。(2)Bohr の門下からは多数の新進研究者が輩出し、彼等からも Bohr は人望がある、と言う事実。(3)物理・化学分野の日本人留学生を親切に世話してくれた事に対するお礼、でした。

その後、1928年末に芳雄が帰国して以来、1937年の Bohr 来日が実現するまでの約8年間を、彼は招聘実現に向けた説明・説得・周知・根回しに費やしています。その間、昭和初めの経済大恐慌は、長岡先生による招聘費の工面に影響し⁴、またよく知られた通り Bohr 教授のご長男 Christian の事故死のため⁵来日が延期されるなど、紆余曲折がありました。

その他、現在の社会状況から見て一般的にも興味深いのは、当時の欧州からの旅行手段です。所要時間約40日のインド洋廻り船旅に比べて、シベリア鉄道の方が時間が短く、2週間強。これを利用する例もかなりあった筈で、1929年にアメリカからの帰路に訪日した Dirac（英国）は母国への帰路としてこのシベリア経路を選択した模様です。その片道1等運賃は当時の英貨で500ポンド。食事と寝台料金は含まれない。計画を助ける意図から、芳雄はシベリア鉄道とインド洋廻りの客船について旅行社並みの詳しさとで解説し、所要時間、運航日程、料金に関する資料を Bohr 教授宛てに郵送しております⁶。

さて話を原子物理関連一般に戻しますと次の各点が強く印象に残りました。

3 玉木英彦、「仁科 芳雄の果たした役割」日本物理学会誌 45, p.755 (1990).

4 1934/3/21 Bohr 宛て書簡

5 1934/8/2 Bohr 夫妻宛て書簡

6 脚注4の書簡

- (い) 初期宇宙線観測の始動に伴う実験機器・器具整備の苦心,
- (う) 郵船会社, 企業技術者, 関連省庁への実験内容に関する懇切な解説と, 丁寧な協力依頼。
- (え) 湯川, 朝永両先生との中間子質量, その他に関する討論, 検討
- (お) 研究所などを見学訪問した際 (例: 1923年に Siegbahn の実験室ほかを見学) の, 迅速な礼状の出し方。この種の礼状は海外旅行の場合, 直後に出さないと累積して困惑することを筆者はしばしば経験しています。ところが芳雄の場合は下書きとは言え, 宿所に戻ってその日の内にスカンジナビア方面への礼状を5通も書いた模様です。要するに筆マメであり, 当筆者がしばしば, 「感じた事をありのままを正直に書けば, そんなに時間はかからない筈だ」と叱咤されたのを, 思い出しています。

さて本プロジェクトの原点にある願い, つまり物理に興味を持つ次世代が多く育つことを願う観点から, この書簡集を改めて見直すのでしょうか。ここに盛られた原子物理実験の始動段階の興奮や苦労は, 恐らく大学生・高校生なら, 興味を以って読んで貰えるのでは, と思います。更に教える側として理科教育に苦心してられる方がたには, 講義の枕に使える話題も含まれている, と思います。では現在, 物理実験に従事して居られる次世代研究者の方がたにとってはどうでしょうか。時代を経て実験の内容は当然変わったとは言え, 一般に実験の初期段階の苦労は, 色々な意味で時代を超えて類似の感慨を覚えることが多い, と筆者は感じて居ます。それに芳雄は当時としては恐らく異例と言えるほど, 学者コミュニティーの外にまで, 接触を試みているのが, 何らかの意味で現在に参考になり, 力を得て下さるのではと愚考しております。以上の意味で, 今回の出版の意義を改めて感じております。

どうか今後も皆様のご理解とご支持を頂くよう, お願いする次第です。

(回顧): 今年は昭和20年3月10日の東京大空襲以来, 60年目であり, この原稿を準備中の3月21日13時05分から105分間放送されたNHK TV スペシャル「東京大

空襲を伝える」は、例年以上に資料の厚みを感じました⁷。芳雄は常々、「ハンブルグの大空襲で取った戦法を連合軍側は、絨毯爆撃という呼び名で呼んでいる」と話し、「日本でもその戦法を取るかも知れないぞ」と家族に警告していたのを思い出します。実際、ルメイ将軍が3月10日に採った戦術には、このハンブルグ大空襲に加えて、直前のドレスデン空襲との共通点が見出されます。

7 この番組で紹介された米軍側の情報は、色々の点でE.パートレット・カー著、大谷勲訳「東京大空襲」光人社（2001年）の内容に一致していました。

仁科記念財団

案 内

2006年4月



財団法人 仁科記念財団

§ 5. 財団出版物

公開講演会は、仁科記念財団の重要な事業の一つですが、その講演会に来聴できなかった人のためにも考えるべきであり、講演記録をぜひ出版する必要がある、というのが、初代理事長洪沢敬三氏の強い願望でした。われわれは講演会活動を活発にし、行われた講演はできるかぎり記録を出版するように努力しています。

2005年度は財団創設50周年に当たりましたので、これを記念した印刷物を次のとおり発刊しました。

「仁科記念財団50年の歩み」歴史的文書、講演会、助成金等の記録
「Nishina Archive」Original paper 5 編、「科学」(1937年別刷り) など
「仁科芳雄－核物理誕生に立会った人－」(1990年、IBM社「無限大」別刷り)
「仁科博士とその時代」鎌田甲一著 (2004年、「IsotopeNews」)

2006年度には、次の印刷物を発刊する予定です。

「仁科記念賞で見る物質科学の進歩」伊達宗行著 (NKZ-43)
「仁科芳雄と日本における素粒子物理学の原点」西島和彦著 (NKZ-44)
「The Klein-Nishina Formula & Quantum Electrodynamics」楊振寧著 (NKZ-45)
「仁科芳雄往復書簡集」みすず書房、3分冊
「仁科記念財団講演録集」シュプリンガー・フェアラーク東京
「仁科記念財団案内」英文版

§ 6. 財団ニュース

2005年は本財団設立50周年に当たりましたので、前掲のように記念講演会、記念出版を行うとともに、財団運営にご尽力をいただいた方々にご案内をし、記念パーティを開催いたしました。



江崎玲於奈理事のスピーチ



伏見康治顧問の乾杯



西島和彦前理事長夫妻に花束を贈る山崎敏光理事



歓談中の上坪宏道氏、小柴昌俊氏

訃報

長い間、本財団の常務理事をおつとめくださいました鎌田甲一氏が2005年4月24日に、評議員をおつとめくださいました藤井忠男氏が2005年12月5日に、監事をおつとめくださいました小山五郎氏が2006年3月2日にご逝去されました。ご冥福をお祈り申し上げます。

§7. 仁科記念室だより

仁科記念室では、一昨年に引き続き、永い間眠っていた仁科芳雄先生の往復書簡の発掘が行われ、それらの出版の準備が進んでいます。

仁科往復書簡出版準備の進展(3)

2006年4月26日 仁科 浩二郎

当作業も最終段階に入りました。思えば2002年夏の活動開始から、間もなく丸4年です。当初の意図は「記念室にある多量の歴史的資料・書簡を整理・公表し、科学史上の考証に役立てて記念財団創立50周年に相応しい収穫とする。これによって創立以来、ご支援頂いた皆様に対する感謝のしるしとしよう」、というものでした¹。従って「書簡集」という形態で公表、と決めてからは「2005年12月に完成・発行」が大目標となっていました。しかし作業班が真剣に努力をすればするほど、ますます新資料・新事実が加わって新しい観点や課題を生み、この期限目標は果たせませんでした。そこで本年12月までに今度こそ完成、という意気込みであります。

この状況下で、同出版物に載せる書簡の範囲も遂に決まりました。今後、解説や図を含めた組み方により多少の変更はあり得ても、総量は1,800ページ程度、3分冊、という予定であります。山崎敏光新理事長の紹介文^{2,3}、江沢洋先生の紹介文⁴、ならびにこの出版に向かって準備を進めておられる「みすず書房」からのチラシ⁵をご参照ください。

1 その構想を最初に私共に説かれた鎌田甲一先生が、当事業の完成を待たずに昨年4月に亡くなられ、痛惜に堪えません。

2 山崎 敏光, 物理学会誌 60, No. 10 (2005), 817—818 談話室

3 山崎 敏光, 本冊子「理事長あいさつ」

4 江沢 洋, 物理学会誌 61 (2006) 192—194.

5 みすず書房のチラシ「仁科芳雄往復書簡集」。ここには書簡の差出人名(日本人74名, 海外研究者39名)がリストされている。後述の財団創立50周年記念講演会(12/6/2005; 東京神田駿河台)の会場, および上野科学博物館展示「仁科芳雄と原子物理学のあけぼの」(11/12~12/18/2005)の会場で配布された。

さてこのように大部となりますと、当書の性格も最初の想定から変化しました。当初は、理科志向の次世代層が、一般書店の書架で本書の書名を見て興味を持ち、手に取ってページを繰り、購入を決断する、という場面を想定したのです。書名もそれに相応しいものを、と心がけていたのですが、今やとても個人の興味から購入を即座に決めるという規模ではありません。学校、図書館に参考図書として備えられるのを期待しよう、という性格となりました。そこで書名に就いても、みずず書房を入れて相談して、「仁科芳雄往復書簡集—現代物理学の開拓」と正統的なものに落ち着きました。

次の課題はその販売価格です。膨大な書簡集となりますと、当然、価格が売れ行きを支配するでありましょう。そこで財政的な助成を得て、価格を現実的な範囲に抑えたいという方針から江沢先生のイニシアティブで、文部科学省の科学研究費助成、「研究成果公開促進費」に対する申請が提出されました。そして有難いことに4月中旬、交付内定の通知がありました。作業班一同、当出版事業の意義が認められた事を喜んでます。

以上、4年を要した書簡集の整理・公開も大詰めに近付きつつあります。作業班一同、この間に皆様から頂いた激励、ご支援に感謝するとともに、これから完成前の校正など、作業に最後のヤマがあることを覚悟し、心を引き締めております。

次にこの場を借りて、財団50周年記念行事に関した話題・感想を2、3述べます。脚注3の山崎先生挨拶、および財団ホームページの紹介欄にある通り、記念行事としては、

- (1) 神田駿河台 日本大学理工学部1号館における講演会（12月6日；伊達宗行選考委員長、および西島和彦前理事長の講演）
- (2) 上野 国立科学博物館における記念展示
- (3) 岡山 国際交流センターにおけるヤン博士の講演

が催されました。(1)のご講演では、伊達・西島の両先生とも朝永先生以来の財団講演スタイル、つまり平易な言葉で説明なされたので、物質科学、素粒子物理のいずれにも門外漢の筆者も内容を理解した気分となりました。伊達先生が話された物質科学は、父の他界後に本格的な発展を見た分野、と言えましようが、その流れの眺

め方について懇切な解説を頂きました。また西島先生による素粒子物理のお話では、他界後55年にもなる父の名を含めた斯界の歴史を伺えて、改めて有難く思いました。

この駿河台の会場では同時に、1935～1940年の仁科研究室による投稿論文5篇(コピー；内容は中間子発見，U-237の発見，対称核分裂の発見)を綴じた小冊子が⁶配付されました。筆者に思い出が深いのは、これら5篇(脚注参照)の内、特に第2篇に記載されている中間子飛跡の写真です。今、改めて読みますと直径40cmの霧バコ中に5cm厚の鉛板が置かれ、その表面から新粒子の飛跡が始まり、この鉛厚さと同程度の半径で円弧を描いています。父はその頃一般向けの科学講演会となるとスライドでこの円弧の写真を示し、質量の値に言及していました。筆者が小3～小5の頃と思います。数回、これが九段の会場⁷で続いたので、父がこの写真で喜んでいる事が分かりました。しかし小学生の筆者にとっては、霧バコまたはサイクロトロンで用いた磁石の鉄心重量を父が口にした時に、聴衆の大学生さん達が洩らした嘆声の方が分かり易く、嬉しかったのを覚えています。

ところでこの冊子によればU-237や対称核分裂が日本人によって当時、既に発見されていた事になります。その結果は現在の原子炉設計、あるいは核分裂生成物の収量計算に使う入力データの間接的裏づけになっている筈です。しかしそれを使う原子力関係者は、あまりこの歴史を認識していないかも、という感慨を持ちます。

また(2)の博物館展示では、長岡半太郎先生の大学時代のノート(科目は確か電磁気学、あるいは物理学)が英語で書かれているのに驚嘆しました。その頃の先生の意気込みと、自負を見る思いです。更にこの会場で床に示された大サイクロトロン心臓部の図面、および手に取ってめくる事が許されたサイクロトロン図面帖の2点が、関係者のご厚意とご努力でそっくりそのままレプリカに作成され、岡山県里庄町(父の郷里)にある展示館「仁科会館」に展示される運びになったと知りました。

6 「仁科研究室の輝かしい研究成果 論文特選」。著者名を省略しますと、次の5編です。(1) Phys. Rev. 52 (1937) 1198 (2) Phys. Rev. 55 (1939) 585 (3) 「科学」7 (1937) 408 (9月号) (4) Phys. Rev. 57 (1940) 1182 (5) Nature 146 (1940) 24L.

7 軍人会館。今の九段会館か？何回かは「科学映画(理研映画)を観る会」の中でした。

同会館の佐藤泰徳館長さんから知らされた嬉しいニュースです。筆者としても戦争中に疎開で一学期間、滞在した懐かしい父の郷里にこれらが展示され、町の児童らが見てくれるのを想像し喜んで居ります。（2006年5月13日）



2005年夏、仁科サイクロロンの青図が多数見つかる。説明中の中根良平常務理事。

仁科記念財団

案 内

2007年4月



財団法人 仁科記念財団

§ 6. 財団ニュース

2006年12月6日、仁科芳雄博士の誕生日に2006年度仁科記念賞の贈呈式を行い、その後に受賞者を囲み懇親会を開催しました。



2006年度仁科記念賞受賞者の方々

訃報

長い間、本財団の理事をおつとめくださいました千速見氏が2007年1月22日にご逝去されました。ご冥福をお祈り申し上げます。

§ 7. 仁科記念室だより

仁科記念室では、長い間眠っていた仁科芳雄博士の往復書簡の発掘をし、このたび「仁科芳雄往復書簡集」(全3巻)として発刊しました。記念室に保管されているこの他の資料についても学術的な価値が高く貴重なものが多いので、理化学研究所等の協力を得て、引き続き資料の発掘、整理を進めるとともに、その利用についても検討をしていくこととしています。

ついに仁科芳雄往復書簡集が完成

2007年4月17日 仁科 浩二郎

遂に「仁科芳雄往復書簡集」が出版されました。第1巻、第2巻は昨年（平成18年）12月6日の財団懇親会で披露され¹、第3巻は少し遅れて本年2月末の出版。振り返りますと2002年夏に記念室書簡の整理作業を開始して以来ほとんど5年です。翌年5月に江沢先生が参加され、出版を強く提案なさってから4年を経過していました。当欄での筆者の作業報告も今回、5回目で最終回となりましょう。

この出版事業への参加は、息子にとって父の再発見につながり感慨深いものでした。お手伝いをする機会に恵まれた事を心から喜んでおります。根気が要求される実際の作業に際して、驚くべきエネルギーと独自の見識を以って当られた江沢、中根、矢崎の各先生に感謝申し上げます。時代の流れに思いを巡らせましても、戦前、戦中、戦後の研究環境をご存じの方々が時代と共に少なくなりつつある当節、恐らくこの種の整理・出版を行うには最後のチャンスと思われた節目（財団設立50周年）を捉えて、当計画を決断・ご支援下さった財団のご英断を誠に有難く思います。

書簡集完成のご報告に関しては、事業の先頭に立って作業を推進された江沢先生ご自身が当冊子に文を書かれる、と聞いて居りますので、当欄ではやや斜めからの記述姿勢をとり、全3巻という大資料を読む際のきっかけとなる内容、あるいはトピックスを2、3拾ってみました。

(1) そもそも仁科芳雄の生涯： 仁科芳雄という人物についてあまりご存知ない方、たとえば物理学以外、文系、あるいは次世代の方々は、むしろ第3巻の【解説】からお読みになるのも一法と思います。この【解説】は江沢先生によって簡潔に書きこなされた力作であり、その上、故人の数式筆跡、サイクロトロン²の部分的図面など、初めて紹介される詳しい資料も含まれ、最初の導入として好適でありましょう。

(2) 湯川秀樹先生の間の子予言、並びにその実験的検証の努力： 湯川先生によ

1 当日は財団設立51周年にあたり、仁科賞授賞の会場に前述の2冊が置かれ、ご来席の皆様が手に取ってご覧になった。

る中間子の予言は、第3巻にある【年譜】によれば1934年11月となります。これに対する国外での反響、そしてその反響に関して湯川と芳雄が意見を交わした書簡を辿ることができます。さらにその粒子の実験的検証の努力も、辿れます。

具体的な理論に関する流れについては、第3巻の事項索引、並びに第3巻の【解説】(江沢)の中、p.28、第4.5.2節【湯川粒子】に述べられた進展を追えば良いと思われまゝ。私はむしろ実験側に注目し、仁科研究室で中間子に相当する飛跡を見出そうとした努力を追ってみました。具体的には竹内柁先生が、横須賀海軍工廠の潜水艦用電源を利用して行なった実験です。つまり霧箱に強力な磁場をかけ、その磁場中の飛跡からこの新粒子の質量を決定しようとされた、と想像します。第2巻目次で竹内・仁科の両者を冠した書簡を探しますと、番号513, 515, 516, 536, 552, 616, 629, 679, 803, 805が見付かりました。これらの中には、実験の初期で装備を立ち上げる段階(「ゴム管、フィルムを届けて欲しい」という訴え)のものまで含まれています。また、この質量測定結果を、芳雄が湯川及び坂田への書簡中で言及したのは617, 619です²。

横須賀で実験中の竹内は、海軍の厳しい時間管理に合わせて研究をしていたとの事で、理研の自由な研究時間に慣れた先生には、実験室の利用時間を厳格に守るのは苦痛であったかも知れません。実験用の各種資材・道具を入手するにも、区域内への出入り管理のためにままならず、焦りが感じられます。また芳雄の方でも、各種の学術誌発表や他の研究室員との討論のために早く質量値を入手したいと訴え、これまた焦りが伝わって来ます。

(3)山崎文男先生の鮮明な記述：今回、当書簡集が提供した貴重な資料の一つに、山崎文男日記があります。その克明、率直、真剣な文体を読んで、私は空襲下の東京における当時の自分の生活感情が再現された思いでした。

特に今回、目に止まったのは、その空襲下の研究生活に関する部分でした。昭和20年(1945年)2月12日付けで記された、研究方針・研究スタイルに関する研究室内の議論です。大サイクロ建設のように、常に大きい装置の建設に精力を集中し

2 この前後、竹内夫人の回顧談を参考としました。

た方針のために、自分は何も研究成果が論文としてまとまらない。とに角、論文をまとめて学位が取りたい、と訴える一先生、これに対し、当面は戦争の役に立つ事をしなければならぬ、と述べる他の先生など、様々の考えが正直に述べられています。

米空軍の夜間大空襲（3月）方式は未だ始まっていないものの、昼間の空襲は行われていた2月です。一般世間では余裕のない心理状態にある中、研究所内では真剣にこのような議論がなされていた、ということに、私はむしろ救いを感じました。さらに日記中、別の月日の項では、「今後、若い人がこの研究室に参加しても、現況では業績を挙げることができず、魅力を感じないだろう」、と憂える発言があったと、書き留められています。

議論内容は異なりますが、研究方針に関する研究室内でのこの種の議論は、私は1970年代、紛争直後の大学で盛んに経験したのを思い出します。むしろ昨今、国立大学が独立行政法人化した状況で、大学は以前よりも大変、せわしいようにOBとして遠くから観察しますが、果たしてこの種の議論をする余裕が今はあるのか、と感じたりしております。

（4）語学学習（渡航準備）に関する力説： 書簡13はコペンハーゲンに滞在する芳雄が、岡山県倉敷市の姉に送った書簡です。以下に述べる意味で、芳雄の面目躍如たるものがあります。当時、留学3年目に入った芳雄は、姉の嫁ぎ先から定期的に留学滞在費の小切手を受け取っていた模様で、その受け取りの連絡と礼文が内容の第1です。しかし極めて簡単なその礼文のあと、対照的に第2の内容としての、外国語学習に関する系統立った解説が延々、便箋の6～7ページにも及んでいます。つまり第2の内容に、圧倒的に多くのエネルギーが割かれています。この説明の動機と言え、文面から察する処、姉が嫁ぎ先からの意向も兼ねて、「仮に今、欧州へ洋行するとしたら、どの程度の語学準備が必要か」と問い合わせたことにある模様です。

芳雄は、①洋行に際しての特定目的の有無、②洋行期間の長さ（1年以内か）、③仮に特定目的ありの場合、外国人との直接対応の必要ありや、④欧米各国を巡歴するか、などの場合分けを行い、それぞれの場合に応じて対策を提案しています。

例えば、○直接の応対が予定されるなら、余程の修練が必要だから、日本に居る間に外国人に習え、○行き先で一国にのみ留まる予定ならば、渡航した後に、現地でゆっくり習えば上達が早い。○「読み書き」を学ぶならば日本でも渡航先でも、さほど差はないが、「話す」ことだけは雲泥の差がある。日本での1年分の習得をロンドンなら1ヶ月で達成可能、云々。

これを眺めますと、その文の長さと言得の熱っぽさのために、当時の読み手は読み疲れたのでは、と苦笑します。洋行に抱いていた姉、義兄たちの夢も、この芳雄からの返答で、一度に醒めてしまったのでありましょう。その後、洋行が実現したという話は聞いていません。

この例のように、さまざまの事例を尽くして論じる解説文、力説文は、芳雄が定石とした模様です。例えば第3巻にある【解説】の第2章「物理を選ぶまで」では、中学生の弟、正道に宛てた芳雄の手紙のスタイル(p.5)が紹介されています。ここでも如何にして中学での予習、復習を実行すべきか、参考書と学校の学習をどう捉え、位置付けるべきかを説いています。実際の手紙はこの【解説】での引用部分よりもずっと長く、郷里の里庄町では小冊子に印刷して生徒に配布している模様です。その冊子文には、「試験前夜の一夜漬け勉強で、翌日の試験の成績を上げよう、などと努力するのは、先生に対して自分の学力を実際以上に良く見せようとする詐欺である」という有名なくだりがあります³。そのような気概・習慣がこの書簡13にも顔を出しています。

以上4例、この大部の書簡集を読むに当たってきっかけとなりそうな、眺め方をご紹介しました。元来、書簡集とは史実解釈の原点であって、利用・理解の仕方は読者の動機によって幾通りも存在する筈ですから、単なるご参考までです。

ところで、この書簡集が出版されて間もなく、この書簡集に記載された書簡のオリジナルは、どこで見られるのか、というお問合せが寄せられました。我々、編集

3 大学生になってからも、芳雄は依然、そう考えただろうか。

に關与した者もこれに具体的にお応えするには、どうすべきか、その實現方法を予備的に話し合い始めております。しばらく時間を頂きたく存じます。この作業を始めればまた、かなりの継続作業を要します。どうか皆様のご理解とご支援をお願い致します。(2007年4月26日)

仁科芳雄先生は生きていた

江沢 洋

こんど『仁科芳雄往復書簡集』全3巻を刊行したが、実のところ売れるかどうか心配であった。そこで學術振興会の「研究成果公開促進費」の交付を願い出て幸いお認めいただき、そこそこの値段設定はできたのだが、まだ若い学生さんたちには手が届きにくからう。本当は彼らに読んでもらいたい、日本の物理学史と伝統に關心をもってもらいたいのだが…。

大学の図書館は50を超えるところが買ってくれた。とりわけ「仁科先生は生きていた」と感じたのは、東京の都立中央図書館から文京、杉並、北、江戸川の区立図書館や府中市の図書館をはじめ、地方では埼玉、栃木、千葉、山梨、静岡、岐阜、岡山、福岡、佐賀の県立図書館などなど公共図書館の少なからぬ数が買ってくれたことである。これは見くびったようで申し訳ないが、予想外であった。東京の区立図書館が購入する本をどのようにして選ぶのか知らないのだが、某区ではある区民が購入請求をしてくれた。他の区でも関心をもつ人がいて、請求をしてくださったのではないかと思う。地方の公共図書館でも同様であろうか？ 思えば、仁科先生は御存命中は日本の科学の中心というか、トップの座を占め新聞や雑誌にしばしば登場していた。新聞や雑誌がいまのようにポピュリズムに毒されていなかったせいもあり、科学界の発言も一定の地位をもっていたのであって、その時代の記憶をもつ人がまだ残っているということかもしれない。直接の記憶はなくとも先輩から話を聴かされたという人もあろう。そういう人々が市井に在ると思うと、ある種の心強さを感じる。

しかし、事態は容易ではない。つい最近まで、玉木英彦先生による仁科先生の子

ども向きの伝記が町の本屋さんに並んでいたのだ。いまは、消えてしまった。湯川先生の伝記にしても同じである。ニュートンの伝記にしても同じである。子ども向きの本にかぎらない。

大人向きの科学の本も変質してしまった。これは人々の心の中にある科学の変質であり、劣化である。公共図書館が『仁科芳雄往復書簡集』を書架に加えてくれたといっても、安心することはできない。公共図書館は、しばしば蔵書を廃棄してしまうからである。仁科先生を代表の一人とする日本科学の歴史と伝統を人々の心に生かし続け増幅するために「仁科記念財団」の果たすべき役割は大きいのである。一国の科学における伝統の重要性は、仁科先生がつとに強調したところであった。

『書簡集』の編集という仕事も容易なことではない。仁科先生の残された書簡は、先生の書かれたもの（カーボン・コピーや下書き）、先生に宛てたものが膨大な数に上る。こんどの『書簡集』には欲張って収録したつもりだけれども、やはり全部は入れられなかった。慎重に選んだつもりではいたが、いざ本が出てみると、あらためて貴重な書簡が目につく。たとえば、横須賀の海軍工廠の発電機を借りて宇宙線の実験をしたときの借料の支払いをめぐる書簡、ドイツのヒットラーのユダヤ人迫害に抵抗して日本に逃れてきた物理学者クロールを理研は受け入れかねると綿々と述べた書簡など。また、クライン-仁科の式の計算はクラインが仁科に示唆したといわれてきた。これはクライン自身の証言によるのだが、実はそれより早く仁科はディラックに宛てて「君の新しい電子の相対論的な方程式でガンマ線の散乱を計算してみたい」と書き送っていたということである。クラインが計算を示唆したことも本当だろうが、仁科自身も計算を考えていた。ただ、クラインの示唆を受けたとき、これを仁科は、謙虚さからか、口にしなかったのだろう。このことは第Ⅰ巻の注に書いておいたが、その仁科の手紙を何とかして入手して収録したい。いや、こんどの『書簡集』は、何といっても仁科記念財団に所蔵されている書簡を収録するので手一杯だった。コペンハーゲンのニールス・ボーア文書室には仁科関連の書簡の提供をお願いしたが、ローレンスのいたアメリカのバークレーには連絡しなかった。ケンブリッジにはディラック関係の文書室があるだろうか？ミュンヘンのドイツ科学技術博物館には膨大な科学者の書簡が収集されているが、仁科関連のもの

はないか？パウリの『書簡集』には仁科もしばしば登場するので、これらも読み直してみなければならない。国内の関係者ないしは御遺族にも十分な御連絡をしたとはいえない。

というわけで、手の届かなかった書簡を集めなければと思っている。宇宙線の近藤一郎先生からは、戦争で理研の研究室が金沢に疎開した頃からの記述が不十分だという御指摘をいただいた。この種の不完全さは他にも、いやいたるところにあるだろう。『仁科芳雄往復書簡集』を御覧になった方々から率直な御批判、御親切な情報提供をいただきたい。こうして集まるであろう新しい書簡、新しい情報を『書簡集』の増補版として世に出すか、別に補遺の巻を出すか？これは、いつ増補版が出せるかにもよる。おそらく増補版を待つのではなく、補遺の巻を出すべきだろうと考えられる。そうきめたら、関係者に早急に協力のお願いをしなければならない。編集の仕事も、まだ終わってはいないのである。仁科先生は、当分、われわれを走らせ続けるだろう。

最後になったが、編集の仕事に協力してくださった多くの方々に、この機会に感謝する。みすず書房は赤字覚悟でこの事業に乗り出してくださった。編集の守田省吾、市原加奈子の両氏は本づくりに大変な努力をされ、同時に編集上のわれわれのわがままをいろいろと聞きいれてくださった。特に、学術振興会に約束した期限までに本をつくり上げるための戦いは熾烈であった。これらには感謝の言葉もない。日本学術振興会は「研究成果公開促進費」を下さった。振興会と、その事務手続きを微細な点まで懇切に手引きしてくださった係の金子百合子さんに心からお礼を申し上げます。

仁科記念財団

案 内

2008年4月



財団法人 仁科記念財団

訃報

長い間、本財団の理事をおつとめくださいました宮島龍興氏が2007年11月26日にご逝去されました。ご冥福をお祈り申し上げます。

§7. 仁科記念室だより

仁科記念室では、長い間眠っていた仁科芳雄博士の往復書簡の発掘をし、2006年12月に「仁科芳雄往復書簡集」(全3巻)として発刊しました。記念室に保管されているこの他の資料についても学術的な価値が高く貴重なものが多いので、理化学研究所等の協力を得て、引き続き資料の発掘、整理を進めるとともに、その利用についても検討をしていくこととしています。

仁科記念講演集の刊行

並木 雅俊

“Nishina Memorial Lectures” が、2007年度仁科記念賞授賞式の日（12月6日）に届きました。この日までに完成することは難しいと知らされていたことも重なって、手にしたときの喜びは大きなものでした。“Nishina Memorial Lectures” は、すでに刊行されている『現代物理学の創造1』、『現代物理学の創造2』、『現代物理学の創造3』に続くもので、財団創立50周年事業として計画された小冊子「NKZシリーズ」の出版はこの刊行をもってすべて終了いたしました。ここで、それに纏わる四方山話をしたく思います。

このNKZシリーズに掲載された多くの講演記録を「仁科記念講演録集」として出版することが財団で決定し、その作業の相談を始めたのは2005年8月でした。シュプリングー・フェアラク東京（現在、シュプリングー・ジャパンと社名を変更）で発行することになり、電子データがないため、入力作業から始まりました。この間、国立科学博物館での「仁科芳雄と原子物理学のあけぼの」展の準備も始ま

りました¹。

編集は、山崎敏光理事長と共に行ないました。初期の仁科記念講演は、すでに『原子時代の科学』(大日本図書、1959年)として刊行されています。そこには、朝永振一郎「宇宙線の話」(1955年)、畑中武夫「流転する宇宙」(1955年)、菊池正士「物質の構造」(1956年)、熊谷寛夫「原子核の実験」(1956年)、萩原雄祐「太陽と地球との関係」(1957年)、石井千尋「宇宙線研究20年」(1957年)、岡小天「放射線の生物作用とその機序」(1958年)が掲載されています。括弧内は講演された年を示し、講演日はいずれも仁科先生の誕生日12月6日でした。今回の収録は、これ以後の講演となりますので、1959年6月の朝永先生の「原子論の発展」から2005年12月の西島和彦先生の「仁科芳雄と日本における素粒子物理学の原点」までの47年分が対象となります。仁科先生の誕生日前後に行なう定例記念講演会はこれまで一度も欠かすことなく行なわれていますし、その他にも80以上の講演が行なわれておりますが、NKZシリーズに掲載された講演原稿は邦文28篇と英文17篇でした。

山崎理事長、シュプリンガー編集部と私とで、編集会議を何度か行なって、①邦文と英文の原稿を分けて刊行する、②原稿はおよそ講演順に掲載する、③各講演記事の1頁目には講演者写真、講演日時と場所、講演者の名前にルビをつけ、当時の所属を掲載する、④表紙袖に仁科先生の略歴を載せる、⑤「発刊にあたって」を山崎理事長が執筆、⑥「編集あとがき」を私が担当、等を決めました。頁数を考慮して邦文3分冊、英文2冊とし、邦文から刊行すべく作業を始めました。シュプリンガーが入力を終え、初校がでてきたのは2006年4月で、第2校は7月でした。章の扉の写真は、山崎理事長が選びました。校正には、事務局の新井輝隆さんと板垣淑子さんにもご尽力いただきました。

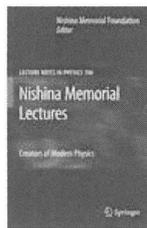
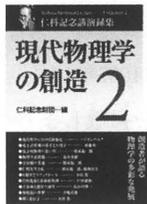
第1巻には、朝永振一郎「原子論の発展」(1959年6月)、青野雄一郎「太陽と電離層」(1959年9月)、菅義夫「電子冷凍の理論と応用」(1959年12月)、朝永振一郎「放

1 1 「仁科芳雄と原子物理学のあけぼの」展は、世界物理年(2005年)の11月12日から12月18日までの間、東京・上野にある国立科学博物館で開催されました。この展示会の準備は、第1回企画会議のあった2005年3月に開始されました。財団の中根良平先生の指導、国立科学博物館の渋谷志穂さんの尽力、それに科学史家の岡本拓司さんの協力のおかげで、大成功を収めました。

射能線の話」(1960年12月), 小田稔「宇宙の考古学」(1961年12月), 平田森三「割れ目の話」(1962年12月), 鳩山道夫「エレクトロニクス時代とトランジスタ」(1963年12月), 湯川秀樹「仁科先生と朝永さんと私」(1965年12月) の9篇の講演録とコラム「ニールス・ボーア博士のこと」(1962年) を掲載しました。全322頁+7頁でした。これらは40~50年ほど前の文ですが, 古さを感じさせない不思議な力をもっています。それに, これほど聴講者を科学の世界に誘う講演をされた先生方のすばらしさを感じざるを得ません。

第2巻には, ハイゼンベルク (柳瀬睦男訳)「現代科学における抽象化」(1967年4月), 後藤英一「電子計算機の得手と不得手」(1969年12月), 朝永振一郎「原子核物理の思い出」(1970年12月), 湯川秀樹「物理学者群像」(1971年12月), 朝永振一郎「宇宙観の変遷」(1974年12月), 朝永振一郎・藤岡由夫「仁科先生と私」(1975年5月), 小田稔「X線とブラックホール」(1975年12月), 戸田盛和「自然現象と非線形数理」(1980年12月), 長谷川博一「宇宙塵と惑星の誕生」(1981年12月), 中嶋貞雄「極低温の世界」(1982年5月), 本庶佑「動く遺伝子」(1982年12月) の11篇の講演録を掲載しました。全270頁+7頁でした。物理現象の面白さ, 何が物理の本質なのか, それにコンピュータの限界を認識して付き合うことの大切さ, どうすれば聞き手に伝わるのか, を学ぶことができます。

第3巻は, 南部陽一郎「“素粒子”は粒子か?」(1985年4月), 西川哲治「素粒子の素粒子“クォーク”をさぐる」(1983年12月), 菊池健「大型加速器で素粒子を探る」(1987年5月), 木越邦彦「放射能で年代をはかる」(1989年12月), 近藤淳「金属電子の異なる振舞」(1993年12月), 外村彰「量子的世界を見る」(2000年12月), 伊達宗行「仁科記念賞で見る物質科学の進歩」(2005年12月), 西島和彦「仁科芳雄と日本における素粒子物理学の原点」(2005年12月) の8篇の講演録と「仁科記念講演会の記録一覧表」を掲載いたしました。全275頁+7頁でした。物理学がどんな方向に進んでいくのか, どのような観点で歴史をみるのか, 教えられます。



『現代物理学の創造1,2,3』として、2006年11月28日に3巻が同時刊行されました。

英語版の編集作業は、2007年5月から始まりました。掲載対象の講演録は、久保亮五（1990年）、シュウインガー（1980年、1965年度ノーベル物理学賞受賞）、ウー（1983年）、ダイソン（1984年）、ファインマン（1985年、1965年度ノーベル物理学賞受賞）、モッテルソン（1985年、1975年度ノーベル物理学賞受賞）、シーグバーン（1988年、1981年度ノーベル物理学賞受賞）、アンダーソン（1989年、2篇、1977年度ノーベル物理学賞受賞）、ヴァン・ホーフ（1990年）、クローニン（1993年、1980年度ノーベル物理学賞受賞）、ローラー（1993年、1986年度ノーベル物理学賞受賞）、ド・ジャンヌ（1998年、1991年度ノーベル物理学賞受賞）、クロート（1998年、1996年度ノーベル化学賞受賞）、フリードマン（2000年、1990年度ノーベル物理学賞受賞）、フェルトマン（2003年、1999年度ノーベル物理学賞受賞）、ヤン（2005年、1957年度ノーベル物理学賞受賞）の計17篇です。久保先生の手稿は、1990年の「仁科芳雄生誕百年記念国際シンポジウム」の冒頭の講演で、仁科先生を紹介しているもので、一番前に移動しました。

編集の際にまず気が掛かったのは、シーグバーンの講演録のことです。NKZ-No. 30に掲載されているのですが、A4版で117頁もあります。これでは、価格面より1冊に収めたいと考えていたのですが、当初の予定どおり2分冊にしなくてはなりません。しかし、この稿の内容すべてを講演したとは思えませんでした。他の稿と同様に掲載し、『現代物理学の創造4,5』として日本語版の『現代物理学の創造1,2,3』と同じように編集するべく作業を開始いたしました。7月の打ち合わせで、何と、これを“Lecture Notes in Physics”シリーズの1冊に加えてもらえ

ることになったのです。この折衝の過程で講演録のリストと校正刷りを本社に示したところ、「Lecture Notes in Physics シリーズの編集委員19名全員が‘great enthusiasm’をもって賛成なされたとのことです！」と8月3日付のシュプリングァー・ジャパンからのメールが伝えています。さらに「こんなことは日本発信の企画ではとても稀なこと（物理では初めて！）で、大変嬉しく思っております」とのメールには山崎理事長と共に大いに感激し、期待に沿えるようなすばらしい本をつくろうとの方針は定まりました。

私は学生時代、このシリーズの本から学んだこともあって嬉しくなり、（現金ですが）シュプリングァー・ジャパンの情熱を感じました。また伝統ある“Lecture Notes in Physics”シリーズともなれば世界中の物理学者がその存在を知っています。そのうえ、編集部は邦文にあったハイゼンベルクの稿（1967年）も掲載したいとアイデアを出してくれました。しかし、これには英文の稿はありません。山崎理事長が財団事務室からオープンリールのテープを探し出して、ご自宅のテープレコーダーで再生してみましたら、ハイゼンベルク博士の鮮明な声と、それを聴講者に翻訳する柳瀬先生の声が流れてきたとのことでした。それで、このテープをもとにしてハイゼンベルク博士の英文原稿をつくってもらうことになりました。

しかし、本の大きさ・形、文字の大きさ・形などを含めた編集は、このシリーズの規則で行なわなければなりません。このため邦文版とデザインが変わってしまいます。しかし、文字は小さくなりましたが、1冊で収まることになりました。全402頁+14頁でした。

こうして、“Lecture Notes in Physics 746 Nishina Memorial Lectures: Creators of Modern Physics”は、完成いたしました。表紙裏は、和紙でつくられています。これもシュプリングァー・ジャパンのアイデアです。日本らしさを出してくれて感謝です。また、テープから起こしたハイゼンベルク博士の声（1967年録音）は、Springer ドイツ本社ホームページから聞くことができます。Web, <http://www.springer.com/physics/book/978-4-431-77055-8> から、お聞きになっていただきたく思います。この声のアップロードは、ドイツ本社内において聞く人に衝撃を与えており、‘40年も前の録音なのにクリアな音

声！’，‘非常に美しい英語！’，‘Splendid!’，‘Marvellous!’と絶賛のメールが届いたようです。50年を越える歴史と伝統をもつ仁科記念財団を世界に広く知らしめることに、ほんの少しですが貢献できたのではないかと考えております。

(2008年2月22日)

財団法人 仁科記念財団設立趣意書 並 寄附行為

委大第164号

財団法人 仁科記念財団

設立代表者 渋沢敬三

昭和30年11月10日付で申請のあった財団法人仁科記念財団の設立を民法第34条によって許可します。

昭和30年12月5日

文部大臣 清瀬一郎

財団法人仁科記念財団設立趣意書

文化勲章受賞者、日本学士院会員故仁科芳雄博士は、わが国の原子物理学の創始者であり、湯川博士等、世界的学者の育ての親でありました。博士が戦前、当時世界で第1級の大サイクロトロンを建設されたことは、そのサイクロトロンの悲劇的最後とともに、あまねく世に知られているところであります。

故仁科博士は、世界的な原子物理学者であったのみならず、戦後国歩艱難の時期に際しては、旧財団法人理化学研究所を潰滅の危機から救って株式会社科学研究所を興し、科学技術こそ国の救済復興の原動力であるという信念を貫かれ、身をもってこれを実践されました。博士はまた、この学識と円満な人格によって世界の学界の信望を一身にあつめられ、博士の存在がわが国の国際社会へのすみやかな復帰に大きな助けとなったことも、永く忘れることのできない点であります。

このように、わが国科学技術界の恩人であり、且つ、わが国が世界に誇るべき偉大な学者を永遠に記念するために、科学の振興、新鋭科学者の育成を目的として、

仁科記念財団

案 内

2009年7月



財団法人 仁科記念財団

§7. 仁科記念室だより

仁科記念室では、長い間眠っていた仁科芳雄博士の往復書簡の発掘をし、2006年12月に「仁科芳雄往復書簡集」(全3巻)として発刊しました。記念室に保管されているこの他の資料についても学術的な価値が高く貴重なものが多いので、理化学研究所等の協力を得て、引き続き資料の発掘、整理を進めるとともに、その利用についても検討をしていくこととしています。

(1) 資料の提供

- ・資料名：原爆被災記録映画「広島・長崎における原子爆弾の影響」の製作関係資料

展示名：「廃墟にフィルムを回す－原爆被災記録映画の軌跡」(平成20年度第2回企画展 (2009年2月25日～7月15日))

主催者・展示場所：広島平和記念資料館

- ・資料名：仁科芳雄博士及び湯川秀樹博士の写真
掲載媒体：「放射線&放射線取扱主任者へのガイダンス」(文部科学省のWebサイト)

制作者：(財)原子力安全技術センター (文部科学省委託)

(2) 取材

- ・取材内容：仁科記念室資料の撮影 (仁科博士直筆ノート, 原爆被爆レントゲンフィルム, 大サイクロトロン設計図, 他), インタビュー

放送番組：テレビ朝日開局50周年特別番組「原爆を知らない僕らのために」
(2008年8月2日全国放送)

制作者：テレビ朝日映像 (株)

(3) 見学

- ・見学会名：「仁科芳雄博士の足跡を訪ねて」

見学施設：仁科記念室, サイクロトロンモニュメント

講演者：中根良平常務理事

見学者：岡山県里庄町中学生（9名）、他

目的：仁科博士の出身地の選抜された中学生を対象にした「仁科博士の足跡をたどる国内・海外研修の旅」の一環

主催者：里庄中学校，科学振興仁科財団，里庄町

・見学会名：文京史跡研究会見学会

見学施設：仁科記念室，サイクロトロンモニュメント

講演者：山崎理事長

目的：文京区の歴史的施設を見て学ぶための当地在住の方々の社会勉強の一環

主催者・見学者：文京史跡研究会（30名）

時代に揉まれた「終始一貫」

—見つけた仁科芳雄の墨書—

仁科 浩二郎

最近、父芳雄の遺した雑品を整理中に、写真に示した墨書を見つけた。兄と筆者にとって初見であり、「終始一貫」の字句も、それまで父の口癖という程ではなかったから、この書で改めて決意を示した、という気配である。

落款にある日付、昭和20年5月24日といえ、敗戦に先立つことわずか3か月足らず。東京は既に米空軍による大空襲を4回（3月10日、4月13日、同15日、5月23日）も受け¹⁾、荒廃が加速していた。特に理研構内は4月13日の大空襲で相当の被害があり、当時ウラン濃縮基礎実験が試みられていたという49号館も焼失していた²⁾。

そのように切迫・荒廃が進む状況下でこの書は書かれたことになる。落款の通り翌日、金沢市へ疎開なさる宇宙線実験室員への激励として理研構内で書かれたのだろうか。その経緯をご存知のはずの関戸弥太郎、宮崎友喜雄、三浦功、鎌田甲一の諸先生も今は亡い。そこで当時の文献記録と筆者の記憶を辿って「終始一貫」の意図を推測してみよう。

父はかつて大サイクロトロンの建設に当たり、不可欠な電磁石用鉄材の工面で、アメリカのE. O. ローレンスから親身の好意を受けた。その時の感動を雑誌「理想」

の原稿で紹介し³⁾、米国科学の前途は洋々と激賞したのだが、時は昭和15年、既に日米関係悪化が進行中で、褒めすぎて時流に合わず、没となったらしい^{*)}。

やがて昭和16年、遂に米英両国との戦争が始まると、「この戦争の終結後に基礎科学で我々が米英に劣っていたのが判明しては恥ずかしい」という基本態度を表明⁴⁾、さらに自身が監修役を務めた雑誌「図解科学」の巻頭言⁵⁾で改めて戦時基礎科学の重要性を熱っぽく説く。

さらに戦争の激化と共に、遂に原爆の研究を軍から引き受ける。工業力における彼我の差を引き摺って、その研究が一筋縄ではいかない状況を目の当たりにすると、計画の遅滞を憂えて依頼元の航空本部に出向き、南方で苦戦する将兵への申し訳なさを繰り返し訴える⁶⁾。

「明朗敢闘」という当時のスローガンを好み、防空演習があれば隣組長として、理研から自宅へ戻ってゲートルを巻いて消火訓練に参加する。金沢市における疎開部隊との連絡・激励の会合を薫風会と名付け、同市内の新緑を前にしながら、「自然を楽しむ心の余裕を持って」と呼びかける⁷⁾。だが戦況の悪化と共にこの会合での揮毫もやがて悲観的な「本来空」へと変化する⁸⁾。

これらの行動は、今の時代から見れば、結果論として理路整然とは言えまいが、明治の教育を受け、加えて当時まれな足掛け8年の滞欧生活を送った父から見れば、心情的、行動美学的に終始一貫、ということだったのであろう。

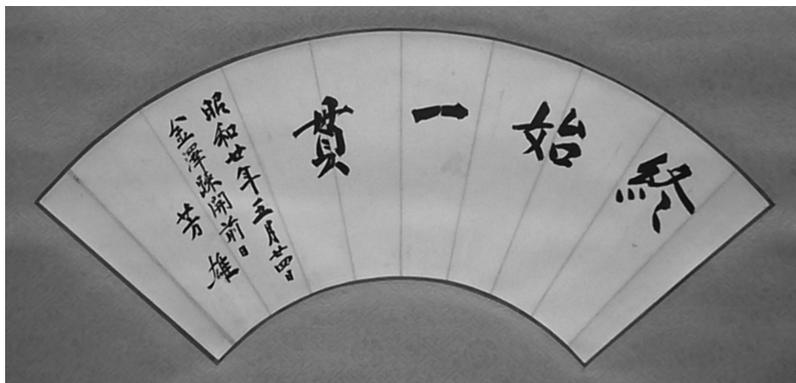
やがて都市空襲はますます日常化し、遂には広島・長崎が原爆被爆。その直後に現地調査を行い、原爆と判定・報告・敗戦。進駐した米軍により、虎の子のサイクロトロンが破壊される。その直後の年末に重い病に臥す。年が改まった21年、やがて回復して、仕事に復帰。その5月に「国破れて山河在り」と色紙で慨嘆した。

振り返ると昭和15年に、神奈川県かんねいの箱根仙石原の宿屋で、霧で真白の谷から一斉に鳴くひぐらしを聞いて「ひぐらしや函嶺の谷、霧深し」と詠んで悦に入っていた

*) 実は没にならず、そのまま記載・刊行された由。この誤りは筆者が類似の事例と混同したためである。江沢洋先生のご指摘に感謝し、読者にお詫びする。他日、改めて状況をご説明できたら、と考えている。

楽しみからわずか6年であった。

なお、写真の書の掛け軸は、岡山県里庄町の仁科会館で展示して下さることとなったことを付言する。さらに我々兄弟は、前述の困難な時代に、父の研究室の諸先生、職員の皆様から筆に尽くせぬお世話になった、という感慨を述べておきたい。



落款に「昭和20年金沢疎開の前日」とある

参考文献

- 1) 東京大空襲秘録写真集, 148, 雄鶏社編 (1953)
- 2) 「1161山崎文男日記抄 (7)」, 仁科芳雄往復書簡集—現代物理学の開拓—Ⅲ, 1121, みすず書房 (2007)
- 3) 「963仁科芳雄『アメリカの科学』」, 仁科芳雄往復書簡集—現代物理学の開拓—Ⅲ, 899, みすず書房 (2007)
- 4) 武谷三男, 昭和史の天皇 (第4), 164, 読売新聞社編 (1968)
- 5) 仁科芳雄, 「戦時下の基礎科学」, 図解科学, 2, 2, 中央公論社 (1942)
- 6) 谷口初蔵, 昭和史の天皇 (第4), 207, 読売新聞社編 (1968)
- 7) 三浦功, 自伝「轍」(1997)
- 8) 科学雑誌自然300号記念総集録「仁科芳雄, 湯川秀樹, 朝永振一郎, 坂田昌一」41, 中央公論社 (1971)

(名古屋大学名誉教授)

(出典：本稿は、Isotope News 誌 2009年1月号 (30-31頁) 掲載記事に一部加筆されたものです。)

仁科記念財団

案 内

2010年7月



財団法人 仁科記念財団

§7. 仁科記念室だより

仁科記念室では、長い間眠っていた仁科芳雄博士の往復書簡の発掘をし、2006年12月に「仁科芳雄往復書簡集」(全3巻)として発刊しました。記念室に保管されているこの他の資料についても学術的な価値が高く貴重なものが多いので、理化学研究所等の協力を得て、引き続き資料の発掘、整理を進めるとともに、その利用についても検討をしていくこととしています。

(1) 資料の提供

- ・資料名：サイクロトロン設計図面等一式

展覧会名：特別展「真空の科学と技術（仮称）」(2010年10月上旬～12月上旬予定)

主催者：東京大学駒場博物館

- ・資料名：湯川秀樹博士から仁科芳雄博士宛の手紙

仁科芳雄博士から湯川秀樹博士宛の手紙

掲載媒体：月刊うちゅう2009年5，6月号掲載及び大阪市立博物館ホームページでの公開

提供先：大阪市立博物館

- ・資料名：仁科芳雄博士の写真

提供先：NHK，(株)学習研究社，高エネルギー加速器研究機構，等

(2) 見学

- ・見学会名：「仁科芳雄博士の足跡を訪ねて」

見学施設：仁科記念室，サイクロトロンモニュメント

講演者：中根良平常務理事

見学者：岡山県里庄町中学生（9名），他

目的：仁科博士の出身地の選抜された中学生を対象にした「仁科博士の足跡をたどる国内・海外研修の旅」の一環

主催者：里庄中学校，科学振興仁科財団，里庄町

直後の首都を歩き続ける父

仁科 浩二郎

太平洋戦争末期の一夜、父芳雄が東京都本郷区駒込上富士前町の理化学研究所（以下理研、または駒込の理研）の一室で「終始一貫」と墨書した心境と時代背景について、筆者は記憶と資料を頼りに、推測も交えて本誌1月号に綴った¹⁾。当稿はその続編である。

同墨書の翌日5月25日、夜間に再び来襲したB-29の大編隊は、首都周辺にまたもや徹底的な被害を与えた。たまたま当日の午後、横須賀市へ出ていた父は帰途、この空襲で横須賀線乗客として足止めを食う。翌朝やっと東京に戻れた父は、疲労を押してなお煙のくすぶる首都の中を歩き、被害の光景を目撃・慨嘆したのであった。

約1週間後、父はこの光景と自分の行動を愛用の便箋に記述し、集団疎開先（金沢市）の兄と筆者あてに送ってきた。以下、簡単ではあるがその内容を紹介して当時の状況を再現したい。当時、筆者は中学1年生であったが、今もおお東京大空襲各回の経過、特にこの日前後の記憶は鮮やかである。忘れ去る前にここに書き留めておきたい。筆者と同世代の読者がご自身の記憶と照合していただけたら幸いであり、併せて次世代の方々の参考となることを願う。また前回記事にあった誤り1点を訂正し読者にお詫びする。

昭和20年5月25日、理研の宇宙線研究班は上野駅から金沢市へ向けて発つ手はずになっていた。当日は前回、つまり同月23日深夜（正確には24日午前1～3時台）の大空襲からわずか2日弱だから、次の大空襲はまだあるまい、との一般的予想もあったが、米空軍は完全にその裏をかいた。再度、夜間大空襲を仕掛けたのである。しかし、幸いにもこの研究班の出発は空襲開始より早く、無事、首都を脱出されたのである。

一方、父はこの研究班の行動とは別に、午後早くから横須賀市の海軍工廠へ向けて発ち、夕方早目に駒込の理研へ戻る予定を立てた。その用件は今では不明である。元来、この工廠内には1936年、宇宙線飛跡撮影用の大型電磁石が東京の工場から搬入・設置され²⁾、竹内柁先生は運搬経路の橋が落ちないか心配した、と回想してい

る³⁾。つまり潜水艦充電用の大型電源を利用して、広い持続的な強力磁場を実現していたらしい。

竹内先生と父は、撮れた飛跡写真に基づいて1937年7月、新粒子質量の評価を試みている^{4、5)}。さらに1939年、Physical Review 誌に載った仁科・竹内ほかの飛跡写真に P.M.S. Blackett (英国) が注目、原版を父にリクエストしている⁶⁾。つまりこの装置は当時の湯川粒子予言を検証するべく活躍したのであった。そして、以下に述べる東京駒込への搬出(1937年11月)までは竹内先生が横須賀で操作に当たっていた。*

その後、空襲が激化する1945年よりずっと前に、筆者はこの巨大な鉄の固まり、電磁石を駒込の理研構内の旧3号館裏、機関場横にあったバラック状の建物内で目撃したのを覚えている(裏付け証言もある⁷⁾)。つまり、駒込の理研構内35号館にも同電磁石用の電源が完成したので、東京へ移されたらしい。とすると、父はこの25日午後、全く別の件を海軍側と協議したのであろう。

さて、この用件が終わって父が理研へ戻ろうとする頃、東京では前述の大空襲が始まっていた。帰路、横須賀線は大船駅でストップ。心は焦るが、赤く染まっていく東京方面の空を同駅から望む以外、何もできない。数時間の待機の末、同夜の横須賀線復旧は結局、大船・横須賀間の折返し運転までであった。そこで父は途中の逗子町に住む義兄、名和方に泊まろうと考え、逗子町に戻って門を叩いたが同家もこの緊急事態下、出払って留守。やむなく父は逗子駅ベンチのゴロ寝で一夜を明かした。

翌朝、父が横須賀線でどの程度、東京へ近付けたかは不明である。父は生来健脚で、この年の4月、水戸方面へ出張中に駒込の自宅が夜間空襲で焼失した時も、翌朝、交通途絶の中、心配で千住方面から歩いて来ている。この5月26日朝も横須賀線の到達可能点からコツコツ歩いたに違いない。その父が被害光景の中でまず目を奪われたのは、まだ炎上焼失中の東京駅舎であった。

このとき焼失した同駅舎の建築スタイルは、戦後の再建築以後、2009年の現在まで存続した直線構成型ではない。1914年完成時のままのドーム型であった。父は東

*) この搬出年月に関する江沢洋、宮沢弘成両先生からのご指摘に感謝します。

大学生時代からその姿に馴れ親しんでいたに違いない。その屋根が焼け落ち、なお炎が上がり続ける中、無残に曲がった鉄骨が残骸を見せていたという。その文調から相当のショックがうかがえた。皇居の一部が前夜あるいは4月14日早朝に被弾炎上したと、明治生まれの父が知って受けた衝撃に劣らぬものと推測された。丸の内周辺は相当量の焼夷弾投下を受けたに違いない。

この後、我々兄弟を含めた親族の安否を探る意図であったか、父は駒込の理研居室に向かう最短の徒歩経路を曲げ、小石川区小日向台町に在った義姉の実家、田口方に立ち寄った。すると、今しも土蔵が炎を上げて燃え続けていたのである。

同家では母屋全焼の後、せめて残った土蔵だけは守ろうと、空気流入による発火を警戒し、夜明け後も細心の注意を払って冷却を待ったという。しかし昼近く、ついに荷重に耐えられずに崩れ落ち、火の手が上がったのである。

以上の2つの焼失現場は、父にとってかなりの衝撃であった。手紙でその目撃経過を述べた後、「これらの被害に加え、昨25日の晩、自分が予定通り理研に戻れなかったことを併せ考えれば、この戦争で今後、どんな困難が到来するか予想もつかない。どんな事にも慌てぬように覚悟をしておけ。」とあった。

「覚悟しておけ」と言われても、自分は不覚にも何を覚悟するのか想像できない中学1年生であった。せいぜい、金沢城の石川門近辺が被弾した場合、城下の第四高等学校の寮に寝起きしていた自分達に逃げる時間的余裕があるか、級友と議論した程度であった。

父は「自分もいつ、命を落とすか分からんぞ。」と実は言いたかったらしい。3月10日、最初の東京夜間大空襲の翌朝、焼け跡には多数の焼死体が残され、その光景は色々と語られていた。その記憶も新しい中、父は改めて今後の運命に思いをめぐらし、疎開不可能の大サイクロトロン(以下大サイクロ)のお守りまもりをするうちに、東京で命を落とすかも考えたのであろう。

この後の戦況だが、少し前の沖縄・硫黄島の実質的陥落を背景に、空襲はより頻繁となった。しかし、この25日夜間大空襲とそれに続く5月27日の横浜大空襲(日曜しかも昼間の大空襲という点、ショックであった)を境に、大空襲の標的は地方都市へと移っていった。東京で頻繁となったのは、むしろ少数機による爆弾・焼夷

弾投下と、艦載機・小型機の来襲であった、と記憶する。

やがて約70日後、8月6日に広島市が原爆の投下を受け、翌朝には軍から父に現地調査の要求があった。軍用機の故障もあって、実際に広島市上空へ父が達したのは8月8日となった。その出発直前、父は研究室に書置きを残している。また、広島では爆心の位置を探って土砂・小石類を集めてまわった気配である。更にこの広島滞在中、長崎市も被爆するに及び、長崎に対する現地検分が追加され、結局、父が東京近郊に戻ることができたのは、敗戦の日、8月15日の昼近く、所沢飛行場へであった。ここで敗戦の玉音放送を聴いた時に抱いた感慨、更にはその後自身のオフィス、理研37号館へ急いで戻り、集まっていた研究室の方々に対して発した大サイクロに関する質問については、既に色々と語り継がれている⁸⁾。当短文で誤解の余地なくそれを語るのは無理なので、今回はここで筆を置く。

参考文献

- 1) 仁科浩二郎、時代に揉(も)まれた終始一貫、Isotope News, 657, 30-31 (2009)
 - 2) 「480仁科芳雄→山司房太郎 (1936年6月)」仁科芳雄往復書簡集—現代物理学の開拓—II, 456, みすず書房 (2006)
 - 3) 科学雑誌自然300号記念総集録「仁科芳雄、湯川秀樹、朝永振一郎、坂田昌一」36, 中央公論社 (1971)
 - 4) 「616竹内証→仁科芳雄 (1937年7月)」文献2) の書簡集, 589, みすず書房 (2006)
 - 5) 「617仁科芳雄→湯川秀樹 (1937年7月)」文献2) の書簡集, 590, みすず書房 (2006)
 - 6) 「861Blackett→仁科芳雄 (1939年5月)」文献2) の書簡集, 822, みすず書房 (2006)
 - 7) 私信柴田隆三氏 (2009年)
 - 8) 文献3), 40—41 (1971)
-

本誌2009年1月号(No. 657), p. 30-31掲載 『時代に揉まれた「終始一貫」』の 内容訂正とその背景

本文 p. 30左段下から4行目『その時の感動を雑誌「理想」の原稿で紹介し、米国科学の前途は洋々と激賞したのだが、時は昭和15年、既に日米関係悪化が進行中で、褒めすぎて時流に合わず、没となつたらしい。』これは誤りであり、同原稿は同誌1940年6月号, p. 41に実際の記事として記載・出版されていた。読者にお詫びす

ると共に、ご指摘と資料提供をいただいた江沢洋、西村純の両先生に感謝します。

筆者はこの「理想」誌のケースと状況が類似し、しかも結果が正反対に終わった以下の（数年後の）ケースと混同していた。

状況が類似し、没となったケース：太平洋戦争中、中央公論社において雑誌「図解科学」の編集を担当していた小倉真美氏は戦後、朝永・玉木編、「仁科芳雄—回想と伝記—」みすず書房、1952年刊（p.138）で、次のように述べている。『その頃（太平洋戦争の開始直後、国民が緒戦の勝利に酔っていた1942年～1943年頃筆者注）、仁科先生の最初の評論集を（我々が）企画し、私（小倉）の手で編纂、再校まで進んだ。しかし、米科学界の実情を紹介・激賞している箇所があって、部分的削除では検閲を通る見込みがなく、組版を廃棄するに到った。』

（名古屋大学名誉教授）

（出典：本稿は、Isotope News 誌2009年12月号（17-19頁）掲載記事に一部加筆されたものです。）

ヴェトナム国家科学大学滞在記

大阪大学理学研究科招へい研究員 板橋隆久

多くの若手研究者が、仁科記念財団の研究者海外派遣研究者助成プログラムによって外国の研究所や大学に出かけて成果を挙げていることは、私も良く知っていました。このたびこのプログラムが、シニヤールの研究者の派遣にも門戸が開かれることになり、その最初の派遣研究者に採用していただきました。研究支援相手としては、かねてから阪大理学部大貫先生の研究室を始め、大阪大学理学研究科と研究協力（Dang VaoLiet 教授、前研究科長）を行っていたホーチミン市ヴェトナム国家科学大学（以後、科学大学と略）を選びました。過去に APPC の会議で知己を得たハノイの大学での研究協力も頭にはありましたが、たまたま原子核実験施設での博士論文を終了した研究者から、その研究環境を開かされたこともあって、あまり迷うこともなく、ホーチミン市行きを決めました。科学大学の物理研究科の研究科長、Chau Van Tao 氏は原子核理論の研究者であり、実験面での研究、支援協力



われわれの仁科芳雄研究

1951年1月に仁科芳雄博士が逝去された直後、おびただしい数の追想が新聞・雑誌に載り、それらの一部と朝永振一郎博士執筆の短い伝記を、仁科博士ご自身が戦後に著された文章数篇に加えた「仁科芳雄——伝記と回想」が、同年8月にみすず書房から、朝永・玉木編の形で出版された。その本の「編集者あとがき」には、「仁科記念財団」設立の企てについて詳しく述べてあるほかに、「我々は、いずれは仁科先生の本格的な伝記を是非書きたいと思っている……」という一文が見られる。

この「本格的伝記」とは別に、わたくしの草稿を岩城正夫氏が児童むきに改修した国土社の少年伝記文庫『仁科芳雄』が1961年に出版された（児童むきでない部分をふくむ草稿は仁科記念財団のわれわれの作業室に保存してある。）その本のまえがきに、わたくしはこう書いた。「仁科先生は、世界で一流の学者で、日本の原子物理学の育ての親と言われていますが、先生は学者としてだけでなく、人間としてもまれな偉人のひとりです。というのは、先生は社会から受けた恩恵を、それ以上にして返すことを念願し、実際に何十倍何百倍にもして返した人だからです。仁科先生は、いわゆる立志伝中の英雄のように、貧乏な家に生まれて苦勞を重ねながら、しだいに人を押しつけて出世した人とは、まるでちがいます。家もゆたかだったし、よい教育も受けました。しかしほんとうの偉人というのは、たくさん人を押しつけた人ではなくて、たくさん社会のためにつくした人であることは、言うまでもありません。」

この伝記を書きながら、いちばん気になったことは、そのころわたくしは仁科先生のコペンハーゲン留学時代についてほとんど知っていなかったことであつた。児童向けの本であるから、詳しい研究業績について述べる必要はあるまいが、しかし、わかい仁科芳雄が置かれた良い環境、その人間形成においていちばん重要であつたと思われるニールス・ボーアの影響について、具体的に知っていないのでは、心もとないはなしであつた。

これよりさき、1955年12月、「仁科芳雄——伝記と回想」の「編集者のあとがき」に述べてある「仁科記念財団」設立の企てがようやく実を結んだ。財団の初代理事長は渋沢敬三氏で、1963年に渋沢氏が逝去された後任には朝永博士がなされた。財団は仁科博士のお誕生日に

あたる12月6日に、定例の記念講演会を催すとともに「仁科記念賞」の発表をおこなうならわしであるが、1974年の講演会後の懇親パーティーに出席したとき、朝永理事長から藤岡由夫博士の「仁科芳雄伝」編纂の計画について告げられた。藤岡博士は、まえに『高嶺俊夫と分光学』という旧理研高嶺研究室の人々が分担執筆した伝記を1964年に応用光学研究所から出版した経験があり、こんどは、藤岡博士が旧仁科研究室の人々に逐次インタビューし、その録音から、かれが仁科記念財団の費用で助手をつかって原稿をつくる、という計画であつた。実際には、あてにした助手が来なかったが、藤岡博士は十数名の人々とインタビューをおこない、1975年5月の朝永博士との対談は、藤岡博士自身がノートにおこすところまで実行しておられる（その録音は、両博士ともなくなつて後、われわれがあらためてノートにおこして、仁科記念財団出版物 No. 14 に載せた）。しかし、藤岡博士は当時すでにご病気であり、最後にインタビューの番がわたくしにまわってきたときには、まったくお苦しうであつた。結局、十数個の録音テープが、手をつけずに残されることになつた。

仁科記念財団の予算書、決算書のそのころのものをみると、1975年度の予算で、「伝記および会報費」ということばがはじめて現われ、その翌年の予算では350万円も計上されている。決算をみるとそのうちのわずか2.5%が費されただけである（それはおもに出版物（講演記録）No. 11の出版費）。出版関係を担当しているわたくしは、そこで島村福太郎、竹内一両氏をさそつて、伝記の問題を考えることにした。1977年の予算では200万円計上されたが、こんどもやはり2.5%しか消化されなかつた。

まともな伝記編纂のめどさえ立たないその段階では、科学史研究と称し得るような「仁科芳雄研究」など思いもよらなかつた。インタビューの録音には、まれには貴重な情報も含まれているかもしれないが、一般にはさほど信用のおけるものではない。他方、財団の「仁科記念室」には、いくつもの戸棚や机の百をこえるひきだしの中に散在する一次資料は、一見手のつけようもないありさまである。この状況を突如として一変させたのは、つぎのような偶然のできごとであつた。

駒込から埼玉県和光市への理化学研究所の移転の際に運ばれた段ボール箱の一つに、由緒ある資料が詰まっていたことが、1978年3月に発見された。これは、仁科博士が西川研究室と合同の原子核実験室の発足（1935年）の際に3号館から37号館の居室（現在「仁科記念室」になっている）に移転したとき、戸棚のひきだしの一つがあかなくなつて、残されたままになっていたのだという。そのなかに、仁科博士がコペンハーゲンから持ち帰ったものや、帰国後、国内国外から来た手紙などが、あたかも「化石」のように蔵されていることが判明したの

である（これを以下では「3号館資料」と呼ぶことにし、「仁科記念室」にあるものを「記念室資料」と呼ぼう）。「3号館資料」のうち、和文書簡はすでに理研資料室の岩城正氏が整理をはじめており、われわれは欧文書簡および研究関係の資料をとりあつかうことになった。

この作業によって、われわれははじめて一次資料による科学史研究とよべるものをおこない得るようになった。そのうち、おもなものについて述べると、まず、欧文書簡のなかに、ひどくクセのある筆蹟のものを見つけて判読の結果、それが G. ヘヴェシーからの手紙であることを知った。やがて「記念室資料」のなかにヘヴェシーからの手紙があることに気づき、それらを集めて書簡集として出版した（仁科記念財団出版物 No. 27, “G. Hevesy—Y. Nishina, Correspondence 1928—1947”）、この小冊子がヘヴェシーの門弟で、ニールス・ボーア研究所の資料室に関係しておられる H. レヴィ女史にとどいたのが機縁となって、女史からボーア、ヘヴェシー、クラインその他にあてて仁科から出した手紙のコピーを送ってもらうことができた（この関係の詳しい経緯は、「物理学史資料委員会だより」No. 6, 『日本物理学会誌』38 (1983), p. 961 に述べてある）。これによってわれわれは 1923 年から 1949 年までのボーアおよびコペンハーゲン学派の人々と仁科の往復書簡を出版することができた（仁科記念財団出版物 No. 20, No. 21, および No. 27）。

「3号館資料」の欧文書簡のなかに、ボーアの秘書ベティ・シュルツからの手紙がたくさんあるが、ボーア自身からの手紙がすくないのを不審におもって、まえには調べかたが不十分だった仁科記念室の再点検をした。そうすると、ひきだしが 30 ずつある 2 基の棚の一つの、ちょうどまんなかの位置のひきだしに、ボーアやヘヴェシーからの手紙が、仁科博士自身の上書きのある古ぼけたハトロン袋にまとめて保存されていた。それは、9 年もかけてようやく実現できたボーア来日の関係の書簡である。これについては、日本科学史学会の第 27 年会の予稿集に書いた。

科学博物館に保管されている長岡半太郎博士関係の資料のなかに、1928 年 1 月にハンブルクの仁科から理研の長岡博士に送った手紙があり、それにはボーア招聘の提唱がなされている。木村東作氏に頼んで入手したその手紙のコピーから、全文を活字にして「物理学史資料委員会だより」No. 7 (『日本物理学会誌』39 (1984), p. 160) に載せておいた。この手紙にはまた、ボーアが *Naturw.* および *Nature* 誌に寄せた「相補性論文」のことが絶賛されている。仁科は帰国の翌年に『東洋学芸雑誌』および『理研彙報』で、ハイゼンベルクおよびディラックの業績を紹介し、その文書のなかでもボーアのこの論文に言及して必読と言っている。実はボーアのこの論文の *Nature* 誌に載ったほうは、仁科がクラインと一緒にボーアの論文を英訳したものなのである。「3号館資料」

を最初見たとき、校正刷とおぼしきものの存在に気づいたのであるが、1983 年、玉木、島村、竹内 3 名のほかに矢崎裕二氏が加わった陣容で再開した調査でそれを詳細に点検した。校正刷は英語とドイツ語とがあり、それぞれに書きこみあり、異本ありで複雑をきわめ、それはボーアがイタリアのコモで催されたヴォルタ百年祭の招待講演のための草稿に何回も修正増補を施した過程を示している。日本語の書きこみは仁科以外のものではあり得ず、また「不審」という題名の仁科のメモの内容がこの論文の内容に対応していることから、仁科がボーアの論旨を理解しようと苦心した跡がうかがえる。これについては、日本物理学会で 2 回にわたって発表した(1984 年九州大学、および 1985 年京都大学)。「3号館資料」にはまた、Klein-Nishina の公式の導出の過程をあとづけるのに役立つ資料を含んでおり、矢崎氏がその研究にあたった。そのほか量子力学の生まれた時期にボーアやハンブルグのパウリのところでおこなわれたコロキウム（のノートなどがかなり完全な形で残されており、竹内、矢崎両氏が科学的資料としての利用の便を念頭におきつつ整理をおこなっている。

- いままでの発表を年度順に列挙しておく、
- 1979・6 科学史学会（専修大学）“ヘベシー・仁科の親交と日本の原子核物理学” 玉木、島村、竹内、村越司（村越氏は古くからの科学史学会会員で、当時仁科記念財団常務理事、いまは同財団顧問）
- 1980・2 『物理学会誌』35・2, p. 93 “コペンハーゲンから理研の仁科博士への手紙” 玉木
- 1980・5 科学史学会（広島大学）“ボーアの招聘と仁科芳雄” 玉木、島村、竹内、村越
- 1981・5 科学史学会（群馬大学工学部）“原子物理学の転換期と理研仁科研究室の初期の活動” 玉木、島村、竹内、村越
- “理研仁科研究室の活動の第一歩としての宇宙線研究” 島村、竹内、村越、玉木
- 1981・7 『理研 OB 会会報』13 号, p. 2 “西川正治先生のローマからの手紙” 玉木（「理研 OB 会」は朝永博士が創立した一種の同窓会）
- 1981・12 『物理学会誌』36・12, p. 861 “研究室初期の仁科博士の海外への手紙” 玉木
- 1982・10 NKZ（仁科記念財団出版物）No. 16, p. 44 “仁科博士からブラケット博士への手紙（1933・5・15）”
- p. 45 “仁科研究室草創期の宇宙線霧箱実験について”（仁科研究室の最初からの実験助手、竹内征氏のメモから玉木が引用した。）
- 1983・3 物理学会（中央大学多摩校舎）“コペンハーゲン学派と仁科芳雄（1）コスター・ヘベシーとの共同研究” 矢崎、竹内、島村、玉木 “同（2）理論的

- 研究と帰国後の宇宙線研究の開始” 玉木, 島村, 竹内, 矢崎
- 1983・4 科学史学会 (東京工業大学) “量子力学のわが国への導入と仁科芳雄” 玉木, 島村, 竹内, 矢崎
- “理研仁科研究室における初期の宇宙線研究” 島村, 竹内, 矢崎, 玉木
- 1983・9 NKZ No. 18, p. 22 “ヘヴェシー・仁科書簡集 1928~1949 について” 玉木
- 1983・12 『物理学会誌』 38・12, p. 961 「物理学史資料委員会だより」 No. 6 (ヒルデ・レヴィ女史と連絡がついたことについて) 玉木
- 1984・2 『物理学会誌』 39・2, p. 160 (物理学史資料委員会だより) No. 7 (仁科の長岡にあてたハンブルグからの手紙について) 玉木
- 1984・4 物理学会 (九州大学) “コペンハーゲン学派と仁科芳雄 (3) ボーアのコモ講演の増補への協力” 玉木, 島村, 竹内, 矢崎, “同 (4) クライン・仁科の公式導出の過程” 矢崎, 竹内, 島村, 玉木
- 1984・6 科学史学会 (京都大学教養部) “仁科芳雄とコペンハーゲン学派の X 線元素分析” 玉木, 島村, 竹内, 矢崎
- 1985・3 理研 OB 会会報 20 号, p. 2 “コペンハーゲン→東京, '28-'49” 玉木
- 1985・4 物理学会 (京都大学工学部) “コペンハーゲン学派と仁科芳雄 (5) クライン・仁科の公式導出の過程 (2)” 矢崎, 竹内, 島村, 玉木, “ボーアの「相補性論文」の生まれる過程と仁科芳雄” 玉木, 島村,

- 竹内, 矢崎
- 1985・10 物理学会分科会 (千葉大学) “仁科芳雄のヨーロッパ留学後半の理論的研究に関する資料” 玉木, 島村, 竹内, 矢崎
- 1986・3 物理学会 (青山学院大学) “クライン・仁科の公式に関する仁科資料” 矢崎, 竹内, 島村, 玉木
- 1987・3 物理学会 (名古屋工業大学) “仁科芳雄の研究活動とニールス・ボーアの影響” 玉木, 島村, 竹内, 矢崎
- 1987・6 科学史学会 (東京大学教養学部) “アウアー・フォン・ウェルスバッハ, ジョージ・ド・ヘベシーと仁科芳雄” 玉木, 島村, 竹内, 矢崎

仁科記念室にある「記念室資料」については、「3号館資料」との関連で手をつけたもの、および戦後に財団法人理化学研究所から株式会社科学研究所への改組の際の仁科博士の苦心を物語る資料についてのほかは、ほとんどまだ整理が捗っていないが、「3号館資料」の取扱いで得た経験を生かして、その資料的価値を保全したいと思っている。

一次資料が宝の持ちぐされにならないためには、科学史的研究に利用できる形に整頓されることが不可欠であることは論をまたない。そのような整頓を実現するには地味な作業とすぐれた記憶力が必要であり、その点で竹内一氏に負うところ多大であることを述べてこの稿をおわりたい。

(玉木英彦)

編集後記

明けましておめでとうございます。本年も冷静で客観的な批判とともに、暖かい助力を期待しております。今号は1月上旬にお届けするつもりで、関係者たちが努力しましたが、年末の関係で中旬にならざるを得ませんでした。申し分けありません。

次号 (164 号) は、3 月には皆さんの手に渡るようにしたいと思います。次号は年次文献目録号であります。年次文献目録は『科学史研究』の目玉記事でもあり、期待していただけるものであります。本年度から「展望」を復活するため、原稿を依頼してあります。依頼された方々には、原稿の完成を心から期待するものであります。

『科学史研究』の購読者や日本科学史学会の会員をふやすためには、『科学史研究』や英文誌の内容の充実が第一と思います。投稿された論文、研究ノートがよいものであることが第一義ではありますが、その他にどういった記事が載せるかという工夫も大切かと考えております。そのためには、多様化も考えねばなりません。そこで、どのように多様化をするかという工夫努力と実行が必要だと思います。編集委員会は努力いたしますが、購読者や会員の方々のアイデアの提供をお待ちしております。し

かし、やっぱり良い論文、研究ノートが沢山投稿されることが第一です。

論文と研究ノートは、委員会が委嘱した審査員に審査を受けねばなりません。審査結果は、判定とともに、内容、表現、形式について、評と指摘を書いてもらったものです。審査結果における内容、表現、形式について、よく言われる苦言を順不同で紹介し、論文、研究ノートを書かれて投稿される際の参考に供したいと思います。

先行業績 (論文、著書) にちゃんと当たってから書くことが必要であること。書くべきことを選択整理をおこなない、何でも書き込むべきでないこと。実証的作業の上で論旨をはっきりさせること。論文や研究ノートは読者があつてのものであり、『科学史研究』のような技術史を含む広い分野の読者に読んでもらう工夫が必要であること。もっとも基本的には、読み易い文章を書くこと。英語以外の横文字による表記、引用文については、十分読者のために配慮すること。等々。

また、原稿は、多くの人たちのお陰で活字化されるものであることを強調しておきます。投稿される際、いろいろと配慮して下さることをお願いいたします。

(矢部一郎)